
バグキャラを継いだチートキャラ

yuuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バグキャラを継いだチートキャラ

【Nコード】

N3692X

【作者名】

y u u k i

【あらすじ】

麻帆良学園に教師としてやってきた英雄の息子。新しい生活に胸を躍らせるネギだったが、実は麻穂良ではもう一人の英雄の息子が高校生として暮らしていた。英雄である父に憧れるネギと、英雄を毛嫌いする彼が出会った時、新しい物語が始まる。この物語は魔法先生ネギま！の二次制作作品です。登場人物の立ち位置や性格が違ったり、アンチがあつたりするかも知れませんが、それを理解したうえでお読みいただければ幸いです。後、気軽に感想や評価を頂けると嬉しく思います。

プロローグ 始まりの日の前日（前書き）

始めまして、y u k i（何の捻りも無い名前）と申します。
ここでの投稿は初めてですので、始めのうちはかつてが分からずに
右往左往してしまうかもしれませんが、よろしく願います。

追伸、主人公の設定とうを乗せた方が良いという意見があれば、載
せます。

プロローグ 始まりの日の前日

太陽が隠れ月が顔を出してからもう何時間もたったところ、麻穂良学園女子中等部二年の綾瀬夕映は大鬼に追われていた。

「ほらほら、もうええやろ嬢ちゃん。痛くせえへんから止まりいや」
「止まれといわれて、止まる馬鹿はいないのです！」

夕映は叫びながら振り返りかえる。その足は止まらずに、背後に気を付けながら走っていく。

目の前にはどう見積もっても自信より格上の敵、こん棒を持った大鬼がせまっていた。

「（のどか、パル、ごめんなさいです。私は今日、死んでしまうかもしれません）」

逃げられないと悟った夕映はそう、心の中で謝りながら足を止めた。

もし夕映が死んでしまっても、その死因は公にされることはない。科学が発展を遂げた現代で妖怪に殺されたなんて誰も信じてくれないだろう。

それはとても、悲しいこと。

「ん？なんや、ようやく諦めたんかい」

「はい。もう、逃げるのは止めです」

「そか、なら、ごめんな。これもしごとなんや」「いえ、諦めたわけではないです」「はい？」

クルワ・クルクル・クルクルリ 来たれ水精10柱

「魔法の射手 連弾・水の10矢！」

「ぬおおっ！」

夕映の手に持つ杖から放たれた矢が大鬼に一直線に向かっていく。はじけ飛ぶ水飛沫の後、大鬼の方をみるが大きな傷はおっではないない。動じることなく大鬼を睨む。

「それでも、足掻かせて貰うです」

「はっ、ははは！ええなあ、その眼、戦う者の眼や！逃げまわるのを追うのは嫌やったが、向かってくるのを潰すのは、嫌いやないでさあ、嬢ちゃん。死合おうや！」

大鬼のこん棒が夕映の身体に迫る。

なんとかかわして、呪文の詠唱を試みるが

「クルワ・クルクル・クルクルリ まほうせんせものみな 焼き尽
す 浄北の炎 破壊の王に して再生の「遅い！」つく、」

それよりも早く大鬼のこん棒が振り下ろされた。

「がっはっは！そんなもんかい、西洋魔術師！」

カントゥス・ベラークス
「っ！戦いの歌！」

魔法で身体能力を上げて、敵の懷に潜り込む、拳は決りこむよう打つ。

「師匠直伝！羅漢適当に左パンチ！」

「、、、殴り合いも出来るんかと感心したが、なんや、その蚊に差されたみたいな拳は」

殴った夕映の拳の方が痛む。

「（師匠！この技、全然効いていません！）」

そう思いながら敵を睨むが、もう打つ手は残されていなかった。

「終いや、嬢ちゃん！」

「かつはっ！」

大鬼のこん棒が夕映の体を吹き飛ばす。

小さなその体はゴロゴロと転がって、樹の幹にぶつかってとまる。

「がつはっは！やっぱ、西洋魔術師は打たれ弱い！」

大鬼の笑い声が夜空に木霊する。

コンビを組む筈だった魔法生徒の人が、定時になっても来なくて、一人で警護しなければならなかったことを恨みながら、夕映は目を瞑った。

「このか、パル。ごめんなさいです。私が居なくなったら、哲学の素晴らしさを少しでも多くの人に伝えてください」

「じゃあな、嬢ちゃん」

大鬼のこん棒が迫る。

そして、そのままこん棒は振り下ろされた。

「、、、、誰や、兄ちゃん」

「えっ？」

「、、、、デメエ、、、、」

夕映の頭はこん棒に潰され、熟れて地面に落ちた柘榴のようになる。そう、そうなる筈だった。そうなる運命を変える者がいた。

振り下ろされた、こん棒を片手で受け止めている男が夕映の目の前にいた。

魔法も氣も使っている気配はない、身の丈二メートルを超える大鬼の力に、筋肉だけで拮抗しているとでもいうか。ありえないことだった。

「デメエ、、なに俺の弟子ぼこってんだ。殺すぞ」

男の怒りに満ちた声が冷たく響く。

「ああ？なんや、偉い威勢のいい兄ちゃ、、、、ラカン直伝。羅漢適当に左パンチー！！」ぐはらべだっ！」

大鬼は星になったのだ。光線のようなものが出るパンチを喰らって吹

き飛んでいった。

夕映はあんまりの展開に敵ながら同情してしまいそうになった。

「、、チートキャラです」

「なに訳わかんないこと言ってるんだ？大丈夫か？」

そう、地面にへたり込む夕映に手を差し伸べるこの男こそ、夕映の魔法と体術の師匠にしてこの物語の主人公。

「羅漢^{らかんくわぎ}狂気！人呼んで、理解^{バクキャラ}不能を継いだご都合主義です！」

「だからなに言ってるんだよ。遂に本物の馬鹿になったか？馬鹿ブラック」

大鬼に襲われていたデコ弟子（デコの広い弟子）を助けた後、狂気は世界樹広場に腕組んで立っていた。

隣にはデコ弟子が、「馬鹿ブラック、バカレンジャーは師匠の高校にまで伝わるほど有名ですか、」などと言って落ち込んでいるが、狂気は放置するようだ。

幸い、骨が折れてなかったことに安堵しながらも、狂気は苛立ちを募らせていた。

「狂気君。少しは落ち着いたらどうだい？」

「落ち着けだど？」

頬を掻きながらダンディもどきの高畑が話しかけてくる。

狂気はその言葉に思わず睨み返してしまった。

「ふざけるなよ。俺の弟子が死にかけたんだぞ？というより、俺が助けなきゃ死んでたぜ？大体さ、夜の警護は二人一組が基本だろ。なんで、俺の弟子は一人だけで駆り出されてるわけ？」

広場に集まっている魔法先生と魔法生徒、もとい、正義の魔法使い（笑）を見据えながら狂気は言う。

大半の奴は顔を逸らす。答える気すらないということだろう。

「（ふざけるな）」

狂気の怒りは高ぶっていく

隣に居る夕映が狂気に小声で耳打ちする。

「定時になっても人が来なかったのです」

「はっ、なるほどな。そりゃ、夕映が一人で警護するのも当たり前だは、はっははは、今日、夕映と組む筈だった奴、前出てこいよ」

一人の男子生徒がオズオズと前に出てきた、弁解しようと口を開くが聞く耳持たずに狂気はその男子生徒をぶん殴る。

さらに倒れた処に追撃で蹴りを入れようとする狂気を止める者がいた。

影で出来た人形に足を掴まれた狂気は、苛立ちを込めて一人の女子生徒をみる。

「気色悪いな。離せよ、高音」

「そこまでになさい。やり過ぎですわよ」

「やり過ぎだと？ふざけるな。夕映は死にかけたんだ、なら、死ぬ寸前までやってやつとあいこだろ」

「っ、なんて暴力的なっ！貴方はそれでも立派な魔法使いを目指す者ですか！」

高音の言葉に狂気は嘲笑を返した。

「立派な魔法使い？はっ、連続殺人鬼を信仰するような魔法使いなんて、目指したこともねえよ」

「なっ、あ、あなたって人は！毎回毎回、そのようなことばかり言って！」

「やんのかコラ！」

高音の影から人形が作りだされていく、対抗して狂気は拳に気を込める。

しかし、両者がぶつかり合うこと無かった。

「師匠、私は大丈夫ですから落ち着いてください。地の口調が出ていますよ」

「高音君も落ち着きなさい。確かに殴ったのはまずかったかもしれないが、彼がさぼった所為で夕映君が怪我をしたのは事実だ」

夕映と高畑が二人の間に入り仲裁される。狂気は拳に込めた気を四散させる。

それを確認した夕映が俺の隣に戻って来た。

「、、、悪かった。止めてくれてありがとう」

「いえいえ、慣れてますから」

弟子の言葉に狂気はこそばゆさを感じ、冷静になろうと努める。

「（弟子に窘められる師匠って何だよ。あの話題が出ると、熱くなる性格はいい加減に変わる努力をしないとイケないな）」

「ふおおおお、いやいや、若者は元気だのお。結構結構」

そんなことを考えていると、耳障りな笑い声と共にぬらりひょん型エイリアン「人間じゃっ!」、、、自称人間な後頭部が異型な妖怪があらわれた。

「酷いのお。結局人間じゃ無いじゃん」

「爺がなんとか言わないでくれませんか？気持ち悪いんで。全身の関節曲げて逆にカッコいいみたいな体格にしますよ」

「こわっ！この高校生、怖っ!、、、、狂気君、今日は荒れとるのお」

「当たり前です。話は聞いていたでしょう？可愛い弟子が死にかけたんだ、黙ってなんて居られませんかよ」

そう宣言する隣で夕映の頬が赤くなっていたことを狂気は知らない。

「まあ、そうじゃろう。狂気君の怒りはもつともじゃ、そこで気絶している彼には仕事をさぼった罰を与えるから、安心してくれ」

「それだけじゃ足りませんよ。今後また、こんなことが無いように夕映とコンビを組む奴は選んでください。間違ってもム力つく俺に敵わないからって、弟子にあたるような自称正義の魔法使い（笑）とは組ませないでくださいね」

狂気は舌打ちしながら周りを見る。

「（俺に言いたいことがあるなら直接言えば良いものを、根暗な奴らだ）」

此処に居るのでまともなのは龍宮と刹那くらいかもしれないと狂気は考える。

瀬流彦先生はまだでしたが、その他の殆どの魔法生徒、魔法先生は狂気につけて信用なんて出来る人間ではなかった。

立派な魔法使いを目指している者の殆どは正義と言うものがある一面から見た物でしかないことを知らない。

教師としてはまともな高畑も魔法関係者としては熱烈な英雄信仰者だからこそ、信用は出来ない。

学園長は妖怪だし「関係無くなっ！」

「ふむ、狂気君の意見はわかった。善処しよう。では、本題に入ってもいいかの？」

「、、ああ」

素っ気なく返事をして、狂気は学園長から距離を取る。

他の魔法生徒から離れる為、だいぶ下がるが夕映はトコトコと後ろをついてくる。

「（結構可愛い奴だな）」

「はっ、ラブ臭ですか！」

「キャラも違うしそれも違う」

ふざけたことを抜かすデコ弟子に狂気はデコピンしてから、学園長の話に耳を傾けることにした。

「さて、みなも知っておるじゃろうが、明日、麻穂良学園に教師としてネギ・スプリングフィールド君がくる。あの、ナギ・スプリングフィールド君の子供じゃ」

「「「おお！」「」」

「（連続殺人鬼の息子が来るのがそんなにうれしいか？）」

「そのネギ君はオックスフォードを主席で卒業するほどの実力を持っているが、いけません、10才の少年じゃ。先生としてやっていくかは不安じゃが、まあ大丈夫じゃろう」

「「「そーですねっ！」「」」

「（10才の子供が教師って、幾ら学園結界の認知誤差が働いても、異常だって気づく奴が出てくるだろ。そして10才の子供に教師が務まるとは思えない）」

「まあ、しかしのお、フォローはしなければならん。魔法と仕事諸々で。そこで、ネギ君を魔法と私生活の両方で支える補佐を付けようと思うっておる」

「「「そーですねっ！」「」」

「（当然だな。田舎から出てきたなら、その分、魔法の秘匿にも疎いかもしれないし）」

「そこでじゃ、頼んだぞ。狂気君」

「、、、、はい？」

「うむ、了承してくれるのじゃな。ではこれで解散！「ちょっと待て、爺！」「、、なんじゃい」

わけわかんねえ、分け分かんねえ、ワケワカンネエ、狂気の頭が混乱していく。

「ざけんじゃねえぞ。なんで俺がそんなことしなきゃいけないんだ」「師匠、地が出ているのです」「いけないんですか！」

「そうです！こんな暴力的な男に任せたら立派な魔法使い候補の未来が閉ざされてしまいます！」

高音は声を荒げながらさういう。顔は赤くなり、興奮していた。狂気にとって今回ばかりは、高音の言葉はありがたかった。子供のお守なんて、やりたくなかった。

「ふむ、それはのお。狂気君が、中立だからじゃよ」

「、、、、どういう意味ですか？」

疑問符を浮かべる高音にふおおおお、と耳障りな笑い声を出しながら近右衛門は言う。

「もし、狂気君以外の誰かがネギ君を見ればきっとその者は英雄ナギ・スプリングフィールドの息子として見る。それでは、駄目じゃ。偏見と臆盾を生む。ネギ君の為にならん」

「それは、、」

高音が唸る。学園長は笑う。狂気は言葉を吐く。

「なら、学園長。俺がネギ・スプリングフィールドを連続殺人鬼ナギ・スプリングフィールドの息子として見るかもしれない危険性に関しては、どうお考えで？」

「（最悪、復讐で殺すかも知れませんか？）」

言外に、そう告げる。

「ふおおおお、君はそんなことはせんよ。もし、君がそういう考えの持ち主ならワシの孫は今日まで無事でおらんかった」

舌打ちをしながら狂気は睨むのを止めた。

「、、、、どうあれ、子供のお守なんて御免ですよ。学校だってあるんです。時間を割いている暇なんてありません」

「常に着いている必要はない。必要な時、少しだけ手を貸してくれればよい」

「、、、、、、」

「それにの、お目付役がいないとワシ、鼻屑しちゃうよ?」

ウインクをしながらそう言う近右衛門に狂気は苛立ちを募らせた。

「つつくつ、こ、の、糞爺」

「ふおふおふお。まあ、そういう訳で、頼んだぞ。狂気君」

こうして、狂気はネギ・スプリングフィールドの物語へと引き込まれていくことになった。

明日から碌なことにならないということは確定だろう。

「取りあえず、学園長。月のない夜は背後に気を付けて歩けよ」

狂気はそう言って、その場を去っていった。

プロローグ 始まりの日の前日（後書き）

とりあえず、プロローグの終了。次回からネギ君が登場します。たぶん、

そうして二人は対峙した。一瞬だけだね（前書き）

主人公の生活環境を書こうとしたら、くだくだになってしまった。
低クオリティは認めませんが、楽しんでくれたら幸いです。

そうして二人は対峙した。一瞬だけだけどね

麻穂良学園。埼玉県の何処かにある学園都市。

バイク通学スケボー通学キックボード通学ローラースケート通学が許可される何でもありの学園である。

冷静に考えれば中学・高校になってローラースケート通学とはどうだろうか。

スケボーにしたって改札口を飛び越えるって程の跳躍を見せる生徒が何人もいるとは、常識を超越しているではないだろうか。
プロか、プロなのだろうか。

そして、極めつけは麻穂良学園の象徴、世界樹。

「異常だろ、この学校。ん？」

狂気が重なった声がした方を見ると、丸眼鏡をした大人しそうな女の子がいた。

中学生くらいだろう。夕映が着ている制服と同じ制服をきていた。

「おはよう」

「えっ、はい。おはようございます」

挨拶もそこそこに狂気は高等部の方へ、女の子は中等部の方へと歩いて行く。

学園長から新任の先生の出迎えを頼まれたが、狂気は断った。

新任の先生乃向かう先である麻穂良学園女子エリアは狂気の通っている高校と反対方向だから、効率的に考えて、非常にめんどろったのだ。

「はあ、糞めんどくせえ」

狂気はめんどうなのが嫌いだ。

「（なんで俺は高校生なんてやってるかな）」

「それは私のセリフだろ。なんで私は女子中学生なんてやっているんだ」

前から金髪少女が現れた。腰に手を当て、堂々と道の真ん中に立つその姿はある種の威厳に満ちていた。

「（心を読むなよ。エターナルロリータ）」

「誰がエターナルロリータだ！」

本日二度目のため息をつきながら、狂気は目の前で飛び跳ねている幼女？と着き従っている従者を見る。

「おはよう、茶々丸」

優しい口調で微笑みながら狂気は挨拶をする。

「おはようございます。狂気様」

「いい天気だな」

「はい。洗濯物がよく乾くでしょう」

着き従っている従者、絡繰茶々丸は表情こそ変わらない物の、温か

な口調でそう返す。

「ああ、そうだな。じゃあ、学校があるからもう行くな。また、今夜にでも」

「はい。お待ちしております」

一礼した茶々丸に笑顔を送ってから、狂気は足を踏み出した。

「さてと、早く行かないと遅刻するな」

「、、、おい、従者に挨拶して主は無視とはどういう了見だ、、、」

ブルブルと震えながら無理やり笑顔を造っている少女、エヴァンジェリン・A・K・マグダウェルをみて、狂気は冷や汗をかく。
ここはひとつ、フォローを入れておかないと後が怖いと。

「、、、早く行かないと遅刻するぞ？今週は遅刻者ゼロ週間って知ってるだろ？」

「ななあああつつ！貴様はあ！他に言うことは無いのか！」

キレたエヴァを置いて、狂気はその場から逃げた。

「（悪い、茶々丸。フォローを頼む）」

と、目配せをしながら。

時間は過ぎて、大して問題も起きないまま（当然か）いつも通りに

授業が終わった（日常だな）あと、デコ弟子、もとい夕映のケータイに狂気は電話を掛ける。

「デコ弟子。今、少しいいか？」

『その呼び方は、師匠ですね。何の用でしょう』

「ああ、今日からお前のクラスに来た例の蓮根『ネギです』、ネギは上手くやってるかと思つてな。どんな感じだ？人参『ネギです』、葱は」

『、、、師匠、一つ聞きたいのですが、ウェールズという場所では魔法は秘匿されていないのですか？』

「ん？まあ、たしか山奥の田舎だからな。日本よりはフランクだと思うが、、、問題があったのか？」

『ネギ先生。黒板消しが落ちてくるのを魔法で止めていたのです』

「、、、、、、馬鹿か？」

思わず起こる目眩に苛立ちを覚える。

「ばれたのか？魔法」

『いえ、けれど私のクラスの神楽坂明日菜さんは何かに気付いたようですし、長谷川千雨さんは苦笑いを浮かべていました』

「、、、そうか、わかった。悪かったな。こんなスパイみたいな真似をさせて」

『いえ、今後何かあつたら連絡します』

「ああ、頼む」

電話を切つて狂気はため息をつく。

「ふざけてんのか？その子供先生とやらは？魔法の秘匿も出来ねーなんて、フォローする以前の問題だろ」

けど、幸いにもまだ誤魔化せる範囲だと気を取り直して、取りあえず学園長に進言して注意を促してもらうかと考えた狂気は学園長室へと足を向けた。

学園長室へと向かう為、狂気は女子中学エリアへと向かっている。なんで学園長室が女子中学の校舎の中にあるのだろうか、いきなりいことこの上ない。

狂気が当然の疑問にイラつきながら歩いていると、前に大量の本を持った女の子が階段を降りているのが見えた。

「（危ないな、あんなに大量の本を持ちながら歩いてたら、落ちるんじゃないか？）」

狂気が心配をしていた傍から、女の子は足を滑らせた。

「あっ！」

そのまま階段から落ちる。

「（魔法で助けるか？いや、見られたら不味い。なら、）」

「間に合えよっ！」

「え？きゃっ！」

狂気は階段の縁から飛び降りて、空中で女の子をキャッチする。

これなら、まだ人間の域を出ない超人的動きで誤魔化せるだろと思
いそう動いた。

女の子を無事救えたことに安堵のため息をついてから、狂気が顔を
あげると

「、、、、、、」

「、、、、、、」

そこには見るからに魔法の杖ですよと主張する馬鹿でかい杖を構え
た子供がいた。

「（ああ、わかったよ、分かりましたよ、ワカッチマッタヨっ）」

狂気は当然のように子供の正体に気づく。

杖を構えたその姿は十中八九、誰が見ても、魔法使いの姿だった。

「（なるほどね、魔法を秘匿する気すらないんだ。はっはは、舐
めてんじゃねえぞ、ガキ）」

「あ、あの、、あれ、ネギ先生？」

「え？わっ、わわっ！」

狂気が腕に抱えた女の子が狂気の顔をみた後、目の前の子供を見てそう言った。

子供、ネギ・スプリングフィールドは慌てて杖を隠そうとしていた。

「（取りあえず、この子を降ろすか。いつまでもお姫様抱っこは俺も恥ずかしいし）」

「しょっと、怪我とか無いかな？」

「あ、ははははい。あ、ありがとうございますー」

狂気の腕から解放された少女、宮崎のどかはようやく事態を飲みこんで、顔を赤くしながら何度も頭を下げた。

「いや、無事なら善かった。次から気を付けろよ。本持って歩き過ぎだ、馬鹿」

「あうっ、す、すみません」

最後に忠告を加えた後、狂気はネギの方を見る。

「ちょっと来い、ガキ」

「へっ？わわっ！」

取りあえずOHANASIでもしようかと木陰へ向かった狂気の前に鈴の髪飾りを付けたツインテ少女、神楽坂明日菜が現れた。

「（なんだよ、このエンカウント率）」

思わずため息がでる。

「な、なんなのよ、アンタ達。アンタは杖構えて何しようとしてたのよ！アンタはなによ今の動き！アンタ達、普通の人間じゃないでしょ！何者なのよ！」

「え、ええー！そ、その僕は決して魔法使いじゃなくて「縮地だ」え？」

動揺するネギを置いて、狂気ははっきりとそう言う。

「縮、地？」

「ああ、俺の今の動きは縮地っていう武術の一芸だよ。疑うなら武術を嗜んでいる奴にでも聞いてみる。そのガキはどうだか知らないが、俺は普通の人間だよ」

それだけ言っつて、狂気はその場を後にすることにした。
もういいめんどうだという感情が狂気の心を締めていた。
ネギが助けを求めているが、狂気の知ったことではない。

「（自分で起こした問題だ、自分で何とかしろ）」

明日菜に問い詰められるネギを無視して、狂気はその場を去っていた。

ネギ・スプリングフィールドが麻穂良学園に来た日の夜。

狂気はエヴァの家を訪ねていた。

ベルも鳴らさずに扉を開けると、待ちかまえていたように仁王立ちで狂気を出迎えるエヴァの姿があった。

「来たか狂気。さあ帰れ。即帰れ。すぐ帰れ！」

「唐突にどうしたんだ？」

狂気は首を傾げる。

「マスターは今朝、狂気様に冷たくされたので拗ねておられます」

「拗ねてなどおらんわー！ふざけたことを抜かすなよ、茶々丸！巻いてやるぞ、このっ、このー！」

「ああ、いけませんマスター。そんなに巻かれては」

「はいはい、テンプレ乙」

いつも通りの光景を横目で見ながら狂気はズカズカとエヴァの家へと上がっていく。

人形が溢れたとてもファンシーな家。

溢れる人形の一つに狂気は挨拶をした。

「元気だったか？チャチャゼロ」

「ケケケ、イツモドオリ、動ケネエンダ。元気モクソモネーヨ」

「そりゃそうだな。髪、といてやるからじつとしてろよ」

ソファーに座る人形、チャチャゼロを膝に抱えて鞆から櫛を取りだす。

「ヤサシクシヤガレヨ」

「ふっ、当たり前だろ」

丁寧な手つきでチャチャゼロの髪をすいていく。
その様子をみたエヴァはプルプルと震え、激昂しながら叫ぶ。

「、、、だから、なんで貴様は主である私を無視して従者と異様に仲が良いのだー！」

「なんでって、チャチャゼロも茶々丸もエヴァの家族なんだから、優しくするのは当たり前だろ」

狂気はエヴァに笑顔を向けながらそう言う。
エヴァは毒気を抜かれたように静かになった。

「お、おおふ。そ、そうか」

「ケケケ、ウマク誤魔化サレテルゾ御主人」

余計なことを言うチャチャゼロの髪を狂気ぐちゃぐちゃにする「オイ」まあ、またとかし直すのだが。

チャチャゼロの髪をとかし終えた後、狂気はようやくエヴァの方を向いた。

「エヴァ。悪いけど、今日も別荘を借りても良いか？」

「ん？ああ、使え使え、私の為にもな」

ニヤリと笑うエヴァを見た後、一同は別荘へと向かった。

エヴァの別荘に入った後、狂気は紅い宝石の前に佇んでいた。

「左腕に魔力、右腕に気。合成」

その言葉と共に狂気の身体を謎のオーラが包み込む。
その様子見てエヴァは笑いながら言う。

「ふんっ、毎度のことだが究極技法である咸卦法をその年で完全に扱うとはな、タカミチの奴が見たらなんというか。流石は奴の養子だよ」

「集中するから、黙っていてくれるか」

「ああ、邪魔をして悪かったよ。存分にやってくれ。茶々丸、茶の用意をしろ」

「はい、マスター」

エヴァは椅子に座りニヤニヤと狂気の様子を見る。
狂気は集中しながら紅い宝石へと咸卦法の力を送っていく。

「収縮、注入、還元、飽和、浸透、」

力の流入が安定するまで呟き続ける。

そしてようやく、狂気の身体から宝石へのバイパスが通り、流入が安定化した。

後はこのまま一日、外の時間では一時間の間、力を送り続ける。

「よくもまあ、飽きもせずに毎日続けられるな」

「約束しただろ？お前の呪いは俺が解いてやるって、、、三年間、この宝石に力を送り続ければ無限登校地獄をぶっ壊せる位の力は溜るはずだ」

エヴァにかけられた呪いを解くため、これが毎日に行われている。

「サウザントマスター以外は解くこと出来ないと言われた呪いをぶっ壊すとは、流石はバグキヤラを継いだチートキヤラだ」
理解不能
ご都合主義

「俺より、俺が三年かけなきゃ解けない呪いを掛けた奴の方が都合主義者だろ。天才を通り越して、天災だよ」

忌々しそくに狂気はそう言う。

エヴァはまずいことを言ったと思い、話の流れを変える。

「それもそうか、それより、本当に呪いは解けるんだな？」

狂気と出会ってから一体何度目になるか分からない疑問を、エヴァは問う。

「俺を信じられないか？」

「いや、信じているさ。今年こそ、卒業させてくれるのだろうか?」

「ああ、必ずな」

汗をかきながら狂気はエヴァに笑顔を送る。

顔を逸らしたエヴァの顔が紅くなっていることを狂気は知らない。

「後、たった一年だ。待っていてくれ」

「後一年か。貴様と出会ってから、もう二年もたったのだな」

「そう、だな」

互いに思い出すのは、初めてであった日の夜。

『お前が闇の福音、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルか?』

『そう言う貴様は新しく入学した魔法生徒か?何の用だ。悪の魔法使いを倒しにでも来たか?立派な魔法使い候補』

『勘違いしないでくれ。俺はお前の敵じゃない。味方だ』

『お前が私の味方だと?』

『ああ、敵の敵は味方。ただそれだけの話だ。大嫌いなんだよ、英雄も正義の味方も。だから、俺はお前の味方になれる。誇り高き悪の味方にな』

『、、、、貴様、名は何という』

『羅漢狂気だ』

それが二人の出会いだった。

そうして二人は対峙した。一瞬だけだけどね（後書き）

ネギ君登場！そしてすぐ退場！

スイマセン、石は投げないでください！

勘違いすれ違う（前書き）

勘違いものと言っものを書いてみましたが、難しい。
そしてだんだん本文が短くなっっていく恐怖。怖い、、、

勘違いすれ違う

狂気は目の前に居る学園長を睨みつける。

「学園長。魔法が一般生徒に露見したと言うのは、本当ですか？」

たった一言のその言葉にどれだけの危険が込められているのか、目の前で温和な笑みを浮かべる近右衛門はわかっているのだろうか。魔法がばれたということは、一般人が此方側に足を踏み入れたということだ。

現実と平和の世界から、幻想と危険な世界へと。

「ふおおおお、うむ。ネギ君が暮らすことになった部屋の子にばれてしまったらしくてのお。まったく、困ったものじゃ」

「（同じ部屋で寝泊まりしている時点で、ばれるのは時間の問題だ。つてことがわかんねえのか？この痴呆爺が）」

狂気は内心でそんなことを思いながらもなんとか自制する。

「それで、これからどうする気ですか？俺としては、話し合いの上、魔法についての記憶を消してしまうのが一番だと思うが」

「ふむ、しかしのお。どうにも魔法を知ってしまったその女子生徒は、魔法が効きづらい体質の持ち主の様でのお」

「（魔法が効きづらい体質だと？黄昏の姫御子じゃあるまいし、下手な言い訳だな）」

近右衛門の態度に狂気は苛立ちを募らせる。

「なら、その女子生徒には魔法の危険性を教えて、身を守るくらいのことは出来るようになってもらわなきゃなんねえよな。師匠を着けるべきだ」

「ふおおおお、わかっておる。君の弟子、綾瀬君と同じような境遇だし、その通りにするよ。師事するのはネギ君にまかせようと思う」

「、、、、10才の子供に師匠が務まると、本気で思ってるのか？」

「成り行きを、見守るしかないのぉ」

髭を撫でながらそう言う学園長に舌打ちしながら、狂気はもうなにも言わずに学園長室を後にした。

苛立ちを募らせながら歩く狂気。ただでさえ、此処は男子禁制の女子中等部の校舎だというのに年頃の男、しかも明かに機嫌が悪い狂気は目立ちまくっていた。

無論、悪い意味で、である。狂気があるく先々で女子生徒達は怯えながら道を開けて行く。

そんな中、果敢にも狂気の前に立つ女子生徒が現れた。

「あんた、此処は男子の立ち入りは禁止って知ってるでしょ。なにしてんのよ」

「あ？」

「な、なによ、やるき」

苛立ちを募らせていた狂気の口調は悪くなる。

女子生徒は少しおびえながらも引くことは無かった。

「（って、まてよ、この子。確かネギに詰め寄っていた子だよな）」

狂気は昨日のことを思い出し、気づいた。

「（魔法を知ってしまった女子生徒って、この子か）」

思わず、狂気は悔しさで拳を握りこむ。

「（あるとき、もう少し俺が気にしていればこの子が魔法界なんかに引き込まれることは無かったんだな）」

「おい、お前。名前はなんて言うんだ？」

「か、神楽坂明日菜よ！文句でもあるの！」

「神楽坂か。俺は羅漢狂気。、、なにか、困ったことがあったらいつてくれ。出来る限りのことはする」

「へっ？」

喧嘩になると思っていたら、いきなり心配されて訳が分からないという表情を浮かべる明日菜を置いて、狂気はさっさと校舎から出て行った。

朝から見たくも無い近右衛門の顔を見て、苛立ちを募らせていた狂気が遂に怒り狂うことになったのは、そのすぐ後のことだった。夕映のケータイから連絡があったのだ。ネギが作った惚れ薬の所為で、女子生徒達が暴走していると。

『あの、師匠』

「ああ？」

夕映はケータイごしでも分かるほどに激怒している狂気に内心で怯えながらも言葉を続ける。

『その、どうすればいいのでしょうか？』

「放っておけ。禁制薬である筈の惚れ薬なんて使った時点で、ネギはもう犯罪者だ。関わったって碌なことになんねーよ」

『しかし、です。私の親友も薬の毒牙にかかってしまったようです。放っておくことはできないかと、』

不安げにそう言う夕映に狂気ははつきりとした口調で説明する。

「いいか、惚れ薬つてのは大抵長続きしないもんだ。人の心を操るなんて真似、簡単には出来やしねえ。あのガキが幾ら天才だからって、それはかわんねえ。時間が立てば、薬の効力は失せるよ」

『そうですか。安心しました。ありがとうございます。師匠』

「いや、夕映こそ報告ありがとな。上には俺から報告しとくから、お前は自分と友達がこれ以上面倒事に巻き込まれない様にしろよ」

『了解です』

ケータイを切った後、狂気は苛立ちの赴くままに壁を殴る。

「ふざけんなよ。あんなガキが「師匠」「先生」だと。どう考えてもおかしいだろ。、、ん？」

壁を殴りつけた狂気が横を見ると、同じような姿勢で壁を殴っている女子生徒がいた。

丸眼鏡をかけたその女子生徒は昨日の朝、駅の改札の近くで出会ったあの女子生徒であった。

そのことに気が付いた狂気が軽く会釈をすると、呆けた様子で女子生徒も会釈を返す。

「、、、、、、、、」

「、、、、、、、、」

「じゃ、また、」

「あ、ああ」

互いに気まずい沈黙の後、狂気はそう言ってそそくさとその場を立ち去るのだった。

その場に残された女子生徒、長谷川千雨は立ち去る狂気の背を

見ながら思う。

「私以外にも、この学園の異常性に気づいている奴って、いるのかな」

そう、淡い期待を抱いた千雨が狂気の殴りつけた壁を見て、落胆したことは言うまでも無い。

「コンクリが拳の形に陥没してやがる。あいつも変人の仲間かよ、」

弟子を怖がらせ、見ず知らずの女子生徒に痴態を見られた狂気は反省していた。

幾ら、苛立ちが抑えられないからと言って他人に当たるのはよくない。

もう、高校生なのだ。いや、実は狂気は実年齢から言えばもっと上、成人も既に迎えたいい大人。

大人として、毅然とした態度で振る舞おう。怒りに身を任せるなんて子供のすることだ。そう考え、前を向いて狂気は歩き始めたが、ふと、考えてしまう。

しかし、果たして怒りを我慢する必要などなるのだろうか。

自分がこんなにも苛立っているのは近右衛門とネギの所為、そしてその苛立ちは正しいものではないだろうか。

そう考えだしてしまつたらもう、止まらない。

再び狂気の内でふつふつと怒りのマグマが煮えたぎり始める。

「とつとと帰って、不貞寝しよう」

怒りを他人にぶつけないようにと、早急に寮に帰ろうと心に決めた狂気は近道をしようと中庭を横切る。

何やら中庭で女子中学生と女子高生が揉めているが、そんなものいまの狂気の目に入らない。

一刻も早く帰り、この苛立ちを鎮めることこそが今の狂気には肝要なのだ。

真つ直ぐと、最短ルートを進んでいく。

さて主観を変え、見てみよう。

ある日の昼休み、女子高生と女子中学生は争っていた。

争いの原因は取るに足らない理由。遊び場の取り合い、先に場所を確保し遊んでいた女子中学生に対し女子高生がその場を退くようにと言ったのだ。

もし、この場にエヴァがいれば、「まるで幼稚園児の砂場の取り合いだな」と鼻で嗤っていただろう。

しかし、そんなくだらない争いにも関わらず、両者は一步も引くことはなく。

あわや掴みあいの喧嘩になる事態になっていた。無論、それを止めようとする教師はいた。

ネギである。しかし、力不足も甚だしく結局は火に油を注ぐ事態に

「今時、先輩風ふかせて物事通そうなんて頭悪いでしょあんなたち！」

「なによ、やる気、このガキーン！」

「あ、あの、や、やめっ」

明日菜が女子高生の一人に掴みかかる、ネギがそれを止めようとしていたが止まらない。

遂に喧嘩になる。誰もがそう思った時、その男子生徒は現れた。

男子禁制のこの場所で、あまりにも堂々と歩くその姿に誰もが目を向ける。

そしてその身から滲み出る感情に身体を振るわせた。

怒り、怒り、怒り、その男子生徒は怒りに満ちていた。

「、、、、、、」

「、、、、、、」

誰もが息を飲んだ。男子生徒が向かう先は争っていた明日菜と女子高生の元。

怒気に当てられ動けなくなっていた二人の前で、男子生徒は立ち止まる。

そして、無言で女子高生の方を見る。いや、睨んでいたといつてもいいかもしれない。

しかし、男子生徒としてはそんな気はなかったのだ。ただ、女子高生の着ている制服が、自分と犬猿の仲である一人の女生徒と同じだなど、少し見ただけのつもりだった。

だが、見られた女子高生はそんなことは知らない。無言で睨んで来る男子生徒に、ただただ圧せられた。

一歩、二歩、と後ずさり、怯えた様子でその場を後にする。取り巻きの女子たちも、続くようにその場を去っていった。

女子高生が居なくなつたその場所で明日菜たちは無言で場を治めた男子生徒を見る。

「あ、あんた、今朝の」

明日菜が何か言うが、渦中の男子生徒はなにも言わずにその場から立ち去って行った。

『なにか、困ったことがあったらいつてくれ。出来る限りのことはする』

最後まで無言のまま立ち去って行った男子生徒の背を見て、明日菜は今朝に掛けられた言葉を思い出す。

「助けて、くれたのかな？」

勘違いに満ちたその言葉が、中庭に静かに響いていた。

勘違いすれ違う（後書き）

ところどころ面識がある主人公とネギ先生です。

本当の意味で知り合うのはまだまだ先かな？

今はまだ、顔見知り程度ということ。

昼下がりのデート（前書き）

平平凡凡な日を書いてみた。

主人公、エヴァ、夕映の日常です。

お楽しみ頂ければ、嬉しいです。

昼下がりのデート

太陽が真上に登る時刻、12時を過ぎたころだろうか、狂気は麻穂良学園に隣接する商店街を一人で歩いていていた。

無論、それだけなら特に何の問題もないことなのだが、問題は今日が平日であるということだ。

そう、狂気は堂々といっそ清々しいまでに学校をさぼっていた。

「そっか、エヴァがサウザントマスターに惚れてるってのは、ホントだったんだ」

平日の正午と言うことで学生たちはいないが、商店街には麻穂良で暮らす人の影がちらほらと見える。

そのほぼ全員が、狂気に異様な目線を向けていた。

当然だろう、学生服を着た男子生徒が学校も行かずにフラフラとしているのは唯でさえ目立つというのに、まるで誰かに話しかけるように一人ごとを呟いているのだから。

しかし、別段狂気が痛い人と言う訳ではない、狂気はしっかりと“誰か”に話しかけていた。

「ケケケ」

そう、頭の上に乗る人形、チャチャゼロに。

、、、、頭の上に人形を乗せた男子生徒が一人ごとを呟きながらフラフラしている。

なにも知らない人から見れば、とても痛い男に見えるということに狂気は気づいていなかった。

「イイコト教エテヤツタンダ。ナンカ寄コシヤガレヨナ」

「酒か？悪いけど、戸籍上は未成年ってことになってるから、酒の類は買ってやれないぞ」

「チツ、ジャア内臓ヨコセヨ」

「わかった。今度、モツ煮でも作ってやるよ」

「血ガネエジャーネーカ」

「鼈の生き血ぐらいなら用意するが？」

「テメーノヨコセヨ。タマニ御主人ニ飲マセテンダロ、俺ニモヨコセ」

「なんだ、嫉妬してんのか？」

「ケケケ、ヤツチマウゾ」

一人と一体は笑いあいながら商店街を歩いて行く。
もしチャチャゼロが人であつたなら年頃の二人のデートにも見えたかもしれないが、如何せん現実では人形に話しかける変人にしか見えないのが悲しい。

「ソオイヤ、モウスグテストツテノガアルツテ妹カラ聞イタケドヨ、テストツテナンド？」

「拷問や尋問の類だな、狭い部屋に集団で押し込められて長い時間沈黙を強要されるんだ」

「オモシロソウジャネエーカ。俺モ連レテケ」

「別に良いけど、絶対に喋んなよ？」

「約束八出来ネーナ。ケケケ」

そんな会話を続けながら歩いていた二人？は、休憩しよう適当な喫茶店に入っていた。

こじんまりとした店内にアンティーク調の家具が並ぶ落ち着いた雰囲気のお店。

ターゲットは学生達なのだろうかお昼時だというのに店内には狂気とチャチャゼロ以外に客はいなかった。

窓際の二人掛けの席に狂気とチャチャゼロは向かい合うように座っている。

狂気の前にはコーヒーとモンブラン、チャチャゼロの前には苺のショートケーキが置かれていた。

この店のマスターは狂気が二人分の注文をしても一切顔を曇らせないとても出来たマスターだった。

「ヨクヨク考エリヤ、動ケネエカラ、ケーキガ食エネー」

「後で持ち帰りにして貰うか」

そんなのどかな会話と共に、今日という日は過ぎていく。

今日は日が昇ってから一度も苛立っていない、狂気にとってはとても幸せな日であった。

場所は変わり、狂気が学校をさぼりチャチャゼロと喫茶店に入っていた頃、エヴァもまた授業をさぼり優雅に紅茶を楽しんでいた。学校の屋上で。

「マスター。学園長先生からの伝言で『いい加減に屋上に椅子らやテーブルやらパラソルやらを持ちこむの止めてくれんかのお。ぶっちゃけありえない』と、言っているのですが返答はどういたしましょう」

「ふんっ、そんなもの無視しろ無視。文句を言う前に自分の後頭部をどうにかしろとでも伝えておけ」

「わかりました。マスター」

エヴァはそれだけ言うとき空を見上げた。

澄み渡る青空を所々浮かぶ白い雲のコントラストが美しく、小鳥達の鳴き声が耳に届く、春特有の温かさもまた心地よい。

「今日はいいい日だな」

エヴァは頬を緩ませながらティーカップに口を付ける。

「はい。姉さんも今頃は狂気様と一緒にこの空を見ていることでしょう」

「ぶっっ」

「、、、、マスター、それは少し、お行儀がわるいかと」

顔に紅茶を吹き掛けられた茶々丸は表情一つ変えることなくそう言

う。

だが、口調に怒りが籠っているように思えた。

「げほっ、げほっ、ちよつとまで、それはどういう意味だ！」

「姉さんが言っていました。今日は狂気様と出かけると。一般的にデートと言われるものだと推測されます」

「私は何も知らんぞ！？」

「マスターはまだ寝ておりましたので」

エヴァが机を叩きながら叫ぶが茶々丸は平然と答える。

「でーと、デートだと？チャチャゼロと狂気が、二人きりでお出かけだと？ま、まさかあのふたり。ゝゝゝ、いや、いやいや、そういうことから最も遠いのがあの二人だろ。心配ない。まあ、元から心配なんてしてないがな！私には別に関係無いしな！なあ、茶々丸！」

「はい。マスター」

そう返答する茶々丸に満足したのかエヴァは何度も頷く。

「今朝、姉さんにいつもとは違う服に着替えさせてほしいと頼まりましたが、何の心配も無いでしょう」

茶々丸の言葉でエヴァは額をテーブルにぶつける。

「自分から服を着替えたいなんていうチャチャゼロは私も見たこと

無いぞ！」

「そうですか、私は今日みました。マスターはまだ寝ておりましたので、見ていませんね」

表情こそ変わらないが自慢げに聞こえる茶々丸の言葉を聞いて、エヴァは「くそお、明日から早起きしてやる」と呟いていた。

「姉さんと狂気様の関係が気になるのですか？」

「、、、まあな、普通の奴なら気にもしないんだが、相手は狂気だ。チャチャゼロが人形だからという常識も、あいつには通用せんだろうし、チャチャゼロは私の家族だぞ、気にもなる」

「大丈夫です、マスター。私の知っている狂気様はマスターの大切な者を奪ったりはしません」

温かな口調でそういう茶々丸を見て、エヴァは不貞腐れたように紅茶をすすする。

「ふん、知った風なことを言うようになったじゃないか。お前と言いつ、チャチャゼロと言いつ、アイツに出会ってから少し変わったな」

「マスターもお変わりになられたと思いますが」

「アイ・カメラが壊れたか？600年を生きた真祖の吸血鬼である私がたかだか数年で変わる筈がないじゃないか」

「しかし、以前のマスターなら食事の際、私に席に着くように命令はしませんでした」

茶々丸の言葉で、エヴァは向かい合うように椅子に座る茶々丸を見る。

そして、呆けながら呟いた。

「そういえば、そうだったな」

場所はまた変わる。麻穂良学園女子中等部2年A組の教室。
そこではある噂が実しやかに囁かれていた。

「突撃リポーター朝倉和美は見た！幻の不良高校生！！今週のまほら新聞の一面はこれで決定ね〜！」

「いや、アンタ。まだ見てもいないのにその見出しはまずいでしょ。大体、本当に居るの？その不良高校生って」

書き上げた原稿を自慢げに掲げる女子中学生、朝倉和美を見ながら明日菜は呆れたように言う。

「明日菜に朝倉さんー、何の話してるん？」

「朝倉のしょ〜もないねつ造記事の話し」

「失礼ね！ねつ造じゃないわよ。これから取材するの！」

「で、結局何の話なん？」

首を傾げているのはほんとした印象の少女、近衛小乃香の言葉に答えるように朝倉は何処からかマイクを取りだし説明を始める。

「今、噂の幻の不良高校生の話だよ。授業中抜けは当たり前、学校をサボって街を徘徊。夜はコンビ二の前での目撃情報あり。こんな絵に描いたような不良でありながら、時にはナンパされている女生徒を救い、時にはお年寄りの荷物持ちをする。そんな、幻の不良高校生を突撃リポーター朝倉が追います！」

どーん、という効果音がする気がするポーズを決めた朝倉に小乃香はパチパチと称賛を贈る。

明日菜は空に向かって呆れたようなため息をついた。

「この学園って面白い人が多いわー。その人、他に特徴とかあるん？よかったら、ウチも探すの手伝うえ？」

「ありがと、近衛さん。えっと、特徴はねー」

朝倉はポケットから手帳を取り出し、パラパラとページをめくる。

「目撃情報では服装は何時も黒い学生服。頭に人形を乗つけて歩いていることが多いみたい。あと、これは確認とってないけど、拳を振るうだけでパンチが光ってナンパ野郎を吹き飛ばしたりするみたいよ」

「パンチが光るって、なによ？」

「すごい人がいるんやなー」

「まっ、あくまでも噂だけどねー」

「何の話してるアルか？強い奴の話アルか？」

「光るとは面妖な。興味深いでござる」

カンフーとか忍者とかが集まって、さらに騒がしくなった教室の端でプルプルと震えている夕映がいた。

「夕映ー、震えているけど、大丈夫？」

「え、ええ、大丈夫です。ありがとうございます、のどか」

親友の一人、宮崎のどこになんとか笑顔で答え、手に持った抹茶コ―ラを飲みながら夕映は考える。

「（常に学生服を着て、頭に人形を乗せていて、パンチが光る。心当たりがありすぎるです。師匠、）」

「そう言えば、知ってる。夕映ー」

はっ、と夕映が我に返った時にはもう一人の親友、早乙女ハルナが隣に居て、話の流れは既に変わっているようだった。

「なにをです？」

「のどかに、好きな人が出来たみたいよなのよ。ねー、のどか」

「なっ、本当なのですか！のどか」

「（男性恐怖症の親友に思い人が出来るなんて、いや、いやいやで

す。もしかしたら、男性所ない可能性も、まさか、女性の方ですかーっ！」

夕映は混乱しながらのどかの方を見る、そこには顔を真っ赤にしたのどかが居た。

「パル。ち、違うよー。ただ、この間、助けてもらったからお礼が言いたいって言っただけでー」

「あれー、そーだっけ？」

「な、なんです。まったく、紛らわしいことを言わないでください」

「あははー、ごめーん」

「そういうことなら私もその人を探すの手伝いますよ。のどか」

「本当？ありがとう、夕映」

今日も二年A組の教室は賑やかだ。

昼下がりのデート（後書き）

書き終わった後に気づいてんですが、

主人公も魔法完全に秘匿出来てねーじゃん
 Σ （ $\cdot$ $\square$ $\frac{1}{111}$ ）

ガビーン

図書館戦争 主人公は不参加です（前書き）

親切な人のおかげでタイトルの文字が間違っているという大変な事態に気づきました。

、、、まあ、仕方ないですね。変えられないみたいですし。
諦めます（・A・、）ソナー

図書館戦争 主人公は不参加です

麻穂良学園近くにある森。

動植物が盛んに生息し、狼のような獣がいて、熊もいて、滝が流れ、岩魚が釣れる。

そんな、とても危険な森の中に羅漢狂気の姿はあった。

時刻は既に夜、もうすぐ7時になる。狂気は苛立ちを感じながら夜の森に立っていた。

「、、、、遅い。夕映の奴、なにやってんだ」

右腕に付けた腕時計を見ながら狂気はそう呟く。

今日は夕映との修行の日、新しい魔法でも教えてやるかと思いわざわざこんなところにまで来たというのに、約束の時間になっても夕映の姿はなかった。

「わざわざこんなところに来たつてのに、日時もアイツが指定したんだぞ。遅れんなってんだよ」

そう文句を言いながら、狂気はふと思い出した。

「（そう言えば、来週の月曜から定期テストだったな）」

もしかしたら、その所為で遅れているのだろうかと思狂気は考える。

しかし、日時を指定したのは夕映の方。遅れる道理はない。

大体、弟子は狂気の通っている高校にまで名前が届く馬鹿レンジャーの一人、馬鹿ブラック。

勉強するから狂気との約束をすっぱかすとかそういう思考の持ち主じゃないだろう。

狂気との約束の為に勉強をすっぱかすというなら、分からなくも無いのだが。

「もしかして、なんかあったのか？」

狂気が心配を始めた時、携帯が鳴り始めた。確認すれば、夕映からだ。

「もしもし、テメー。今、何処で何やってやがる」

『す、すいません。師匠。実はですね、、、』

夕映からあらかたの事と次第を聞いた狂気はキレた。おもむろに拳で大木を殴る。大木は音を立てて折れ、倒れた。自然破壊だ。

「ああ、わかった。悪かったな、お前を責めて。お前に非はない」

『いえ、はい、ありがとうございます。それで師匠、私はこれからどうすればいいのでしょうか？』

「図書館島に行く友達が心配なんだろう？なら、ついて行ってやれ。あそこは危険だからな、冗談抜きで。ただ、魔法使いだってことはばれない様にな」

『わかりました。それと、師匠にお願いしたいことがあるのですが』

「なんだ？」

『もし、私達に何かあったら地上に残っている二人を寮まで送り届

けて欲しいのです。その二人は私の、親友なのです』

「わかった。任せておけ。後、“お前に何かある前に”俺を呼べ、絶対に助けに行つてやるから」

『つつ、は、はい!』

何故か最後に大声で返事をした夕映の声の所為で聴覚を痛めながら（キーンという音がした）、電話を終えた狂気は夜の森を後にするのだった。

麻穂良学園に戻りながら、狂気は電話を掛ける。相手は近右衛門。

『はいはい。こちら学園長じゃよ』

「よおお、ぬらりひょん。テメーの孫が魔法の本探しにダンジョンに潜つたらしいんだけどよお。今頃、死んでんじゃねえか?」

『ふおふおふお、最初から口調が最悪じゃのお、狂気君』

「反応が無いってことは、知ってたのか?」

『ふおふおふお』

耳障りな笑い声の所為で携帯電話を握りつぶしそうになる手を止める。

『心配せんでも、危険はない。三日ほど出てはこられんがのお』

「当たり前だろ、もし俺の弟子になんかあつたら学園長室を校舎ごとぶっ飛ばしてやるよ」

『狂気君がいうと冗談に聞こえないから恐いのお』

「（冗談じゃないからな）」

そう、心の中で呟きながら狂気は続ける。

「で、どういふことか説明してくれるよなあ？」

『ふむ、実はお。これはネギ君の修行の一環で「あ、やっぱいいわ。もう切るな」のおって、ちょ！まだ話はおわつとらんぞ！』

「テメーの話より弟子との約束の方が大事なんだよ」

電話の向こうで何かを叫ぶ学園長を無視して、電話を切った狂気は遠目で図書館島の裏口近くに居る女の子二人を確認した。

ばれない様に少し離れた場所に着地した後、彼女達の方へと歩いて向かって行くのだった。

宮崎のどかと早乙女ハルナは困惑していた。突然、魔法の本を探しに言った図書館島探検隊と連絡がつかなくなったのだ。最悪の事態も考えられる。

「みんなーッ、どうしたのーっ！」

「へ、返事をしてくださいーい！」

叫んでみるが、返事はない。

「どーしよ、どーしよ、のどか」

「だ、誰かに連絡を、、、でも、こんな時間じゃ」

そんな時、その場に狂気が現れた。

「こんなところで、なにやってるんだ」

「ひっ、」

「つつ、」

その声を聞いた時、一瞬二人には闇の中から声が聞こえたように思えた。

当然と言えば当然だ。黒い服、黒い髪、黒い眼。狂気の印象色は黒。闇に紛れるには最適だったし、狂気自身足音一つ立てずに二人に近づいて行ったのだから。

「そう、幽霊にあつたみたいな反応をされると流石に傷つくな」

「あ、え、男？」

「、、お、男の人、、、」

闇の中から姿を確認したハルナは少し身構えながら狂気を見る。
しかし、のどかは最初こそ怯えていたが狂気の顔を確認すると安心したように声をだす。

「あ、この間、助けてくれた人、ですよ」

「ん？ああ、そう言うお前は階段から落っこちた子か」

のどかの顔を見て、狂気はネギ・スプリングフィールド個人に初めて苛立ちを覚えた日のことを思い出した。

「あ、あの、名前は宮崎のどか、です」

「そうか、俺は羅漢狂気だ」

「へ？あれ？自己紹介とかする感じ？じゃ、私も。早乙女ハルナだよ、のどかとは親友やってまーす！」

俯きながらの自己紹介と、淡泊な自己紹介と、無駄に元気な自己紹介が終わった後、狂気は二人を見ながら話を戻す。

「最初の質問に戻るが、こんなところでなにやってるんだ？」

「えー、えっとそれはですねー。その、あははー」

「えっと、その、あの、ん、ん、」

「いや、もういい。面倒は省こう」

なんとか誤魔化そうとするハルナと不安そうに足元を見つめるのど

かを見て、狂気はため息をつきながらそう言う。

「お前達が魔法の本なんて馬鹿なものを探しに来たってことは知っている」

「うげっ、バレテル」

「あうう」

「もう、遅い時間だ。さっさと帰れ」

「ま、待って！中に友達が入ってて、それで、連絡も取れなくなっちゃてるのよ」

だから私達は探しに行くの、と続けるハルナの言葉を遮るように狂気は言う。

「知っている。それは俺の方から学園長に連絡しておいた。学園長から図書館島の司書長の方に連絡するらしいから、お前達の友達は無事だよ」

「へ？それ、本当？」

「嘘ついてどうする」

「そっか、よかった。ね、のどか」

「、、、、うん」

狂気の言葉でハルナとのどかは安心したのか、ペタンと地面に座り

込む。

その後、二人は狂気に頭を下げてきた。

「ありがとうございます。羅漢さん」

「その、また助けて頂いてー、すいません。羅漢さん」

「、、、出来れば、狂気と呼んでくれ」

「え、でもー」

「好きじゃないんだ。“ラカン”の名は」

「あ、は、はい」

苦い顔をしながらそう言う狂気を見て、のどかは頷くしかなかった。

そんなやり取りを終えてから狂気は言う。

「じゃあ、後は司書長に任せてもう帰るぞ。寮まで送っていくから、支度をしろ」

「え、私達二人でも帰れますよ。子供じゃないんだからー」

「こんな夜遅くに、こんな人気のない場所に居ようとする女を、大人とは言えないな。何かあったらどうするんだ？馬鹿」

「あう、ごめんなさい」

「ほら、行くぞ」

有無を言わせない狂気に二人は大人しく付いて行く。

狂気が先頭を歩き、その少し後ろにのどか、ハルナが続く。

会話は無い。元々、狂気ものどこもお喋りな方ではないし、ただ一人喋るのが好きなハルナは「むむ、ラブ臭が、」とか言っているの
で、会話が無い。

三人はほぼ無言で女子寮まで歩くのだった。

「じゃあ、狂気さん。送ってくれてありがとうございます」

「ま、ましたー」

「礼はいいが、一つ言っておきたいことがある」

笑顔でお礼を言うハルナと、何故か赤くなりながら小声で喋るのど
かの二人を見ながら、狂気は言う。

その顔はとても真剣で思わず二人の背筋が伸びた。

「宮崎、前にも言ったが馬鹿なことはするな。女の子が一人で15
冊もの本を持って歩くことも、夜に図書館島に忍び込もうなんて考
えることも“普通”じゃないんだ」

「え、あの、どういう意味ですか？」

「、、、、、、」

首を傾げるハルナとのどかを見て、狂気は苛立ちを募らせる。
やっぱり、この子たちも可笑しくなってしまうているのか、と。

「藪を突いて蛇が出るならまだいい、もしかしたらお前達を殺す鬼が出るかもしれないっていう話だ。覚えておけよ、好奇心は猫を殺すぞ。実際に、平穩を殺された猫もいる」

そういつて、狂気はその場を後にした。

残された二人は、最後まで首を傾げたままだった。

図書館戦争 主人公は不参加です（後書き）

日刊掲載って大変ですね。

この作品の倍以上の文量で一日、二三話上げている人たちが信じられませんか。

日刊掲載を諦めるか、文量を減らすか、迷います。

まあ、しばらくは大丈夫だと思いますけど。

2年A組！、、、、
(前書き)

学校が違ってから接点のないネギの生徒たちと絡ませたいな
と、考えたかなり強引になってしまった。(- ” -)

2年A組！、、、

「どうしてこうなった」

ネギ達が図書館島で遭難した次の日、狂気は麻穂良学園女子中等部2年A組の教室の前に居た。

苛立ちに満ちた狂気の問いに答えれば、全ては学園長の所為であった。

昨日の夜、のどかとハルナを送り届けた後のこと、、

狂気は学園長室へと呼び出されていた。

「何の用だ？」

「ふおおおお、そうカリカリせんでくれ。お茶飲む？」

「要らん。とつと要件を言え」

「うむ、実はのお。ネギ君が今、図書館島に居ることはしっておるだろ？その所為のお、ネギ君が受け持っているクラスの授業で英語を担当する者がいなくなってしまったのじゃよ。そこで、狂気君にお願いしたいとおもふのじゃが、やってくれるかの？」

「、、、、、まて、ツツコミ所が多すぎるだろ？ネギが居なくなるのを知っていてなんで代理を立てなかった。英語の授業を普通の高校生である俺がするっていうのは問題があるだろ。そして、俺は明日も普通に学校があるんだ。そんな暇はない」

「まあまあ、狂気君なら中学生に物を教えるくらい何の問題も無いじゃろう。それに狂気君の通っている学校にはワシの方から社会学習ということで話を通しておくから安心してくれ」

「ふざけるな。俺はもう帰るからな。痴呆爺」

そう言って学園長室を後にしようとする狂気の背に、近右衛門はポツリと呟く。

「、、、、留年させちゃおうかな」

「、、、、、、、、」

「狂気君、学校サボりまくってるし。ワシ、麻穂良で一番偉い学園長じゃし」

「、、、、それが、教育者のすることか、、、、」

「ワシ、痴呆爺じゃもん」

ギギギ、とまるで油の切れた機械人形のように振り返る狂気に近右衛門はニコニコしながら言う。

「やってくれるの？狂気君」

「、、、、わかった。だがな、一つ言っておくぞ、学園長」

「何じゃ？」

「どうしてテメーがそんなに俺をあのクラスに聞かせたいかは知らないが、俺はネギと違って英雄の子として生きる気なんぞ、さらさらねえからな」

「、、そうか、残念じゃ」

そうして回想は終わり、冒頭へと戻る。

「どうしてこうなった」

「ケケケ、諦メロヨ。モシクハ、ヤツチマエ」

ため息をつく狂気の頭に乗っているチャチャゼロが答える。

「チャチャゼロ、お前がいてくれることだけが支えだよ。なんかあったら助けてくれよな」

「約束ハ出来ネーナ」

いつも通りの答えに苦笑しながら、狂気は教室の扉を開け教室へと入っていく。

すると、扉を開けた傍から仕掛けられていたトラップが発動する。狂気はチャチャゼロを庇うように黒板消しを殴り飛ばし、足元のヒモを蹴り千切り、バケツを受け止め、矢を全て避けてから教壇の前に立つ。

「さて、色々言いたいことがあるだろうが授業を始める。ノートの

準備を「お待ちください!」、お前は、委員長の雪広あやか、かなんだ?」

手に持ったクラス名簿と見比べながら狂気は雪広の名前を呼ぶ。

「ネギ先生はどうしましたの!?それに、貴方は誰ですの?見た処、学生のようなですが、あら?そう言えばどこかで見たことがあるような気も、」

「ネギ先生はこのクラスの馬鹿レンジャーと一緒に勉強合宿中であられない。俺はその代理だ。お前の言う通り、麻穂良で高校生をやっているが、文句は学園長に言ってくれ」

「は、はい。わかりましたわ。処で、何処かでお会いしたことが」「幻の不良高校生」「っつ、みなさん、騒がしいですよ!」

言葉の途中で邪魔をされた雪広は耳を押さえながら怒鳴る。

「だってだって、委員長――噂の不良高校生だよ!本当に居たんだ!」

「本当に頭に人形乗せてる」

「本当に学生服きてるね」

「本当に髪が黒いよ」

「待て、最初の一人以外が言っていることは別に普通だろ。「パンチが光るっていうのは本当ですか!」なに訳のわからないこと言っているんだ?光る訳がないだろう。お前達、少しは静かにしろ」

少し洒落にならない疑問を平然と受け流す狂気に朝倉がマイクを突き付けながら詰め寄る。

「まあまあ、ここは報道部であるこの私が仕切らせてもらうよ！二、三問質問に答えてくれればみんな静かになると思うから」

「三問だけだぞ」

「はい！じゃ、まず一つ目、名前はなんて言うの？」「ノーコメントで」じゃあ、なんで高校生が臨時教師なんてしているのかな？「学園長を通してください」うう、じ、じゃあ、このクラスに居る中で恋人にしたいとしたら誰？「チャチャゼロ」へ？誰、それ？」

クラスのほぼ全員が首を傾げていたが、エヴァは額を机にぶつけ、茶々丸は「姉さん、羨ましいです」とぼやき、当の本人は狂気の頭の上で「ケケケ」と笑っていた。

「質問には答えた、全員席に着け」

狂気の言葉で全員が渋々ながら席に着く。

「さて、さつきも言ったがネギ先生の都合で今日一日の英語の授業は俺が受け持つことになった、正直あまり気乗りはしないんだがやるからにはしっかりとやってやる。ネギ先生や学園長のことでお前達に当たるのは筋違いだからな」

そう話しながら狂気は黒板にびっしりと何かを板書していく。クラスの面々は首を傾げながらそれ見ていたが、次に出た言葉に驚くこととなる。

「ほら、これが次の期末テストの問題だ」

「「えっ、えー!」」

「り、臨時先生――！幾ら、テストでいい点取らせたいからってそれは不味いんじゃない」

「い、いけないことです」

「お前達は、鳴滝姉妹か。何を勘違いしてるかは知らないが、別に不味いことは何もしていないぞ。これは昨日の夜、このクラスの絡繰茶々丸から聞いたネギ先生の前の英語担当教師、つまり期末テストを作る教師の性格と今回のテスト範囲を考えて作った俺の予想問題だ。まあ、ほぼ合っているだろうからこれを覚えるだけで90点は取れる」

堂々とそう言う狂気を見て、黙っていたクラスの面々だったが徐々に笑いが溢れてくる。

「ま、まっさかー」

「冗談でしょ?」

「テキトーなこと言わないでくださいよ」

「お前達は、チアリーディング部か。一つ言っておくが、学校の勉強は無駄が多すぎるんだよ。必要な部分を見極めれば、テストでやることなんてたいしてない」

そう言い切る狂気に、遂にクラスの全員は黙り込む。

「ここに来る前に職員室で聞いたが、お前達万年最下位なんだってな。新田先生と瀬流彦先生はそうでもなかったが、他の先生達は嗤っていたぞ。恥ずかしくないのか？悔しくないのか？恥ずかしいなら、悔しいなら、学年一位くらいとって見せる。道は俺が示してやるから、どうするかはお前達次第だ」

「くくく、くくく、くくく、くくく」

「ずっと最下位なんて取っているお前らは、どうせ努力なんてしてなかったんだろ？この学校はエスカレーター式だからあんまり関係ないなんていい訳をしながらな。甘えるな、社会に出れば必ず努力をしなければならぬ時が来るんだ。学校のテストなんてその時の為の練習なんだよ。だからこそ、努力をするべき時は何時だ？今だよ」

「くくく、くくく、くくく、くくく」

それだけ言うと、クラス全体を睨みつけていた狂気は深い息を吐く。

「俺が言いたいことはそれだけだ。努力をしようと思う奴は黒板を書き写せ。その後、残りの10点を上積みする方法を教えてやる」

そう言うと、クラスに居る全員が一心不乱にノートへ鉛筆を走らせるのだった。

全員が黒板の内容をノートに写す中、狂気に話しかけてくる女生徒

がいた。

「いやー、この予測問題はすごいヨ。これを覚えれば9割点が取れるというのもあながち間違えじゃないかもネ」

「お前だって、やろうと思えばこれぐらいのことは出来るだろう？
麻穂良最強頭脳」

「貴方の様な人がいるなら、最強を名乗るのは早かったカナ？」

そう言つて頬をかく少女、超鈴音はすつと眼を細めながら言つ。

「少し聞きたいことがあるんだが、いいカナ？」

「授業中だ、おしゃべりは後にしろ」

「わかったヨ」

『貴方に聞きたいことがあるヨ。羅漢狂気。いや、クルキ・ラカンと呼んだ方がいいか？理解不能を継いだご都合主義殿^{チート}』

教卓の前に立つ狂気の頭の中に直接声が響く。

「（念話か）」

そつポツリと呟くと狂気は超を睨むが超は笑顔を向けたままだった。

『お前は魔法を使えないと聞いていたんだが？』

『使えないと使わないは違うヨ。でも、このことは黙っていてくれ』

るとありがたい』

『そうか、茶々丸のことでお前には世話になっっているからな。黙っていてやる。それで、俺に聞きたいことと言うのは何だ？』

『君はなに者なのかナ？』

その言葉に狂気の中の何かが苛立ちを覚える。

溢れだしそうになる怒気を教卓の下で血が滲むほど拳を握り抑える。

『私の知る歴史の中にクルキ・ラカンなんて言う人物はいないヨ。君は一体、なに者なのかナ？もしかしたら、君は私と同じ『黙れ、小娘』、、怒らせたなら、謝るヨ。君と争いたくはないネ』

『俺を怒らせたくねえなら、もう二度とくだらねえ質問なんざすんじゃないねえ。俺は俺だ。それ以外のあり方なんざ、俺自身が許さねえ』

『そうか、すまなかったヨ。私はただ、もしかしたら同士になれるかもと思っただけ、他意はないネ』

超の声に悲壮が混じる。

狂気は少し表情を濁らせながら言う。

『、、お前の予想は大方あつてゐるが、俺はお前とは違う。俺はただ、逃げてきたただけ。あの時代から。まあ、結局、何処に行こうが悲劇はあるってことを20年前の大戦で知ったがな』

『君はやはり未来を知っているのか。なら、わかるハズ。この世界の不正と歪みと不均衡が正されるべきだと。ならば、やはり、私の同士になつてはくれない力？悪を行い、この世界に対し僅かながら

の正義を成そう』

狂気は感じる、揺れる己の心を。

狂気は正義の魔法使いが嫌いだ、けれど、今までただの一度も正義の味方^{キョウ}に憧れを抱いたことが無いという訳じゃない。

人並みに正義を信じていた頃もあった、正義を尊い物だと信じていたこともあった。

「（悪を行い、この世界に対し僅かながらの正義を成す）」

それはとても偽悪で偽善的だが、とても“かつこいい”ことなんじゃないだろうか。

「（ふっ、）」

狂気は嗤う、そんなことを考えてしまっている自分を。

「（なにを馬鹿な。これじゃ、こんな押し付けた善意。立派な魔法使いの連中と変わらないじゃないか。それに）」

狂気が思い浮かべるのは、此処に来て出会った人達。

「（答えは、考えるまでも無かったな）」

『悪いな、同胞。この世界（幻想）、壊すには大切な者が増えすぎた』

『そうか、残念だ、同士。気が変わった時は何時でも声を掛けて欲しいネ。超包子で待っているカラ』

『そんな時が、来たのならな』

『待っているヨ。さて、同士。もう20分も経つ、みんなに10点上積みする方法を教えてあげるヨロシ』

『なぜ、いきなり命令口調なんだ？』

『ははは、だって君はなんだかんと言つて私の同士になる気がするヨ。そうしたら私が上司ネ』

『いやな予言だな』

互いに笑いながら念話を解く。

狂気は教鞭を振り始める。超はそれに耳を傾けた。

この教室でそう遠くない未来、とてつもなく大きな事件の伏線が張られたことを当人達以外、誰も知りしなかった。

「時間だな。これで授業は終わりにする。全員、内容を頭に叩き込んでおけよ」

「「「「ありがとうございます！」「」「」」

色々あった授業も終わり近右衛門への報告と職員室へ出向いての今日一日の謝罪、（新田先生は君が謝ることじゃない。と言ってくれた）を終えた狂気が廊下を歩いていると、そこに一人の少女の姿があった。

「狂気さん、少しよろしいでしょうか」

少女の名は桜坂刹那。麻穂良学園に居る狂気の数少ない友人、だと狂気は思っている。

出会い方こそ最悪だったものの、刹那も狂気に敵意が無いと分かる
と謝罪してきたし、狂気自身、刹那のように何かを守るために努力
をする者は嫌いじゃなかった。

「聞きたいことはわかってる。近衛小乃香のことだろ？」

「はい。学園長から危険はないと聞いていますが、一応狂気さんにも確認をと思ひまして。すいません、迷惑でしたか？」

「いや、いいよ。信用できないからな、あの学園長は」

「い、いえ、そういう訳では、」

「俺からの忠告だが、あの爺を信用なんてするなよ。魔法から遠ざけるとか言いながら、孫娘の部屋に魔法使いのガキを送り込むような狸だ。いい迷惑だろ、上から近衛に魔法を知られないようにしろと命じられてるお前からしたら」

「はい、実はそのことについては私の方からも抗議をしたのですが、聞き入れてもらえませんでした。、、私の力不足の所為で、お嬢さまの元にあのような子供を」

悔しそうに竹刀袋を握りしめる刹那に「お前が気に病むことじゃない」と声を掛けてから、狂気は仕切り直す。

「話が逸れたな、悪い。それで近衛のことだが、心配は要らないだ

る。万が一何かあっても、俺の弟子が傍についているからな、大概の事には対処できる」

「そうですか、安心しました。御配慮のほど、礼を言います」

「頭を下げるなら、夕映にしてやってくれ。何かがあっても近衛を守るのはアイツだ。俺は何もしていない」

「はい。しかと、」

夕映の名前を出すと、表情に影を落とす刹那に狂気は諭すように言う。

「自分で守ってやりたいなら、傍についてやればいいだろう。護衛本来のあり方はそれだし、夕映から聞く限りの近衛なら受け入れてくれると思うんだが」

「それは、そうかもしれませんが、、、、」

「いや、悪い。今のは俺の失言だ。ごめん、俺みたいな部外者が口を出すことじゃなかった。忘れてくれ」

「いえ、狂気さんの言うことは最もですから。全ては、不甲斐ない私が悪い、、」

落ち込む刹那にため息をつきながら、狂気は刹那の頭を撫でる。サラサラの髪が気持ちよかった。

「あ、あの、狂気さん？なにを、」

「全部一人で抱え込もうとするなよな。何かあったら言え。少しくらいは力になる」

「しかし、これは私の問題です。狂気さんを付き合わせるのは、悪いですから」

「安心しろ、好きで手をかすんだ。俺は刹那みたいな奴が好きだからな」

「なあっ！す、好きい！」

突然奇声を上げて赤くなると、慌てて頭を下げ去っていった刹那に狂気は首を傾げる。

そんな狂気の頭の上に居て、今の今まで空気だったチャチャゼロは動かない筈の手を動かして狂気の髪を引っ張る。

「痛いぞ。チャチャゼロ」

「浮気シテンジャーネーヨ」

「浮気、なんのことだ？」

「ウワ、コイツマジデワカッテネーノカヨ。同情シテヤルぜ、刹那。狂気ハヤラネーケドナ。ケケケ」

「何のことだか分からないけど、あんまり喋るなよ」

チャチャゼロにそう忠告してから、狂気は校舎を後にした。

こうして、色々と内容の濃かった狂気の一日臨時教員は終わるのだった。

そして、週が明けた月曜日に行われたテストで2年A組は見事に学年一位を取り、ネギは見事？に試練をクリアし、正式な教員として麻穂良学園で働くこととなった。

学年一位を取ったことでネギ祭り上げられ、クラスのみんなもそれに同調したが馬鹿レンジャー達（-1）以外は本当の意味で期末テストに貢献したのは誰だったかを理解していた。

ちなみに、そのことをエヴァと茶々丸から聞いた狂気が隠れて喜んでいたことは、狂気を盗撮していた茶々丸しか知らない。

おまけ

狂気の通う高校での期末テスト。

「羅漢、期末テストだから珍しく学校に来たかと思えば、その頭の上の人形は、何だ？」

「ただの筆箱です。気にしないでください。先生」

「ケケケ」

「いま、喋ったような気がしたんだが」

「ただの腹話術です。気にしないでください。先生」

「ケケケ」

「わかった、もういい、テストを始める。全員席に着け」

「ケケケ」

「羅漢。テスト中は静かに！」

「はい。先生」

2年A組！、、、、（後書き）

なにやら重要なフラグが立った！？
かもしれない。

次回からエヴァ戦闘編に突入です。

エラー（前書き）

エヴァ編開始！まあ、多分二三話で終わるけど。

エラー

ある日の放課後のこと、狂気と夕映は喫茶店のオープンテラスに居た。

周りには結界が張られ、中での会話は外から聞けば当たり障りのない物に変換されるようになっていた。

「そう言えば師匠、あの噂の犯人はやはりエヴァンジェリンさんなのですか？」

「あの噂？、ああ、桜通りの吸血鬼の噂か。そうだぞ。何でも学園長に頼まれたらしい。ネギの相手をしてやって欲しいとな。その為の下準備だろ」

「やはりですか。しかし、珍しいですね。エヴァンジェリンさんがそんな面倒な真似をするなどとは。何か目的があるのでしょうか？」

「さあな、暇つぶしかなんかじゃないのか？」

狂気は興味がなさそうにそう言って、自分の前に置かれたアイスコーヒーを飲む。

その様子を夕映は意外そうに見る。

「意外です、師匠はネギ先生が嫌いですから、もう少し興味があるのかと思っていたのですが」

「俺はネギを興味が出るほどに嫌ってはいない。ゴキブリと同じだ。目の前に出てきたら叩き潰すけど、探してまで潰したいとは思わない」

「、、、食事中にGの話はしないでください」

「、、、悪い」

不快そうに眉を顰める夕映を見て、流石にデリカシーが無かったな
と思い素直に頭を下げる。

夕映は仕切り直すように水分を含んでから喋り出す。

「では、今回の件、私達はノータッチということでもいいのですか？」

「少なくとも俺は静観するつもり。別にお前は好きにしてもいいぞ。
ネギに手を貸したいというならそれでもいい。正し、「エヴァンジ
エリンさんを本気で怒らせないこと」、ああ、わかってるならい
い。まあ、少しちよっかいを出すくらいなら、修行になって良いか
もしれないが」

「いいえ、止めておきます。エヴァンジェリンさんは女子供には手
を出さないと聞いていますし、心配も要らないでしょうから」

「そうか。懸命な判断だな、ところで夕映、ずっと気になってた
んだが、」

「なにがです？」

狂気はお茶を濁すように言う。

「お前、なにを飲んでいるんだ？」

「ペプ○キュウカンバー。まあ、キュウリ味のペ○シです。これ、

まだあったのですね？とづくに製造中止になっていると思っています」

「、、、、美味しいのか？」

「飲みます？」

「いや、いらない」

ある満月の夜。エヴァは桜通りで宮崎のどかを襲っていた、いや、正確には襲おうとしたが止めた。

「そういえば、この娘は狂気の弟子の友達だったか。ふむ、魔力もそう濃くないし、見逃してやるか」

なぜ、エヴァがこんなことをしているかと言うと、一重にただの暇潰しだった。

封印で魔力を封じられたエヴァが公認で暴れられる、しかも相手はあの男の息子。

暇つぶしにはもってこいだっただけだ。まあ、狂気と会う前ならネギの血を吸い封印と解こうとしたかもしれないが、狂気いるのならその必要も無い。

あと一年、ただ待てばいいだけだ。封印されて十五年も待ったのだから、後たった一年待つくらい、エヴァには何でもなかった。

「僕の生徒になにをするんですかーっ」

「ほう、来たか。どれ、少しは楽しませてくれよ？」

エヴァはネギの父、サウザントマスターの話を引き合いに出しネギを挑発する。

激情に駆られるネギは何も考えずにエヴァへ魔法を放っていく。わかつているのだろうか？放たれる魔法が魔力任せのこり押しで、エヴァ程の術者でなければ怪我では済まないということを。

「どうしてこんなことするんですか！先生として許しませんよー！」

「（わかっている筈も無いか。無知すぎる。狂氣がこの件から手を引いたのは正しかったな）」

自分と同じようにネギの相手をして欲しいと近右衛門から頼まれたもう一人の顔を思い出して、エヴァは苦笑する。

「（つまらん。終わりにするか）」

「紹介しよう。私のパートナー。3-A、主席番号10番。魔法使いの従者、絡繰茶々丸だ。パートナーの居ないお前では、私には勝てんぞ」

狂氣の知らないところで夜は暮れて行っただった。

エヴァとネギの初戦から数日たち。

その間に色々あったことを狂氣は夕映から聞いていた。

ネギが落ち込んでいて授業が成り立たなかったり、ネギが連れてきたオコジヨの妖精が下着ドロを働いたり、ネギが一般生徒に何も知

らせぬまま仮契約を結ぼうとしたり（未遂）。

狂気とネギは随分前に会って以来、顔も合わせていないんだが狂気
の中でのネギの評価は下落に下落を重ねている。

まあ、ともかく、そんなある日のこと。

チャチャゼロは狂気の前で呪いの踊りを踊っていた。

「ケケケ、狂気ノ血ヲ飲ンデ動ケルヨ―ニナツタゼ」

「元々、エヴァの魔力不足の所為で動けなくなっていたんだし、俺
の血を飲んで魔力を補充すれば動けるのは当たり前だな。なんで今
まで気づかなかったんだろう？」

「シラネー。マッ、アリガトヨ。礼八言ッテ置クゼ」

「素直なお前も可愛いな」

そう言つて狂気はチャチャゼロの頭を撫でようとするが、

「ウルセー、ヤッチマウゾ」

かわされた後、手を蹴られる。

狂気は苦笑しながら手を引いた。

「ジャア、俺八町ニクリダシテクルケドヨ、一緒ニ行クカ？」

「いや、今日はやることあるから。ごめん、俺は帰るよ」

「ソウカ、ジャ、マタナ」

「ああ、あんまり目立たないようにしろよ」

「此処ノ奴ラハ妹ガ動イテテモ疑問ニ思ハネー、人形ガ動イテルク
ライ平気ダヨ。ケケケ」

そう言つて飛び跳ねながら街に向かったチャチャゼロを見送つてから、狂気は自分の寮へと帰つていった。

「アー、人混ミウゼー、ヤツチマイデー」

狂気と分かれた後、チャチャゼロは物騒なことを言いながら街を徘徊していた。

「ヨクヨク考エリヤ、狂気ガイネート金ガネーカラ遊ベネー。カツ
アゲデモスルカナー」

エヴァと共に長く生きた殺戮人形も15年の間、ぬるま湯と言える
麻穂良に居た所為か、思考が不良になっていた。

そんな、少し残念なチャチャゼロが公園の前を歩いていると知つて
いる後ろ姿を見つけた。

「オ、妹ジャネーカ。ケケケ、アイツマタ猫ナンカニ餌ヤツテンノ
カヨ」

チャチャゼロは笑いながら公園で猫と戯れる茶々丸mp姿を遠くから
見る。

なぜだろうか、空っぽの筈の胸の中から何か温かい物を感じる気が

した。

「ナンド？俺、コワレチマツタカ？ヤツパ、御主人ノ魔力ジャナキ
ヤマズカッタカ？」

突然の違和感にチャチャゼロは首を傾げるが、原因は分らない。
チャチャゼロが久しぶりに戦い以外のことで考え事をして「マツ、
イーカ」という結論に辿り着いている間に何故か茶々丸とネギが口
論をしていた。

「ナニヤツテンダ？ケケケ、殺シ合イナライーナ」

茶々丸の元にチャチャゼロが向かおうとしたその時、明日菜が茶々
丸に向かって行く。

突進の上にデコピン。驚いた茶々丸は一瞬動きを止めた。

ネギはその隙を付いて茶々丸に向けて魔法を放った。

普通に避けられる筈のそれを、茶々丸は避ける気配が無い。後ろに
居る猫達を庇おうとしているのだと気づいた時、チャチャゼロは飛
び出していた。

「え？人形？」

「ちょ、何なのよ！」

「ね、姉さん！」

突然登場したチャチャゼロにネギ、明日菜、茶々丸が反応するが構
っている暇はなかった。

飛んでくる魔法の射手を手を持ったナイフで叩き落とす。

一本、二本、三本、、、六本目を落とした所で、チャチャゼロは気

づく。

「アア、コリヤマズイジャネエカ」

元々、チャチャゼロが狂気から供給してもらった魔力は普通に一日出歩ける程度の量。

戦闘を行うことなど、想定されてはいなかった。

「ア—ア、ナサケネー」

七本、八本目を打ち落とす。

チャチャゼロの体が重くなる。

九本、十本目を打ち落とす。

チャチャゼロは何時も通り笑いながら、妹の方を見た。

「マア、無事デヨカッタジャーネーカ。妹ヨ」

「姉さん？」

「ケケケ」

動けなくなったチャチャゼロの身体に、最後の一本が突き刺さった。公園に爆発音が響きわたる。

「え、、、姉さん？ネエエサン？neesann？」

煙が晴れた先にあった物は、片腕と片足が壊れ、焦げたチャチャゼロの姿だった。

「あ、ああ、」

エラー

エラー

茶々丸の身体から出る警告音が公園に鳴り響いた。

エラー（後書き）

やっちまっ たぜ、ネギ先生。 > (| |) <

エラーします(前書き)

茶々丸視点とか書いてみようとして、どういつ感じにすれば良いのかな？

と、悩んだ末にロボット風にしてみた！

なんか読み難くなっちゃったぜ！Σ(□_111)

エラーします

ピー ガガガ

現状を確認、ネギ・スプリングフィールド及び神楽坂明日菜との戦闘中、追尾型魔法至近弾多数が接近。

回避は可能。しかし、背後に居る動物、個体名・ネコに被害が及ぶ可能性大。回避は不可能と判断。

当方に回避行動なし。腕、足、腹部への被弾を想定。行動不能状態へ追いやられる物と判断。

「すいません、マスター、、、もし、私が動かなくなったら、猫のイサを、、、」

「ケケケ」

「姉さん？」

前方に戦闘への介入者あり。視覚的情報により個体名・チャチャゼ口。姉さんと確定。当方の味方であると判定。

ネギ・スプリングフィールド及び神楽坂明日菜 対 チャチャゼ口を想定。勝敗を計算します。

計算終了。機動力及び経験値は当方が圧倒的有利。勝率99 / 99 %と判断。

援護の必要性を計算。計算終了。必要性は認められず。機動力の差により、足を引っ張る可能性大。

このまま待機を推奨。推奨を選択。現状維持のまま待機します。

「アア、マズイジャネエカ」

不確定要素の発生を確認。当方、姉さんの機動力が元来の数値と隔絶している可能性あり。

原因は不明。今一度、援護の必要性を計算。計算終了。必要性有りと判断。

援護行動へと移行。移行不可能、当方の機動力では追いつきません。

「アア、ナサケーナ」

現状確認の為、視覚的情報へと移ります。

当方味方、姉さん、第10弾までの迎撃に成功。

続き第11弾が接近、迎撃行動へと移行。機動力低下、迎撃行動停止。第11弾、迎撃不可能。

「マア、無事でヨカッタジャネーカ。妹ヨ」

「姉さん？」

「ケケケ」

当方、姉さんの言動を確認。思考・試算した結果、該当件数あり。俗称、死亡フラグなる物と判断。直ちに救援の必要性有り。

第11弾、個体名・チャチャゼロへの着弾を確認。

視界、良好。当方に被害なし。当方が受ける筈の被害を、姉さんが受けた物と判断。

「え、、、、姉さん。ネエサン。neesan?」

返答はなし。左肩、右足への被害を視覚にて確認。危険レベルの損傷を受けた物と断定。

「あ、ああ」

エラー エラー

言語レベルでの エラー を確認、原因を解析。原因解析不能。

「この人形って、なんなんですか！ エラー しちゃいましたよ！」

「わ、私に聞かないでよ！勝手に飛び出してきたんじゃない！」

現状を確認。ネギ・スプリングフィールド及び神楽坂明日菜に現在戦闘の意思はなしと判断。

離脱を推奨。推奨を却下。姉さんを置いての逃走は不可能と断定。第二次案を計算。計算終了。姉さんを連れての逃走を推奨。

推奨を却下。ネギ・スプリングフィールド及び神楽坂明日菜への当方からの敵意を認識。

感情プログラムへの追加。俗称、憎悪という物が感情プログラムへ追加されました。

「よくも、姉さんを。ネエサンを。neesanを。エラー
します。エラーします」

ネギ・スプリングフィールド及び神楽坂明日菜への エラー を推

ネギ・スプリングフィールドの言動を解析。

アスナサンガゲヲシタラドウスルンデスカ。

神楽坂明日菜への被害を恐れているものと判定。理解不能。

「当方への攻撃及び私の姉を エラー した人が、なにを言っているんですか？」

「で、でも、明日葉さんが傷ついたら血を流す人なんですよ。茶々丸さんはロボットだし、エラー　したのはただの人形じゃないですか!」

ネギ・スプリングフィールドの言動を解析。

ただノニンギョウジヤナイデスカ。

理解、したくも無い、言葉と判断。解析を中止。

感情プログラム・憎悪の鎮火を確認。

新たに感情プログラムへの追加。俗称、無関心が追加されました。今後、ネギ・スプリングフィールドの行動の全てに関心無しという判断を下します。

戦闘への関心はなし、姉さんを連れての離脱を推奨。推奨を選択。

「姉さん、行きましょう。マスターならきっと直してくれます」

「あつ！逃げる気ですか！卑怯ですよ！」

ネギ・スプリングフィールドの言動は理解する必要性もなし。

「貴方など、戦う価値もありせん」

「なっ！どういう意味ですか！」

飛行装置を使つての離脱を推奨。推奨を選択。離脱しました。

「チャチャゼロ！」

エヴァからの連絡を聞いて、駆け付けた狂気が見た物はベッドに置かれていたチャチャゼロの姿だった。
何時も空いている筈の眼も閉じられ、普段では考えられないほど静かに寝ている。

「、、、エヴァ、チャチャゼロは」

「安心しろ。無事だ。間接部がやられて、中に魔力が入り込んでいただけだからな。元々チャチャゼロは頭部さえ無事なら復活できるよう頑丈に作ったんだ。二、三日もあれば眼を覚ますさ」

「そう、か。よかった」

安堵のため息をついた瞬間、狂気の全身から力が抜け、床にへたり込む。

普段では考えられない情けない姿を狂気は晒す。

それほどまでに狂気はチャチャゼロのことを心配していた。

「狂気様。御茶をお入れしました。どうぞ」

「あ、ああ、ありがとう。茶々丸」

お茶を口に含んで、心を落ち着かせると狂気は何時も通りの様子に戻る。

そして、それを見て安心したエヴァは切りだした。

「チャチャゼロこんなにしたのは、ボーヤか？」

「はい。私が公園でネコに餌をあげているさい、気を抜いてしまい襲われてしまいました。その時、姉さんが私を庇い。このような損傷を」

「ふ、ふふふ。あははは！本当に立派だよ。ネギ先生は、悪を倒す為なら昼間に魔法を使うことも生徒を襲うことも躊躇しないというのだからな」

エヴァが大声で笑いながらさういう。だが、眼は笑っていない。眠るチャチャゼロを見ながら、口元を歪に吊り上げる。

「そちらが本気で来るというなら、私も本気を出さなければならんな。なあ、茶々丸」

「はい。マスター。前回のようには手は抜きません。全力で潰しましょう」

「くつくつく、当然だ。あのガキ、氷漬けにしてやる！」

バンッ、とエヴァが床を踏みつめると部屋に冷気が四散する。茶々丸は何時も通りの無表情だが、瞳は鋭く細められていた。

「エヴァ、茶々丸。俺も「狂気は手を出すな」、だが！」

「元々、私がボーヤを調子づかせたのが原因だ。この決着は、私が付ける。いくらお前でも手を出せば、許さんぞ」

「、、、わかった。だが、大丈夫なのか？封印状態でもエヴァがネギに負けるとは思わないが、外野が手を出してきたらまずいだろ。最悪、高畑や学園長が出てくるかも知れないぞ」

「それ付いての策はある。なあ、茶々丸」

「はい、マスター。実はマスターの魔力を抑え込んでいるのが、サウザントマスターのかけた無限登校地獄ではなく学園に張られた結界ということが判明しました。この結界は科学の産物、電気によって動いています。なので、2日後の大停電の日、予備電力を落とすことでマスターの魔力は回復します」

「なつ、無限登校地獄以外にもエヴァを縛る呪いがあつたのか！」

「ああ、そうらしい。ハイテクという奴だな。私も10以上気付かなかったよ」

驚く狂気に、忌々しそうなエヴァ。
虚空を握りつぶしながら言う。

「まあ、そういう訳だ。大停電の日、私は魔力が戻り次第ボーヤを襲う。全力さえ出せば、私の前に敵などいないさ。タカミチが出ようが爺が出ようが、潰すだけだ」

「そうか。エヴァが全力を出せるなら心配はいらないな」

「当たり前だ。お前はチャチャゼロを見てやっていてくれ。言っておくが、間違っても、手は出すなよ？」

「ああ、約束する」

ネギは誤った。他人から見ればただの人形に見えるかもしれないチャゼロが誰かにとっては家族であり、大切な人であるということを理解していなかった。

ただ、子供だったからでは済まされない。

誰かを傷つけたのだ。なら、自分が傷つけられることを覚悟しなければならぬ。

ネギにその覚悟があるのかどうか、全ては大停電の日の夜。明かされる。

エヴァの家を出た狂気は、その足で超包子に向かっていた。

「超、頼みたいことがある」

「突然、なにかナ？」

「機械関係、ハイテクならお前が誰よりも詳しいから。——
そついう訳で、漬して欲しいんだ、学園長が掛けているだろう保険を」

「ふふ、なるほど、理解したネ。同士の頼みなら、聞いてあげてもいいアルヨ。けど、私は安い女じゃないヨ？」

「一つ貸し、ではどうだ？」

「アイ、お買い上げありがとうございます。同士」

こうして、大停電の夜。あらゆるイレギュラーが起こる可能性は消えた。

エラーします(後書き)

次回、エヴァ無双！

エヴァ 無双 1 主人公は留守番中（前書き）

エヴァ 無双！としか言えねえぜ、、

エヴァ無双1 主人公は留守番中

運命の大停電の夜。狂気は一人、エヴァの家に居た。

目の前にはベッドに横たわり、眠るチャチャゼロの姿があった。

無言の静けさが部屋を包む。時計の針が進む音のみが木霊していた。

チツチツチツ

そして、時計の長針が12を短針が8を指示した瞬間、部屋の電気がきえた。

暗闇の中で用意しておいた蠟燭に火を灯す。

狂気は窓から外を見ながら、呟いた。

「始まったか」

エヴァにとっては待ち焦がれた夜が始まるうとしていた。

この夜が訪れる間に色々なことがあった。

チャチャゼロの修理に没頭しすぎて風邪をひいてしまったり、風邪の上に花粉症を患ってしまったり。

ネギが謝罪したいと言ってきたから、話くらいは聞いてやるかと家に招き入れたら果たし状を付きつけられたり。

その時はその場で殺そうかとすら思ってしまった。

だが、耐えたのだ。我慢した。全てはこの日の夜の為に、ネギを完全な絶望へと誘い為に。

「ラス・テル マ・スキル マギステル 光の精霊、集い来りて、

、魔法の射手 連弾 11 矢！！」

「リク・ラク ラ・ラック ライラック 氷の精霊 12 柱 魔法の射手 連弾・12 矢！！」

相殺しきれない 1 本の魔法の射手がネギの身体を穿つ。

幾らネギがその身に障壁を展開しているからと言って、衝撃の全ては無効果出来ない。

ネギは乗っている杖を揺らしながら、痛みに耐える。

「ぐつ、ま、まだです！ラス・テル ラ・スキル マギステル 雷の精霊 28 柱 魔法の射手 連弾・28 矢！！」

「ハハ、雷も使えるとは！だが、詠唱に時間がかかり過ぎだぞ！リク・ラク ラ・ラック ライラック 魔法の射手 連弾・闇の 29 矢！！」

またしても相殺しきれない 1 本がネギの身体に突き刺さる。

何度も、何度も、当たる一本の矢がじわじわとネギの身体を傷つけて行く。

蛇の生殺しのようになり、痛みが、苦痛が、出来るかぎり続ければいい。

エヴァはそう考え口元を吊り上げる。

「くう、つつ、」

「アハハハ！苦しめ、ボーヤの苦しみが私の蜜となる！さあ、もつとだ！もつと！」

「（ス、スゴイ力だ。とてもかなわない。でも、あと少し、あと少しである場所が、見えた！）」

ネギが目指していた場所がわかった、エヴァは鼻を鳴らし嘲笑う。

「ふっ、なるほどな。この橋は学園都市の端だ。私は呪いによって外には出られん。ピンチになれば学園外へ逃げればいい、か。、、意外とせこい作戦じゃないか。え？先生」

無様に転がるその姿を見てエヴァは愉悦の笑みを浮かべながら前に進む。

無論、足元に仕掛けられた捕縛結界には気づいているが避ける必要すらなかった。

パシイイン！

捕縛結界が発動し、エヴァを包む。

「や、やったー！エヘヘ、ひっかかりましたね！エヴァンジェリンさん。もう動けませんよ。これで僕の勝ちです！さあ、大人しく観念して悪いことはもうやめてくださいね！」

「、、、、で？これがどうしたのかな？ボーヤ」

捕えられてなお笑みを浮かべたままのエヴァを見て、ネギは困惑する。

「私を捕えた後、ボーヤは私をどうする気なのかな？」

「え、ど、どうするって、、悪いことを止めてもらっんです！-」

「この結界では永遠に私を閉じ込めて置くことは出来んぞ。どうや

って私が行う悪行とやらを止める？殺すか、この私を」

「こ、殺すって、そんなこと出来る訳がないじゃないですか！」

「何故だ？ボーヤは茶々丸を殺そうとし、事実チャチャゼロを壊しただろう？」

「それは、茶々丸さんはロボットだし、僕が壊したのはただの人形だから問題はないって、カモ君がいました！」

杖を握りしめてそう断言するネギを見て、エヴァは思う。

「（ああ、これは、茶々丸が感情を抱いたのも当然だな）」

「無辜、無常、無用、無知蒙昧。ああ、極まればいつそ清々しい。良いだろう、認めてやろう。ボーヤのその理論。人間だから、人間じゃない者を殺すことに罪はないと。そういうのだな！いいだろうなら！」

エヴァの身体から魔力が溢れ出る。縛っていた結界が音を立てて崩壊する。

「私もボーヤと同じように、人間を壊そう。なに、問題あるまい？私は吸血鬼なのだから」

「あ、ああ、あああ！」

空間に満ちた冷気にネギは震え、生れて初めて死の恐怖を感じた。そして、生れてはじめての死地にネギの魔力は暴走する。

呪文も無く、ただぶつけられる為に放たれた魔力の塊を前にしても

エヴァは笑みを絶やさない。

「あああああああ！！」

「無駄だ、ボーヤ。怖れで私は殺せぬよ」

ネギの全力魔法もエヴァの前で霧散した。

知りたくなくても押し付けられるように認知させられるほど圧倒的な力。

突如として溢れ出た魔力は直ぐに麻穂良に居る魔法関係者へと伝わった。

無論、それは狂気と近右衛門にも伝わってきた。

「エヴァ、どんな結果になったとしても、俺はお前の味方だ」

「な、なんじゃ。この魔力は！」

狂気はチャチャゼロを見ながら薄く微笑み、近右衛門は学園長室の椅子に座りながら瞳目した。

それがそのまま彼らの違いであり、根幹にある意思の強さの違いでもあった。

男は恐れを抱かない。恐れる必要性も感じられない、あの魔力は味方であり友だから。

そしてもし、あの力が自分に向いたとしても対抗する覚悟はある。

戦いから逃げてきたからこそ、戦いが何たるかを知り覚悟している。

対して老人は人を知るが故に樂觀していた。闇の福音が誇り高き悪であり、女子供を殺さない主義であるということに胡坐をかいていた。

理解をしてなどいなかった。誇り高き悪であろうと、悪であり。主義は何処まで行っても主義でしかない。

「ケ、ケケケ。随分ト思ワレテルジャーネーカ、御主人ハ。焼ケチマウナ」

「つつ！気が付いたのか！チャチャゼロ！治ったか！違和感があるということかないか！」

「大丈夫ダカラヨ、身体ユスルノヤメロ」

「そうか、よかった。ホント、よかった」

そう漏らしながら抱きついてくる狂気を見て、チャチャゼロはため息を付く。

「（ナサケネーナー、俺。狂気ニ心配ヲ掛ケルナンテヨ）」

「コレジャ、守ラレルダケジャーネーカ」

「チャチャゼロ？」

『チャチャゼロ、お前がいてくれることだけが支えだよ。なんかあったら助けてくれよな』

思いだすのは、日常で言われた狂気の言葉。

なぜその言葉をずっと覚えていたのか、チャチャゼロ自信も分らない。

だが、なぜだろうか。空っぽの筈の胸に響くようにその言葉が木霊する。

チャチャゼロは生みだされて初めて、殺す為に戦うのではなく守るために戦いたいと思った。

今まで芽生えなかった感情が何故芽生えたのか、それは誰にもわからない。

「ナア、狂気。俺ト仮契約シテクンネーカ？」

「、、俺とお前が仮契約、だと？」

「アア、仮契約シテ、バイパスガ繋がレバ、才前から送ラレル魔力デ俺ハ自由ニ動ケル様ニナルシヨ、、。イヤカ？人形ト仮契約ナンテヨ―」

啞然とする狂気にチャチャゼロは普段では考えられないほど静かな口調でそいう。

「馬鹿、嫌な訳ないだろ。けど、出来るのか？チャチャゼロはエヴァと正式な人形契約しているだろ。幾ら仮の契約でも色々和不味いんじゃないのか？」

「、、、ケケケ、普通ソコハ人形ノ俺ガ仮契約出来ルカドウカ心配スル所ダロ―」

「変なことを聞くな？出来るに決まってるだろ、チャチャゼロはチャチャゼロなんだから。そんなことより、チャチャゼロが俺とエヴ

ア、二人の従者になることが出来るのかがだな「ソリヤ!」、、、、
痛い。なにすんだよ」

チャチャゼロは笑いながら狂気の頭を叩く。
狂気は不満そうにチャチャゼロを見た。

「勘違いシテンジャーネーヨ。誰ガ才前ノ従者ニナンテナルカヨ。俺
ガ従者ニナルンジャーネー、才前ガ俺ノ従者ニナルンダヨ。ソレナラ、
問題ネー」

「俺が、チャチャゼロの従者か」

「嫌力？」

「まさか、嫌な筈がないだろう」

狂気によって仮契約陣が引かれる。

蠟燭の光とは比べ物にならないほどの灯りが部屋を照らす。

「い、行くぞ」

「柄二モナク緊張ナンテシテンジャーネーヨ」

「うるさい。初めてなんだよ」

「ケケケ、俺モダゼ」

光の中で、狂気とチャチャゼロの影が重なる。
人形の主と人間の従者。なんとも珍妙な主従関係が出来上がった瞬間だった。

エヴァ無双1 主人公は留守番中（後書き）

エヴァは最強だと思うんですね、個人的に。
スクナを瞬殺出来ちゃうんですね？

チャチャゼロとの仮契約はご都合主義です。

でも、茶々丸もできるんだからチャチャゼロだってできるんじゃないかなあ？

エヴァ 無双2（前書き）

エヴァ 対ネギ戦。決着。

エヴァ無双2

たとえば彼の一生が、定められている物だとしたらどうだろう。

人生における選択、些細なものから重要なものまで、選んでいるのではなく選ばれているのだとしたらどうだろう。

与えられた環境、与えられた試練、与えられた従者、与えられた戦い。

そして、与えられた勝利。

富める者は富めるように、貧しき者は飢えるように、英雄は善人として、罪人は悪人として。

英雄の子は英雄に。

ただ流されるままに生きる人生。その流れを作る者、流される者。

英雄の子はなにも知らずに、ただ戦い、勝利する。

それが誰かが引いたレールの上であるとも気づかずに。

「うむ、まずいのお。まさか、エヴァがネギ君相手に本気を出すとは、此処までじゃな。高道君、聞こえておるの。予定より早いが停電を復旧させるのじゃ」

『はい。学園長』

遠見の魔法で様子を見ていた近右衛門は残念そうに高道へそう伝える

全ては定められた結果。

美しき者醜き者、弱き者強き者、不幸な者幸福な者。

——そして、勝者と敗者。

全てはそうなるようにそれ以外にはならぬように定められているとしたらどうだろう。

一人の英雄の子とその他多数。己の意思で決めたのではなくそうさせられているだけだとしたら。果たして、それを許せるか？

——否、断じて否

『が、学園長。停電の復旧が出来ません！』

「なっ、ど、どういうことじゃ！」

『わかりません。しかし、全システムが深夜12時丁度に復旧するように強制的にプログラムされています。ハッキングし返そうにも、何者かによって阻害されています！』

「な、なんじゃと。一体誰が、こんな真似を、、いや、それよりもネギ君が、このままでは未来の英雄が、高道君！そこはもう良い、至急ネギ君とエヴァの元に向かうのじゃ！」

『はい！わかりました！』

「、、、、高道君がエヴァを止められると善いが、しかし、一体誰がこんな真似を、」

「学園内の電力プログラムを全てハッキングしました。けど、こんな真似して良かったんですか？例の作戦を開始するまでは目立つ行動は控えた方がよかったですじゃ」

「仕方ないネ。同士との約束だ。それに、たったこれだけのことで同士に貸しを作れた。とても安い買い物ヨ。あと、私達は何も悪いことしてないヨ？ただ時間通りに停電が終わるようにしただけネ」

エヴァとネギの戦闘は一方的なものになっていた。

橋の上を逃げ回るネギを追うようにエヴァは魔法を放つ。

ネギの唯一の希望であった結界外への逃走も、作られた氷の壁がそれを阻む。

「どうした、ボーヤ。この程度でもう負けを認めるのか？お前の親父ならばこの程度の苦境、笑って乗り越えたものだぞ！」

「くっ、ラス・テル マ・ステル マギステル 来たれ雷精風の精！」

「ふっ、それでいい。リク・ラク ラ・ラック ライラック 来たれ氷精風の精！」

橋の上でエヴァとネギの魔法が衝突する。

方や勝利を約束されていた筈の英雄の息子と、方や負けることが決まっていた伝説の吸血鬼。

たった一人の男の介入によって、運命は変わる。

「雷をまといて吹きすべき南洋の風」

「闇を従え吹雪け常夜の氷雪」

「雷の暴風！！」

「闇の吹雪！！」

互いの魔法は一瞬だけ拮抗し、吹雪が暴風を包んだ。

吹き荒れる冷たい夜風の中でエヴァは月を背にしながらネギを見下ろす。

「まあ、よく頑張ったよ、ボーヤ。結局、私の足元にも及ばなかったが、最後まで一人で戦ったことは褒めてやろう」

捕えていた茶々丸の腕を抜けだして、ネギに駆け寄る明日菜を見ながらエヴァはそう言った。

途中でネギと合流し、仮契約を交わした明日菜の介入をネギは拒絶した。

もし、ネギがエヴァとの初戦で死の恐怖を感じていなかったら助けて欲しいと頼んでいたかもしれない。

だが、死の危険を感じたネギは、残っていた最後の理性で明日菜を遠ざけた。

その点だけは、確かに評価できることだった。

「どうして、どうしてこんな酷いことするのよ！エヴァンジェリン！」

「酷い？笑わせてくれるなよ、神楽坂明日菜。これは戦いだぞ。酷いも何もないだろう」

「ね、ネギはまだ子供なのよ！」

「戦いに歳など関係あるか。それに果たし状を叩きつけてきたのはボーヤの方だろう」

「それはアンタがクラスメイトを襲ったりするからでしょ！」

「ふん、そのクラスメイトに闇打ちを掛けたのは誰だったかな？」

「そ、それは、そうだけど」

「あまつさえ、私の家族を傷つけたんだ。殺されないだけありがたいと思え」

「、、、家族って、ネギが壊したあの人形のこと？」

「そうだ」

エヴァは倒れてボロ雑巾のようになったネギと、それを庇う明日菜をみながらいう。

「貴様らにとつてはただの人形だったかも知れんがな、チャチャゼ口は大切な私の家族だ。私は私の家族を傷つける者を誰だろうと許さない。大体、ロボットだから人形だからと覚悟も無く傷つけること自体が傲慢だ。貴様の勝手な価値観を押し付けるなよ、小僧」

「な、なら、僕は一体、どうすればよかったですか？エヴァン

ジェリンさんを止める為には、僕は戦わなきゃならなかった！どうすればいいっていうんですか！」

「簡単だ、覚悟を持つて戦えば良かった。私はボーヤのそこが気に入らん。たいした覚悟も無いくせに闇打ちして、謝罪と共に果たしたのだ？ふざけるなよ、卑怯に徹する覚悟も無ければ誠意を見せる気すらない。半端者だよ、親父とは大違いだな」

「うん、さん？」

「ああ、アイツは大雑把な奴だったが曲がりなりにも真つ直ぐだったぞ。私のことも最後の戦いで此処に封じ込めた。抵抗も出来ぬほど大きな呪いを植え付け、自由を奪つてな。ボーヤにはそんな覚悟も無いのだらう?」

[/ / / / / / / / / /]

「なら、奴の後を追うことは諦めるんだな。ボーヤでは奴の影も踏めんよ。もつとも、この弱さではそれ以前の問題か。アーハッハッハ。あー、おかし！」

「マスター、せっかくのシリアスな場面が台無しですよ」

「おつと、失敗、失敗。だが、まあ、シリアスになどなる必要も無かったな。奴の息子がこんなにも弱いとは、封印状態でも圧勝だったか。結界を解く必要などなかったな。さて、もういい、行くぞ、茶々丸」

「よろしいのですか？」

「ああ、此処まで言ってまだ立ち上がれないボーヤなど、戦う価値も無い」

「そうですね、マスター」

何時までも地面を見つめるネギを一瞥してから、エヴァと茶々丸は夜の闇へと消えて行った。

仮契約を終えた狂気とチャチャゼロは居間で休憩していた。

狂気とチャチャゼロを繋ぐバイパスは問題なく繋がったようで、チャチャゼロは自由に動き回り、エヴァ秘蔵のワインを勝手に開けてカパカパと飲んでいる。

「へー、コレが仮契約カードッテヤツカ。ケケケ、良く出来テンジヤネーカ。ソレニシテモ、ナンデ描カレテル狂気ハ上半身裸ナンダ？変態ダカラカ？」

「この格好は、魔法界で拳闘士をしてた頃の服だ。変態とか言うな」

「ナンダヨ、人形トキスシテ顔赤クスル奴ハ変態ニ決マツテンジヤネーカ」

反論できない、と思ったのだろう、狂気は開き掛けた口を塞ぐと息を落ちつけながらコーヒーを飲む。

「ふう、まあ、いい。それより、早く俺にスペアカードをくれ」

「アア、ホラヨ」

受け取ったカードを見れば確かに、上半身が肌蹴る黒を基調とした拳闘士服を着た狂気が立っている。

空手無刀で両手には何も持っていない、というより服以外には何も無い。

絵の中には無駄な装飾品も武器も描かれていない、ただ四角く描かれた地面に拳闘士服を着た狂気が立っているだけである。

「これ、可笑しくないか？普通は何らかのアーティファクトが描かれてる筈だろ？着ている服がアーティファクトなのか？いや、けどこれは俺が魔法界出来ていた服だし」

アーティファクト名は ラスト・バトル 勝者こそが正義を語る場

「なんだかカッコイイ名前だな。少し痛い気もするが。出してみるか？」

「ヤメトケヨ。ソロソロ御主人ガ帰ッテクルゼ」

時計を見ればいつの間にか十二時を過ぎていた。

「そうだな。疲れてるだろうから、紅茶でも入れてやるか」

そう言って、狂気は台所に向かうのだった。

その頭にチャチャゼロは飛び乗って何時も通り笑う。

大停電の夜は、こうして幕を閉じた。

エヴァ 無双2（後書き）

結構あっさり終わってしまった、、

エヴァ 無双 幕引き（前書き）

エヴァ 対ネギ戦。

これにて幕引き！

エヴァ無双 幕引き

大停電から一夜明けた早朝。まあ、早朝と言っても時間はまだ3時。そんな深夜と言ってもいい時間帯にもかかわらず世界樹広場には麻穂良に勤める多くの先生と一部の学生達が揃っていた。

男性、女性、人種、背格好、それは全員がまちまちに違っていた。一般的な教師のなりをした者もいれば聖職者の衣に身を包んだ者、果ては堂々と刀剣の類を持った者までいる。

何もかもが違う彼らだが、ただ一つの共通点があり、その名の元にここに集っている。

そう、此処に居る全員が魔法という神秘を知っている者たちだった。

「あ、真名。お前も来たのか」

集った生徒の内の一人、輪の端に居た刹那は近づいて来た女子生徒、龍宮真名を見てそう言った。

表情にこそ出さないが、その声色には安堵や喜びが感じられる。

「ああ、刹那か。流石にあれ程の魔力を感じてもなお、寝ていられるほど楽観的にはなれなくてね」

「そうか。どうあれ、来てくれてよかった。、、、どうにも、この場は居づらくて」

「全員殺気だっているからね。まあ、あの魔力だ。闇の福音が復活したのかと勘ぐっているんだろう。当然と言えば当然だよ」

「だからと言って、抜き身の刃物や銃器を持っているのは問題だろう。夕凧を持っている私が言えた義理じゃないが」

「確かにね。ガンドルフィーニ先生以外は闇の福音を樂觀視していたようだし、今回の件で気を引き締めて、引き締め過ぎてしまったという所じゃないかな？もしくは、この場に居る闇の福音と半分は同じである私達への牽制かもね」

「なるほど、、露骨に感じる居心地の悪さの正体はそれか」

龍宮からそう聞いた後、周りを見れば確かに自分達を周りが避けている様に思える。

無論、刹那自身自分から輪の端へと身を置いていたのだから、被害妄想である可能性はぬぐえないが、あながちあり得ないことじゃないと刹那は思う。

「まあ、居心地の悪さで行ったら私が一番です」

「うひゃ！だ、誰だ！、って、綾瀬か。いきなり後ろから声を掛けるな！」

「まったく、心臓に悪いね」

突然現れた夕映に刹那は奇声を上げて身を跳ねさせ、龍宮も驚いたが少し眼を大きく開くだけにとどめた。この辺が経験の差と言える。夕映は驚いた刹那の様子にピースを向けたが、刹那はこめかみをピク付けせるだけだった。

「ふふ、あまり刹那をからかってくれるな。これでも意外と恐がりなんだ」

「なっ、誰が恐がりだ！私は断じて臆病者などでは「そうですか、

わかりました」納得するな！」

「恐がらせてすいません。桜咲さん」

「謝るな！頭を下げるな！」

桜咲刹那、龍宮真名、綾瀬夕映、この三人は同じ3 - Aのクラスメイトであり仕事仲間でもあった。

表では各々の事情で表立って仲良しと言う訳ではないが、裏ではそれなりに仲良くやっている。

最近では色々な諸事情により三人でコンビではなくトリオを組んで仕事することもあり、前よりも砕けての会話が可能となっていた。三人でいる時のギャグ要員は刹那であるが、「私はギャグ要員ではない！」本人は認めていない。

「まあ、コントはそれぐらいにして「コントではない！」。綾瀬に聞きたいことがあるんだが、良いかな？」

微笑みながらそういう龍宮に夕映は何処からともなく取り出しや紙パックのジュースを飲みながら首を傾げる。

無視をされた刹那は涙目で龍宮を睨んでいる。

「なんです？」

「今回の件、君の師匠が関わっているんじゃないかと思うんだけどね。何か知っているかい？」

「んー、私は今回の件に関しては関わらないと師匠から聞いていますから、関わっていないと思いますが、師匠は少し気分屋というか、怒りっぽいところがあるのでもしかしたらという可能性は捨てきれ

ません」

「そうか。ん？今回の件というと、綾瀬は闇の福音の封印が緩むのを前から知っていたということかい？」

「ええ、龍宮さんは聞いていないのですか？元々、ネギ先生とエヴァンジェリンさんの戦いは学園長が与えたネギ先生への試練の一つだと師匠から聞いていたのですが」

「聞いていないな。刹那、君はどうだい？」

「いや、私も聞いていない。それに、あの様子では一部の魔法先生達以外も聞いていなかったのだろう」

刹那が目を向けた先には多くの魔法先生に詰め寄られる近右衛門の姿があった。

抑えに回っているのが高畑くらいしかない様子から、それが秘密裏に行われたことだとわかる。

「秘密裏に、というのは余りいい気分ではないが、学園長がどういう積りだったのか。それは彼らに聞けばわかるのかな」

そう言つて龍宮が目を向ける先には、吸血鬼とロボットに人形と人間という性別や人種どころか種族さえバラバラな四人の姿があった。

12時を過ぎた頃帰ってきたエヴァと茶々丸を迎え入れて、紅茶を出すついでに色々な話を聞いてから、布団に入っただのが一時間前。

丁度気持ちよく寝はじめた頃に呼び出され、狂気はとても機嫌が悪かった。

「眠い、眠いぞ」

「私は眠くないぞ、吸血鬼だからな。調子が良い位だ」

「俺も眠クネー、人形ダカラヨ。ケケケ」

「私も、睡眠は必要ありません。ロボットですから」

愚痴を零した狂気だったが周りに誰も援護してくれる者がいなくて仕方なく眠い目を擦りながら呼び出した元凶の方へと向かう。

周りを見れば、弟子や友、それに敵意を含んだ視線を向けてくるその他大勢がいる。

狂気としては面倒なことにならなければいいな、すぐに帰って寝たいなどと考えているが、隣を歩くエヴァと頭に乗っているチャチャゼロの笑みを見れば面倒に巻き込まれるのは確定していた。

「で、爺。私達を呼び出したのは何の用だ」

「ふむ、実はお。ネギ君との件を此処に居る皆に説明して欲しくて――」

「――」

エヴァと近右衛門が色々話をしているが、どれも狂気の耳には届かない。

眠いのだ。猛烈に、眠いのだ。こんな時間に呼び出された苛立ちよりも、眠気の方が圧倒的に勝っている。

狂気は耳に入る会話を全て聞き流しながら、エヴァの隣で立ったまま寝ていた。

「――！――！――！」

「――――」

「ぐう」

「オイ、オキロ。終ワツタミタイダゼ」

「、、、、ん、そうか。なら俺は帰る」

チャチャゼロの言う様に話し合いは終わったらしく、近衛門は疲れたようなため息を付いていて、その横では高畑が苦笑いを浮かべながら煙草を吹かしている。

エヴァは何時もと変わらぬ様子で悪い笑みを浮かべ、それを睨んでいるガンダロ、ガンドルフィーニ。

彼らの姿以外、もうあまり人は残っていなかった。もう帰ったのだろつ。

狂気ももう寮に帰ろうと、頭の上のチャチャゼロを茶々丸に預けて足を寮へと向けるが、

「待ちなさい！」

それを止める声がした。

狂気は面倒そうに振り返る。声の主はさっきまでエヴァを睨んでいたガンドルフィーニだった。

「なんですか？ガンドルフィーニ先生」

「君は悪である闇の福音の手下になってしまったのか！ネギ君と同じ英雄の子である君がなんでそんなことを！」

いきなり脈絡も無い言葉をぶつけられて、『英雄』という言葉に普段なら怒りを覚える狂気も一瞬、呆けた。

「別に俺はエヴァの手下になった覚えはない」

「ならなんで親しげにしているんだ！」

「友達だからですよ。だいたい、なんで親しげにしちゃいけないだ？敵対するならともかく、仲良くするのはいいことだろ」

「エヴァンジェリン・A・K・マグダヴェルは悪の魔法使いだぞ！君のように光を歩く者が関わっていい相手ではない！君も正義の魔法使いなら付き合う相手を選ぶべきだ！」

そしてガンドルフィーニの態度に怒りを通り越して呆れを覚える。

「はあ、いい大人が悪だとか正義の味方だとか言つなよな。そんな夢を抱いていいのは子供までだろ。魔法も使えない一般人だって、大人になるころには気づくんだけ？正義も悪もただの言葉遊びでしか無いって」

出来る限り言葉を選んで、親切に分かりやすくそう伝えた積りの狂気だったが、いまだに自分を睨みつけてくるガンドルフィーニにいい加減苛立ちを覚える。

「だいたいいいよお、もし仮に正義って奴がこの世にあったとしても、

それはテーマなんか口にしていい言葉じゃない筈だぜ？なあ、そうだろ。一般人の女を魔法で脱がするような変態小僧を庇ってる露出狂信者さん？」

「なあつ、き、君は何を言うんだ！」

「あれ？違うの？俺はてつきり自称正義の魔法使いは子供が女の服を剥くのが見ていて楽しいからネギを放置してるんだとばかり思ってたんだけど。そうじゃないのか？むつつりスケベ」

「ふざけるな！そんな理由でネギ君の罪を見逃すか！私達は彼が英雄の息子だからこそ、彼の悪行を、、はっ！？」

しまったと、あわてて口を塞ぐガンドルフィー二を見て狂気はにやりを笑う。

「なんだ、気づいてるじゃないか。結局、正義も悪もただの言葉遊びだって、なら、あんたにもまだ救いはある」

「くっ、」

「せいぜい、仲良くやりましょうよ。俺は別に、アンタ達と無理にでも敵対したいわけじゃないんだ。やられたらやり返すが、誠実な態度と相応の報酬を渡すなら手を貸すのも吝かじゃない。なあ、エヴァ」

「まったくだ！アーハッハッハ！」

「マスター、最近よく笑いますね」

「仕方ないだろ。見たかあの正義馬鹿の顔！あーおかし！」

「ケケケ、ザマアネエナア」

思い思いの捨て台詞を吐いて去っていく四人をガンドルフィーニは歯を噛みしめて見送るしかなかった。

おまけ

弟子と狙撃手と護衛ちゃん。

「なぜ、師匠はエヴァンジェリンさんの家の方向に帰っていくのでしょうか。寮は反対側の筈ですが」

「何かやることでもあるんじゃないのかい？夜じゃなきゃ出来ないこと、とかね」

「まっまさ、え、えっちなコト、、とか？」

「、、、、桜咲さんもむつつりスケベですか、、意外です」

「へ？」

「ふむ、意外だ。刹那がむつつりだったとは」

「こ、これはその、、ち、ちがーう！違うねん！ちょ、話聞いて！ウチを置いてどっかいかんというて！」

真実はこう

「あ、やばい。ノリでこっちに来ちまった。今から戻ったらかつこ悪いよな？」

「ケケケ、イイジャーネーカ。モウ遅イシ、ウチニ泊マツテケヨ」

「チャチャゼロがそう言うならそうするか」

「なんだ、貴様ら？仲が良すぎて少し気持ち悪いぞ。なんかあったのか？」

「「なんでもねえ（ナンデモネエ）」」

エヴァ無双 幕引き（後書き）

三話で終わったエヴァ編（；――）

次は修学旅行編か、すぐ終わっちまいそうだぜ！

修学旅行の約束（前書き）

ネタがない・・・（□；）！！
と言う訳でこれが終わったら修学旅行編に突入します。

修学旅行の約束

麻穂良学園の空気が浮かれたものへと変わっている。

ただでさえ普段から騒がしい麻穂良学園がさらに活気立ち、姦しい。そんな麻穂良の様子を外から見ると一団がある喫茶店のオープンテラスに居た。

「騒がしいな。何だというのだ？」

「マスター。もうすぐ、修学旅行ですから」

「ああ、そう言えばそうだったな」

茶々丸の言葉を聞いたエヴァは思い出したように不貞腐れながら紅茶を啜る。

眼に映るのは楽しそうにお菓子をまとめ買いするクラスメイトや子供な先生を引っ張り回すクラスメイト、クラスメイトを尾行するクラスメイトなど。

「ふん、修学旅行ごときで浮れおって、まだまだ子供だな」

「羨マシイナラ、素直ニソウ言エバイダロ、御主人」

「羨ましいのか？エヴァ」

「うらやましくない！だいたい、私は15年も中学生をやっているんだぞ！修学旅行だって五回目だ！京都だって二回目の時の行先だ！だから羨ましくなんてないもん！」

「羨ましいですね。マスター」

「羨マシインダロ、御主人」

「羨ましいのか、エヴァ」

まあ、考えてみれば中学生を15年もやって置きながらただの一度もエヴァは修学旅行に行っていないのだ、うらやましいとしても仕方がないことなのかもしれない。

「と、ところで狂気。貴様の高校の修学旅行は一体どこに行くのだ？」

三人に図星を付かれたエヴァは話題を逸らそうと必死になる。
いまいち、逸らせていないのは御愛嬌。

「ウチか？ウチは、確かハワイだったな」

「ふーん、ハワイか。やはり高校ともなると国内ではなく海外に飛び出していくのだな。まあ、良かったじゃないか。狂気は英語も出来るのだろうか？存分に楽しんでくればいいさ。お土産はマカダミアナッツのチョコでいいぞ」

「俺ハ、パイナップルワイン」

「私はマカダミアナッツオイルと言うものを」

「あー、いや、期待に添えなくて悪いが、俺は修学旅行には参加しないぞ」

「は？どうして参加しないんだ？」

「いや、だって俺、クラスに友達いないし。不良なんてやってると、友達が出来ないんだよ」

狂気の言葉で、一瞬にして場が凍った。

エヴァの飲んでいた紅茶はいつの間にかアイスティーになっていたし、茶々丸は何時もより身体の調子がよくなった。首を傾げたまま固まるエヴァは突き刺さるような二つの視線を感じる。

見れば、自分を睨んでいたのは二人の従者だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「（まつ、まで、私が悪いのか！）」

「（他に誰かいますか？）」

「（ア―ア、狂気ノ奴、可愛ソウダナー）」

「（だ、だが、別に奴に友達がいないのは私のせいではないぞ！）」

三人はそんな言いあいを念話でやっていたのだが、それを見て何を勘違いしたか分からないが狂気は言葉を続ける。

「あー、なんだ。だからさ、俺は修学旅行には行かないんだ。ああいうのって、班作って行動したり寝泊まりしたりするだろ？友達グループの中に仲がいい訳じゃない俺が入って、いまいち盛り上がらない様子とか見たくもないしな」

「（マスター。狂気様がとても悲しい言い訳を言い始めてしまいました。どうしてくれるんですか？）」

「（いや、どうするといっても、私にはどうも出来んぞ）」

「（・・・・・・まったく、使えないマスターですね）」　ボソッ

「（茶々丸！今、何を言った！私の聞き間違いだよな！？）」

「アー、狂気。意外だな、才前ガ他人二気ヲ使ウナンテヨー」

「その言い方は心外だ。俺も他人に気を使っぐらいする。蔑にするのは敵対する奴らだけだ」

気丈に振る舞う狂気を見て居られなくなったチャチャゼロはなんとか話題を逸らす。

「（流石は姉さん。それに比べてマスターは、はあ）」

「（今、ため息をついたか！ついたな！？）」

「まあ、それに」

「ソレニ、ナンダ？」

「修学旅行に行くのは、エヴァが卒業した後、みんなと一緒に行けばいいしな」

狂気は笑ってそういった。

言い合いをしていたエヴァ、茶々丸は顔を見合わせると声を合わせて答えるのだった。

師匠である狂気が爽やかに笑っていた頃、弟子である夕映は困惑していた。

どれぐらい困惑していたかと言えば、自販機の前でその話を聞き、間違つて烏龍茶を買ってしまうほど困惑していた。

「（なぜです。何故なのでしょう！）」

声が震える。目の前で囁かれる現実を直視できない。

烏龍茶を持つ手も震える。あり得ない筈だった。

そうなる道程を世界は明確な意思を持って潰していたというのに、これが運命だともいうのだろうか。

だとしたら何たる無体、世界は総じて厳しすぎる。

「ねえ、聞いているのー？夕映。のどかってはネギ君が好きなんだつてー！」

「ぱ、パル。違うよー。わ、私はネギ先生のことは、その、少ししか、」

「（神よおおー！）」

夕映は思わず頭を抱えて跪いた。親友であるのどかとハルナが何事かと騒んでいるが夕映の耳には入らない。それほどまでに、現実は厳しかった。

「（の、のどかがネギ先生に惚れている？どうして？年上の好きな人が出来たと言っていたではないですか！）」

なぜ、のどかがネギに好意を持っていたのか、その原因を言えば一重にエヴァと狂気に責任があった。

エヴァとの戦いに敗れたネギは、途方も無く落ち込んだ。

『父親とは大違い』『ネギではナギの影すら踏めない』

エヴァの言葉は、次代の英雄候補として褒めちぎられていたネギには堪えた。

ネギの潜在的才能、努力をみて周りに居る誰もが言ったのだ。

『英雄の息子は英雄になると』

ネギ自身、その言葉を信じていた。有体に言えば、奢っていたのだ。自分は父の様な英雄になる。だから、たとえ相手が誰であろうと完敗なんてことはないだろうと。

そんな思い込みが無ければ誰が伝説の吸血鬼、闇の福音になど挑もうと思うか。

けれど、戦った結果は惨敗。勝負にすらならなかった。

現実を知ったネギは、落ちに落ち込んだ。

それこそ、教師という職業に支障が出てしまうほどに、そして、そんなネギを励ましたのが明日菜であり3-Aの生徒たちだった。

心優しい彼女達に助けられ、ネギは立ち直った。元々が子供なのだから、落ち込むのも早いが立ち直るのも早い。

そしてそんな時、学園長から告げられた。

父への手掛かりが修学旅行先の京都にあると。

ネギは、完全復活を遂げた。悪い意味でも、いい意味でも。

そんなネギの様子を見て、のどかはネギに少しだけ想いを抱いてしまった。

元々、10才の先生などというまるで小説の主人公の様なネギに興味を持っていたのとか。

そこに何で落ち込んでいたかは知らないが、健気にもたちあがったネギに好意を持ってしまうのも仕方がないことなのかも知らなかった。

「（だとしても、これはあんまりの仕打ちではないですか！）」

「ゆえゆえー、どうしたのー。お腹、いたいのー？」

「だ、大丈夫です。の、ののとか。少し考え事してるだけです」

「いや、全然大丈夫に見えないんだけど」

無論、夕映としても、親友の恋は応援したい気持ちもある。

けれど、相手がネギというのは問題だ。

別に夕映はネギのことが嫌いという訳ではない。

師匠である狂気は厳しいことを言うが、弟子である夕映はネギは10才なりによくやっていると知っている。

魔法秘匿力の低さや仕事に私情を持ちだすことは否めないが、それでも生徒としてネギに接している夕映にはネギが日に日に成長しているのがよくわかる。

もう10年、いや5年もすれば夕映が知る仲でもマトモな部類に入る男性になるだろう。

そうなれば親友の恋を応援することに何の躊躇も抱かない。

けれど、今は駄目。

偉そうな言い方になってしまつかもしれないが、まだ、ネギは親友を安心して預けられるほどの男じゃない。

何より、未だ成長過程のネギではのどかに何も知らせないまま、魔法の世界に連れ込んでしまうかもしれない。

それだけは、本当に避けなければならぬこと。

こんな危険と冒険に満ちた非日常ファンタジーを生きてるのは自分だけでいい。

親友たちには何も知らないまま、幸せになつて欲しい。夕映はそう願っていた。

だからこそ、夕映は気持ちを落ち着けて口を開く。

「のどか、その、とても言い難いことなのですが。のどかがネギ先生を好きになるのは、少し問題があるとおもつのです」

「え？あ、その、ど、どうして？」

「先生と生徒、ということもありますし。それにのどか、前に好きになつたかもと言っていた人はどうなつたのです？嫌いになつてしまつたのですか？」

「ううん、そういう訳じゃないけど、その、最近全然会えないし、名前しか知らないから、」

「もしかしたらのどかは、その人に会えない寂しさをネギ先生で埋めようとしているだけなのではないですか？それは、ネギ先生にとっても失礼なことですよ？」

「……………ごめんなさい」

本を抱えて俯いてしまつたのどかを、夕映は眉を顰めて悲しそうに見つめる。

夕映には分かっている。目の前に居る親友はとても乙女なのだ。物語に登場するキャラクターのように、素直に恋をする。そして誰

かを好きになつてしまつたら、きっと周りが見えなくなつてしまう。その結果、訪れるのはシンデレラのような幸福かロミオとジュリエットの様な悲哀だろう。

夕映はそつとのどかの頭を撫でた。

「私達はまだまだ子供です。人を愛するという行為は初めてのことで、わからないことだらけだからこそ、迷いながらゆっくりと歩いて行きましょう」

「あ、うん。ありがとう。夕映」

夕映には自分の行動が正しいのかはわからない。もしかしたらネギに好意を持つことでのどかが成長することがあったかもしれない。

けれど、今はまだ言葉通り、夕映自身にもわからないことだらけだ。ゆっくり考えて行こう。

夕映はそう胸に誓った。

ほんわかした空気が流れる中、ハルナはひとり呟く。

「私、マジ空気」

修学旅行の約束（後書き）

潰した筈なのに復活するのどこかへのネギ君フラグ。
これが主人公補正か・・・

まあ、アレです。

チートアイレムである『いどのえにつき』を潰したくなかったんで
すよね。

綾瀬夕映の冒険 修学旅行開始！（前書き）

昨日、忙しくて投稿出来なかったので連投します。

修学旅行編開始！飛ばします。

そしてしばらく主人公の出番がありません！！？（「」；）！
ホエー！！

だって主人公は高校生で、女子中学生の修学旅行になんて参加しませんから！

綾瀬夕映の冒険 修学旅行開始！

休日をはさみ、週が明けた。今日は修学旅行の日。京都へ向かう新幹線の中で、刹那はため息を付いていた。手には関西呪術協会へと渡す筈の親書が握られている。

「まさか、こうも容易く親書を奪取されるとは」

「まあ、優秀と言ってもまだネギ先生は子供ですし」

地面に転がる二つに裂けた紙型を拾いながら言う夕映の言葉は確かに的を射ている。

先に起きた式神力エルの大発生を曲がりなりにも治めていたネギに、期待しすぎていたのかもしれない。

（自分は一体、何を期待していたのだろうか。まだ10歳の子供に）

だが、と、そう考えて居ても刹那はネギに期待を向けてしまう。

自分が知る中での英雄の息子というカテゴリーに入っている彼は、かくも凛々しく、理不尽なまでに強いのだ。

なら、同じく英雄の息子であるネギ先生だって、もしかしたら。

「狂気さんなら、この程度のことには動じもしないというのに」

「まあ、師匠ならまず問題すらおこさないでしょう。というより、こんな依頼受けもしないでしょうが。その点でいれば、ネギ先生には社交性がありますね。力量は否めませんが」

「しかし、ネギ先生だって狂気さんと同じ英雄の息子で、「ストップです」」

「ネギ先生と師匠を比べてはダメです。元々、師匠が規格外すぎるのですから、それに子供であるという点を除けばネギ先生の魔法は優秀な物だと思いますよ？」

「・・・そうか、同じ魔法使いである綾瀬がいうなら、そうなのかもな」

「まあ、適度な期待を持って行きましょう。第一、ネギ先生の手を借りずに私達だけで木乃香を守ることが出来るのが最善なのです」

「ああ、わかった。すまないな、綾瀬。元々、護衛は私の役目だといふのにつき合わせてしまつて」

「いえいえ、木乃香は私の友達でもありますし、桜咲さんだって友達ですから。友達の為に手を貸すのは当たり前ですよ」

笑いながら、そういう夕映に刹那は一瞬呆けながらもすぐに微笑みを返す。

「ありがとう、夕「待てー!」、ん？」

「あ、あれ？貴方達は、桜咲さんに綾瀬さん？」

そんな時、お約束のようにセリフを被せながら登場するネギ。刹那は紙型の残骸を拾い終えた夕映がもう行こうと促しているのを見て、頷く。

「あの・・・コレ・・・落としたものです」

「ええ、あー！これは僕の大切な親書！ーありがとうございます、助かりました！」

「気を付けた方がいいですね、先生。――特に、向こうについてかはね」

「あ、どうも」丁寧「・・・」

「いえ、それでは。行きましょう、綾瀬」

「はいです」

颯爽と去っていく刹那に続き、夕映は歩いて行く。
そんな二人を見送りながら、ネギは首を傾げていた。

「あれ？あの二人って、あんなに仲良しさんでしたっけ？」

「あの二人、メツチャ怪しいじゃねーか。もしかしたら、奴らが西からのスパイかも知れないぜ！」

「ええ、えー！まさか、そんなわけないよ、カモ君。二人ともクラスメイトなんだよ」

「じゃあ、どうしてあの二人が親書をもってたんだい？なんかの拍子にペーパーゴーレムを倒しちゃったとしても、残骸がねえ。きつと、あの二人のどつちかが術者で消してしまったに違いねえ！」

「そ、そんな。クラスメイトの綾瀬夕映さんと桜咲刹那さんが、ス

パイだなんて・・・」

ネギの勘違いを余所に、新幹線は京都へと到着し、遂に修学旅行は始まった。

そして当然のように関西呪術協会？の妨害工作？が行われる。

縁結びの神が祀られる神社の恋占いの石では落とし穴が仕掛けられ、

「（つつ！のどか、それは誰との恋を成就される気なのか！・・・あ、落とし穴）」

「きゃー！！」

「いいんちよとまき絵が落ちた！？」

清水寺では音羽の滝に酒樽が仕込まれ、

「な、滝の上にお酒が！一体誰が・・・」

「（その前に屋根の上に登るのはどうかと思うのですよ。ネギ先生）」

そうした妨害工作？の所為で、3・Aの一行は予定より早く嵐山にあるホテルへと向かうのだった。

ホテル嵐山の廊下でのこと。

夕映と刹那は二人で今日のことを話し合っていた。

夕映は首を傾げ、難しそうに眉を寄せながら手に持った紙パックのジュースを飲む。

「桜咲さん。とても聞きにくいことなのですが、呪術協会の人達は、お馬鹿ですか？」

「い、いや！そんなことはありません！ま、まあ、今日行われた妨害はなぜか頭の悪い物だったが・・・敵は、何がしたかったんだろうか？」

「んー？一般人に被害を出したくないから、悪戯程度の妨害に収めたのですかね？」

「あるいは、警告かもしれない。邪魔をするのならば、これ以上のことをするぞ。とか？」

「だとしても、いささか幼稚すぎるのではないだろうか？夕映はストローを噛みながら考える。

始めのカエルパニックは此方の出方、つまりネギ先生の力量を見る為のものだったとして、次に仕掛けられていた落とし穴には何の意味が？

「そこまで深い穴ではなかったから、怪我をしたとしても足を挫く程度のもので。」

「それぐらいの怪我で起こる弊害は怪我をした生徒が観光できなくなってしまうことくらい。」

「そんなこと、何の意味も無いのでは？」

「次の妨害は音羽の滝に仕掛けられていた酒樽。」

「毒ではなくあくまでもお酒なのだから、飲んでしまったとしても酔

ってしまっただけ、それが敵の狙いなのか？

酔わせることが敵の目的だとして、起きる弊害は。

酔ってしまったら、まあ、観光は出来なくなってしまう。

だが、それくらいの嫌がらせの為に、妨害なんて。

「いや・・・まさか、観光をできなくすることが敵の狙いでは？」

「ん？どういう意味だ、綾瀬」

「始めに起きたカエルパニックは別として、恋占い石の落とし穴、そして音羽の滝に仕込まれた酒樽。その二つに共通していることです！刹那さん！」

「いや、だから、もう少し分かりやすく話してもらえないか？」

「ですから、落とし穴に落ちて怪我をしたら無論、観光なんてできなくなります。お酒を飲んで酔ってしまったても同じです。最悪、飲酒がばれて宿に強制送還されるです。つまり、敵の目的はこの宿に私達を追い詰めること！「きゃー！」、と、気づくのが遅かったようです」

「今の声は、木乃香お嬢様！方向は脱衣場か！行くぞ、綾瀬」

「はいです！」

まずい、と二人は焦る。

もし夕映の考えが当たっているとしたら、この宿に追い詰め、逃がさないことが敵の狙いだとしたら、木乃香の身が危ない。

もう、敵は幼稚なふざけた罠など使ってこないだろう。本気で、来る筈！

その思いが、二人の足を急がせる。

「木乃香！」

「お嬢様！」

そして、ようやくたどり着いた脱衣場で見た物は、

「いやあゝゝん！」

「なんかおサルが下着をーっ！」

「な、なななんですかこれー！」

「だから、これはスパイ二人の妨害だって、アニキ！うっは、最高ー！」

下着を剥かれる明日菜と小乃香、そして手で眼を隠しているネギに、大喜びしているカモだった。

「・・・これが、敵の本命ですか？」

「・・・とりあえず、斬る！」

「え、えー！お二人は西のスパイなんじゃなかったんですか！」

「・・・ネギ先生、驚くのもいいですが、もう少し静かにしてください」

「さい」

「あ、す、すいません」

旅館のエントランスにあるソファアーの上でことの次第を説明していた夕映は眉を顰めながらネギを見る。

少しでも不機嫌なのは仕方がないことだろう、何を勘違いしたか知らないがネギは夕映と刹那のことを西のスパイだと思っていたのだから。

真面目に木乃香を護衛していた二人からすれば、ネギの勝手な思い込みは失礼なことこのうえない。

風呂場で起こった事件は、刹那が全ての猿と淫獣を斬ることで場を治めた。

その後、刹那は木乃香の前から逃げ出し、一旦は夕映から離れていたが今は隣に座っている。

木乃香には話があるということとで先に部屋へと帰ってもらっているが、そのことを伝えた時、夕映と共にいる刹那を見て、寂しそうにしていた木乃香の顔が印象的だった。

後でフォローをいれておかなければ、と考えている夕映の横では刹那がその場に居るネギ、明日菜、いつの間にか復活した淫獣に陰陽道についての説明や、木乃香に対する自分の気持ちなどを語っている。

「3 - A 防術部隊結成ですよ！」

「えー、何その名前」

「関西呪術協会からクラスのみんなを守りましょう！」

「（おや、いつの間にやら面白そうなことになっているのです。完全に乗り遅れました）」

盛り上がるネギと明日菜、恥ずかしそうにしながらも参加している刹那を見ながら夕映は呑気に京都限定もみじ茶を飲んでいた。

一頻りの決意表明が終わったのだろうか、明日菜は呑気にしている夕映を見て、首を傾げる。

「ねえ、聞いてなかったけど、桜咲さんと一緒に居るってことは綾瀬さんも京都神鳴流っていう組織の人なの？」

「ん？いえいえ、違いますよ。私はネギ先生と同じ、魔法使いです」

「え、えー！綾瀬さんって魔法使いだったんですか！」

「・・・ネギ先生、ですからもう少しお静かに」

さつきした注意をもう忘れているネギにやれやれとため息をついてから、夕映は話し始める。

「二年ほどに魔法と言う神秘を知る機会がありまして、それ以来の付き合いです。ですが、ネギ先生と違って魔法学校を出たわけではないので、あまり戦闘では期待しないでください」

「あ、そうなんですか。なら、夕映さんはさがってもらっていた方がいいですね」

「ふーん、魔法学校を出なくても魔法使いになれるものなんだ」

「アニキほどに強くはないってことか。・・・なあ、綾瀬の嬢ちゃん。そんな嬢ちゃんにぴったりのチヨ―簡単なパワーアップの裏技があるんだが」

「ん、ん。ネギ先生、明日菜さん、それにその淫獣。言っておきますが、夕映の捕縛術、結界術は一流です。攻撃するということだけが戦いではありません。全体を補佐する後衛と言う点では綾瀬はとても強い。けっして、足手まといではありません」

悪気はないだろうが、夕映を下に見た三人に少し怒気を感じながら刹那は言う。

「夕映も夕映だ。そんな自分を下に見る言い方をして、もう少し自信をもったらどうなのですか」

「まあ、はい。ですが、まだ師匠に免許皆伝も貰ってませんし、私は半人前ですよ？」

そう言っただけ飲み物をすすむ夕映自身が気にしてもしない様なので、刹那は何も言えなくなってしまう。

夕映としても刹那が自分の為に怒ってくれるのは嬉しいが、事実未だに自分は自分の身すら完全に守れるか怪しいのでそこまでの自信は持てない。

少し淀んでしまった空気を变える為か、カモは煙草を吸いながら状況の分析を始めた。

「つまり、桜咲の嬢ちゃんは前衛タイプ。綾瀬の嬢ちゃんは援護タイプってことだよな。そこに前衛の姐さん、後衛のアニキが加わるんだからバランスとしては悪くねえ」

「まっ、そうよね。前衛二人に後衛二人だもん。ゲームみたいに考えればいい感じじゃない」

明日菜を始め、自分の言葉に頷きを返す一同を見て、カモの眼はキラッと妖しく光る。

「けど、綾瀬の嬢ちゃんには攻撃魔法が得意じゃねえんだろ？チヨイ火力不足は否めねえな。そこでだ、チヨー簡単なパワーアップの裏技があるんだが」

「それ、さっきも言っていました、なんなのですか？」

「仮契約だよ、仮契約！アニキと仮契約すればパワーアップ間違いなしだぜ！」

「なっ、カモ。アンタねえ！」

「え、僕と綾瀬さんが仮契約！？で、でもそれって、キ、キスすることだよな・・・」

本人をそっちのけで騒ぎ出したカモに明日菜、顔を赤らめて俯きながらもチラチラと顔を見てくるネギに夕映はため息を付く。

何故か自分が仮契約をする方向で話が進んでいるが、夕映の意思は尊重されないのだろうか。

「さあ、綾瀬の嬢ちゃん！アニキとぶちゅーと仮契約を！」「いやです」って、ええ！なぜでいい！」

「仮契約をするということはネギ先生とキスをするということです」

よね？なら、いやです。私は好きでもない人とキスしたくありません」

詰め寄ってくるカモを鬱陶しそうに払いのけながら綾瀬は不快そうに眉を顰める。

「ただキスするだけでパワーアップ間違いなしなんだぜ！いいじゃねえか！キスくらい」

「よくありません」

言いいいを続ける二人を見て、ネギは夕映を見ながらおずおずと言う。

「あ、あの、綾瀬さんは僕のこと、嫌いなんですか？」

「いえ、別に嫌いではありませんが「な、なら」好きでもありません。どうして私が好きでもないネギ先生とキスとしなくてはいけないのです？」

「そ、それは・・・その、」

「木乃香の嬢ちゃんを守るためだろ！それにアニキはまだ10才のガキだぜ？いいじゃねえか、キスくらい。初めてって訳でもねえだろ？」

そういうカモには打算があった。

木乃香のことを引き合いに出し、ネギがまだ子供だということを利用する。

その上で初めてじゃないんだろ？と夕映を煽れば、仮契約するだろ

うと考えた。

明日菜もそれで落としたのだから、今回も上手くいくだろうと考え
ていた力モの作戦は、しかし、失敗に終わる。

「私は初めてですよ？つまりはファーストキスです。だからこそ、
好きな人に捧げたいんじゃないですか。木乃香のことは心配ですが、
私の初めても大切です」

「（が・・・あ、姐さんとは違う。この嬢ちゃん、本当の意味で大
人だ！？）」

幾らも恥じることなくそういう夕映に力モは衝撃を受けた。
明日菜はその言葉にバツが悪そうに耳が傾けていた。

「（確かに、幾ら相手が子供だからって、キスってそう簡単にする
もんじゃないわよね）」

夕映の言葉に、色々と考えさせられる明日菜だった。

その後、カモとネギは逃げるように外の見周りに行くと言って出て
行ってしまったので、明日菜と刹那、夕映は班部屋の守りに着くこ
とにした。

「よし、取りあえず、私達の役目は木乃香の護衛ね！って、なにし
てるの綾瀬さん？」

夕映達三人以外が寝静まった部屋で何やら作業をしている夕映に明
日菜は声を掛ける。

「いえ、旅館の周りには刹那さんが結界を張りましたが、念のために部屋にも結界を張っておこうかと思ひまして」

「へー、綾瀬さんはそんなこともできるんだ。でも、大丈夫？見周りの先生とかも入ってこれなくなっちゃうんじゃない？」

「そこは考えて、敵意がある人が入ってきた場合のみ発動する術式ですので心配無用です」

「そっかー、便利ね。ちなみに発動したらどうなるの？」

「まあ、簡単に言えば・・・爆発します」

「爆発！？なにが！？」

「色々と」

「そ、そっか」

表情が読み取れない夕映に恐怖を覚えた明日菜だった。

ちなみに、夕映の用心が功を奏し、刹那の張った結界を潜り侵入してきた敵が部屋の前で立ち往生したことを明日菜達は知らない。

「ちい、此処にも結界かいな。表の奴はカワイイ魔法使いのお陰で抜けられましたけど、これは厄介やわぁ。西洋魔法のようやし、あの新入りを連れてきた方がよかったか」

綾瀬夕映の冒険 修学旅行開始！（後書き）

なんだか、ネギ君がただのエロガキに見えてきたぜ・・・（ー、）
フッ

修学旅行編の開始、そしてだんだんストックが切れてきた。

まあ、取り合えず修学旅行編が終わるまでは持ちそうなので、基本
日刊掲載でいければ良いな〜とおもいます。

ちなみに修学旅行編はエヴァ編よりは長いです。（ー、）
チパチパチ！！ ↑ 自画自賛

過去編 千の刃と英雄嫌いの息子（前書き）

祝！総合評価1000pt越え！

ひゃっほー！！とか思ってた狂気の過去編。

これを読むと今まで謎に包まれていた？狂気の正体がわかります、英雄達を毛嫌いしている理由も。

追伸

戦闘描写を書くに厨二病が再発するのは俺だけじゃないですよ？

過去編 千の刃と英雄嫌いの息子

拳と拳がぶつかりある。

両者は一瞬だけ拮抗し、小さい拳の方が押し負け吹き飛ばされた。

俺は吹き飛ばされて、地面を転がる不甲斐ない姿を見て、笑い声を抑えられなかった。

「H A H A H A！相変わらず弱ちいな、狂気！」

「なっ、うつせーぞ！ジャック！俺だって本気を出せばお前なんて！見てろよ！はぁぁ「親父と呼べと言ってんだろぅがごら！」はぶでびばっ！」

「たっく、学習力のねえ奴だな」

「あ、あんたに言われたくはねえ」

「H A H A H A！」

「笑いごとじゃねえよ！終いにや死ぬぞ！？」

もう少しからかってやりたい気持ちを抑えながら、涙ぐみながら睨んで来る狂気に眼を落とす。

そう――

こいつは何も知らない。

自分がどういう立場にあるのか、そして俺がこいつにとってどういう存在であるのかも。

悪気があつた訳じゃない、ただ巡り合わせが悪かつただけだ。

俺は狂気にとつて、恨むべく存在。育ててくれた祖父と祖母を奪つた、大戦の殺戮者^{英雄}。

英雄なんて呼ばれちゃいるが、こいつから見れば俺は罵倒されて当然の存在。

あの馬鹿^{ナギ}と共に戦つたことを、今さら悔いちゃいない、けれど、こいつに真実を伝えたくはない。

いつか、ばれてしまうとわかっていても。

——だからせめて、今だけは。なあ、俺はお前のことを、

「どうしたんだ、ジャック？ 腹でも痛いのか？ つらそうだぞ？」

「へ、おおふ？ いや、そんなことはねえが・・・俺、変な顔でもしてたか？」

「ああ、泣きそうな顔だったぞ。どうしたんだよ、似合わねえ。ジャックが涙ぐんだつてキモいだけだぞ」

「・・・たつく、お前は」

「いったい、誰のせいだと思つてんだ。」

内心憤慨ものだったが、楽しくなっている当たり俺も救いようがねえ。

「親父と呼べつて何回言わせんだ！」

振るつた拳がかわされる。いつの間に、俺の拳がかわせるほど強くなつたんだよ。

「ははは！いつまでもやられっぱなしじゃねえんだよ！」

「ほほう、それは俺様への挑戦か？」

「なんだよ。俺がこんなこと言うのは生意気か？親父」

「・・・ああ、そうだ。まったく、偉そうに。糞ガキが」

ああ、頼む。

もう少しだけ、もう少しだけ、俺に時間をくれ。

血もつながってねえ、お前と親子でいられる時間を。

ジャックが孤児を拾ったと聞いた時は、あやつに子育てなど出来るものかと笑ったものじゃ。

すぐにあやつの不甲斐ない姿を身に行きたかったが、いかせん、私は王族、時間は直ぐには取れなかった。

ようやく出来た休暇の日に、隠居している奴の別荘を訪ねてみれば、あやつにまわりつくように懐く子供の姿があった。

ジャックに習ったのか、訳も分からぬ気の応用で拳からビームを出して遊んでいたのを見た時は思わずこけそうになったが、あのバグキャラの息子だというなら何故か納得もできた。

いや、それ以前に時には殴り合いの喧嘩をしながらも笑いあう二人を見ては、本当の親子以外に見えなかった。

信じられるか？私にはあのジャックが人の親に見えたのじゃぞ？私が祝いにと用意した肉の量が違うとかどうだとか、おやつのケー

キの種類がそっちの方がいいとかなんとかと、何かにつけて喧嘩をする二人を見ては思わず笑顔が浮かんだものじゃ。

そうして喧嘩をした後は、どちらからともなく笑っていた。

狂気が笑う声を聞いて、ジャックは私も見たこと無い笑顔を作る。

羨ましいと思った。接している時間は私の方が長いのに、狂気は私よりジャックの心の奥に居た。

どうしてなのかと考えて、これが親子というものなのかと納得した。

狂気が遂にジャックを親父と呼び始めた時、二人はこの関係は永遠に変わらないものなのだとそう信じていた。

だから、私には今、目の前で繰り広げられる光景を信じることが出来ない。

なぜ、どうして、狂気は目を血走らせて、ジャックは苦渋の表情を浮かべながら、殴り合っているのだ？

いつもとは違う、笑顔が無い、笑い声も無い、怒りと、悲しみがそこにはあった。

「・・・やめよ」

「ジャックううう！」

「狂気いいいいい！」

「もう、止めるのじあああ！」

「「うらあああああ！」」

幾ら叫んでみても、私の声は二人には届かない。

ある時、ふと気づけばそこに居た。

目に映る物は腕を流れる赤い色。駆け抜けた戦場。

辿り着いたのは無想とした安息。けれど、それはただの休息に過ぎなかった。

手にしたと思った物は、鉄色の手から簡単に零れ落ちた。

要らない。もう、嫌だ。

血の赤も、骨の白も、焼け爛れる肉の黒も、焼かれた臓腑の灰色も。

生きる為に、振るうしかなかった。

白銀の弾丸である右腕を、軋む戦車を思わせる左腕を、敵と呼んだ誰かは俺の腕でかくも容易くはじけ飛んだ。

戦いが避けられないなら、ただ一度も迷わない様に殺戮をくり返すしかなかった。

戦いを終わらせたいのなら、戦う俺を俺は殺すしかなくて、けれど俺は死にたくなかったからそんな真似は出来なかった。

だから、俺は逃げ出した。戦うことから、その時代からも、逃げ出した。

手を貸してくれたのは、子供の俺をこんな体にした祖父さん^{じい}だけだった。

けれど、逃げ出した先もまた戦場だった。

俺がいた時代とは違う、科学ではなく魔法で争う人たち。

俺達は領土を得る為に戦った、不毛な大地から逃げ出す為に戦っていた。

この時代の人達は、一体何のために戦っているんだろう？そう考えて、笑ってしまった。

——ああ、逃げた処で、逃げる場所なんて何処にもなかったんだと諦めて、絶望して、行くあても無く歩いていた俺を拾ってくれたのは、一組の老夫婦だった。

「どうしたんだい？坊や。独りでこんな場所にいるなんて、なにかあったのかい？」

「逃げてきたんだ。戦争から、結局、逃げられなかったけど」

「そうかい・・・辛かったねえ。お父さんとお母さんはいないのかい？」

「うん。もう、此処にはいない。俺は、逃げてきたから。俺が、逃げてきたせいで・・・」

「そうかい・・・なら、私達と一緒に来るかい？」

この世界に来て、初めて差しのべられた手はとても温かった。

その日から、俺はこの人たちと暮らし始めた。

老夫婦が住む村は、山の中にあって戦火もそこまでは届かないというほどの田舎だった。

便利な機械も無く、とても不便な生活だったけど、この人たちと暮らすうちに慣れていった。

朝から畑に出て、無理をしようとするお爺さんの代わりに畑仕事を手伝った。

最初は戸惑ったけど、俺の体は強いから、頑張れば出来た。

終わった後には、頭を撫でてもらえた。初めてだった、頭を撫でてもらうなんて、あの世界では幾ら頑張っても誰も頭なんて撫でてくれなかった。

夜になって家に帰れば、お婆さんが温かい食事を作ってくれていた。美味しいと感じた、あの世界では温かい食事なんて食べられなかったから、本当に美味しくて、残さず食べた。

そしたら、また、偉いねと頭を撫でてもらえた。どうしても分らなかったけど、嬉しくて久しぶりに笑顔が零れた。

そんな俺を見て、二人は孫が出来た様だと言ってくれた。どうしてだろう、嬉しいのにどうして涙が零れるんだろう。俺はここでの生活が、好きで好きでたまらなくなった。

ようやく、俺は逃げられたのだと思った。

けれど、世界はそんなに優しくなくて、ありふれた悲劇は本当に何処にでも溢れていた。

気がつけば、何もかもが燃えていた。耕した畑は吹き飛んで、温かいご飯を食べた家は崩れていた。

あとから思えば、あれはよく見知った光景だった。戦争に巻き込まれた、小さな村。

たったそれだけのこと。

けれど、その時の俺は忘れてしまっていたから、涙ながらに問う。

「どうしてなの？」

答えてくれたのは、優しく微笑むお婆さん。

「ごめんね、戦争から逃がしてあげられなくて」

その言葉を聞いて、俺は気づいた。

ああ、まだ俺は戦争におわれていたのかと。

みんなもえてしまったむらで、おれはひとりいきのこった、つよかつたから。

戦争から逃げ出して、逃げ込んだ先は戦争で燃えてしまった。

「どうしてなの？」

問うてみても、もう誰も答えてくれない。

仕方がないから、自分で考えよう。そう思った。

戦争ってなに？大切な人が殺されてしまうもの。

誰が殺すの？俺みたいな人間。

俺みたいな人間をなんていうの？わからない、最近は名前しか呼ばれなかったから、昔は別の呼ばれ方をしていたんだけどな。

思い出そうよ。あの世界で俺は何と呼ばれていたの？ああ……
……英雄だ。

俺はあの世界で、英雄と呼ばれていたよ。

じゃあ、英雄が悪い奴なの？うん、そうだよ。

最初から、わかっていたのに忘れていたの？うん、忘れていた。

最初から、俺は言っていたじゃないか。

戦いを終わらせたいなら、俺が^{英雄}俺^俺を殺すしかないって。

「ん？おい、坊主。どうしたんだ？こんなところに迷い込んで」

考え事をしながら歩いていた所為か、よくわからない場所に俺は居て、誰かが話しかけていた。

「何処から来たんだ？」

「火星。」

「ふーん。いろんな奴を見てきたが、火星を見たのは初めてだぜ。所で坊主、お前、一人なのか？」

「うん」

「父親とか母親とか、保護者はどうした？」

「いない、戦争から逃げてきたから、逃げた所為でいない」

「・・・そつか、なら、坊主。俺に着いてこい！このジャック・ラカンがお前の面倒を見てやるぜ！H A H A H A！」

差しのべられた手は、力強くて少し痛かったけど、とても温かった。

ジャックに出会って、俺は変わった。
たぶん、頭を叩かれ過ぎてどっかの螺子が飛んじまったんじゃないかと思う。

ボーっとしてたら元気出せ！って叩かれて、走り回ってたらうるせえっ！って叩かれて、料理を試みたらよくやった！って叩かれた。痛かったけど、それ以上に温かったから嬉しくて、そのことを話したら引かれた。

「お前、その年で痛いのが好きって、きめえな」

「・・・・・・・・・・そいう意味じゃねーよ」

「なんだ？最近、口が悪くなってきたねえか？」

「誰のせいだ！誰の！テメーのせいだろうがジャック！」

「親父と呼べと言っただろうガアー！」

「うつせんだよ。筋肉達磨！」

その時、初めて殴り合いのけんかをして俺は初めて誰かに負けた。
ぼろぼろになった俺を見て、ジャックは笑っていて、全身が痛い筈なのに俺も思わず声を上げて笑ってしまった。

ジャックの傍は、お婆さんやお爺さんの傍と違う意味で、とても温かった。

ジャックに自称最強の拳法を教えてもらい、何が言いたいのかわかんないと言ったらジャックに殴られて。

二人分のご飯を作って、このおかず嫌いとか抜かすジャックを殴り。

たまに来るテオドラの前で試合と言つ名の喧嘩をした。

その生活はとても楽しくて、嬉しくて。

もしかしたら俺はようやく戦争から逃げられたのかも勘違いしてしまふほど、平和な毎日だった。

けれど、勿論、そんなことはなかった。逃げられてなんていなかった、忘れてなんていなかった。

だから俺は、いま、拳を握って親父の前に立つ。

「なあ、親父。本当なのかよ、親父が大戦に参加してたつてのは！」

街に買い物に出て、耳に挟んだ話。大戦の英雄、紅い翼。千の刃、J・ラカン。

ああ、だめだ。それだけは、駄目だ。親父が英雄だつてことだけは、あり得ちゃいけない。

「うそ、だよな。親父みたいなチャランポランな奴が、英雄になんて慣れる筈が無いもんな。きつと、同姓同名の別人なんだよな！・・・なあ、親父。答えてくれよ」

何時もの様な陽気な笑顔も無く、親父はただ愕然と何かを悲しんでいる表情をしている。

やめてくれよ、それじゃまるで、隠したかった何かがバレたみたいじゃないか。

「親父・・・嘘でもいいから、嘘だつて、言ってくれよ」

その言葉に親父は覚悟を決めたように目を瞑ると、重い口を開いた。

「俺は、俺は、赤い翼の千の刃。大戦の、英雄だ」

「嘘だアアあアアあああああ！」

親父の顔を見て、堪え切れなくなり嘔吐した。

「俺を、騙してたのか？ずっと、今まで、何年も！」

「・・・・・・・・・・」

「あ、ああ、違うよな。俺が考えなかったただけだ。考えない様にしてただけだ。俺より強いアンタが、英雄じゃない筈がないもんな！」

崩れそうな身体は、脅迫概念によって動かされる。
根幹に根付く想いが拳に宿り、俺に囁く。

英雄が悪いんだよね？うん、そうだよ。
もう、忘れていないよね？うん、忘れてないよ。
じゃあ、やるの？うん、やるよ。

「俺は、お前が好きだ。狂気」

「俺は、英雄が嫌いだ。ジャック」

ジャックは悲しみ、俺は笑っていた。

本当に、どうしてこうも反りが合わない。

こうなってはどうやっても水と油で、何度やってももう交われない。

二人の拳は、戦意に呼応して淡い気の輝きを放つ。

けれど、ジャックのそれは何故か泣いているように見えたのは何故なのだろうか。

「俺は英雄を殺す」
英雄 アンタ

「そんなこと、俺は認めねえ」

この日、俺は久しぶりに戦争から逃げなかった。

テオドラが泣く中で、二人の姿はぶつかり合う。

互いの拳が拳をはじいて、血に塗れながら割れていく。

「ジャックううう！」

「狂気いいいいい！」

自戒と自嘲と多大な自虐が身を貫く、こうして殴り合っているだけじゃ殺せない。

この英雄の頑丈さは誰よりも自分がよく知っている。

「ラカン・インパクトオオ！」

「ラカン・インパクトオオ！」

全力の気をぶつける技も、同等の物によって相殺される。

「クルワ・クルクル・クルイ・クルウ 来れ アギデー・テネブラエ・アビュシエンシス・インケンデンス 深淵の闇 燃え盛る大剣！！闇と影と憎悪と破壊 復讐の大焰！！我を焼け 彼を焼け シン・ソールム・インケンデンス 其はただ焼き尽くす者」

「プラ・クテ ビギナル 来れ アギデー・テネブラエ・アビュシエンシス・インケンデンス 深淵の闇 燃え盛る大剣壊！！闇と影と憎悪と破壊 復讐の大焰！！我を焼け インケンダント・エト・メイ・エト・エウム・ソールム・インケンデンス 彼を焼け其はただ焼き尽くす者」

「インケンディウム・ナエ 奈落の業火！！！」

「インケンディウム・ナエ 奈落の業火！！！」

ならばと、唱えてみた魔法も、同系の物によって相殺される。当然のことだろう。

自分の扱う技も魔法も、全ては目の前に居る英雄から教わった物なのだから。

互いに、手の内は知れている。これではどちらも決定打を叩きこめない。

いや、師匠と弟子と言う点で此方の方が劣っているだろう。

「気を抜いてんじゃねえぞおお！」

「かつはっ！」

拳を腹に受けて気道から血があふれる。

それを見て、一瞬だけ動きを止めた英雄の拳を蹴り飛ばし距離を取

「ライトアーム■を殺す■。左腕■を殺す■」

ホ・ヘーロース・メキ・リオン・プロソーボン
「千の顔を持つ英雄」

拳が、身体が、魂が、戦争をする兵器へと変成する。

それは不毛な戦争を彩る為に作られた一種の芸術。

血と硝煙に染まった空の下で、ただ戦いを強いられてきた肉と機械で出来た英雄。

虚空から剣が、斧が、槍が溢れだす。

その場は剣爛舞刀が舞う場であり、英雄の舞踏。

生半可な銃弾では追い越し打ち砕き喰らい尽くす、千の武器を操る英雄。

「行くぞおおお！」

「行くぞおおお！」

兵器の英雄と武器の英雄はいま、此处にぶつかり合った。

大地が割れ、湖が乾き、空が砕けたその場所で兵器の英雄は武器の英雄に魔剣を突き付けていた。

「どうして、本気をださなかったんだ？」

「馬鹿野郎。息子相手の喧嘩に、本気になる親父がいるかよ」

「俺は英雄^{アンタ}を殺すんだぞ」

「ああ、好きにしてくれ。悪かったな、殺さなきゃなんねえほど糞つたれな親父だよ」

「、、ぐつ、つつ、うう、あ、抵抗、しろよ。いやだ、いやだ、いやだよ。俺、親父を殺したくねえよ」

「たつく、どっちだよ。殺すならなるべく痛くねえようにな。殺さねえなら、武器は下せ」

青年は武器を落とした。

「うつ、うああ、うあああー！」

「あー、よしよし、わかったから泣くんじゃねえよ。まったく、随分遅い反抗期だったじゃねえか」

「俺は、俺は、兵器なんだよ。だから、だからあ、英雄^{アンタ}を殺さなきゃいけなんだ。けど、けどお、親父^{英雄}を殺したくねえよお。どうすればいいんだよお」

「はあ、悪りいな。俺、ちゃんとお前のこと見てなかったわ。お前に必要なのは戦う力じゃなくて、教育だったか。、、、息子よ、学校に行って来い」

「がつこつ？」

「ああ、魔法界じゃ俺の息子ってことで色々メンドイから、旧世界

の麻穂良がいいな。俺の知り合いも要るし。そこで、ちゃんと自分を探してこい。いいな？」

「うん」

過去編 千の刃と英雄嫌いの息子（後書き）

狂気の本気、それは「ラカンと殴りあえるレベル」。
パねえぜ……（*―――|―――）フッ

綾瀬夕映の冒険 止められなかった悲劇（前書き）

前のは記念作品と言つことで、今日の分を投稿

綾瀬夕映の冒険 止められなかった悲劇

修学旅行初日の夜も過ぎ、今は二日目の夜。

昼間の間は奈良公園で鹿に鹿煎餅をあげたり、観光もしたのだが、特に珍しいことも無かったので飛ばさせていたどころ。

強いて言うなら、木乃香を護衛する為について来たネギにハルナがのどかをけしかけ様としていたことくらいだ。

そんなわけで始まった二日目の夜。その夜の嵐山ホテルは何故だが喧騒に満ちていた。

『修学旅行特別企画！くちびる争奪！修学旅行でネギ先生とラブラブキッス大作戦ー！』

いや、もう騒がしい理由は明確すぎるほどに明確だが、特に説明は要らないだろう。

そうやってホテルが盛り上がっている中、刹那と夕映はホテルを出た街道の見周りをしていた。

「なあ、夕映。なんだかホテルの方角が騒がしくないか？」

「そうですね。なんだか魔法の気配もしますが、敵意のある物ではありませんし、大丈夫じゃないですか？私達の身代わり人形も置いてきましたし」

「それもそうだな。神楽坂さんもいることだし、何かあったら連絡がくるか」

夜風の吹く中、歩いて行く二人。静かな京都の夜が、少し不気味に感じられた。

ふと、気付けばどちらからともなく立ち止まる。

「……………刹那さん」

「ああ、流石にこれは静かすぎる」

「人払いの魔法が何かでしょうか？」

「私の符術を西洋魔術なんかと同じにせんでくれます？」

夕映の言葉に答えたのは、刹那ではなく誰かの声だった。

刹那は背負っていた夕凧を抜き、夕映は懷から銀の指揮棒タクトを取りだす。

「あんさんらが、宿に結界を仕掛けている張本人でいいんやろうか？ そうなら、少しの間眠っててもらいますえ」

闇の中から現れたのは、熊と猿の着ぐるみを従えた黒髪長髪の美人天ヶ崎千草だった。

目の前に現れた明確な敵に目を凝らす。美人、と呼んで差しさわりのない大人の女性。

従えている善鬼と護鬼は随分ファンシーで可愛らしい外見ですが、それなりに強力な物だと見受けま

特にクマさんの方、あの手に付いている爪は普通に凶器です。

「刹那さん。私が二人の鬼の動きを止めますから、とっつきやすそうな方から還しちゃってくださいです」

「ああ、わかった」

刹那さんとそう話している間も、女性は笑みを浮かべて此方の出方を待っています。

どうして動かないのでしょうか？余裕綽々と言うものでしょうか？

だとしたら、なんて滑稽。戦場で余裕な態度というのは、師匠クラスになって初めて出来る物。

目の前に居る女性も、それなりに高位の呪術者なのでしょうが、師匠とは雲泥の差。

力不足も甚だしいです。

「お姉さん。お決まりごとということで、聞いておきましょう。どうしてこんなことを？」

「そうだ。貴様は何のために木乃香お嬢様を狙う！」

「何のために？そんなの、決まっていますわ。復讐の為に！行きますえ、猿鬼！熊鬼！」

動き出した二体の鬼に対するように、刹那さんが剣を振るう。

流星です。たった一人で二体を相手にしてくれている。

ならば、この隙に私は詠唱を終わらせる。

エヴァンジェリンさん曰く、魔法使いという物は究極的に言えばただの砲台。

ですから全ては火力が命。けれど、私には火力も無ければ、砲弾す

らありません。

ある物はただの鎖だけ。

「クルワ・クルクル・クルクルリ エクス・ソムノ・エクシスタツカス・スレーレンス・サラマン 目醒め現れよ 燃え出づる火蜥
ドラ イニミークム・インウォルウイダキ 蜴 火を以てして 敵を覆わん」

カプトウス・フランメウス
紫炎の捕らえ手！！！

生れた焰が大火の網となつて二体の敵を縛る。リミットは解除。
敵を捕え、溶かし拘束する我が鎖の前に跪けばいいのです！

「ナイスだ！夕映！はあああ！斬岩剣！！」

乗りに乗っていると捕えていた一体の鬼、猿鬼の首を刹那さんが跳
ね飛ばす。

・・・血が出ないからまだいいですが、あのファンシーな姿であ
の還され方はトラウマものですね。

「もう一体も！」

「させませんえ！お札さんお札さん、敵を倒しておくれやす」

お姉さんの手から離れた札から、大量に水があふれ出す。

クマさんを縛っていた大火の網は音を立てて消火されてしまいまし
た。

羨ましい限りですね、あのような攻撃手段も持っているなんて、で
すが。

「それくらいで、私の鎖から逃げられると思わないでください。誰
も、私の手からは逃げられません！」

クルワ・クルクル・クルクリ
メルポットアルウエウム
に敵を沈めん

エクス・ソムノー・エクシネアス・ダシス・ウンディー・オニミークム・イン
目醒め現れよ浪立つる水妖 水床

「前衛がいれば魔法が唱え放題。いいですね、最高にハイってやつです！」

ウィンクトゥス・アクアーリウス
流水の縛り手！！

「なあっ！？炎だけじゃなく水も操るんか！」

溢れ出た水を凍らせながら、流水の楔を敵に打ち込み動きを止める。
フハハハ！天の鎖よ！……ごめんなさい、トリップしてしまいました。

「斬空閃！」

「くまっ！？」

そうしている間にも、刹那さんがクマさんのお腹に大穴を空けて還しました。

いや、いいですよ？いいんですか、もう少し倒し方を考えてもらえるとトラウマにならずにすむのです。

とりあえず、もうサルとクマのぬいぐるみは買えません。

「つつ、お札さんお札さん。うちを逃がして」遅いです。魔法の射手 戒めの水矢！「なあっ！」

水で作った縄でお姉さんを縛りつける。束縛系の小規模魔法なら、無詠唱で使つくらい簡単ですよ。

符術は詠唱なしで使うことが出来て便利ですが、いちいち行う動作が面倒ですね。

動きを止めてしまえば、それで終わりです。

「終わり、ですね」

「ああ、案外呆気なかったな」

「な、なななんで、ガキがこんなに強いんや……」

「お決まりのセリフを言えば。復讐などに囚われる者に負ける訳にはいかぬのです」

「木乃香お嬢様に手を出すというのなら、手を抜く必要もありません。さあ、大人しく本山に送られて貰いませよ「えーい！」なっ、新手か！」

「刹那さん！」

お姉さんに手を伸ばした刹那さんを斬り飛ばすように、一人の少女が現れた。

ゴスロリというのでしょうか、随分ファンシーな服装です。

「この剣筋、まさか神鳴流か！」

「はい。どうも、神鳴流です。おはつに」

「こんなものが神鳴流剣士とは、時代も変わったな……」

「よ、よくきてくれた！月詠はん！」

やはり、というか当然このタイミングで現れたこの人はお姉さんの味方のようです。

刹那さんに奇襲とはいえ一撃を浴びせるとは、一体、どれ程の実力を有して・・・って、ん？

何故、お姉さんに顔を向けたゴスロリさんは顔を赤らめてくねくねしているのでしょうか。

「やゝん。千草さんもそういう趣味だったんやゝ。ウチとお揃いやねゝ」

「ちゃうわ！好き好んで縛られてるんちゃう！そこの嬢ちゃんに無理やり」

「はあ、ええなあ。その無理やりが気持ちええんよねゝ。」

はう！止めてください！そんな熱っぽい目で私を見ないで！

「せ、刹那さん！あの子は危険です！やっちゃってください！」

「は、はあ。まあ、敵だというなら倒すが」

そんな、どうしたんだ？みたいな目で見ないでください！

刹那さんには分からないんですか！？あのゴスロリさんの危険度が！

本当に、危ない人です。だってほら、さっきまで私を熱っぽい目で私を見ていたのに、今は刹那さんを見て顔を上気させています。刀身を舐めながら。

「ほな、遊びましょう。刹那センパイ？」

「どうして、私の名を？」

「ふふ、それがウチの楽しみやから」

「意味が不明だ！」

斬り合いを始めた二人。取りあえず、援護にでも入りましょうか。お姉さんの方はもうしばらく戒めの水矢が働いていて動きが取れない筈ですし。

たぶん、ゴスロリさんと刹那さんの力量は同じくらいでしょうから、私が援護に入れば時間も掛らずに倒せる筈です。

「いきます」

「油断大敵って言葉、知ってるか？チビ助」

「なっ、後ろ！？かつ、つう、」

くそっ、です。油断しました。まさか、もう一人援軍が居たなんて・

．．
首に腕を回され絞められる。

顔は見えませんが声からして男性。背丈は私より少し大きいくらいでしょうが。

「俺は女は殴らん主義や。なるべく痛めつけとぅない。せやから、なあ、大人しく千草姉ちゃんを解放してくれんか？」

胸に爪を突き立てられながら脅されます。

「・・・まったく、女性の胸倉にいきなり手をつ突っ込むなんて、マナーがなってません！」

師匠直伝 気合い爆破！

「なつ、自爆！？」

出来ればこの技は使いたくなかった・・・本来の意味で。

気と魔力を合わせて、わざと反発させる爆破技。

捕まった時に逃げられるのと爆風によって移動できる利点があります。

まあ、基本自爆ですから肉体な多大なダメージを受けますが。

「胸倉に手をつ突っ込むエロガキに捕まっているよりはマシですか」

「誰がエロガキや！チビ助！あんな有るか無いか分からんもん触っても嬉しくないわ！」

カッチーン。

「ふ、ふふ、お仕置きが必要みたいですね」

「いいぜ、来いや、チビ助」

と、言ってみた物の冷静になって考えればかなりまずい状況ですね。刹那さんはまだゴスロリさんとやり合ってますし、お姉さんを縛っている戒めの水矢ももうそろそろ効力が切れてしまします。

それに何より、私は肉弾戦が得意ではありません。目の前のエロガキは見るからにバトルジャンキーみたいですし。

「仕方ありませんね、奥の手を使わせてもらいましょう。刹那さん！」

「っ！ああ、承知！」

「あゝ、逃がしませんえ。センパイ」

「ちっ、前衛も姉ちゃんかい。やりづらい！」

三十八計逃げるに如かず。刹那さんが二人の攻撃をしのいでくれている間に、さっさと逃げましょう。

「クルワ・クルクル・クルクルリ 神々の鎖 魔狼は千切り 嘲り笑う 無駄知恵の根よ 敵を捕えて役目を果たせ！」

「およ？」

「んぎゃ！なんやこれ！？」

地面から伸びる根っ子がゴスロリさんとエロガキの足を縛りつける。これぞ私が誇るオリジナル必殺魔法の一つ！

レーディング
悪知恵で縛りつけるもの！（エヴァ命名）

「此処は退きましょう。刹那さん」

「ああ、わかった。月詠とやら！決着はいずれ必ず！」

「はい。また遊びましょう。センパイ」

「またんかコラ、卑怯やぞ！デコ助ー！」

敵の叫びを背に、私達は嵐山にあるホテルへと戻っていきました。

そして、旅館に戻って私が見た物は

「あ」

「え」

んちゅ？

「やつり！あははー！」

ハルナに足を引っ掛けられてネギ先生とキスしている親友の姿でした。

「なああああああ！？」

「ちょ、大丈夫か！夕映！？」

綾瀬夕映の冒険 止められなかった悲劇（後書き）

この作品の夕映は原作の夕映とは異なっております。

綾瀬夕映の冒険 現われたモノ（前書き）

主人公が動かない分、夕映が頑張ります。

しかし、変わらない現実が・・・これが歴史の修正力か！？

綾瀬夕映の冒険 現われたモノ

千草や月詠、小太郎との戦いがあつた夜から一夜明けた日。
夕映はネギや明日菜と共にエントランスのロビーにいた。

なんということでしょう。信じられません。まさか、のどかがネギ先生と仮契約をしてしまうなんて。
昨日の夜に帰って止められなかった自分をぶん殴ってやりたい気分です。

そう考えながら、夕映は落ち込んでいた。

「ねえ、綾瀬ちゃん。大丈夫？」

「大丈夫ではありませんね。まさか、ネギ先生とのどかが仮契約をしてしまうなんて。最悪の事態です」

「確かに、あの本屋ちゃんをこっちに巻き込むのは不味いわよね。戦うなんて出来そうもないし。たくつ、ネギ！アンタ何やってんのよ！」

「え、で、でもあれは事故で「言い訳しない！」うわーん。すいませんー！」

明日菜さんに叱られて涙を流しているネギ先生。
もう少しちゃんとしていてくれれば、のどかを任せようという気にもなるのですが、無理ですね。

所詮、まだ10才の子供ですし。
夕映はため息をついた。

「神楽坂さん。もうそれくらいにしてあげましょう。過ぎたことですし、今さらなにを言っても仕方ありません」

「でも、それでいいの？」

「しょうがないことですし。それに、聞いた限りではネギ先生は旅館であんなことが起きているとはしらなかったのでしょうか？」

いつまでも叱られているネギ先生に助け船を出す。
見ていて哀れだったから。

「は、はい。僕はパトロールに出ていたので。カモ君が朝倉さんと組んで勝手にあんなことを、してしまって・・・」

「なぜ朝倉さんに魔法がばれたかとか、ペットの問題は飼い主の責任だとか言いたいこともたくさんありますが、情状酌量の余地はあります。ネギ先生はネギ先生なりに生徒を守ろうとしていて、起きてしまったことなのですから」

「それも、そつか。まあ、今回だけは大目に見てあげるわよ」

「はい！ありがとうございます、明日菜さん！綾瀬さんも！」

「ちょ、御礼は受け取りますから抱きつかないでください。私は神楽坂さんではないのですよ」

「あつ、す、すいません」

まったく、委員長さんやまき絵さんの影響でしょうか、すこし馴れ馴れしすぎです。

「ねえ、綾瀬さん。その言い方だと私が何時もネギに抱きつかれて
いるみたいじゃない？」

「違うのですか？」

「……否定はできないけどさ」

不貞腐れてしまった明日菜さん、けれど、仕方がない評価だと思いますよ？

木乃香から聞きましたが、毎日ネギ先生と一緒に寝ているそうじゃないですか、幾ら子供といえど、好きでも無い人と男女同衾はどう
かと思うのです。

言いませんよ？そんなこと、喧嘩になったら嫌ですし。

「まあ、取りあえず。ネギ先生の件はそれでいいとして、次に主犯
格の朝倉さんとカモさんに付いてですが、これは庇いきれませんね
私にはどうすればいいかも分かりませんから、修学旅行が終わった
後、学園長に指示を仰ぎましょう」

「指示を仰ぐって……もしかしてカモ君と朝倉さんに何らかの罰
を与えるってことですか！」

「そうですね？当然じゃないですか」

「そんなのためです！カモ君は僕の友達で、朝倉さんは僕の生徒なんですよ！」

そう憤慨するネギ先生を見て、空いた口がふさがらないというのがどういう意味なのか教わかりました。

私が怒られる意味が分からないのですが？何なんでしょうね？

「ネギ先生の友達だろうと生徒だろうと関係ないんじゃないですか？魔法に秘匿義務があるということは私よりネギ先生の方が詳しいでしょう。魔法をむやみに露見させてしまった者がどうなるのか、しっていますよね？ネギ先生」

「・・・オコジヨにされちゃいます」

「はい。その通りです。法と正義。罪には罰を。それが人類普遍の一大正義なのですから、仕方がないことです」

「・・・・・・・・」

黙ってしまったネギ先生。子供には少し重い話だったでしょうか？しかし、わかってくれたというのならそれでいいでしょう。

さて、本題に入りましょうか。え？今までののはなんだったんだ？前ふりです。

「ネギ先生。回りくどいことは無しに言いますが、のどこには近づかないでくれませんか？」

「え？どういう意味ですか？」

「そのままの意味です。教師と生徒という立場なら、別にいいのですが、それ以上の関係にならないで欲しいのです」

私の言葉に、ネギ先生は不快そうな表情をしました。

「それは、別に綾瀬さんに言われることじゃないと思います。僕とのどかさんの関係は、僕とのどかさんが決めることです」

「確かに、そうでしょう。いくら親友でも口を出してはいけない関係という物があります。しかし、そこを曲げてお願いしたいのです。お願いします。ネギ先生」

私は、ネギ先生に頭を下げました。ネギ先生と神楽坂さんは驚いているようですね。

「のどかは、とても優しい性格をしている子です。虫を殺したことだつてありません。そんなのどかが、魔法の世界で生きていけると思いますか？」

「・・・・・・・・・・」

「もし、ネギ先生が絶対にのどかを守ってくれと、断言してくれるのなら私はもう何も言いません。断言できますか？ネギ先生」

「・・・・・・・・できません」

ネギには断言できる筈がなかった。心の中に残る、エヴァ戦での惨敗。

勝負にすらならなかったあの記憶があつては、絶対に誰かを守れるなんてもう奢ることもできない。

「なら、わかってくれますか？」

「・・・はい。わかりました」

「ありがとうございます。そして、ごめんなさい」

「いえ、いいです」

沈んでしまった空気の中、一同は朝食を取るためその場を後にした。

「・・・どうしてこうなったのです」

夕映は目の前の光景に只ならぬ怒りを感じながら呟く。

目の前には、仲睦まじいネギとのどかの姿。

明日菜は恐る恐る夕映に話しかける。

「ごめんね、綾瀬さん。ネギの奴、何にもわかってなかったみたい・
・・・」

「い、いえいえ、明日菜さんが誤ることではないです。それに、まあ、百歩譲ればあれも先生と生徒の健全な関係に見えなくもないですし」

「じゃ、次はプリクラ撮ろうか！のどかとネギ先生は一緒にね」

夕映は手に持っていた紙パックジュースを思わず握りつぶしてしまった。

「あ、綾瀬、さん」

「ふ、ふふふふ。なるほど、元凶はパルですか。ふははっははは！」
壊れたように笑い始めた夕映を置いて、明日菜はみんなの元に向かって行った。

正しい判断だったろう。今の夕映は危ない人にしか見えなかった。

そうして、何もわかっていなかったネギがのどかと仲よくするのを心配そうに見つめていた夕映。

そこに現れたなにを勘違いしたか分からない親友、ハルナのたわけた戯言『なにに、ネギ君とのどかの仲が心配なの？あんだ、もしかして？』に青筋を立てていた夕映は、今、そんなことがどうでもよくなるくらいに動揺していた。

あ、ありのまま、いま起こったことを話しますよ？

『ネギ先生とのどかの心配をしていたら、ネギ先生とのどかに神楽坂さんがなにを言わずにどこかに行きました』

な、なにを言っているか分からないと思いますが、私も何をされたのか分かりません。

頭がどうにかなりそうです。

子供だとか、魔法先生だとか、そんな小さな問題じゃ、断じてありません。

もっと恐ろしい物の片鱗を味わいました。

「せ、刹那さん。どうしよう、ネギ先生と神楽坂さんが居ません。のどかも居ません。確実に面倒な方向にことが進んでしまっています」

「・・・確かに、ネギ先生にも困ったものだ。おそらく親書を渡しに行ったのですが、声ぐらい掛けてから言っただけ」

「ど、どうしよう?」

「夕映は三人を探しに言ってください。言い訳は私がしておきます。木乃香お嬢様のことは、私がしっかりと護衛しますので心配は要りません」

「は、はい。それでは、お願いしますです」

頭を下げて、走っていく夕映の背を見ながら、刹那は呟く。

「いつも冷静な夕映があそこまで動揺するとは、いや、仕方がないことか、親友が此方側に来てしまうかもしれないのだから。私も、このちゃんが危険に晒されるかもと思えば、冷静ではいられないかな」

夕映は走った、関西呪術協会本山に向かって。
のどかを此方側に巻き込まない為に、自分と同じ立場に立たせない為に。

「駄目です。のどか、私と同じ過ちを、繰り返さないでください」

けれど、そんな思いを踏み躪るようにソレは現れた。

「ねえ、君が、千草さんの言っていたやり手の封印術師さんかい？」

「・・・誰です？貴方は」

「ああ、そうだね。名を聞くときは此方から名乗るべきだった。非礼は詫びるよ」

ソレは一礼してから夕映の正面に立つ。
その顔に表情はない。

「ボクの名は・・・そうだね。フェイトと呼んでくれるかい。ボクは君に興味を持った、同じ束縛者として」

修学旅行、三日目のお昼。

その時、私は、自分の命運を悟りました。

綾瀬夕映の冒険 現われたモノ（後書き）

次回、夕映に最大のピンチが到来！く” 0 ” ） くなんてこつ
た！！

綾瀬夕映の冒険 届かない力（前書き）

フェイト無双。

そして、夕映、覚醒の時！（――ノ、□、）ノオオオオオオー！
！

綾瀬夕映の冒険 届かない力

「僕の名は・・そうだね。フェイトと呼んでくれるかい。僕は君に興味を持った、同じ束縛者として」

目の前の少年の眼が私を捕えた瞬間、天が落ちてきたように感じました。

「——ガッ」

押しつぶされる大圧力。骨まで砕けそうな魔力の存在感。天が落ちてきたと思えませんでした。

身動きが取れずに地に押し付けられ屈服させられる。ひび割れていくアスファルト。

「・・あ・・あ」

少年に目を向けて、恐怖を感じたのは初めてでした。

私が直立すれば同じ程度の身長。銀色の髪に白い肌の顔には造形上何の欠点も見つけられない。

切れ長で、涼しげで、地獄の底めいたなにも映していない赤い瞳。

疑いようも無く、私は確信しました。この人は、師匠と同じ。バケモノじみています。

逃げなければ、逃げなければ、逃げなければ。

一刻も早く、脇目もふらずに、何を置き去りにしても良いから逃げるべきです。

だというのに、身体が動いてくれません。

「君は、聡いね。賢すぎるのかな、ボクという存在を完全にとらえ過ぎてしまっている。意外だよ、まだ彼も育っていない状態で、君みたいな子がいるなんて」

フエイトさん、が何か言っていますが耳には入らない。

どうして、身体が動かないのでしょうか。

逃げなければいけません、知らせなければいけません、こんなバケモノが居るなんて聞いていません。

すぐに師匠、に連絡して、助けに来てもらわなければ、のどかが、襲われてしまいかもしれません。

「——あ」

親友に害が及ぶかもしれない。そう考えた瞬間、夕映の頭が弾けた。

「へえ、立ち上がるのかい」

身体が軽い。先ほどまで感じていた、圧力が無くなっています。

人間脳にはリミッターが付いている。

幸せも苦しみも快楽も痛みも全ては上限があり、それを越えたとないにも感じられなくなってしまう。感覚神経の麻痺。

無論、それは恐怖にも準ずる。

夕映が幸福だった点は、人格が壊れてしまう前に限界を超えたこと。不幸だった点は、恐怖と共に知性すらも麻痺してしまったこと。

「縛るのも、止めるのも、私の特権です。私がアナタを止めてみせます」

普通に考えれば、それは正常な行動じゃない。

敵わないと分かっているのに挑むのは勇気でも何でもない、ただの蛮勇に過ぎない。

それが、いまの夕映には分からなくなっていた。

「いいね。ボクに負けぬと、良く吠えたよ。その魂、敵に値する。ただの仕事だったのだけれど、それなりに本気で行くよ。封印術師」

「綾瀬です。綾瀬、夕映です」

銀の指揮棒タクトを構えてそういう夕映を見て、フェイトは頷く。

「もう一度名乗ろう。ボクはフェイト・アーウェルンクス。3番目テルティウムとして造られた、曰く、土くれの様な人形らしい」

フェイト・アーウェルンクスの名乗りをして、夕映は一步も動かない。

ネギが小太郎と戦い、刹那が月詠から木乃香を守っている時、絶望的な夕映の戦いが始まった。

「ヴィシユ・タル　リ・シュタル　ヴァンゲイト　小さき王八つ足
・ボドーン・カヨイン・オンマトイン　プノエーン・トゥトシイタ由ノン・バライルーサン
の蜥蜴邪眼の主よ　時を奪う毒の吐息を」
バーシリスケ・ガムラーヨークト

フノエー・ペトラス
石の息吹――！

迫る煙はかの有名なメドゥーサの呪い、触れてしまえばどうなるか、考えるまでも有りません。

ならばどうしましょう？これもまた、考えるまでも無いでしょう。跡方も無く、吹き飛ばしてしまえばいい。

「気合い爆破！」

轟音を立てる爆発が起こる。

驚きは私とフェイトさん、二人の物。

巻き起こった爆風は、フノエー・ペトラス石の息吹を吹き飛ばすどころか、フェイトさんの身にすら届いていました。

「へえ、これは」

「な、これは」

フェイトさんは無表情のまま事態を呑みこんで、私は瞳目した。

「暴走かな？」

「というより、貴方がそうさせているのでしょうか。フェイトさん」

私の身体から、力が溢れてくる。土壇場での覚醒、なんていう都合主義。

けれど、負荷はあるようで、その全身は悲鳴を上げて、秒刻みに壊れていく。

「このボクと共振しているのかい？面白いね、今、君の魂は作りかえられているよ。原因は、なんだろう？やっぱり、同じ束縛者だからだろうか？」

夕映の成長は止まらない、体をむしばみながら、徐々にプラスへと向かっているのをフェイトは感じていた。

「これではいずれ、今の僕を上回るかもしれない」

フェイトはどこか楽しそうにそういった。

「クルワ・クルクル・クルクルリ 神々の鎖 魔狼は千切り 嘲り笑う 無駄知恵の根よ 敵を捕えて役目を果たせ！」

レーディング
悪知恵で縛りつけるもの！

大樹の根がフェイトさんの全身を縛りつける。いや、縛りつけるだけではとどまらず、その身を音を立てながら締め付ける。

だというのに、フェイトさんは表情一つ変えない。

「やっぱり、可愛い顔をしていてもバケモノですか」

「酷いことを言うね。たしかにボクは人ではないけれど、それは君も同じじゃないかな。このボクを拘束している君も、十分バケモノじみているよ」

「女性に向かってバケモノと言うなです！ 魔法の射手 連弾 水の58矢！」

バーシリスケ・ガリオメタ・コークトール・ボドーン・オグイン・オンマトイン
小さき王 八つ足の蜥蜴 邪眼の主よ その光 我が手に宿し
トイ・カコイ・デルタヌをサト
災いなる 眼差しで射よ

「カコン・オンマ・ペトロセオース
石化の邪眼！！」

放たれた光線で全ての矢が石化し地面に落ちて砕け散る。

捕えていた根も砕かれた。魔法媒体なしでの魔法行使にあの速度での超高速詠唱。

やはり、バケモノはあちらではないですか。

「オリジナルの拘束魔法。根源は魔狼^{フェンリル}を縛る神々の罠か。素晴らしい拘束力だ。これだけの力を持ちながら、綾瀬君。どうして君は、こんなところに居るんだい？ 君なら、もっと上を目指せるだろう？」

「上、というのは魔法界での地位ということですか？ そんなもの、要りません。私はただ厄介事を捕まえて、私に近づかないようにしたいだけですから」

知的好奇心の所為で踏み入ってしまった非日常^{ファンタジー}。

そんなものに私は縛られたくない、自由に居たい。
だから、私は縛り返す。私が縛らない様に。

「危険から逃げだすのではなく、捕えたい。どうしてだい？嫌なら逃げればいい、誰も文句なんて言う人はいないだろう。言う人はきつと頭がおかしい」

「理解してくれて嬉しいです。けれど、逃げる訳にはいきません。もし、私が逃げてしまったらそれは獲物を狙う猛獣がまだ徘徊しているということ。もしかしたら、私の大切な人が食べられてしまうかもしれないじゃないですか」

——好奇心は猫を殺す

こんな過ちをしてしまうのは、私だけでいい。

失ってから初めて分かる物の大切さ。

だから、非日常ファンタジーで生きるのは私だけでいい、親友たちには何も知らずに日常を生きて欲しい。

「優しいね、そして酷く傲慢だ。君が言う親友とやらも、君を心配したいんじゃないのかい？」

「傲慢じゃない人など居るのですか？少なくとも、私はあったことがあります」

「確かに、ボクもあったことがない」

話しながら行われる魔法と魔法のぶつかり合い、ふと、疑問が浮かびました。

どうしてフェイトさんはあの場から一步も動いていないのでしょうか。私と同じように、接近戦は得意ではないのでしょうか。

「クルワ・クルクル・クルクルリ 神々の鎖 魔狼は千切り 嘲り
笑う 千切られるたび繋ぎ直せ 永劫永遠 捕えるまで縛り直せ
第二の鎖よ」

「ガイシユ・タル リ・シユタル オー・タルタローイ・ おお ケイメノン・バシレイオン・ネク 地の底に眠る死者の宮殿
ローン ファインサスト・ヘーミン 我らの下に姿を現せ」

ドローム
阻止するもの (エバア命名)

ホ・モノリット来オン・トゥ・ハイドゥ
冥府の石柱

フェイトさんの魔法で現れたのは大量の巨大な石の塊。
その一つ一つを無限とも思える長さを持つ極太の鎖が縛っていく。
そして、その鎖は術者自身も捕えて止める。

「捕えました。その鎖は貴方のあらゆる行動を阻止します」

身体に巻き付いた鎖を興味深そうに見ているフェイト。
油断している間に、なんとか捕えることが出来ました。
これは私の想像ですが、出会った時の大圧力は接近戦も師匠レベル
だと言っていた気がします。

もし、最初から魔法での勝負ではなく肉弾戦を挑まれていたら、私

は1秒も持たずに倒れていたことでしょう。

今、この瞬間を逃したらもう私に次は無い。

おそらく、この現状でフェイトさんを止められなければ、今後もうこのようなチャンスはない。

「止まってください。フェイトさん！」

阻止するものにありつた^{トローマ}だけの魔力を注ぎ込む。

けれど、そんな私をあざ笑うかのようにフェイトさんは最初から変わらぬ表情のまま言いました。

「ボクを止める？無駄なことだ。何故なら僕は最初から止まっている。動いてすらないボクを止めたいというのなら、あと20万は鎖を持ってきた方が良い」

その時、耳と目を疑いたくなる事態が起きました。音が鼓膜を蝕んで、目が映像を映す。

「君は、一つ勘違いをしているようだから教えておこう。君は逃げないといった、けれど、君は戦わないといった。後ろにも前にも進まず立ち止まる君は、とても滑稽だよ」

私は、私は、私は何も出来なくて。——この化物に^{バケモノ}何ら太刀打ちできなくて。

ビキリと、鎖に亀裂が走ります。

「君は、弱い」

絶対と信じた鎖が砕け散った様子を見て、私は意識を失いました。

「ん・・・私は、生きていますでしょうか？」

眼が覚めて、気が付けば、フェイトさんは消えている。

壊れた筈の鳥居も、砕け散ったアスファルトも全てなにも無かったかのように元通り。

全ては、夢だったのかと思いました。

しかし、股から感じる寒気が事実だったと伝えてきます。

「・・・・・・・・・・・・・・・・とりあえず、替えの下着を買わなければ」

綾瀬夕映の冒険 届かない力（後書き）

フェイト君が中二病を発病しました。

綾瀬夕映の冒険 後悔の夜（前書き）

修学旅行の最後の夜、開始！

いい加減、主人公を出さなきゃ不味いな・・・（ ;_;> ）
うーん

綾瀬夕映の冒険 後悔の夜

綾瀬夕映は慌てていた。

明かに自分の力量以上に重い事体に困惑します。

私はただ親友である木乃香を護衛するだけでよかった筈です。

なのに、何故、私は木乃香と一緒に関西呪術協会の本山に居るのでしょう？

いや、まだそれはいいでしょう。

私自身、木乃香にいつまでも魔法を隠しておくのは難しいと思っていた者の一人です。

木乃香が何故かネギ先生が“秘密”の任務を行っているこの場にて、魔法が露見してしまっても仕方がないこと。

だが、どうしてここには私や刹那さん、ネギ先生や明日菜さん以外にも魔法を知らない一般人が居るのです？

これは非常にまずい事体なのでは？

もし此処に居る全員、こんな大人数に魔法が露見してしまったとすれば、オコジヨの刑にかせられるかもしれません

そう考えて、綾瀬夕映は慌てていた。

綾瀬夕映は悔やんでいた。

全てはあのととき、フェイトさんと戦った時に自分が負けたのがいけなかったのです。

恐怖と疲労で気絶してしまうなんていう失態を何故犯してしまったのですか。

もし、私がもつと早く動けて居ればこうなることを事前に防げたはずです。

いえ、考えてみれば、最初から間違っていたのかもしれませんが。舐めていました。関東魔法協会と関西呪術協会の確執を軽視してしまっていました。

まさか、ネギ先生と木乃香の敵があんなバケモノを雇うほど、本気だったなんて思ってもみませんでした。

師匠クラスの戦闘力を持つ魔法使い。あんなものに私やネギ先生が太刀打ちできるはずがない。

どうしてこうなってしまったのでしょうか？

この茶番じみた関東と関西の友好は、ネギ先生への試練の一つだった筈では？

そう考えて、綾瀬夕映は悔やんでいた。

綾瀬夕映は怒っていた。

どうしようもなく腹が立つ。頭の中で考える前に口に出てしまうほどに。

「これは、どういうことですか。ネギ先生」

怒気を含んだ、いや、怒気しか含まない声で夕映は言う。

ネギが親書を渡すまで夕映はずっと堪えていた。

大切な任務を邪魔するほど恥知らずにはなれないし、一般人の前で問いただすほど馬鹿にもなれない夕映の怒りは今ここで爆発する。

この場所には自分とネギ、のどかの他には誰もいない。もう、我慢する必要も無かった。

「どうして、のどかが魔法のことを知っているのですか？」

「そ、それは・・・ここに来る途中に敵に襲われてしまって。その時に、のどかさんにたすけてもらっただけです！」

「助けてもらった？一般人ののどかですか？」

「はい！そうなんですよ、綾瀬さん！のどかさんのアーティファクトはすごいんですよ！人の心が読めちゃうんです！とてもレアなアーティファクトだってカモ君も言っていました。のどかさんの力があつたから敵に勝てたんです！これからものどかさんがいれば、きっと誰にも負けませんよ！」

興奮気味に話すネギと、褒められて赤くなっている親友を見て夕映は愕然とする。

さて、どうしてこうなった。

私が言いたいことをネギ先生は微塵も理解していません。

私は一般人であるのどかの力を借りざる負えない状況に陥ったネギ先生を“責めた”のに、どうして目の前のネギ先生は嬉しそうに飛び跳ねているのです。

その上、これからものどかの力を借りる？ふざけるなです。

命の危機があつて、のどかの助けがなければネギ先生が死んでしまっていたというのなら、のどかの力を借りたのも仕方のないことだと思ひましょう。

けれど、それは一回限りに収めるのが普通です。

罪悪感もあるでしょう、やりたくはなんてありません、けれど、それを押し殺してのどかの記憶を消してしまうことが結果的にのどかを救う最良の手段なのは明白です。

「・・・ネギ先生。私とした約束、覚えているですか？」

「へ？約束？なにか約束なんてしましたっけ？すいません、長さんに密書を渡すことで頭がいつぱいで」

笑いながらそういうネギに夕映は失望した。

あろうことか、忘れたと言ったのだ。

夕映が頭を下げて頼んだことを、こんな簡単に忘れたと、悪びれる風も無く。

「それで、なんのことですか？」

「・・・あんまりです」

夕映は思わず涙を零しそうになって、なんとかとどめる。

「・・・任務が果たせて嬉しいのは分かります・・・けれど、その言い方はあんまりではないですか・・・私と約束した筈です・・・のどかを・・・巻き込まないと」

「それは・・・でも、のどかさんが勝手に付いて来たんですよ？」

ネギのその言葉に、夕映はついにキレた。

泣き掛けていた瞳は怒りに歪み、大声でネギを攻め立てる。

「ふざけるなです！勝手に付いて来た？そうさせたのは誰ですか！
なにも言わずにいなくなっただのは誰ですか！一言、言うてから出て行けば私もフォロー出来たのに、それすらしなかったのは誰ですか！」

夕映の思いを理解していなかったネギには怒声が突然の怒りに思えた。

理不尽な物に思えた。

自分は悪くない、だってそうじゃないか。

僕は立派に学園長先生から依頼された任務を果たしただけ、それにたまたまのどかさんが付いてきちゃっただけじゃないか。

悪いことをしたわけじゃないんだから、怒られるのはおかしい。

むしろ、善いことをしたんだから褒められるべきなのに。

「僕はしっかりと任務を果たしたんです！どうして怒られなきゃならないんですか！」

「つつ！」

夕映は手を振り上げる。

怒られる理由はその理由が分からないからだ。

夕映がネギに向けて振るった平手は、ネギには届かなかった。ネギを庇ったのは、巻き込みたくなかった親友だった。

「・・・のどか」

「痛いよ。夕映」

「・・・ごめん、です」

痛々しそくに頬を抑えるのどかを見て、夕映は罪悪感に苛まれる。のどかは悲しそくに夕映を見た。

「ねえ、夕映。どうしてネギ先生を叩こうとしたの？」

「それは、ネギ先生がのどかを巻き込んだから」

「私は、巻き込まれたなんて思ってたないよ。ううん、嬉しかった。ネギ先生に魔法のことを教えてもらえた時、嬉しかったよ。ネギ先生の秘密を知ることが出来たんだって思えて嬉しかった」

「そ、それは間違った解釈です。確かに好意を持つ人のことを知るのには嬉しいかもしれませんが、危険を伴「それでね。夕映。悲しかったよ」・・・なにがです」

「夕映が魔法を知っているってネギ先生から聞いた時、すごく悲しかった。ねえ、ゆえゆえ、どうして教えてくれなかったの？」

のどかの瞳はとても悲しそうに夕映を見続けていた。
夕映は首を振る。

違う、悲しませたかったわけじゃない。
だた、巻き込みたくなかったんだ。
優しいこの親友を、危険にさらしたくなかったただけなのに。

「違う、違うんです。私はただ、のどかを危険から遠ざけたくて」

「・・・我が儘だよ。ゆえゆえは傲慢だよ。・・・そんなの寂しい」

そう言っただけを振るわせる親友を見て、夕映には掛ける言葉がない。
ネギはそんな二人を見て、のどかの肩に触れた。

「行きましょう。のどかさん」

「・・・・・・・・」

無言でネギに付いて行くのどかに声を掛けたくても、夕映にはどうすることもできなかった。

力なく震える夕映の手から、紙パックのジュースが落ちる。零れた滴が床を濡らした。

夜になり、食事が終わった後、夕映は一人で部屋の天井見上げていた。

気分が悪いので独りになりたいと言って借りた部屋、隣からは楽しそうな笑い声が聞こえてくる。

「どうしてこうなってしまったのでしょうか」

そう、小さく呟きながら夕映は考える。

私はただ、親友に泣いて欲しくなかったただけなのに。結局は泣かせてしまった。

どうすればよかったのでしょうか。

魔法を知ったあの日に、全てを話してしまえばよかったのでしょうか。

けれど、そうしてしまえば親友たちを巻き込んでしまっていた。

そんなことはしたくなかった。魔法は確かに素晴らしい物だけど、同時に危険すぎる物だと師匠に教えられた。

火薬も何も使わずに爆発が起こせる、自由に記憶を操ることだってできると聞かされた。

それを聞いた時、素直に怖いと思った。

もし、街を歩いている時に隣に居るのが魔法使いだったら突然殺さ

れてしまつかもしれない、そして記憶を操られて何をされたかも分からないうまま身体を弄ばれてしまつかもしれない。

そう思うと、怖くてどうしようもなかった。しばらくの間、怯え続けていた。

だから、私以外の誰かには何も知らずに笑って居て欲しいと思った。

「私は、間違っていたのでしょうか？」

問いかけた処で、答えなんて返って来ない。

布団をかぶって、目を閉じる。

嫌なことなんて全て忘れてしまいたい。これ以上何も起こらないで欲しい。

今、この瞬間に時が止まってしまえばなにも悩まずに済むのに。

「のどかに、嫌われてしまいました」

嗚咽が漏れる。枕が涙で濡れた。

どれくらいそうしていただろうか、夕映が目をこすっていると不思議なことに気づく。

あれだけ騒がしかった隣の部屋から、何の物音もしなくなっていた。不思議に思った夕映は隣の部屋を覗こうと向かう。

「みなさん。もう眠ってしまったのですか？」

そう言つて、覗いた先に広がっていたのは不思議な光景。

みんなが一步も動かず、固まっている。

一瞬、何かの遊びかと思ったが、良く見て、違うと気づく。

「みな、さん？のどか、ぱる？」

石化していた。

自分が泣いてなんている間に、きつと敵が来てみんなに石化の魔法を掛けたのだと気づいた時、夕映の目からまた涙が零れた。

「私が、泣いてなんて居たから。・・私は、また、・・あやまちを・
・ひつぐ・・うう、あうああ」

泣いている場合じゃないことぐらい分かっている。

すぐにでも石化している親友たちを助けなきゃいけない。

けれど、夕映には高等魔術である石化を解呪することなんてできなかった。

なら、誰かに頼るしかない。

夕映が頼れる相手なんて、一人しかいなかった。

携帯電話を取りだす。電話帳を開いて、何度もかけた所為で覚えてしまった番号を選ぶ。

プルルル プルルル ガチャ

『もしもし、何の用だ。デコ弟子』

いつも通りの口調を聞いた瞬間、涙腺が緩んで涙があふれる。

「ひつく、ぐすつ、じ、じしゅー」

『なんだ？どうしたんだ？』

「助けて、ください」

色々と説明をしなければいけない事くらい頭では分かっている。だけど、舌が回らない。口が動かない。涙と嗚咽ばかり出てくる。けれど、夕映が言った一言に帰ってきたのは力強い返事だった。

『わかった。すぐに助けてやる。だから、待ってる』

それだけ言つと、電話は直ぐに切られた。

夕映は安堵する。

師匠がすぐに助けてくれると言つた、なら、本当にすぐ来てくれるだろう。

師匠さえ居てくれれば、もう大丈夫だ。

石化も解いてくれる、あのバケモノじみた少年が出てきても、師匠なら勝てるだろう。

狂気が負ける様子なんて夕映には想像できなかった。

夕映はごしごしと涙を袖で拭く。

師匠が来てくれると言つた、なら、もう大丈夫です。だから、私も自分に出来ることをしなければ。

立ち上がるともう一度電話を掛ける。相手は、仕事で何度も組んでいる相手。

お金はかかるけど、信用も信頼もできる相手。

『龍宮だ。なんのようかな？』

「仕事に依頼です。」

「———わかった。引き受けよう。助っ人も何人か連れていくよ」

パチン

電話を終えると夕映は自分の頬を両手で叩く。
浴衣から制服に着替えて銀色の指揮棒タクトを握る。

カントゥス・ベラークス
戦いの歌

「・・・行きましょう」

夕映は部屋を飛び出して行った。

綾瀬夕映の冒険 後悔の夜（後書き）

ストックが消えていく・・・

取り合えず修学旅行編終了までは持つと思うけど、それ以降は日刊掲載無理だな。

、（ 、 （ ノ ♪

綾瀬夕映の冒険 その名を呼んで（前書き）

特に書くことは無いかな・・・） ・ ） ズイヤア

綾瀬夕映の冒険 その名を呼んで

関東呪術協会本山を飛び出した夕映は林の中を走っていた。

あの後、石化した親友達が居る部屋から飛び出した後、本山内を探しまわったがある物は石化してしまった人達の石像だけでした。

まさか呪術協会の長さんまで石化してしまったことには驚きでしたが、それ以上に居なくなっていた刹那さん達のが心配です。長までもが石化していたということは、おそらくネギ達だけで敵を倒しに行ったのでしょうか。

勝てる訳がない。夕映はそう確信する。

「敵が二日目に出会ったお姉さん、ゴスロリさん、エロガキの三人だけならなんとかなるかも知れませんが、あの白い少年が居るとすれば勝ち目なんてありません」

取りあえず、ネギ達を探しに行かなければいけない。

そう思い急ぎ屋敷を出た夕映だったが、思いの他早くネギ達を見つけることが出来た。

湖の中で巻き起こっている竜巻。それを囲むようにいる鬼や烏族達。おそらくはあの竜巻の中にネギ達が。

そう考えた後、様子を確認できる茂みの中で身を顰める。

あれだけの数の鬼に真正面から挑んで勝てるなどとは驕らない。

「そう、勝つことはできません。けれど、止めることならば」

高揚する精神、それに続くように高まっていく魔力。
この修学旅行で確実に高まった自分の力、夕映は目をつぶり集中する。

想い描く者は、いつも最強の自分。
現実で勝てないのならば、せめて、幻想の中で勝てる自分を思い描け、です。

「今の私に止められない物は、ありません。・・・いえ、師匠クラスのパケモノは別としてです」

最後は弱気になってしまったが、夕映の中でイメージ固まる。
ならば、あとはそれを現実のものとするだけ。

「クルワ・クルクル・クルクルリ 神々の鎖 魔狼は千切り 嘲り
笑う 無駄知恵の根よ 敵を捕えて役目を果たせ！」

レーディング
悪知恵で縛りつけるもの！

泉の中から突如生えてきた根っ子に鬼達は困惑した。
その根が身を縛り、動きを阻害する。

「「「な、なんじゃこりゃー！」「」」

縛られた鬼達が一斉に両手の掌を見つめながらそういう様に夕映はこけそうになった。

「ノリが良いです。随分、古いネタですが」

「ワシらは長生だもんでな。で、これをやったのはチビちゃんかい」
鬼達の中でも一回り大きく、肩に狐の面をかぶった女性を乗せている大鬼がいう。
夕映はむっとしながら頷いた。

「おチビとは失礼な鬼です。背丈が可愛らしいと言ってください」
そういう夕映に鬼は値踏みをするような目線を向ける。
命の危機を味わった夕映は今さらそんなことで取り乱しなどしないが、不快そうに眉を顰めた。

「悪かった、確かにワシら全員を一瞬で縛るなんていう真似出来る術師がただのチビな訳ない。恐ろしい嬢ちゃんやな」

そう言って笑う、笑う大鬼の横を通り過ぎて、未だ渦巻く竜巻の前に立つ。

「ネギ先生。聞こえますか？」

『え、その声は綾瀬さんですか！？どうして外から綾瀬さんの声が』

『アニキ。気を付けろよ！敵の罠かも知んねえぞ！』

『そ、そうなのかな？』

「・・・呆れました。私の声も覚えていないのですね。まあ、いいです。もう、魔法を止めて大丈夫ですよ。鬼さん達は全部、私が止めましたから」

『あ、綾瀬さんが全部倒しちゃったんですか!』

「いえ、あくまでも止めただけです。ですが、しばらく危険はありません」

『ネギ先生。夕映が言っていることなら信用できます。結界魔法を解きましょう』

『け、けどよ。まだ、刹那姐さんとアニキの仮契約が終わってねえじゃねえか!』

『くどいぞ、淫獣。私はネギ先生と仮契約をする気はない!』

「（何やらごちゃごちゃやっていますね。というか、刹那さんが仮契約をしてしまう前に間に合ってよかったです）」

竜巻が消えて現れたのは、ネギとカモ、刹那と明日菜だった。

200体を越える鬼が泉から生える根によって捕えられている様を見て、各々に驚く。

刹那が感心したように呟いた。

「流石は、夕映だな。あの人の弟子だけのことはある」

「いえいえ、今回は集中して詠唱する暇がありましたから。普通の戦闘ではこうはいきません。それより、状況から考えるに木乃香が攫われたと考えていいのですか?」

一瞬、その光景に呆けていた刹那だったが、夕映の堅い言葉ですぐに自分を取り戻す。

「はい。私が不甲斐ないばかりに・・・すぐに追いかけた所為で夕映に伝える暇がなく。すまなかった」

「いえ、誤らないでください。私だって親友たちの危機に気づけなかったのですから。それよりも、早く木乃香を追ってください。此処は、私が受け持ちます」

この大鬼達を独りで食い止める、無茶を止めようとした刹那だったが、夕映の顔を見て思いとどまる。

「・・・分かりました。行きましょう。ネギ先生、明日菜さん」

「え、で、でも」

「ちょ、刹那さん！本気なの？そりゃ、綾瀬さんが強いのはよくわかったけど、流石にこの数は・・・」

心配そうに自分を見る明日菜に、夕映は笑顔を送る。

「神楽坂さん。心配してくれてありがとうございます。私は大丈夫ですから。木乃香を、頼みます」

「う、うん」

有無を言わせないその姿に明日菜は頷くしかなかった。

「さあ、行ってください！」

「すみません、夕映」

「ありがとうございます！綾瀬さん！」

「無茶しちゃ駄目だからね！」

そう言って去っていくネギ達を背中で見送った後、夕映は鬼達の方へと向き直る。

「さて、では動けない間に、半分ぐらいには減ってもらいましょうか」

そう言う夕映の顔には薄く笑みが浮かんでいた。

「しかし、ホンマにすごいな嬢ちゃんやな。いくら縛られて動きが鈍いからって、たった3分で150体も還すとは」

肩に狐の面を被るアヤカシを乗せた大鬼は感心したようにそう言う。夕映は肩で息をしながら答える。

「普通、動きが鈍るのではなく動けなくなる筈なのですが、動いている貴方達は別格ということですか？」

「この程度では別格も名乗れんかも知れんがな、一応、某し達は高位ということだ」

「まあ、そう言う訳や。けど、嬢ちゃんの所為で動きが鈍うて、強さで言ったらその辺のアヤカシと変わらんようになってもったけど」

「弱った私達に苦戦しているということは、アナタは余り戦いは得意じゃないのかしら？束縛専門の西洋魔法使いなのかしら？」

「・・・良くわかりで、弱点を見抜かれてしまいましたか」

「じゃあ、嬢ちゃん。今、ピンチなんか？」

烏族、大鬼、狐面の言葉に頷きを返しながら夕映はため息をつく。

「元々、私は援護要員なのですよ。前線に出て戦うのは本業じゃありません。ですから、本来はこの様に味方が居る状況で力を発揮するのですよ」

そう言った瞬間、烏族の顔が吹き飛んだ。

「ぬおおっ、しまった、新手か!？」

「遅いですよ。龍宮さん。もう、半分終わってしまいました。これでは、依頼料は半額ですね」

茂みから現れた龍宮は銃を担ぎながら苦笑する。
その後ろには興味深々と鬼達を見渡すクーフェが居た。

「いつになく厳しいね。何か良いことでもあったのかい？夕映」

「うひあー。私、本物のオバケ見るの初めてアルよ。こんなに一杯居るのの半分を夕映が倒したアルか？夕映は強いアルねー」

クーフェを見て、驚いた様子の夕映が龍宮を見るが、微笑を浮かべるだけでなにも言わない。

仕方がない、と夕映はため息をついてから銀の指揮棒タクトを構えなおした。

「クーフェさんが来てしまったのは予想外ですが、戦力が多いに越したことはありませんし、ありがたいです。二人とも、私が足を止めますから止めを頼みたいのですが、」

「了解だ」

「わかったアルよ」

「では、行きましょう!」

一方的な攻撃が始まった。

夕映が足を止めた鬼達にクーフェが拳を叩きこんでいく、時折、夕映の魔法から逃れる別格達は龍宮が後方から狙撃し還して行く。前衛、援護衛、後衛、三拍子そろったそれは夕映や龍宮がいつも仕事をする時と同じだった。

まあ、前衛が刹那からクーフェに変わってはいるが強力なことに変わりはない。

鬼達は次々に還って行き、最後の大鬼を真名が狙撃した所で、全ては終わった。

「終わりましたね」

「ああ、そのようだ」

「いやー、早かったアルね。6行くらいで終わった気がするアル」

若干危険なことを言うクーフェを龍宮が笑い、夕映もつられて笑おうとした。

その時、天が落ちてきた。

「つつ、」

突如として駆ける悪寒、頭髮が皮膚に擦れるのを不快に感じる、全身の産毛が逆立って行くのがわかる。

『死』の感覚。

あの時に味わった、あの感じ。

全身の神経が針のように研ぎ澄まされていくのがわかる。

嫌で嫌で、逃げ出したくなるあの感蝕。

思わず、涙が溢れてくるあの温度。

夕映だけが気づいて、龍宮とクーフェはまだ気づいていない。

そっと空を見上げると、そこには白い少年。フェイト・アーウェルンクスの姿があった。

「あ、ああ」

フェイトの姿を確認して涙を零す夕映、それを見て初めて龍宮は異変に気付き空を見上げた。

そして、フェイトの姿を見た瞬間、叫んだ。

「夕映！クー！逃げるぞ！」

龍宮が感じたものも夕映と同じ感覚。

いや、戦場に居た経験が長い分、龍宮のソレは夕映のソレより濃いものだった。

圧倒的すぎる力の差、死に対する絶対の恐怖。

アレと対峙すれば、奥の手を使ったとしても危うい。

瞬時にそう判断し、離脱を叫んだ。

龍宮は煙幕弾を打ち走った。夕映は瞬時に戦いの歌を唱えて逃げた。カントウス・ベラークス
クーフェは龍宮に言われるがまま、全力で駆けた。

キルクルス
ヒロールム・ニグロールム
万象貫く黒抗の円環

けれど、それを阻むように天空に無数の黒い石針が浮かぶ。

フェイトは言葉とは裏腹に平然と言った。

「ごめんね。本当はこんなことをするつもりはなかったのだけれど、今の戦いを見ていてわかった。綾瀬君、やはり、君は危険だ。もし、君がネギ君のパートナーになってしまったら、ボクの主の計画に支障が出るかもしれない」

「あ、」

迫りくる黒い石針を前に夕映は恐怖で目を瞑った。

戦うことも逃げることもせず、ただそこで止まった。

だから、その体は貫かれ、射抜かれ、縫いとめられ、血が飛び、肉が抉られ、激痛が身体を駆ける。

そう、駆ける、筈だった。

いつまでも来ない痛みには夕映はそっと目を空ける。

目の前に映った物は、何時かの夜の再現でした。

あれはネギ先生が赴任してくる前の夜。

私はまた、守られていました。

あの人の背中に。

安堵の息が出て、安心しきった涙腺から涙があふれる。
涙声で鼻をすすりながら、夕映はその名を呼んだ。

「ぐすつ、じ、じしょー」

夕映の声に狂気は答えない。

ただ不動に、夕映を守るように立つ。

そして、自分を見下ろすフェイトを見据えながら言った。

「デメエ・・・なに俺の弟子泣かせてんだ。殺すぞ」

砕け散った無数の石針が散乱する夜。

フェイト・アーウェルンクスと羅漢狂気が対峙した。

綾瀬夕映の冒険 その名を呼んで（後書き）

次週、満を持して主人公参上!!、（D、）（/、D、）
そして、遂に修学旅行編はクライマックスです。

綾瀬夕映は冒険を終わらせる（前書き）

遂に主人公対フェイト戦。開幕！
、（、、（ノ♪

綾瀬夕映は冒険を終わらせる

弟子からの電話があった。

『助けて、ください』

泣いていた。誰かに泣かされていた。

なにも考えずにただ言った。助けてやると。

すぐに学園長の元に向かえば、エヴァの姿があった。

学園長の方にもネギから連絡があったらしく、エヴァを援軍に送るということだった。

影の転移魔法で俺も連れて行ってくれとエヴァに頼んだ。

学園長が何か言っていたが、黙らせた。

送られた京都で、エヴァは学園長との契約だからネギを助けに行くと言った。

俺はエヴァと分かれて、弟子の魔力を追って走った。

辿り着いて見たのは、泣いている弟子の姿だった。

全身の毛が逆立ち、全身を巡る血が熱くなるあの感覚。

もう、敵が誰だとか周りがどうだとか考えずに、泣いている弟子の前に立った。

「テメエ、なに俺の弟子泣かせてんだ。殺すぞ」

突然現れた狂気。身体の周りからは目視できるほどの圧力が生み出されている。

龍宮はフェイトを見た時と同じ感覚に襲われた。クーフェはその雄々しさに魅入った。夕映はただ安堵の涙を零す。

フェイトは自分に向けられる大地を潰すほどの圧力を感じながらも、汗一つかかずに涼しい顔で言う。

「君の方こそボクの邪魔をするなら消すよ」

夜空を背にして狂気を見下ろすフェイトと夕映を背に守りながらフェイトを見上げる狂気。

互いが互いの顔から目を逸らさない。睨みあうだけで大気が狂うほどの魔力と気がぶつかり合う。

狂気は自分の顔がゆがむのを感じた。久々の感覚に戸惑いながらも酔いしれる。

全身が震え、目が血走り、巡る血液は沸騰して、吐く息は熱くなる。ああ、と狂気は息を吐く。久しぶりの高揚。いつ以来だろうと考えて、親父と殺り合った時以来だなと結論付ける。

フェイトはなにも無い筈の胸の中で何かが生まれるのを感じた。初めて感覚に戸惑いながらも冷静を保つ。

久しぶりに興味を持った対象の一人である綾瀬夕映。不本意ながらも彼女を討とうとした時に現れた男。

彼が現れたことで安堵した綾瀬を見て、フェイトは納得した。この男が彼女の師か。なら、彼女の異常な力も納得がいくと。

対峙したまま、しばらく動かなかった二人にようやく動きが見えた。動いたのは狂気だった。開いていた手を拳に変え、言った。

「わざわざ人を殺すのに殺すなんて言うてくれんのかよ。優しいな、お前」

「君が最初に言っただろう？」

「戦争をする覚悟が足りないな、出直してこいよ！」

フェイトの言葉を聞き終わる前に、右腕を振りきった。

「ラカン^{フル}全力ストレート！」

夜空に極大の光線が打ちあがった。

無限登校地獄から抜け出して、京都に降り立ったエヴァは歓喜に震えた。

自分を縛っていた楔が外れ、魔力が身体から溢れだす。
今この時間、夜に君臨するに相応しい力が自分の全身を巡っている。
エヴァは力の限りに笑った。

「フ、フフハハハ！京都だああ！ひゃっほーう！」

「マスター。自重してください」

夜空の中、飛び跳ねるエヴァ。その横で茶々丸は巨大な銃のメンテナンスをしている。

目の前には復活した大鬼神、リョウメンスクナノカミにそれを従える天ヶ崎千草。

空にはほぼ裸の木乃香を抱いた刹那が白い羽を生やし飛んでいて、
地面ではボロボロのネギと半裸の明日菜とがエヴァの登場に驚きながら見上げていた。

一見しなくても混沌^{カオス}な状況だった。

「え、エヴァンジェリンさん！それに茶々丸さんも！どうしてここに」

ネギは驚きながら二人を見る。エヴァは下に転がるネギを見下ろしながら答えた。

「学園長との契約だよ。京都観光のついでにぼーやを助ける。ただそれだけだ。そこで転がって見ているといい。本当の魔法使いの力をな」

そう言う顔には笑みが浮かんでいる。

しかし、それは別にネギに向けられたものではなく純粹にことが終わった後の観光を楽しみにしているらしかった。

茶々丸はネギのことを一瞥もせず言う。

「マスター。早くあの鬼神を倒して狂気様と合流しましょう」

「む、そうだな。なにも明日一日だけが観光という訳ではないし、コレを倒した後は夜の観光にでもしゃれ込むか。茶々丸、いい場所はあるか？」

「万灯呂山展望台という所から見る夜景は美しいと聞きます」

「決まりだな」

笑みを深めたエヴァとどこか楽しげな茶々丸。

戦場に似つかわしくないその光景に対峙している筈の千草は苛立ちながら叫ぶ。

「あんたら何なんや！邪魔しに来たんか！無駄話しに来たんかどっちなんや！」

千草の言葉を鼻で笑いながら、エヴァは両手を広げ言った。

「貴様の耳は飾りか？言っただろう。観光をしに来たのだ！やれ茶々丸！」

「了解マスター。^{yes} 結界弾、発射」

巨大な銃から放たれた物はリョウメンスクナノカミを周りの空間ごと包み込み、圧迫する。
直立し不動であったスクナは怒轟を上げながら身をかがめる。

「ぎゃあああ！？スクナ！どないしたん！？」

その様子を爆笑しながら見ていたエヴァはネギを見下ろしながら指を立ていう。

「ついでだから覚えておけーや。このような大規模な戦いでも魔法使いの役目とは、究極的にはただの砲台。つまり火力が全てだ。よく見ておくと良い」

ふはははは、と笑いながらエヴァは空高く舞い上がり、詠唱を始めた。

「リク・ラク ラ・ラック ライラック
クリュスタリナー・バシレキネー・テ・タイオーニオン エレボス
氷の女王 来れ とこしえの やみ！
リユスタレ
ようがー！！」
ト・シュンボライオン 契約に従い 我に従え
ハイオーニエ・ク えいえんのひ

スクナの周りの湖が凍りつき、突き出た氷塊がスクナの身を貫く。
スクナ自身も表面は氷に覆われ、動くことが出来なくなった。
千草は目の前で起こる大規模魔術を見ていることしかできず、無様な悲鳴を上げた。

「フハハハ！ 雑魚はさつさと散ると良い！ 私と狂気の相引きを邪魔するなど百年早いわ！ 全ての命ある者に等しき死を其は安らぎ也」
バーサイス
ゾーサイス
トシ・イソシ・タナトシホス
アタラ
「おわるせかい」 フツ、砕ける」

エヴァが指を鳴らすと、スクナはいとも簡単に崩れ去った。
千草はその余波で何処かへ飛ばされていき、エヴァはそれを確認しながらも放置するようで地面へと降りて行った。

「ふん、バアカめ。伝説の鬼神が知らぬが私の敵ではなかったな」

「さ、流石です。エヴァンジェリンさん」

「マスター。先ほどの発言について聞きたいことが、」

「ん？ なんだ、刹那。もう羽を隠すのは止めたのか？」

「え、ええ、はい。お嬢様を救うために・・・仕方なく」

「狂気様との相引きとはどういうことでしょうか？」

「となると、近衛木乃香も此方側へ足を踏み入れるということか。
・・・ふん、爺の思惑通りなのかもな」

「エヴァちゃんて魔法使いやったんや。気が付かなかったわ。
ネギ君はそんな気がしてたんやけど」

「マスター。流さないでください」

「ちゃん付けは止せ。私は悪の魔法使いだぞ」

「無視ですかマスター」

エヴァに刹那が駆けより、木乃香もその後ろに付いている。

茶々丸のくどくどとした問い詰めを聞かない様にしながらエヴァは二人の相手をしていた。

そんな和やかな空気の中、空気と貸していたネギは空気を読まずに叫んだ。

「ま、まだです！エヴァンジェリンさん！まだ長さん達を石化した白い少年が残っています！」

その時だった。

夜空に極太の光線が打ち上がり、何処からか白い少年。フェイト・アーウェルンクスが飛ばされてきた。

光線を防いだらう両袖の服は焦げているが、その腕に傷は無い。湖の上に立ったフェイトは周りを見渡し、スクナと千草が居ないのを知ると落胆した様にため息をつく。

「やはりネギ君を打ち負かしたからと此処を離れたのは失敗だったね。しっかりとボクが見届けておくべきだった」

フェイトの登場にネギは身体を引き摺りながら杖を構え、明日菜も片手で胸を隠しながらハリセンをフェイトに向ける。

茶々丸は無言で銃を持ち直し、刹那は木乃香を庇うように前に出た。

だが、そんな四人など眼中にないとばかりに、フェイトはエヴァだけを見ている。

「闇の福音 ハイ・デライトウォーカー 吸血鬼の真祖では分が悪いか」

「心配しなくても手は出さんよ。貴様の相手はあいつだろう?。」

笑みを浮かべながら夜空を見るエヴァ、その先には湖に降り立とうとしている狂気の姿があつた。

「ああ、そうだね」

フェイトはエヴァに背を向け、正面から狂気を見据えた。

それを見たネギは背後から魔法を放とうとしたがエヴァに杖を飛ばされる。

「不粋な真似をするな」

「で、でも！チャンスじゃないですか！あの男の人が誰だか走りませんが、負けちゃいますよ！」

「それは・・・ないと思いますよ」

ネギに答えたのはエヴァではなく刹那だった。

その言葉に木乃香は刹那の背から顔を出し尋ねる。

「せつちゃん。あの人のこと知ってるん？」

「はい。お嬢様の親友である夕映の師匠にして私の知る限りでは最強の男。20年前、魔法界で起きた戦争で名を上げた紅い翼の一員。

大戦の大英雄、千の刃、J・ラカンの息子。羅漢狂気さんです」

「羅漢狂気って、あの時の男子生徒よね？」

「……僕と同じ英雄の、子供」

刹那の言葉に驚く明日菜とネギに。エヴァは言う。

「よく見ておくと良い。あれが本当の英雄の息子という奴だ」

吹き飛ばされたフェイトを追って、湖まで狂気は来た。

夕映達は幸いに重い怪我はなかったたので、放置してきた。

一言声をかけても来てもよかったが、今の狂気の眼にはフェイトしか映っていなかった。

フェイトを見詰める。

その後ろにはエヴァと茶々丸、刹那や木乃香や明日菜と、その他一人と一匹が居た。

狂気はエヴァへ目配せをし、口を吊り上げながら頷いたのを見るとフェイトとの戦闘に集中する。

それはフェイトも同じ様で、背中を気にもせずに狂気だけをみつめていた。

互いに立っているのは湖の上、静かに睨みあっていた両者は誰かの汗が地面に落ちた瞬間、動き出した。

「ヴィシユ・タル リ・シュタル ヴァンゲイト 小さき王八つ足
・ポドーン・カイ

バーシリスケ・ガムクイーヨークト

カコイン・オンマトイン
の蜥蜴邪眼の主よ

ブノエーン・トゥットシイタ山ノン・バライルーサン
時を奪う毒の吐息を」

ブノエー・ペトラス
石の息吹！！

「気合い爆破あ！！」

噴き出た石化の煙を爆風によって吹き飛ばす。

狂気はその選択こそ、弟子である夕映と同じだった。だが規模が違う。

爆風は石の息吹を吹き飛ばすだけには止まらず、周りの水も上空へと巻き上げた。

「クルワ・クルクル・クルイ・クルウ 来れ 深淵の闇 燃え盛る
大剣！！ 闇と影と憎悪と破壊 復讐の大焰！！ 我を焼け 彼を焼
け其はただ焼き尽くす者」

インケンディウムナエ
奈落の業火！！

狂気の手から放たれた黒炎の塊が放たれ、爆ぜた。
空へと巻き上げられていた水が一瞬にして蒸発し、一帯は凄まじい
量の水蒸気に包まれる。

「ヴィシユ・タル リ・シュタル おお 地の底に眠る死者の宮殿
ファインサストー ・ヘーミン
我らの下に姿を現せ」

ホ・モノサオトス・トゥ・ハイドゥ
冥府の石柱

「羅漢適当にラアアアシユウウツッ！」

水蒸気の中から現れた強大な石柱を狂気は拳で打ち砕いて行く。
一撃では壊れない、二撃三撃を入れてから砕かれる石柱。

ぶつかり合う風圧で視界を覆っていた水蒸気は飛ばされ、二人は互いの姿を目視する。

誰もがその戦闘を見て息飲んでいた。飛び交う大魔法と大魔法。砲弾のように打ちだされる気弾を避け続けるフェイト。遠くに居た小太郎や楓にさえ目視できるほど強大な戦い。それはもはや戦闘ではなく、戦争だった。

狂気が動く、振るわる拳は石柱を砕く豪鉄の拳。
しかし、フェイトはその全てを避けきる。

狂気が振るう拳以上の速度で動き、狂気の背後を取りながら言った。
「君は強い、攻撃が一撃でも当たればボクでも危うい。けれど君は足りないものがある」

「なんだよ？」

「君に足りない物それは、情熱、思想、理念、頭脳、気品、優雅さ、勤勉さ。そして何よりも。―――――速さが足りない！」

自分を捕えようとする裏拳を掻い潜り、フェイトは初めて魔法以外の攻撃手段を取った。

フェイトが振るった拳はヒュボツ、と拳を振るった音ではない音を出す。

その拳の直撃を受けた狂気は、口元を歪め、笑っていた。

「そう言うお前は、出力不足だ！」
パワー

フェイトは言葉と共に放たれる気弾を避けて、狂気から距離を取る。二人は三度、正面から対峙した。

「攻撃力と防御力が常軌を逸しているね。まるで重鈍な亀だ」

「そう言うお前は速さしかねえだろ、ひ弱な燕が」

「確かに。君はボクに一撃も入れられない。ボクは君に一撃入れても意味がない。これじゃあ勝負はつかないね。引き分けにするかい？」

「一撃も入れねえで、退けるわけがねえだろーがよお！」

そう言うって狂気は右腕を水平に持ち上げる。握っていた拳を開き、指を真っ直ぐと伸ばす。

戦闘中に行われた意味のわからない光景。

その動作によって魔力も気も変化があるという訳ではない。フェイトは狂気の行動に首を傾げながら言った。

「なにをするつもりか分からないけど全ては当たらなければどうと
いうこともないよ」

「ああ、わかってるよ。だから、絶対^{こ都合主義の}に当たる一撃を放てばいいんだろ？」

「君は、なにを言っているんだい？」

狂気の言葉に、最後まで分からないと首を傾げるフェイト。
理解不能。

確かにそうだろう、絶対に当たる一撃。
そんなご都合主義があり得る筈がない。
しかし、フェイトは知らない。

今、自分が戦っている相手が誰なのかを。

フェイトが避けることのできる攻撃。

本気を出せば超えられるかもしれない防御力。

それしか持たない者が、果たしてかの理解不能を継ぐご都合主義者

足り得るのか？

答えは、否。

最後通告、狂気はフェイトに問いかけた。

「……お前は、英雄か？」

「いや、悪役だ」

「なら、お前は俺には勝てない。英雄以外に俺が殺せるものか。

Yetzira 俺 英雄
形成 英雄は俺を殺す」

そう、狂気が呟いた瞬間。狂気の右腕が割れた。

裂けたのではない、右腕の中指から肩まで一直線の割れ目が走り、開いて行く。

血が滴ることも無く、中から覗くのは骨ではない白い鉄を思わせる何か。

骨格の形が変化し、血肉が何かへと組みかえられていく。

その様子に、見守っていたエヴァやネギ達はおろかフェイトすらも目を見開く。

割れて組みかえられていく腕、一見として不気味に見えるその動きは不思議と嫌悪感はない。

ライトアー、グレイブアーツ
「右腕 英雄を殺す魔拳」

そう狂気が言うと、腕の変化が止まる。

現れた物は精巧な機械を思わせる、白銀の腕。
通常の狂気の腕と太さは変わらないが、すらりとした曲線美が何処
か脆く儚く見せる。

拳を握ればその腕に青白い文様が浮かびあがる。
フェイトは柄にもなく戸惑いながら言う。

「君は・・・人間じゃなかったのかい？」

「人間だ。ただ、身体の半分は科学に喰われた、半人機兵^{はんじんきへい}だけだな」

空間を圧する圧力が強まる。魔力でも気でもない何かが空間に広ま
っていく。

遠い未来、地球人と火星人の生存を賭け起こる100年戦争で後天
的に生みだされた英雄^{シレン}を前に、フェイトは初めて表情を崩す。

「なるほど人の業はそこまで届くのか。凄まじいよ明日から来た英
雄」

「確かに俺は殺人狂^{英雄}だよ。だから、被害者^{悪役}。黙って殴られる」

「殴れるのかい？このボクを」

「やってやれないことは無い」

「何度でも言おう。君のその腕がどれほどの力を持っていようと、
当たらなければどうということばあっ！」

突如、腹部に走った痛み。勢いよく襲った衝撃は身体を飛ばしかけ
た。

フェイトは慟哭する。まさか、今、ボクは殴られたのか？と。

しかし、ありえないと首ふる。少し離れたあの場所から、狂気は動いてもいないのだから。

「君は、今、なにをつっ！」

障壁も突き抜けて、次は顔面に痛みが走る。衝撃が襲った場所を摩りながら、フェイトは確信した。

目の前に居る狂気は面白そうに顔を歪めている。その白銀の右腕は振るわれていた。

「殴ったのかい？君は今ボクを。その腕で」

「ああ、」

言葉の意味は、当事者である二人にしか通じない。

傍から見れば、フェイトは自分から体勢を崩したようにしか見えなかった。

「確率変動、ついてもわかんねえよな。難しい説明なんてしてやる気はねえから結果だけ教えてやるよ。要は必中の拳。振るえば絶対に当たる攻撃」

無双拳 ご都合主義の一撃

「良い名前だろ？」

「・・・測りかねるね。けれど、なるほど、理解は出来ないけれど知覚はしたよ。つまり君に勝つには速いだけではだめ。ボクも本気

を出さなきゃいけない訳か。……顔を殴られたのは、初めてだよ」

殴られた頬を摩りながら、フェイトは目を見開く。
瞬間、湖の水が暴れ出した。

飛沫が飛ぶ、風があれ、蒸発し、電気を伴う空気が生まれる。
荒れ狂う魔力の渦の中で、狂気はただ不動のまま問う。

「本気で殺るか？」

狂気の問いにフェイトは一考してから、目をつぶる。
零れ出ていた魔力が鎮まった。

「やめておこう。ここが焦土になってしまふ。今回は君の勝ちだ」

「そうか」

狂気の右腕は元の形へと戻っていく。

「そういえば名前を聞いてなかったね。ボクの名はフェイト・アーウェルンクス。君の名を教えてもらっても構わないかな？」

「羅漢、狂気」

「そうかい」

それだけ言い、小さく頷くとフェイトは立ち去ろうとする。
その背に、狂気は言った。

「アーウェルンクス。俺の弟子を泣かせたこと。二度目はないぞ？」

「そうだね。もし次やる時は相応の覚悟を持ってやらせてもらおうよ。羅漢」

首を動かし狂気を見た体勢のまま、フェイトは水の中へと消えていった。

フェイトが消えたことで周りの空気が一気に緩和する。
狂気がため息を付きながら右肩を動かしているとエヴァが駆けよってきた。

「狂気！終わったのならすぐに観光に行くぞ！」

相当に興奮しているのだろう、まるで子供のように狂気の腕を引くエヴァを疲れた目で見ながら狂気は言う。

「少しくらい休ませてくれ久々に疲れた」

「駄目だ！遊ぶ時間が無くなるだろうが！」

無理にでも引つ張っていかうとするエヴァ、魔力が全開しているせいか狂気の腕を掴む力が異常に強い。

助けを求めるように狂気は茶々丸に目を向けるが、茶々丸は微笑んだままだった。

「ああ、狂気様に甘えるマスター。可愛いです」

「はあ、」

狂気のため息が木霊する。

先ほどまでとは打って変わり、まるで家族の様な微笑ましい光景を作る三人を見てネギや明日菜、刹那や木乃香は呆然とするしかなかった。

ちなみに、父 狂気 母 茶々丸 子供 エヴァなのは言うまでも無い。

こうして、修学旅行最後の夜は幕を閉じた。

おまけ

主犯であつた千草を捕えたチャチャゼロは空を見上げながら呟く。

「俺、メインヒロインダツテノ二出番ガ少ネーナー」

「私はアンタみたいな人形をヒロインにする変態に負けたのかい」

「ケケケ、キザムゾ？」

「ひいい」

綾瀬夕映は冒険を終わらせる（後書き）

次回、修学旅行編閉幕。

主人公は少しでも後始末をして帰るようです。グ（ー）グ（ー）．．

（シ、ー、）ツ

綾瀬夕映の冒険 幕引き（前書き）

綾瀬夕映と命を打っておきながら夕映が一切出てこない狂気による
修学旅行のまとめで

す。

長かったぜ！く（-----く）ノ↑やりきった

顔

綾瀬夕映の冒険 幕引き

「で、何の用でしょうか？近衛詠春。俺はとても忙しいので要件があるなら早く仰って頂きたいのですが」

フエイトとの戦いから一夜明けた朝。狂気は関西呪術協会の長、近衛詠春の前に居た。

だだっ広い木目張りの広間に置かれた座布団の一つに正座する狂気は、敬語こそ使っているが顔には笑み一つ浮かんでいない。

大体、狂気は目の前に居る人物に敬意など感じていないのだから仕方がないと言えは仕方ない。

敬語を使っているのは、ただここがそういう場場ということのを弁えているからにすぎない。

「いえいえお茶でも飲みながらゆつくりと話しあいましょう。どうぞ、お口合えばよろしいのですが」

詠春がそう言うのと周りで琴やら太鼓やらを奏でていた巫女の内の一人、おそらくそういう役割の巫女さんがお茶を用意し、丁寧に差し出してくる。

それは狂気の頭の上に乗る茶々丸の分も用意され、誠意という物がある。うかがえる。

しかし、狂気は巫女さんに目礼すると一息でお茶を飲み干し、湯呑を置く。

「で、本題はなんでしょうか？」

狂気の様子に薄い笑みを浮かべながら詠春は言う。

「ジャック、彼もこういった格式ばった場は嫌いなようでしたがそれは息子である君も同じ様ですね」

「いえ、別にこういう堅苦しい場が嫌いなのではなくただ純粹に貴方のことが大嫌いなのですよ。殺人狂^{英雄}、サムライマスター」

奏でられていた厳かな音楽の音が少し外れる。

詠春は一瞬目を見開くと、狂気をじっと見つめながら小さく口を開いた。

「そう、ですね。確かに私はそう呼ばれて然るべき者だ。言動からするに君は紅い翼^{私達}が嫌いなようですが、理由を聞いても良いですか？流石に理由も聞かずに嫌われるというのは辛い」

「理由？言わねば分からないほど子どもでもないでしょう。しかし強いて言うなら。昔、住んでいた村が吹き飛びましてね。俺以外の全員が死んでしまいました」

「つつ!？」

「ええ、それはまあ小さな村でしたよ。いえ、村とすら呼べないかも知れない山の中の集落。上空から見渡してもなにも無いように見えたりもしない寂れたところです。そこが突然雷鳴と共に消し飛びましてね。残ったのや焼け焦げた村と俺だけでした。まったく、誰がやったか皆目見当も付きませんよ」

「……その村というのは、何処にあったのでしょうか」

詠春の顔から、汗が垂れる。厳かな音楽が何処か空虚に響いて行く。膝に置いた拳を握りしめながら、震えている狂気の頭をチャチャゼ口はそつと撫でていた。

「いえ、申し訳ありません。思い出したくも無いことを思い出させようとしてしまった」

「・・・ああ、いや、いえ。此方こそ感情が高ぶりました。申し訳ない」

「頭など下げないください。お願いいたします」

礼をしようとした自分に対して、より深く頭を下げる詠春を見て狂気は頭を下げるのをやめる。

そのまま、数秒待ってから仕切り直すように狂気は話を続けた。

「それで一体どのような御用で俺を引きとめたのでしょうか。本来なら今頃はエヴァと共に観光をしている予定だったのですが」

「その節は、本当にすみません。しかし、私は・・・関西呪術協会の長としても、サムライマスターとしてもなく、一人の父親として君にお願いしたいことがあるのです」

「・・・大方の予想は付く、いえ、付きます。「辛いなら言葉を崩してもらって結構ですよ」では、近衛木乃香のことだろうか？」

狂気の言葉に詠春は大きく頷き、語りだす。

木乃香に平穏な暮らしをして欲しいと思い魔法を秘匿し続けていた

こと。

反体制勢力から木乃香を守るために麻帆良へ木乃香を送り刹那という護衛を付けたこと。

祖父である近右衛門は木乃香への魔法の秘匿については批判的であったが、まさか自分に断りも無く友の子であるネギに近づけ、魔法を知ってしまう可能性を高めるとは思わなかったことなど。その全てを狂気に吐露する。

狂気はその話を時折眉を顰めながら聞き続けていた。

「――　どうか、木乃香をお願いできないでしょうか」

「力になるならあんたの友達、サウザントマスターの息子がいるだろ。なんでわざわざアンタ達を嫌っている俺に頼む」
紅い翼

狂気の言葉に詠春は自傷的に微笑む。

「・・・我が儘、ですかね。ネギ君と君、信用できるのはネギ君でしょう。けれど信頼できるのは君です。君は強い、一目見れば分かってしまう。未だ成長過程であるネギ君よりも君に木乃香を守ってもらえれば・・・安心出来る」

「アンタ、ふざけてるのか？あんならに爺さんと婆さん殺された俺がなんでアンタの家族を守んなきゃなんねえんだ」

狂気の手から重圧が溢れ出る。床板がギシギシと嫌な音をたてた。護衛の為、弓を持って立っていた巫女たちは瞬時に矢をつがえる。

「止めなさい！彼の言っていることはまったくもって正しい！」

詠春は立ちあがりそう叫んだ。巫女たちは素直に矢を治める。

「申し訳ない」

「いや、今のは俺も場所を弁えなかった」

重庄も消え、再び音楽が奏でられ始める。

詠春はお茶を口に含み、舌を湿らせ、喋り出す。

「君の言うことも思う所も理解できるつもりです。しかし、此処は親の罪に子は関係ないと思っではもらえないか？」

思いをこめて、本心を隠さずに語る詠春。

「——どうか、木乃香を守って欲しい。この通り」

深く頭を下げる詠春を見て、狂気は齒を噛みしめた。

「親の罪に子は関係ない。親がそれを言うのは・・・反則でしょう」

悔しそうに呟く声を聞いて、詠春は頭を下げたまま安堵の息を吐いた。

「ありがとう」

「面倒ゴトが増エタナ」

「まっただ」

詠春から解放された狂気はため息をつきながらエヴァの元へと向かっていった。

頭の上に居るチャチャゼロは何時も通りに笑いながらもどこかソワソワしている。

「デ、コレカラ如何スルンダ？木乃香トカイウ娘ハヨ」

「仕方ないから身を守るくらいには育てるさ。取りあえずは刹那とも話しあわないとな。今回の件で近衛に魔法を秘匿しておく必要もなくなったんだし、アイツも堂々と動けるようになるだろ」

「マタ、才前ノ傍二女ガ増エルノカヨ」

「なんだ？嫉妬してんのか？」

「ウルセー。勘違イシテンジャーネーヨ」

そう言つて髪の毛を引っ張ってくるチャチャゼロに苦笑しながら歩いていると、狂気の耳にエヴァと刹那の声が入ってきた。

——おい、もう行くのか？せめてアイツに別れの挨拶くらい

——顔を見れば、辛くなりますから

——何処に行くあてはあるのか？近衛木乃香はどうするつもりだ？

——い、一応、一族の掟ですから、あの姿を見られた以上、仕方がないのです！

「オイオイ、コツチモ面度クセーコトニナッテンゾ」

「・・・だな。たく、なにやってんだか。刹那！」

「ひゃい!？」

廊下から出ながら、狂気は庭からどこかに去ろうとしていた刹那を大きな声で呼んだ。

刹那は情けない声を出しながら振り返る。目に映るのは、呆れたようにため息をつく狂気の姿だった。

「く、狂気さん。その、私は、あの、すいません」

狼狽する刹那に、狂気ははっきりとした口調で言う。

「刹那。今、関西の長と話しあってきた。近衛の力になるよう頼まれてな、正直面倒だがひきつけることにした」

刹那はその言葉に安心しながらもどこか影を落とす。

「そうですね・・・狂気さんがお嬢様を守ってくれるというのであれば安心できます。これで私も心おきなく此处を去れ」だが、断ろうと思う「な、なんで!」

「近衛木乃香に、守る価値がないからだ」

「なっ、どういう意味ですか! 幾ら狂気さんといってもお嬢様を馬鹿にするのは許しませんよ!」

「特別に親しいわけでもないし、近衛自身に借りがあるわけでもない。そんな相手が俺が守らなきゃいけない対象か？何の関係もない奴に進んで力を貸そうと思うほどに俺は優しくはないぞ」

狂気の言い分にたじろぎながらも、刹那は負けじと言い返す。

「な、なら、どうして一度は引き受けたのです。後になって言葉を裏返すなど狂気さんらしくもない」

「簡単だ。お前が居たからだよ」

「へ？」

ポカンと口を空けながら、刹那は顔を見る。

「俺が最初に面倒だが近衛に手を貸してやろうと考えたのは近衛がお前の友達だったからだ。こんな俺でも、友達の友達を守ってやろうと思えるくらいの優しさは持っているつもりだからな」

「……こんな私と、狂気さんが、友達？」

刹那の目に何故だか涙が溜まった、たぶん嬉しかったのだらうと刹那は自分で答えを出し頷く。

小さく頷いた拍子に零れた涙を見て、狂気は目を細め歯を擦る。

「あー、なんて言えればいいか、良く分かんないが大体で言っておく。お前が近衛から離れるってんなら、俺が近衛を守る理由はない。それと、」

言い難そうに、本当に言いたくなさげに狂気は言った。

「数少ない友達が居なくなるのは嫌だから。何処にも行くなよ、刹那」

それだけ言つと心なしか顔を赤らめ、逃げるようにその場を立ち去る狂気。

刹那は目を袖でこすると、涙を堪え笑顔でその背を見ながら言った。

「はい！」

その様子を見ながら、エヴァはニヤニヤし言う。

「まったく、どうして私の周りの奴は誰も彼も不器用な奴らばかりなんだろうな」

エヴァの隣にいつの間にやら腰かけていたチャチャゼロも笑う。

「ケケケ、ソリヤ、御主人が不器用ダカラダロ」

「似た物同士は惹かれあうと言いますし、姉さんの言う通りと」

追隨する茶々丸。二人を見てエヴァは不貞腐れた。

「それは私が不器用だと言いたいのか？」

「アア」

「はい」

こうして、長かった修学旅行は終わるのだった。

おまけ みんなで京都散策編。

銀閣寺

「どうして銀閣寺なのに銀色じゃないのだ？」

「幕府の財政事情により銀箔を貼れなかったという説や銀箔を貼る前に義政が他界してしまったせいという説がありますが詳しいことは分かっていないようです」

「なんか、貧相だな」

「蹴ッタラ崩レンジャーネーカ？」

金閣寺

「なんだ、この恥ずかしげもなくギラギラした建物は」

「さっき見た銀閣寺よりはハイカラで面白いだろ」

「狂気様は語彙が古いですね」

「目ガ、目ガアア。ツテホド、眩シクネーノナ」

伏見稲荷大社

「見る！ここがよく怪奇物で殺人現場になる場所だぞ！」

「本山の入り口に似ていますね」

「真似て作つたんじゃないの？」

「ケケケ、朱ノ赤ハ血ノ色ゝテナ」

清水寺

「フハハ！ここが清水の舞台か！・・・意外と飛び降りても助かり
そんな高さだな」

「確かに・・・思ったより高くありませんね。木に突き刺さったら
絶命しそうですが」

「落ちル間ニ突キ落トシタ奴ヲ三回八殺ヤレル」

「このメンバーならスカイツリーから落っこちても死なねーよ」

綾瀬夕映の冒険 幕引き（後書き）

修学旅行編の終了。それは日刊掲載の終了を意味します（□――
――！！

まあ、今後も出来る限り早く上げていきたいと思うのでご容赦を。
では、再見！（＊、、）ノ マタネー♪

いろいろ紹介と言う名の話数稼ぎ。

登場人物紹介とかしておこう。

主人公サイド

羅漢狂気（クルキ・ラカン）

ポジション 主人公

身長 186cm

体重 ??Kg

外見はDiesuireに出てくる黒騎士殿を若くした感じが良いなあ。

目つきが悪い。常に黒い学生服を着ている。

幼女から熟女（推定600歳）まで網羅するにとどまらず、ロボットや人形にまで手を出す男前すぎる主人公。

未来から来た火星人であり、英雄J・ラカンの息子であり、改造人間でもある。

年上には敬語を使おうと努力はするがすぐにボロがでて、苛立ちが募ると口調が一方通行化する素敵仕様。

自他共に不良として認識されているが魔法に巻き込まれた当初の明

日菜を心配したり、弟子である夕映を泣かせた相手にブチ切れるなどしているため、意外と面倒見は善いと思われる。ネギに対する感情は関わりたくない、であったがチャチャゼロの一件以来悪化中。

チャチャゼロ

ポジション メインヒロイン

狂気のマスターで在り、狂気との仮契約を二人だけの秘密にしている乙女な子。

でも、狂気が他の女と楽しそうにしていると包丁を振り回すヤンデレでもある。

定位置は狂気の頭の上。たとえ描写がなくても大体そこに居る。

狂気のおかげで自由に動ける為、現在の戦闘力はかなり高い

綾瀬夕映

ポジション ヒロイン

親友を助けようとしたり、強大な敵と戦って覚醒したりする主人公のような狂気の弟子。

魔法は束縛系統特化型。常に冷静沈着だが親友に危機があつたりすると慌てた様子を見せる。

ネギのことを子供にしては頑張っていると主張するなど、主人公サ

イドでは珍しいタイプ。

エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル

ポジション ヒロイン

伝説の吸血鬼にして悪の大魔法使い。
主人公と接している過程で幼児化が見られる永遠のロリ。
ただその戦闘力は群を抜いている。

絡繰茶々丸

ポジション ヒロイン

姉の恋を応援する健気な妹。
狂気とは何があっても事故で済むほど仲がいい。
戦闘力は本気になると全身から武器が出てくるため、原作より強力になっている。

桜咲刹那

ポジション ヒロイン

京都神鳴流剣士。

狂気に多大なる羨望の眼差しを向ける少女。

尊敬が恋心に変わる日がきつと来る。

夕映や真名とは仕事仲間。狂気にとっては数少ない友達。

龍宮真名

ポジション ヒロイン候補

魔眼持ち。

狂気とは知り合っている筈だが絡んでいる描写がない。

夕映や刹那とは仕事仲間。守銭奴だが信用できる大人の女性。

近衛木乃香

ポジション ヒロイン候補

ぽやんとした子。刹那の護衛対象。

京都弁が難しい為、あまり出番がない不遇な子。

作者は刹那と木乃香の恋を応援している。

長谷川千雨

ポジション ヒロイン候補

最初のころちよくちよく出番があつたヒロイン候補。

たぶん少しするとヒロインに昇格する。

作者が思うにネギま！の世界でも不幸ランキング上位に食い込む救いたい子。

原作主人公サイド

ネギ・スプリングフィールド

ポジション 原作主人公

父を愛するファザコン。母はどうした！と突っ込みたくなるキャラ。夕映に抱きつこうとするなど、3-Aの生徒たちに囲まれているせいで女性認識がずれてきているハーレム属性。

一応、エヴァと戦ったり小太郎と戦ったりフェイトと戦ったりして居る為、原作通り成長している模様。

アンチすぎると原作からかけ離れていくため扱いに困るキャラナンバー1。

神楽坂明日菜

ポジション 原作主人公の従者

ネギによって魔法の世界に巻き込まれてしまった不遇な人。

普通の生活をしたかった筈なのに謀略によって魔法界に引きずり込

まれてしまった。

ネギを見捨てられないほど優しい子でもある。

作者が思うにネギま！の世界で不幸ランキングナンバー1

救いたいけど、救うと原作からかけ離れて物語が続かないという意味でも不幸。

宮崎のどか

ポジション 原作主人公の従者

狂気に一目ぼれしてしまったり、ネギに恋してしまったりする恋多き子。

たぶん、これから狂気に出会うことが有れば立ち位置が変わる。

現在、夕映と喧嘩中。パルが緩衝材になってるためなんとか大きな喧嘩は起こっていない。

朝倉和美

ポジション 原作主人公の仲間

周りを引っ掻きまわす厄介キャラ。

そのうちに狂気による天罰が下るだろう。

アルベール・カモミール

ポジション 使い魔

淫獣。諸悪の根源。こいつがいなきゃネギはもう少しマシに違いない。

大体犯罪者だろ。留置所帰れよ。

麻穂良学園生徒陣

高音・D・グットマン

狂気と犬猿の仲の女生徒。

たぶんこれから出番が増えていくであろう正義の魔法使い。よく脱げる。

佐倉愛衣

高音を慕う百合っぱい子。

高音と敵対する狂気を怖がっている。

ナツメグとは二人でワンセット

あまり脱げない。

夏目萌（ナツメグ）

佐倉より百合度が高そうだと思われる子

高音と敵対する狂気を怖がっている。
愛衣とは二人でワンセット。
あまり脱げない

古菲（クーフエ）

一般人では最強の部類なカンフー少女。修学旅行で狂気の異常な強さに痺れて憧れた。
原作通りにネギに中国拳法を教えるだろうが、なんとか主人公サイドに引き込みたいなと思っている。
そのうち、ポジション持ちに昇格予定。

長瀬楓

裏の世界の忍者ちゃん。
クーフエと同様修学旅行で狂気に興味を抱く。
狂気とネギ、どちらに付くか不明な実力者。

早乙女ハルナ

のどかにネギをけしかけた張本人。
こいつの所為でのどかが巻き込まれてしまったと言っても過言ではない。
ない。

無自覚に被害を振りまく天災。悪意があるわけではないのが厄介。

麻穂良学園教師陣

近衛近右衛門（学園長）

鼯肩と偏見を直す為、ネギに狂気という監察官を付けた筈なのに自分が鼯肩をする情緒不安定な人。
痴呆が進んでいると思われる。

高畑・T・タカミチ

熱烈な紅い翼信者。白いスーツで白いスポーツカーを乗りこなす似非ダンデー。
ネギの応援者筆頭。狂気曰く、教師としては信用出来るが魔法使いとしては信用できない。

ガンドルフイーニ

タカミチ二号。

英雄の息子としての狂気に期待していたが、その言動や行動に失望して強く当たってしまう。
それほどまでに狂気には期待していたのだと思われる。

瀬流彦

未登場だが、狂気の言動から狂気が嫌っていないと思われる数少な

い魔法先生。

物語に介入させたいがどう活躍させたらいいか分からない人。

敵対者サイド

フェイト・アーウェルンクス

中二病を発病した残念フェイト。

当たらなければどうということはない！やボクと君が本気で戦った
らここら一帯は焦土になる。などと恥じることも無く言うことので
きるある意味勇者。

しかし、狂気の攻撃を完全回避したりするなど原作同様実力は折り
紙つき。

フェイトハーレムズ（栞調曆環焰）

フェイトに尽くす少女達。フェイトが中二病化したのはきっとこの
子達の所為。

未登場だがなんとか登場させたいキャラ。

月詠

京都しんめーりゅー剣士

サド、マゾ、レズの三拍子そろった最強の敵。

狗神小太郎

夕映の胸に手を突っ込んだエロガキ。
おそらくこの先の出番は多い。

天ヶ崎千草

おそらくもう出番はないだろう。

超鈴音

狂気と同じ火星人。

エヴァ対ネギ戦のときには狂気に手を貸したり、同士などと呼ぶところから狂気に対して少なからずの好意があると思われる。
現在、狂気に対して貸しが一つ。

学園祭に向けて色々ときつい計画を発案中。

葉加瀬

一瞬だけ出番があった人。

超の協力者にして凶器のマッドサイエンティストらしい。
茶々丸関連で狂気とは面識あり。

その他

ジャック・ラカン

狂気の義理の父親。

狂気の口調が悪くなったのはこいつの所為。

大概の事はH A H A H A ! と笑い飛ばす。

狂気に殺されかけた時は上手く宥めるなどの意外とと父親染みた一面もある。

テオドラ

なにげに狂気の初恋の人だったりする。

褐色美人な大人な女性、と見せかけたじゃじゃ馬姫。

武器・技紹介

ライトアーム プレイブアーツ
右腕 英雄殺しの魔拳

使用者 狂気

狂気の右腕が改造された兵器。

白く、しなやかなで脆い外見に閑らず振れば当たる拳を打ち出す。
チート

別段技名という訳ではなく、右腕解放時の狂気が右腕で振る全ての拳がこれに該当する。

羅漢適当に左ストレート

使用者 ジャック 狂気 夕映

拳から光る光線が出るパンチ。
夕映が使えるのは劣化番。

羅漢^{フル}全力ストレート

使用者 狂気

適当じゃないストレートパンチ。
極太の光線が出てとても危険。

ラカン・インパクト

使用者 ジャック 狂気

尋常じゃない規模の光線が出てくる。
巨大戦艦の主砲に匹敵するらしい。

気合い爆破

使用者 夕映 狂気

混ぜるな危険。

魔力と気を合わせて自爆を起こす。

基本自爆の為、本気で使うには肉体がかなり頑丈じゃないとだめ。

魔法紹介

悪知恵で縛りつけるもの
レイディング

使用者 夕映

夕映が狂気、エヴァと共に作り上げた専用魔法。

地面から木の根が伸びてきて敵を縛りつける。

特性上、飛んでいる敵には効果が薄い。

阻止するもの
ドローマ

使用者 夕映

夕映がエヴァ、狂気と作り上げた専用魔法。

一本の太い鎖を呼びだして敵を縛る。太さは込める魔力によって変わる、長さは測定不能。

縛るだけではなく魔法の詠唱、気を使う技統の使用を阻止することが出来る。

しかし、フェイトが簡単に破っていたことから実力差の大きい相手

には効果が薄いということが判明した。

インケンディムナエ
奈落の業火

使用者 ジャック 狂気

原作で登場した魔法だがその全容を作者は知らない。
この作品では放たれた後に爆ぜる黒炎の塊。
レッドアイズの黒炎弾が一番近い。

コーヒープレイク（前書き）

知っていましたか？

コーヒーと言う飲みモノによって途轍もなく解りにくいフラグが立っていたということを。

（。・Д・）d □

コーヒープレイク

麻穂良学園の一部が浮かれていた修学旅行という学生生活の中での一大イベントが終わったある日の午後。

友達が居ないという悲しい理由でそのイベントに参加しなかった狂気はひとりである喫茶店の隅に座っていた。

何処の喫茶店かと聞かれれば、狂気は馴染みの所と返すだろう。たまするチャチャゼロとのデートでは定番の場所だし、外に置かれたオーブンテラスではエヴァと茶々丸、弟子である夕映などと世間話や談笑することもある。

そんな狂気お気に入り喫茶店に狂気はひとりで居た。

一人ではない、いつも頭に乗せているチャチャゼロが居ない為、文字通り独りで、である。

何故独りなのか？と問われれば、狂気は言葉を濁すだろう。

それは狂気が年の割に幼いというよりもそういうことに耐性がないからであり、断じてヘタレだからということではない。

いや、何故だが言い訳じみている。簡潔に、簡単に言おう。

ようは、誘われたのだ。クラス的女子に。

・・・・・・何故だ！

と、叫びたいだろう。だがしかし、それは狂気とて同じこと。

どうしてこうなったのか、狂気自身も訳が分からない。

呼び出しを受けた女子を知っているかと聞かれれば是であろう。

しかし、知っている要素が薄すぎる。

狂気とその女生徒との接点なんてそれこそクラスメイトであるというくらいだろう。

それは一言二言くらいなら話したことがあるかもしれないが少なく

ともいつも通りに遅刻しながら登校をして、授業では惰眠をむさばった後、さて帰るか顔上げた時、クラスの真ん中で顔を赤らめながら「今日、お暇ですか？よ、よろしければ、一緒に、お茶でも・・」などと声をかけられる覚えはない。

何故だと首を傾げた処で答えなんて出てこない。

考えることをあきらめた狂気がコーヒーの入ったカップに口を付けた時、店の扉に取り付けられた呼び鈴が静かに鳴る。
狂気が手に持っていたカップが僅かに揺れた。

「まいったかな？」

「いや、いや来たところだ」

「そう、よかった」

お決まりともいえるやり取りを終えた後、狂気は向かい合う様に座ったその姿を見る。

白い肌にまるで人形のように整った造形。柔らかそうな白い髪に映える澄んだ水色の瞳で狂気を見ているその顔は無表情で顔筋がピクリとも動かない。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

沈黙の後、狂気はコーヒーに口を付ける。カップを握る手はプルプルと震えて居て、今の狂気の心の動悸をよくあらわしていた。

「ああ。注文をいいかい？」

「はい。なににいたしましたしょう?」

「そうだね・・彼と同じものを」

「かしまりました」

そんな狂気などお構いなしに彼はマスターに声をかけ注文を頼む。
恭しく頭を下げた初老のマスターは明らかにデートに緊張している
男子生徒の前に現れたのが外国人の美少年だったということに動揺
もせず去っていく。

まあ、常日頃から店に女の子の人形を連れ込むような狂気を相手に
商売をしていたのだから、とても寛大な心がさらに深まっているの
かもしれない。

そんなある意味異常、しかしどこか正常な風景を見て、ようやく狂
気は目の前の光景が現実であるのだと納得し顔を上げる。

「落ち着いたかい?」

「ああ、危うく吹くところだったけどな」

「それは止めてくれ。汚い」

「俺だっしてたくねーよ。で、なんでこんなところに居るんだ?フ
イト・アーウェルンクス。だったか?」

「へえ、名前、覚えていてくれたんだね」

「そりゃ、ついこの間に殺し合った仲だからな」

「フッフ」

「ハハハ」

互いに笑い声は出しているが、狂気は目が笑っていないしフェイトにいたっては表情一つ変えていない。

「ハハハ」

「フッフ」

何処までも異常な、その席に近付けばまるで異界に迷い込んだような錯覚を覚える空気を出す二人に対しても洗練されたマスターであるヘルマン（年齢不詳）は動じることなくフェイトの前にコーヒーをいれたカップと砂糖瓶、ミルクを置いて一礼し離れていく。

二人は一頻り笑った後、コーヒーに口を付ける。

「ミルクはいいのか？ガキには苦いぞ」

「子供扱いは止してくれ、ボクは見た目ほどの年齢じゃない。君と同じだね」

「・・・なるほど、殴った時にどこか作り物めいていると思ったが。人形のお前に味のよしあしなんて分かるのか？」

「根拠のない誹謗は止めてくれ。それでもボクは日に7度は珈琲を飲む珈琲党だよ」

フェイトの言葉に一瞬目を見開いた後、狂気は表情を崩し笑う。
さっきと同じ笑いではなく、純粹に感心したようにほおを緩めた。

「へえ、いい習慣だな。コーヒーは精神を覚醒させる。続けた方が
良いぞ」

フェイトの目尻がピクと跳ねる。一度目を閉じると、目を細めて静
かに語り出した。

「・・・一つ、聞いても良いかい？」

「なんだ？」

「好みの品種は？」

「・・・地球産のでいいのか？」

「かまわない」

「なら、コナだ。あのたまらない酸味とコク、それに風味がいい。
ブレンドしても美味しいな」

「コナ。良い選択だ。けど、ボクは断然モカ。独特の酸味にコク、
そして何より優れたあの香氣。たまらないね」

「モカか。確かにあの甘みはガキ好みかもな。年相応で何よりだ」

「まったく、子供扱いは止めてくれと言わなかったかい？」

「ハハハ」

「フフフ」

二人はもう一度、笑い始める。しかしそれはさっきとは違う。狂気は普通に笑っているし、フェイトも僅かだが口元を吊り上げていた。

「まさか、此处に来て初めてコーヒーに付いて語り合える奴がお前とはな。皮肉だが、僥倖だ。俺の周りにはコーヒーを苦くて飲めないとか抜かす少女と味覚が狂ってるとしか思えない弟子しかないんだ」

「ボクも同じような物だよ。珈琲に付いて語るにはボクの周りの彼女達は少し幼い」

「久しぶりだからな、少し付き合ってもらえるか？」

「よろこんで」

二人は喫茶店の隅で珈琲談義に花を咲かせていく、数日前に殴り合った二人とは思えないほど静かに語り合い、笑いあっていた。

ちなみに、なんだか専門的すぎて理解できない単語が飛び交う中、一つ的话题を拾ってみると、

「最近では珈琲より紅茶を好む人が多すぎて困る」

「紅茶か。俺はあんまり飲まないけど、お前はどんなんだ？」

「一応飲むよ、レモンティーをアイスでだけど。それじゃないと、

飲む気にはなれないね。そうそう、中には香り高い銘柄の物をミルクティーして飲む輩もいるのだけれど、信じられるかい？」

ブリティッシュ

「どうせ英国人だろ？あいつ等は味覚が馬鹿なんだよ。元の食材の味を壊す英国式調理法を見ればすぐわかる」

「まったくもって同感だね」

などという、何処かの子供先生が聞けばブチ切れる内容があったりした。

どれぐらい語り合っていただろう。

長かったような気もするしあつという間だったようにも感じる中、いつの間にか姓ではなく名で呼ぶようになった狂気は言う。

「意外だったなフェイト。まさかお前とこんなに話が合うなんて。案外いい友達になれるかもしれない」

「いや。それは無いよ」

即答するフェイト。

その口調には確固たる意志が込められていて、有無を言わせない迫力に満ちていた。

狂気は残念だと思いつながらも仕方がないかと納得する。当然だろう。

狂気はフェイトが何をしようとしているかなんて知りはないがお互いの立つ立場が違うということは理解できる。

自分と目の前のこいつは敵同士。友情なんて生まれる可能性も無け

れば必要もない。

狂気は自分の馬鹿な発言に嘲笑する。

「・・・その通りだな」

「ああ、なにしろ。友達を持つと人間強度が下がるからね」

真顔のフェイトがそう言った瞬間、世界が止まったように感じた。永遠ともいえる一秒だった。永遠としか思えない一秒でもあった。狂気の頭の中にエコーがかかりフェイトの言った言葉が繰り返される。

よく考えて、よく考えなくてもそれがとても痛い発言であると気が付いた狂気はフェイトを見るが、フェイトは別段何の変化も無く普段通りの無表情を浮かべるだけだった。

「なあ、フェイト」

「なんだい？狂気」

「お前をそんなにしたのは、そこに隠れているつもりでいる奴らか？」

指摘しない様にと決めていた場所を指してしまうほどフェイトを気の毒に思う狂気の顔には苦笑いしか浮かんでいない。

「（ちよ。ばれてますよ！？どういことですか！）」

「（・・・暦、うるさい）」

「（アンタが無駄にデカイ所為でバレたんじゃないの！調）」

「（いえ、そう言われましても）」

「（あの、取りあえずみなさん落ち着いた方が・・・）」

「くっ、ははは。保護者同伴か？何処の授業参観だ？フェイト」

「はあ、もう善いよ。みんな出ておいで」

渋々といった感じで、5人の少女達が出てくる。

警戒、侮蔑、怒り、恐れ、興味、無心、さまざまな視線を狂気に向ける少女達だが、フェイトに対しては一樣に同じ眼差しを向けているように思える。

「ボクは独りで行くと言った筈だが、どうしてみんなは此处に居るのかな？」

「はっ！もうしわけありません。し、しかし、私はただフェイト様
が心配で」

フェイトの言葉に真っ先に反応したのは金髪ツインテールの少女。
跪きながら反省の言葉を並べ立てている。

その様子を見て、狂気は眉を顰める。

「おいおい、フェイト。感心しないな、店の中で女の子を跪かせる
なんて・・・そういう趣味なのか？」

「いや、ボクは「貴様！フェイト様を侮辱する気か！」・・・焰、い
いから。落ち着いて」

「しかしこの男はあろうことかフェイト様を、へ、へへ変態扱いしたんです。生かしてはおけません。燃やします」↑目から火花が散っている子

「はあ、彼だつて本気じゃないさ。それに彼を燃やすなんて100年かけても無理だと思うよ」↑みんなのフェイト様

「まあ、落ちつけよ。取りあえず座ってもらったらどうだ？」↑けつこう本気だった人

「火を付けた人がいうことじゃないですよね？」↑黒髪おかつぱちゃん

「………」↑寡黙な子

「お止めなさい、焰。フェイト様の命令ですよ」↑一番女の子（主に身体付きが）

「あらあら」↑金髪ウェーブ

「一気に人が増え過ぎだぜ……書きにくいんだよお！（。口。）」↑神の声

何故か一瞬にして混沌カオスに満ちた空間だったが、フェイトの「取りあえず座ろう」という一言によって場が収まる。
座る席順は

狂気

— ○ ↑ クルキ オススメコーヒー ↓ ○
— クルキオススメコーヒー —

調 栞 焰 フェイト 暦 環

である。

何処の企業の圧迫面接だ！と叫びたくなるのを堪えながら狂気は前を見る。

五人の女の子達に睨まれた。

一体、俺が何をしたんだと考えながらため息をつく。

そして目の前のフェイトに向けて、迷惑そうな視線を向けた。

「ごめんね。みんな、良い子達なんだけど少し心配症の気があるよ
うだ」

「いや。心配性どころの騒ぎじゃないだろ。・・・にしても、上手い幻覚魔法だ。角持ち二人に亞人が二人、あと精霊族の末裔なんて何処のびつくり博覧会だ？誰ひとりとしてこの場にはまともな人間が居ないな」

「つつ」

「うぬ」

「ちっ」

「くっ」

「・・・」

狂気に突き刺さる視線の鋭さが増す。

フェイトはため息をつきながら眉を顰めた。

「無意味な挑発は止めてくれないかな？」

「無意味じゃない。空気の入れ替えだ。もう和やかに楽しく笑いながら話が出来る話題じゃないんだろ？」

「・・・そうか、うん。そうかもしれないね」

そうして、場の空気が変わる。

フェイトの顔から僅かにあった緩みが消え完全な無表情になり、狂気は僅かに目を細めた目つきが悪いものになる。

「それで麻帆良になにしに来たんだ？」

「うん、実はね、今度ボクは此処に悪魔でも送りこもうと思っているのだけど」

「なっ、！」

「ちよっ！」

フェイトの隣に座っている少女二人、焰と暦は驚いた様子でフェイトを見る。

狂気は動じることも無く頷くと、諭すように言う。

「なあ、そういうことは普通俺達に言わない方が良いんじゃないかな？」

狂気の言葉に調、栞、環の三人は思わず頷く。
フェイトはふっ、と微笑すると狂気の顔を真っ直ぐと見詰める。

「いや、言っておいた方がいいさ。たとえ邪魔をしようとしてもボクが止めるからね。君達が棄権してくれた方が死人が少なくて済むだろう」

「へえ・・・つまりは・・・」

ピシッと、窓の外にある木が鳴く。
永遠とも思える余韻を含んで、狂気は苛立ちを募らせた。

「俺がお前に負けると?」

狂気の眼が見開かれギロツと狂気を睨む。

「ああ、負けるね」

対してフェイトは眉を上げ、ニタアと作り物じみた笑みを浮かべる。

その場に居た五人の少女達は二人が出す空気を吸って、生きた心地がしなかった。

ビリビリとした空気が肌を指す。

無意識のうちに目に涙が浮かんだ。

服を握りこんでその一瞬が過ぎ去るのを待つしかない。

彼女達の望み通りに二人は背負う空気は直ぐになりを纏める。

二人はゆっくりとカップに口を付けながら談笑していた時と変わらない口調で喋り始める。

「まあ、実際のところやってみなくちゃわからないのだけれどね」

「そうだろうな」

そんな二人とは対照的に、彼女達の顔からはダラダラと汗が垂れていた。

息が切れたように呼吸をしている者もいる。

狂気とフェイト、二人と同じ空気を吸うには5人の少女達ではいささか幼すぎた。

明かに疲れ切った様子の彼女達を気にすることもせず、二人は会話を続ける。

「で、要件はそれだけなのか？」

「まあ、もうひとつあるのだけれど此方の方が本題だからね。別に言わなくてもいいかな」

「気になるだろ？もったいぶるなよ」

「そうかい？じゃあ、話そうかな。ボク達の目的について」

「なに？」

狂気の眉が僅かに跳ねる。

「君が言ったことだろう？ボクと君はいい友達になれるかもしれない。人間強度はさがってしまうかもしれないが、君という戦力が手に入るならそれもいい。まずは解り合うことから始めよう」

「おい、フェイトふざけてるなら「ボク達の目的は■■■■■、■■■■■だよ」……なん、だと？」

「どうかな？君が守る物が■■■だというのなら、協力するのも悪くないと思わないかい？」

「……………」

「それに君には理由もある筈だ。あの世界を変える理由が。憎いと思ったことがあるだろう？どうして笑っていられるのだと思うだろう？どうして、彼らが英雄が讃えられるのだと、叫んだ事があるだろう？……復讐も、立派な革命の動機だよ」

ガタンッ

椅子が倒れる音がして、立ち上がる狂気の姿をフェイトは見る。掛ってる前髪の所為で、その表情は読み取れない。

「…………人形が人の感情を語ってんじゃねーよ」

そう捨て台詞を吐いて、狂気はその場を立ち去って行った。

「な、なんだ、あの言い方は！失礼にも程があるぞ！」

狂気が居なくなっただことで元気を取り戻した焰は握りこぶしを振り上げながらそう叫ぶ。

「今日で二度目だね。うるさいよ、焰」

フェイトの言葉で口を紡ぐ焰の代わりに調が口を開く。

「しかし、いいのですか？我々の目的まで明かしてしまつて」

「調は彼が仲間になるのには反対かい？」

「・・・ええ、あのもの言いはどうも、好きにはなれません」

「一番最初に彼が言った言葉なら気にしない方が良い。アレは別に君達を貶めるつもりで言つたわけではないからね」

「どうということデス？」

首を傾げる環と同じように、皆が一様にわからないという表情を浮かべている。

フェイトは仕方がないのかな、と思いながら空を見る。

「彼はこの場にまともな人間がひとりもないといった。つまり、彼自身が自分を人間扱いしていないということだよ。ボクと同じようにね」

「あつ・・・」

「し、しかし！」

「それに境遇だつて君たちとそっくりだよ。調べたところ彼もまた戦争によつて故郷と呼ぶべき場所を失っている。・・・ボクの予想が正しければ、二度ね」

黙り込んで、狂気が出て言つた扉を見詰めている5人。

フェイトは立ち上がると店を出ようと歩いて行く。すれ違う刹那に、静かにいった。

「彼はきつと此方側の人間になるよ。歩み寄る努力をした方が良くない、口は悪いけどなかなか優しい男だと思うよ。ボクが話してみての予想だけれどね」

困惑する彼女達の横をわざわざ通り過ぎた後、フェイトは振り返える。

「じゃあ、帰ろうか。いくら偽造が優秀でもこれ以上は闇の福音にバレかねない」

それぞれの返事を返す彼女達。

フェイトは会計を済ませて店を出ようとしたところで一人の女生徒とぶつかる。

「あう」

「あつ、ごめん。大丈夫かい？」

「あ、はい。大丈夫です。こちらこそすみません」

ペコリと頭を下げた女生徒は店をきよろきよろと見渡した後、フェイトに訪ねた。

「あの、すみません。此処に目つきが悪くて黒い学生服を着た人が居ませんでしたか？」

「ああ、彼ならいま出て行った所だよ。近くを探せば見つかるんじ

やないかな？」

「あ、ありがとうございます」

もう一度頭を下げた後、女生徒は探し人を探しに走っていった。

コーヒープレイク（後書き）

出したかったフェイトハーレムズを無理やり出したら、こうなった
ぜっ！ゝ（´・こゝ）ノ

後悔は無い。俺は俺のやりたい事を貫き通しただけだっ！（！。ー）

弟子入り交渉（前書き）

なにも言わない。言えません・・・（――）ゝウム

弟子入り交渉

「僕を弟子にしてください！」

「知らん。帰れ」

朝一番、ある日の日曜日、エヴァはベットの上で足を組みながら正座しているネギを見下ろしていた。

傍では茶々丸がチャチャゼロの髪を梳いていて、その視線は一切ネギには向けられていない。

紙を梳かれているチャチャゼロは何時も通りに笑っていて、瞳孔が開きっぱなしである。

三者三様の様子を言葉で並べるのなら、無愛想、無関心、無愛嬌であろう。

それぞれの反応は微妙に違っているが、共通点も大きい。

要は三人が三人とも、ネギに対して何の価値も見出せないという点だ。

「そ、その、代償が必要なら、僕の血を渡します。いくらでも吸って貰って結構です！だから、お願いします！」

「要らん。ボーヤの血を吸うくらいなら狂気の血を吸うわ。私は弟子など取る気はない。わかったらとっとと帰れ」

「僕に出来ることなら、何でもします！だから、お願いします！」

いつまでも頭を下げ続ける、俗称でいうなら土下座を続けるネギの肩は振るえ悲壮感を滲ませる。

ネギには目的がある。父を捜しだし、立派な魔法使いマジステルマギに成るといふ生涯をかけてやり通すべき目的がある。

下げられた頭の所為で見えない筈の瞳からは、並々ならぬ決意と熱い思いが溢れ出ている。

ネギの後ろに立つ明日菜は小さくも大きいその背を見て何故だか顔が熱くなるのを感じた。

明日菜だけではない、誰もが今のネギを見れば心動かされるであろう。

そう言い切れるだけの魅力が、今のネギにはあった。

エヴァはそんなネギを見て、舌うちをする。

年端もいかない小僧に自分の心が動かされ悔しくて出た物。ではなく、ただ純粹に苛立ちの末に出された物。

「帰れ。答えは変えん」

始めに明言しておくが、エヴァはネギを嫌ってはいない。

確かに、春頃に起きたいざこざで一時はネギを殺そうとしたのは事実。

しかし、害された当人であるチャチャゼロは何も言わないし、目の前で行われたそれに殺意を懷いたであろう茶々丸も何の行動も起こさない。

なによりも、誰よりも憤怒に燃えたであろう狂気が自分の言葉で矛を収めたのだ。

ならば、自分一人がいつまでもあの出来事に心を縛られて居る訳にはいかない。

エヴァの誇りがそんな女々しいことを許しはしない。

故に、春先に起きたあの事件はエヴァ達の中では終わったこととして扱われている。

ネギに対する全ての感情がリセットされたと言っても良い。

無論、最初に戻るのではなくエヴァは昔惚れた男の子供だからと氣遣う想いが消え、茶々丸にいたってはネギに対する感情の全てが消えたという変化は存在する。

ちなみにチャチャゼロは最初から何も思っていなかったため、ある意味では一番変わっていない。

「お願いします！エヴァンジェリンさん！」

「私は弟子など取らん。戦い方などタカミチにでも習えばよからう」

「ちょ、エヴァンジェリンさん。ネギがこんな一生懸命頼んでるのに、ちょっとひどいんじゃない！」

ネギの後ろに居た明日菜が声を張り上げる。

『貴様らがしたことを忘れたのか？』

その言葉を飲みこんで、エヴァは忌々しそうに口元を歪めた。

「頭を下げたくらいで物事が通るなら世の中、苦労せんわ。大体、ボーヤを弟子に取って私に何の得があるというのだ。まさか、悪の魔法使いである私をタダで動かそうなどとは考えていまいな？」

「そ、それは・・・」

「あの、もし僕に修行を付けてくれるなら、父さんの手掛かりになるかもしてない情報を渡します。タカミチから聞きました、エヴァンジェリンさんはずっと父さんを探しているんですよね」

ふざけるなど言いかけて、エヴァは言い淀む。

死んでいたと思っていた奴が生きていることは随分前に狂気から聞いていた。

情報元はあのバグだジャックというから、あまり信用できないが狂気が自分に直接教えた情報なのだから真実なのだろうと思う。

「それは本当か？」

エヴァの態度にネギは喜びの表情を浮かべる。

エヴァンジェリンさんの心を動かすなんて、やっぱり父さんはすごいんだ。

そう思いをはせながら、はきはき声を出す。

「はい！実は京都で父さんの別荘に寄った時に色々と情報が手に入ったんです。中には麻帆良の地図もあって、暗号で書かれているそれを今解読中です。きっとその中に手掛かりがある筈です」

エヴァは考える。ナギに会いたい、そう思う気持ちはおそらく嘘偽りなくこの胸に。

しかし、それが15年前に懷いていた恋心かと問われれば、わからない。

自分は確かめなければいけないのではないのでしょうか、胸に手を当てる。

・・・私はナギに会いたいのだろうか？

逢いたい、それは事実だろう。

・・・私はナギが隣に居て欲しいのだろうか？
おそらくは、そう。

・・・私はナギが好きなのだろうか？
わからない。

ナギに逢いたいと思う、ナギが隣に居たら楽しいと思う。
けれど、昔のように恋焦がれているかと聞かれたら、首を捻るしかない。

試しに私の隣にナギが居て、自由気儘に旅にでも出る様子を思い描いて見る。

楽しそうだが、何か足りない気がする。

従者であるチャチャゼロと茶々丸もつれて行ってみる。

何故だか隣に居るナギが不自然に思える。

ならばと、奴の息子であるネギを足してみたらどうだろう。

・・・駄目だ、壊滅的に何かが壊れた気がする。とてもじゃないが旅を楽しめそうにない。

おそらくチャチャゼロや茶々丸と喧嘩をするだろう、それを私とナギが止めて、なんとか仲裁する。

けれど、きつといつか止められなくなってしまう。

ならば、チャチャゼロや茶々丸と仲がいい狂気も連れて行ったらどうだろう。

何故だが、煙っていた違和感が消えた気がする。

完全に近づいた実感がある。これなら旅を幾らでも楽しめるだろう。

しかし、狂気は英雄やネギが嫌いだ。

あの二人が居るといふなら、ついて来ないだろう。

仕方なく、ナギとネギを連れて行かないことにしてみた。

すると、完全が完璧に変わったように思える。

私の後ろを面倒そうにしながらも狂気が付いて来て、その頭の上にはチャチャゼロが笑いながら乗っている。そして茶々丸が優しい声で全員の世話を焼くのだ。

なんて、なんて楽しそうなのだろう。

ああ、と納得して思わず笑みが浮かぶ。

そういえば、誰かが言っていたな、初恋は叶わないものだ。

まったくもって、その通りだ。初恋なんぞ、叶わない方が良く。

「わかった。今度の土曜、弟子に取るかどうかのテストをしてやる。それでいいだろう?」

「は、はい!ありがとうございます!」

ネギと明日葉が帰った後のエヴァの家で、茶々丸が首を傾げながらエヴァに問うた。

「良いのですか？あのような約束をしてしまつて」

「ふんつ、仕方ないだろう。私はナギに会つて確認しなければなら
ないのだから。私はもう、奴のことを好きではないのだと。でな
ければ、」

エヴァは胸の内に居る彼のことを思い描いて、呟いた。

「アイツのことを、好きだと言えんだろう」

おまけ 狂気の学園での日常。

いつも通りの朝を迎える。目が覚めて時計を見れば、既に9時を回
っていた。

一現目は9時から。完全な遅刻だ。

しかし、仕方がないことだろう。狂気は目覚まし時計の目覚まし機
能を使っていないのだから。

……端から、起きる気がないのである。

大きく伸びをした狂気は顔を洗って歯を磨く。寝巻を着換えた後朝
食を作り出した。

メニユーは定番のトーストと目玉焼き、そしてホットコーヒーであ

る。

此処まで三十分。さらに新聞を読みながらむしゃむしゃと食べることにさらに三十分。

テレビの隅に映った時刻はただいま10時3分。

よし、と声を上げてから狂気は立ちあがった。今から登校すれば二度二現目の始まり頃には顔を出せるだろう。

狂気は寮の部屋を出て行くのだった。

学校に着いたのは読み通り10時28分、二現目開始の二分前だ。

そして自分の席に着いた狂気はいつものように机に突っ伏す。

授業担当の教師が睨んでいるが、いつも通りの光景だ。

狂気は気にせず惰眠をむさぼり始める。

昼休み。ようやく狂気は行動を開始するようだ。

「……購買、行かなきゃ」

狂気は寝ぼけながらも懸命に身体を動かし、購買へ昼食を買いに行く旅に出ようとしている。

この冒険は正しく行きはよいよい帰りは恐いであり、一度教室を出た狂気は教室に戻ってくることはなく、屋上か図書室で眠ってしまふことになるのだが今日はそうはならないようだ。

「ねえ。少し、話があるんだけど」

「なんだよ？」

教室を出ようとした狂気の前に一人の女生徒が立ちふさがった。

周りの生徒たちは戦々恐々と無謀なことは止せと忠告をするもの。止められなかったと悔いを背けるもの。さまざまな反応を示す。ただ、ほぼ全ての生徒が狂気の前に立った女生徒を心配しているようだった。

昼食を取ろうとしたのを邪魔された形である狂気の不機嫌そうな顔に、汗を浮かべながらも女生徒は強気な姿勢を崩そうとしない。ふと、その女生徒の後ろを見てみると、もう一人の女生徒がいることに狂気は気が付いた。

姉妹かな？狂気はそう思いながら対峙する。

「用があるなら早くしてくれるか？購買のパンはクロッケパンか焼きそばパン食べないと食べた気になれないんだよ」

なにを言っているんだこいつ？という視線を女生徒は向けてくるが、狂気に取っては死活問題である。

購買で人気を二分する総菜パンであるクロッケパンと焼きそばパン。そのどちらかを狂気は手に入れなければならないのである。

故に、購買に急がなければいけない。

余り物のメロンパンやコッペパンなど論外、百歩譲って三食パンじやなきゃなんねえ。

真剣な顔をする女生徒の前で、狂気はそんなどうでもいいことを考えていた。

「この前、この子と・・・その、で、デートの約束したでしょ。どうして破ったのよ」

はて、と考えて狂気はようやく思い出した。

強気な女生徒の後ろで袖を引いている大人しそうな女生徒、何処かで見たなと思えば前に教室で自分を喫茶店に呼び出した子である。

フエイトのなんやかんやで忘れていたなど、狂気は反省する。

「別に、破った訳じゃない。俺はちゃんと時間通りに待ち合わせ場所にいた。時間が来てもその子が来なかったから帰った」

というよりも、その子はこれなかったんだろう。フエイトも人避ける魔法を使ってたから。

そう思いながらも、当然のことだがそれを言葉にはしない。

「デートで女の子が少し遅れてくるのはしょうがないじゃん。待ってあげようとか思わない訳」

「一応、三十分は待ってたぞ」

「・・・へ？三十分も待ってたの？一人さびしく？」

女生徒は思わず本音を漏らす。横を見れば自分の服の袖を掴んで顔を赤くし首を振っている友達の姿がある。

おそらく、自分を止めようとしていたのだろう。

此处まで来て、ようやく女生徒は自分の過ちに気が付いた。

しかし、今さら引き下がれない女生徒は辛うじて強気の姿勢なまま腰に手を当てる。

「ま、まあ、ならいいわ。他にも聞きたいことがあるんだけどいい？」

「なんだ？」

「アンタ、好きな人とかいる？」

狂気の口元が引き攣った。

何故俺はいま、クラスメイトがいる教室の真ん中でこんな恥ずかしい眼を受けているのだろうか？

考えた所で分からない。これで相手が男であつたなら殴つて黙らせるところだ。

しかし、相手は女生徒。しかも少し我が強よそうではあるが美少女である。

そんな相手を教室の真ん中で苛々したという理由だけで殴るのは幾ら狂気でも躊躇した。

仕方なく、素直に質問に答える。

「好きな人はいない」

「そう。それでいいのよ」

女生徒は満足そうに頷くと、後ろの女生徒に笑顔を送る。

後ろに隠れた大人しそうな女生徒は何故か顔を赤らめ、泣きそうになつていた。

「じゃあ、次の質問ね」

「まだ続くのか？」

心底嫌そうな顔をする狂気にもお構いなく、女生徒は急に自分の袖を掴んでいた手を掴み返し、引つ張った。

後ろに隠れていた大人しそうな女生徒は狂気の前に引つ張りだされる。

急なことに動揺する友人を気にかけることもなく、女生徒は満面の笑みで言つた。

「この子のことどう思う？可愛いと思わない？」

途端、大人しそうな女生徒の顔は耳まで赤くなった。

対して狂気の口元はさらに引き攣る。

どうして、俺は教室の真ん中でこんな拷問を受けているんだ？

その問いに、答えてくれる物は誰もいない。

クラス中が注目する中で、もはや答えないという選択肢はない。

狂気はじつと生贄に捧げられた可愛そうな女生徒を見る。

その女生徒の目には徐々に涙が溜まっていつていた。

「そう、だな。可愛いと思うぞ」

「本当にそう思う？アンタ好み？」

「ああ、」

——少なくとも、お前よりはな。

そう聞こえないように狂気は呟く。

女生徒は隣で泣きそうになっている友達のを叩いていた。

「よかったね」

「う、うん」

一体なんだったんだ？狂気は首を傾げながらその様子を見ていた。
女生徒にとって誤算だったことは、狂気が体質上、人間に対するそ
ういう感情が希薄だったことだろう。

しかし、そんなことを知らないクラスの男子達の心は一つ。

「
「
「
「
「
リア充がああっ
」
」
」
」

弟子入り交渉（後書き）

いや、わかりますよ。皆さまが言いたい事はよく解ります。けれどもここでよく考えてみてください。

ネギ君がエヴァ様に弟子入りしない場合はどうなりますか？
喰う寝るさんに重力魔法をならおうか。もしくは高畑先生を師と仰ぎましょうか。

どちらにせよ、詰んでませんか？魔法世界編まで考えたら、原作崩壊以前の問題です。

学園祭編ほどで完結するのであればそれでもいいのですが、長く続けたい自分としては何とかそれは避けたかったのです。

なので、ネギ君をエヴァ様に弟子入りさせました。

言い訳染みていて申し訳ありません。

お嬢様と剣士の扱いはどうしよう・・・（前書き）

前回の「ネギ君はエヴァ様に弟子入りさせちゃうぜっ！Σ（。д。；
（又オオ！？）」という空気読めない自分の発言はもっと罵詈雑言
を呼ぶかと思っていたらそんなことはなく、逆に皆さまの優しさで
泣きそうです。（Ｔ＾Ｔ）。

これからでもできる限り頑張っていきたいので、皆さまも出来る限り
付き合っただければ幸いです。

お嬢様と剣士の扱いはどうしよう・・・

ある日のこと、刹那は緊張した面持ちで待ち人を待っていた。

女子寮の前に生えた観葉植物の花の花びらを千切ってはブツブツと
呟いている。

「来る、来ない、来る、来ない」

ぶつちやけ、傍から見ればとてつもなく不気味である。

常に冷静沈着である彼女が何故こんな楽しいことになっているかといえ
ば待ち人に原因があるのだ。

「く、来る。よ、よし。大丈夫。お嬢様は来てくれる」

待ち人の顔を思い描いて、刹那は想いを馳せる。

常に離れた場所から見守っていることしかできなかった私。

手が届く場所にいるのに決して触れることのできなかったお嬢様。
何度も想った。どうしてお嬢様の隣にいるのが私ではないのかと。

お嬢様の隣で笑う明日菜さんに対して卑しい気持ちを抱いたことすら
ある。

そんな自分が嫌で嫌でしょうがなかった日々、それがようやく終わ
る。

嬉しすぎて思わず昔のように呟いた

「・・・このちゃん」

「なあに？せつちゃん」

「うひゃあっ！」

返事がない筈の呼びかけに答えた声を聞いて刹那は情けない声を出す。

横を見れば楽しそうな笑顔を浮かべた木乃香がいつの間にか立っていた。

「な、なな、いつの間にいらしていたのですか。お嬢さま」

「あー、めーだよ。せつちゃん」

刹那の問いには答えることなく木乃香は頬を膨らませている。この愛らしい表情が怒りを表していると理解するまで刹那は数秒の時間を要した。

「せっかく昔みたいに呼んでくれたのに、どうして変えてしまうん？」

「それは私はあくまでも護衛という立場の人間です。お嬢様の立場を考えれば、このちゃんなどと軽々しく呼ぶことはできません」

「むー」

「むくれられたところで仕方がないことです」

「むー」

「そ、そんな表情をしても愛らしいだけです。私は気にもしません」

「むー」

「……わ、わかりました。しかし、せめて二人きりの時だけにさせてください」

顔を赤くして諦めたように言う刹那の頭に木乃香は手を伸ばして撫で始める。

「えへへ、せっちゃんはいいい子やね」

「なあっ！お、お止め下さい」

言葉では止めるようにいながら身体を動かさない刹那に気をよくした木乃香はより一層楽しそうに刹那の頭を撫でる。

顔を真っ赤にしたまま動かない刹那が復活するまで、しばらく時間がかかるのだった。

その後、木乃香が手を止めたことで刹那はすぐに復活した。

逆に言えば、木乃香が手を止めなければ刹那は停止したままだったということだ。

変な所で対桜咲刹那用捕縛術が出来たものである。

「せっちゃん。魔法に付いて大事な話があるっていうたけど、何処に向かつてるん？」

辺りを闇に包まれた麻帆良を刹那と手を繋ぎながら歩く木乃香は少しだけ不安そうにいう。

時刻は未だ、3時30分。早朝と言うより深夜と言ってもいいかもしれない時間帯。

「申し訳ありません。説明をしていませんでしたね」

木乃香と手をつなぐという大事によって失念していた刹那は頭を下げてから説明を始める。

「私達が向かっている場所はエヴァンジェリンさんの自宅です。もうすぐ付きますから、安心してください」

「エヴァちゃんのお家？あ、そっか。エヴァちゃんも魔法使いやっだね」

「はい。魔法界でも屈指の実力者である伝説の吸血鬼。私などでは足元にも及ばない存在ですね」

何かを含みながら笑う刹那に木乃香は頬を膨らませている。とてもわかりにくいが怒っているという合図である。

「せつちゃん」

「あ、はい。何でしょう」

「そうやって自分のことを蔑んで言うのは悪い癖や。夕映から聞いたんよ。せつちゃんは隠れずっとウチのことを守ってくれていたって。そんなせつちゃんが弱いわけあらへんもん」

「・・・お嬢様」

「ウチにとつてのせつちゃんは、いつでもかっこいい大切な人や」

「・・・このちゃん」

何故か両手を握りあつて見つめあっている刹那と小乃香。ちゃちゃを入れたら馬に蹴られるかもしれないこの光景を見ながら、笑う影が一つあった。

「ラブコメルノモ結構ダケトヨー。狂気ハモウマツテンゾー」

「あ、お人形さんや」

「な、チャチャゼロさん」

いつの間にか付いていたエヴァの家であるログハウス。

そこで気の手摺に腰をかけたチャチャゼロを確認した瞬間、刹那は思わず両手を離して驚いた。

喋る人形と言うファンタジーの代名詞に出会った小乃香は目を輝かせたが刹那に両手を離されたことで今は少し唇を尖らせている。

「ウエツ、思ワズ砂糖吐キソウニナツタゼ。刹那ハソツチノ気ダツタンダナ。ライバル減ツテイケドヨ。応援シタルゼー。ケケケ」

「なっ、ちち違います。私はしっかりとお嬢様とは健全なお付き合いを！」

「女同士デ健全ト力言ッテル時点デイヤラシーゼ」

自分と木乃香の関係をどう思われたか悟った刹那は慌てて弁明をしようとするがチャチャゼロは聞く耳持たずに手摺から降りると、ドアノブまで飛びあがり扉を開く。

「マ、トモカク入レヨ」

「あ、うん。ありがとう。えっと、チャチャゼロちゃんていいんやろか？」

「チャン付け八止メヤガレ」

「じゃあチャチャゼロさんやね。ウチは木乃香でええよ」

キアリングドールであるチャチャゼロに臆することもなく笑顔で馴染み始めた木乃香を見て刹那はもう弁明することも忘れて普通に感心した。

私はあの笑顔を直視出来るまでしばらく時間がかかった物だと思います。

「ジャア、茶デモ飲ムカ？」

「あ、いえ、お構いなく」

「冗談ダツツーノ。俺ガソナ事スル訳ネー。元カラオ構イナンテシネーヨ」

呆けていた所為で冗談が通じなかった刹那を見てチャチャゼロはカラカラと笑い、家の奥へと歩いて行く。

「付イテキナ。狂氣ガ別荘デマツテンゼー」

エヴァの家の中にあるボトルハウス、別荘と呼ばれているその場所

に狂気はいた。

周りには鬱蒼と生え茂る木々、人居るのには不釣り合いな場所。無論だが此処は最初に狂気がチャチャゼロに、此処で待っている。と言った場所ではない。

狂気がチャチャゼロに刹那と小乃香の迎えを頼み、此処で待っているといった場所は別荘に入りすぐの一本道を渡った広場であり狂気が今立つ場所ではなかった。

狂気は本来、待ち合わせ場所で待つと言いながら別の場所をふらふらするような男ではない。

しかし、ならば今は何故こんなところ居るかと言えば、全ては狂気の考えが甘かったことに原因がある。

狂気がチャチャゼロ達を待つこと既に5時間。

そう、狂気は5時間も待ち惚けている。

別荘と外の世界とでは時間の流れが違う。

別荘での一日が外では一時間であるように、外での数十分は別荘の数時間に匹敵する。

「なんで忘れてたんだろか」

広場で一時間の間、立ったまま待ち惚けた狂気がそう呟いた後、暇をつぶす為フラフラと出歩き出したことを誰が責められようか。いや、断じて責められまい。

そう言う訳で、現在待ち惚けること5時間と3分。

未だ独りきりで暇を持て余していた狂気は暇つぶしを思い付いたとばかりに懷から一枚のカードを取り出した。

それは狂気としては恥ずかしいやら情けないやらの思い出で一杯な

一枚のカード。
チャチャゼロとの仮契約カード^{バクティオ}だった。

「結局、このアーティファクトが何なのか確認してなかったんだよな」

アーティファクトなど使わなくても狂気は既に十分すぎる強さを誇っているため、今まではチャチャゼロへの魔力供給以外に使わなかったカードを見て、狂気は丁度いいかと思ひ呟いた。

アデアット
「来たれ」

ラスト・バトル
勝者こそが正義を語る場

出てきたソレを見て、一瞬呆けた狂気だったがそういう形状だったのかと納得すると辺りを触り始める。

「へえ」。そりゃアーティファクトは武器だけじゃないとは知ってたが、こういうのもあるんだな」

そんなことを呟きながら、最初こそ何処か楽しげだった狂気はソレの効力に気が付くと眉を顰める。

いや、まさかと思ひながら確認を続ける狂気の顔はどんどん苛立ちを含んだものになつていく。

終いには舌打ちををすると、自分のアーティファクトであるそれを蔑みながら言う。

「最低だな。チャチャゼロとの仮契約で出た物じゃなけりや、殴り

壊してる所だ。・・・もう二度と出さねえ。アヘアット 去れ」

チャチャゼロとの仮契約で手に入れた力があまりに嫌悪感を覚えさせる物だったことに顔を顰めている狂気の耳に、当人の声が聞こえてきた。

『オイ、狂気。何処二行キヤガッタ』

「あ、悪い。すぐ戻る」

カードから聞こえてきた声に慌てて返答するが、返事がない。少しの間首を傾げてから思いいたる。

「そういえば、仮契約カードの念話は一方通行だったな」

顔には出さないが、狂気はアーティファクトのことでショックを受けているようだった。

少なくとも、呆けてしまうほどには。

刹那と木乃香を迎えに行っていたチャチャゼロと急いで待ち合わせ場所に戻ってきた狂気は合流した所でようやく本題が始まる。

いままでが何だったか？行数稼ぎである。

狂気は目の前にいる近衛木乃香を見る。その姿を見て思う所は数多くあると言っていていいだろう。

英雄嫌いである彼は紛れもなく彼女の父、サムライマスターを毛嫌いしている。

しかし、一人の親として子を案じる詠春の姿を自身が親父と呼ぶ彼と重ねてしまったからこそ受けてしまった彼女への手助け。

承諾したからには約束は守ろう。そう思いながら何処か怯えた様子の木乃香へ喋りかける。

「緊張はしないでくれ。自己紹介から始めるか、俺の名前は羅漢狂気だ」

「俺ハチャチャゼロ様ダゼ。ケケケ」

「あ、えと、はい。ウチは近衛木乃香と申します」

緊張しないでいいと言ったのに未だ固い木乃香を見て狂気はため息を付き、定位置である頭の上に登ってきたチャチャゼロを見上げる。

「おいおい、お前が怖いから怯えてるだろ。取りあえずナイフはしまえ」

「俺ジャネー。俺ハ前ニ自己紹介シテルカラ怯エラレル理由ガネーゼ。オ前ガイケネーンドヨ」

そうなのか？と狂気は木乃香に目で問いかけるが、ビクツと身を振るわせた後、木乃香は無理やり笑顔を浮かべる。どうやら、チャチャゼロの言っている通りだった。

木乃香の隣にいた刹那は様子を見て、フォローするように言う。

「お嬢様。狂気さんは確かに目つきが悪くてガラが悪く見える紛れもない不良ですが、怒らせなければ無害です」

「フォローニナツテネーゼ」

「そうでしょうか？」

狂気の頭の上でやれやれと首を動かしそういうチャチャゼ口を見て、刹那は首を傾げる。

木乃香は未だ固い様子だし、狂気の口元が引き攣っているのがそれを助走させる。

「刹那、いつの間にか天然になったのは結構だが人を巻き込むのは止める。それと、近衛」

「は、はい」

「そう怯えないでくれ。……流石に傷つく」

「あ、あのウチ、別に怯えてへんよ。ただ羅漢さんがどつかで聞いたことのある容姿やから」

「そうなのか、ならいいが」

唇に指を当てて首を傾げる木乃香は考える。

頭の上にお人形さんを乗せて、真黒い学生服の目つきが悪い男子高校生。

絶対何処かで聞いたことがあるんけどなー。と。

それもその筈だろう。

彼女のクラスである3 - Aで時たま噂される幻の不良高校生こそ、目の前にいる彼なのだから。

しかし、噂を聞いたのが2年生のころの定期テスト前でありその後、色々記憶に残ることが多すぎたため木乃香はそれを忘れてしまっていた。

唇に指を当てて可愛いポーズを取る目の前の美少女を見て、狂

気は思う。

よく、あの親からこんな可愛い子が生まれたな、と。

彼女が美少女であるということは狂氣に取って嬉しいことだ。

父親と容姿がに通っていない彼女なら、父親と姿が重なって見えることもない。

それはサムライマスターを毛嫌いしている彼にとっては僥倖だ。

狂氣は何処か安心しながら再び喋り始める。

「少し姓名を嫌う理由があるから、俺のことはラカンじゃなく狂氣と呼んでくれ。その代わりに俺はお前を姓じゃなく名で呼ばせてもらう。いいか？」

「ええよ。狂氣さん」

「そうか、良かった。木乃香。これからよろしく頼む。何か聞いたこととかあるか？」

そういう狂氣に木乃香は、はい！と手を上げる。

狂氣もそれに乗るようであるで生徒を指す先生のように言葉を返す。刹那はその様子を微笑ましそうに見ていて、チャチャゼロは時折笑いながら狂氣をおちよくっていた。

和やかな空気のまま、木乃香は魔法のこと、狂氣のこと、自分の立場など聞きたいことを全部狂氣に問い、時間は過ぎて行った。

それこそ日を通さなければ語れないほどの魔法についての説明と英雄の娘である木乃香自身の立場に付いて語りつくした狂氣達はようやく別荘を出て、刹那と木乃香を見送っていた。

「ありがとうございます。狂気さん。これでお嬢様も魔法と自分の立場を知り、道を踏み外すことはなくなるでしょう」

そう言つて頭を下げる刹那の背にはいつの間にか寝てしまった木乃香が背負われている。

狂気は首を振ると微笑みながら言った。

「一応、約束したからな。言つのが辛いことだつて言つてやるさ。たとえ聞きたくないことだとしても」

「・・・本当にお嬢様に魔法を教えるのがあなたで良かった。感謝します」

狂気の言葉を聞いて本当に安心した声を出した刹那はそう言つて嬉しそくに寮へと歸つていった。

「相変わらず律義な奴だよな。刹那」

「才前モナ」

それを見送つた二人は部屋へと戻つていった。

おまけ

朝のコーヒープレイクを狂気とチャチャゼロが楽しんでいると、エ

ヴァと茶々丸が帰ってきた。

「なぜこんな朝早くにお前が居るのだ？」

「前に言っただろ。木乃香に色々説明するのに別荘を借りるって。そういうエヴァは何処に行ってたんだ？」

「ただの朝の散歩だ。……………そう言えば狂気、今度の土曜の朝は暇か？」

「ん？ああ、別に大丈夫だが、なにかあるのか？」

「フフ、ぼーやの試験が決まった。面白い物が見られるかも知れん。来い」

「……………もの凄く、行きたくないな」

お嬢様と剣士の扱いはどうしよう・・・（後書き）

題名にも書きましたが刹那と木乃香の扱いはマジでどうしよう！

へーーー ウーム

刹那だけなら狂気側に引き込めばいいんですけど、木乃香は明日菜の親友だし図書館組でのどかとも仲が良いし、優しい子だし。

立ち位置が絶妙すぎる（ - - - - - ）ウーム・・・

宇宙人からの手紙（前書き）

超はネギま！の中でも好きなキャラクターですね。

チャチャゼロ、夕映に並ぶくらい好きです。

あの偽悪的に頑張る所が良い！応援したくなるぐ（ー、ど）．．

（シ、ー、）ツ

宇宙人からの手紙

宇宙暦103年。

こう書き出せば、きっと皆は笑うのだろうナ。

けれど、私にはふざけている気もふざける気もないのだということ
をわかって欲しいヨ。

確かにそういう時代はアリ。そう呼ばれた時代に私は生きていたの
だカラ。

魔法世界の崩壊。それによってあぶれた人間達が生きた時代。

ああ、なんていう悲劇ダロウ。

人類が人類の生存をかけた人類との戦い。元は同族だというのに、
人と言う種はなんて愚かしいノカ。

共食いなんて犬でも切羽詰まらなきゃヤラナイネ。

けれど、人は簡単に喰らいアイ、殺しアイ、そして最後には簡単に
許しアイ、愛しアイ。

そんな茶番。自分で悲劇を模様しその悲劇に酔う。戦争こそが人に
歴史ダ。

私はそれを否定しないヨ。むしろ面白いとすら思う。

なぜなら、その自己陶醉にこそ人間が種として生き残る本能が残さ
れているのだと思うカラ。

ホモ

サピエンス

Homo sapiens 霊長類の長であり、既に現在この地球ど
ころか火星すら支配下に置いている人間世界最強の種族。

悪魔や吸血鬼、亞人や竜種など人種を超えた存在なら幾らでも居る
ヨ。

ケレド、彼らが世界の支配者かと問われれば、違う。

あくまで世界は人間の物ダ。だからこそその人間界。

なぜなら人間には繁殖力^{チカラ}がある。

人間はそのチカラを以て他のチカラを淘汰して世界を支配してきた、それはこれからもずっと続くのダロウ。

理不尽に不条理で不変不動な一大規律とシテ。

自分たちとは違うカラ、怖い、恐ろしい、理解できない、ああなら淘汰してシマエと。

現に私達は同じチカラでありながらも別のチカラだと烙印を押されて受け入れられなかった。

同士なら言わなくても分かるダロウ。あの時代を生きた同士ナラ。いや、スマナイネ。話が逸れた。

私が言いたいことはつまり、そのチカラこそ人間の力でありながらもその力こそ人間界を壊すチカラであるということが面白いということダヨ。

言いたいことがわかるカナ。わかるネ。同士は私と同じでとても頭がイイ。

人間はチカラを使い続ければ増え続ける。当然だネ。日を灯せば明るいと同じくらいの必然ダ。

増え続けて、増え続けて、増え続けル。

昔はそれでもよかったヨ。獣、疫病、天災、人を削る力は何処にでもあった。

ケレド、いまは違う。獣は駆逐され疫病は治療され天災は科学によつて抑え込まれタ。

殺せぬ獣は居るだろう。直せぬ病もあるだろう。人知の届かぬ天災も起きる。

ケレド、全ては総じて少なすぎる。

ソレデハ、人間の数に対抗できない。

人は増え続けてしまう。まるで蟻のように隊列を成して地球を覆う。そしていつの日か地球という砂糖は喰らい尽くされてしまうヨ。

ほかならぬ人間の手で人間界はオワル。

そうツマリハ、そうしない為ノ、その為にアル同族殺しという人間のサガだ。

人間しか人間を殺せるチカラを持たない。なら殺しアオウ。増えすぎぬよう、砂糖を全員で仲良く分け合うために先ずはトモダチの数を減らしてしまえ。

その考えは愚かしくアリ、狂おしくアリ、馬鹿らしくアリ、まったくもって正しいネ。

自分で手を下す分、ある意味とても崇高だともいえる。

正しく裁きダ。神が雷を落とさないなら、自分で手を斬り落とせ。そうして切り落とされた手が私達だと私は思うのだケレド、同士はどう思うかナ。

見捨てられたあの時代、宇宙から人間が来て起こる急激な人口の増加を人間は受け入れなかった。

ダカラ、地球人は我々を火星人と呼び人間とは呼ばなかった。

ダカラ、我々も火星人として地球を侵略するほかにはなかった。

おそらく同士はどちらも下手ない訳だというダロウ。

戦争はただの殺し合いであり正義は言葉遊びでしかなく英雄はただの殺戮狂だというダロウ。

けれど私はそうは思わない。

同士とは気が合い、良いパートナーになれると確信している私でもそこは違う意見ダ。

あの時代では確かに両者が正義を持っていた。

地球人達はタダ只管に故郷を守ろうとした。我々火星人は新たな新天地を求めた。

そのどちらに間違いがアル。

守ることは悪イノカ？求めることは悪ナノカ？
違う。

守護こそが力の正しい使い方であり、求道こそがチカラの正しいあり方ダ。

言いたいことがわかるカナ。わからナイだろう。同士は私と同じでとても頭がイイ。

頭がいいから考えてしまうハズだ。別の可能性を探してしまう。止めた方がいいヨ。後ろを振り返って歩いて来た道に後悔するなど愚かしい。

私が言いたいことを素直に聞くがヨロシ。

あの時代で同士は確かに英雄だよ。その両腕を血で染めて、同胞を守ってくれていたよ。ありがとう。

どうカナ？ぐつときたカナ？私は同士の心を掴んで離さない女になったカナ？

きつと今、この手紙を呼んで後ろにある未来というあの時代を思い出した同士が一番かけて欲しい言葉を選んでみたヨ。

怒ったカナ？怒らないでくれ。不純な動機もあるけど紛れもない本心ダ。

修学旅行ではお疲れ様だったネ。

リョウメンスクナを倒したエヴァンジェリンもさることながら、ご先祖様が倒す筈の彼を追い返した同士には惚れなおしたヨ。

その凜々しくも雄々しい姿を見て、昔話を思いだした。

私が生まれる以前、100年戦争が開戦した当初に生みだされた最古の半人機兵。

史上最高の頭脳を持ち狂った科学者を祖父に持った一人の少年の英雄伝をネ。

同士が私のご先祖様を嫌う理由も、英雄が嫌いな理由もそこにあると考えたガ、どうだろう？

同じ英雄だから君は紅い翼が嫌いな^{彼ら}のダロウ。

同じ道を歩む作られた英雄だから君はご先祖様を嫌うのダロウ。

図星カナ。図星だろうと私は確信するヨ。

後付けの理由があるにせよ、同士の憤怒の奥底にある物はソレだ。

自己嫌悪、同族嫌悪、同士は自分が嫌い嫌いでしょうがナイ。そうだろう。

同士はとても人間らしいサガが滲み出ている。

共食いしたくて仕方がない

怒ったカナ？怒らないでくれ。私は事実を言ったまでだヨ。

それに前記したように私は人間のそういう愚かしいサガが大好きだヨ。

手紙はもう破ってしまったカナ？

同士の性格を考えればそれが一番高い可能性だが、もしまだ破っていないのなら読み進めて欲しいヨ。

ここからが本題ダ。

長々と書いてしまったケレド、前ふりで言いたいことは一つだけネ。

同族嫌悪など止める。見ていて苛立たしいだけだ。

自分が嫌いだというのは構わない、けれど自分と他者を重ねて勝手に嫌うのは傲慢すぎる。

どうかナ。いや、聞くまでもないネ。こんな辛辣な言葉も同士の心は決れないだろう。

分かりきったことを言うなと笑うのダロウ？

私のことなど枝葉にもかけないと言うのダロウ？

まったく、同士は酷い男だヨ。傲慢ダ。我が儘ダ。理不尽で自分勝手な男ダ。

けれど、そういう所も私は嫌いではないネ。むしろ真っ直ぐで好意が持てる。

どうかな？天才美少女宇宙人カラの愛の告白は嬉しいカナ？

嬉しいに決まっているネ。いまこうして手紙を書いている私の脳裏に顔を赤くする同士の顔が思い浮かぶよ。

意外と初心で可愛いネ。

怒ったカナ？出来れば手紙は破かないで欲しいネ。

続けるヨ。

真っ直ぐな同士は好きダヨ。同士に害意など無いし仲良くしたいと思っている。

だから、伝えておくネ。

私は今年の学園祭の最終日にあの世界を救おうと思っている。

どうかナ。とても大きい理想だろう。普通は笑ってしまう所だが、同士ナラ笑わないと信じている。

むしろ信じたうえで疑問を持つハズだ。どうして自分に伝えるのだろうと。

同士は仲間に害がない限りは中立だということを私が知っていると、いうことを知っているかカラ。

なら、どうしてなどと考えなくても分かるダロウ。

私が行う計画が同士の仲間に少なからずの害を及ぼすカラだよ。

予告殺人と同じダ。まるで漫画のようだネ。

現実には名探偵がないことが悔しいネ。それとも同士が探偵役をやるのカナ。

止めておいた方がいいヨ。正しさを見つけ出すなんてきつと似合わ

ナイ。

予告しておこう。

私が行うことは同士を変えて、同士が幸せだと感じている価値観を壊すモノダ。

コレを聞いた同士がどういう行動を取るかは私には分からないネ。今すぐに私を消しに来るカナ？止めて欲しいヨ。とても怖いネ。

同士が可愛い女の子には優しいと願っているヨ。

ソレと考えておいて欲しいネ。幸いにもまだ時間はあるのだカラ。なにをなどとは言ってはくれるナヨ。

分かっているだろう。私の問いは二つに一つダ。

明日を取ルカ。今日に縊ルカ。そのどちらかだけダ。

私は迷うまでもなく明日を取るヨ。明日起きる悲劇を止めて見せる。その為の私、その為の力、その為の時代。

同士ナラ分かってくれるだろう。間違っても悲劇を忘れて今を生きようなんて言わないはずダ。

そんな理屈は奪われたこともない奴の戯言。今に満足している強い者の言葉。

正直に言っただけが走るネ。

起きたことは忘れナイ。忘れられナイ。忘れてはならナイ。

未だ流れていないけれど、あのとき流れた涙は確かに存在したのだカラ。

同士はどうカナ。あの時代を好き好んでいないのはワカル。

けれど、明日とも知れぬあの時代に同士にだって愛した者がいたんじゃない力。

長々と失礼したネ。これで筆を置かせてもらつヨ。

最後まで読んでくれてありがとう。

の愛しい同士より

P S . もしかったら私と一緒に世界を救うおう。

「オイ、狂気。終ワツタミタイダゼ」

早朝早くにポストへ投函されていた手紙を呼んでいた狂気が我に返ったのはチャチャゼロの声を聞いた時だった。
世界樹広場に目を向けて見れば確かに言う通り、全ては終わっている。

「結果はどうなったんだ？」

「小僧ガヤリヤガッタ」

「はあ、それはまた」

何処か呆れたような。いや、これは事を成し得たネギを少なからず感心しているのだろうか。

どうにも掴めないため息を付いて狂気は広場へと目をやる。

ボロボロになったネギとその姿を見て何処か呆然としている茶々丸。ギャラリィとして集まっているいつか見た3 - Aの生徒たちは喜びの声を上げているが、エヴァや一部の生徒たちは信じられない物を見たように啞然としている。

「ネギはどうやって勝った？アレが茶々丸に一発入れる確率なんて1%未満だろ。油断でもしてたのか？茶々丸は」

「イヤ、妹二非ハ無力ツタ。タダ、小僧ガ妙ナ拳法ヲ使ウノハ予想外ダツタミテダゼー。ケケケ、マダマダ甘メーナ、妹ヨ。功夫ツタツケカ、アノ蛸ミタイナ動キハ」

「そうか、中国拳法か。確かにそれはアレに会ってるかもしれないが――」

途中で言葉を切りながらネギに駆け寄る生徒の内の一人である少女に目を向ける。

弟子から聞く限りでは一般人最強の部類の少女。

師としては一流と言っているだろう。だが、しかし。眉を顰めながら狂気が言う。

「たかだかその程度で茶々丸に一撃入れられるものか？よくて勝率の桁が一桁上がる程度だろう。元が0コンマ1%なら、ようやく百回に一度勝てる程度の奇跡だ。そんなモノが都合よくこの場面で起こるものか」

狂気とて戦いと言う物を少なからずは熟知している。

だからこそわかる異常事態。

百回に一度勝てるかどうかの相手なぞ、勝てないのが当たり前。

努力とか諦めないとかの問題ではない。これは可能性の問題だ。

だってそうだろう。百回に一度しか勝てない敵は百回に九十九回勝利する可能性を秘めているのだ。

ネギの百度に一度勝てる可能性と、茶々丸が百度に一度勝てない可能性が重なる時などという冗談だ。計算だってやっぺられないだろう。

無論、計算だけがすべてではない。

それは分かっているからこそ、狂気は頭の上に乗る戦いの先達に問

う。

チャチャゼロはどこか懐かしそうに目を細めながら笑った。

「世ノ中ニ八居イルモンダゼ。万二一ツノ可能性^{キセキ}ヲ当たり前ニ起こ
ス大馬鹿ヤローガヨ―」

「・・・つまり、アレは英雄の器か」

チャチャゼロの言葉を聞いて、忌々しそうに呟きながら狂気は踵を返す。

確かにエヴァの言う通り面白い物は見れた。それがエヴァの予想していた物であつたかは別として。

まったくもって馬鹿らしい。けれど笑つてなどいられない。

勝てない筈の相手に勝てるなんて、どれだけ危険な存在だ。

傍迷惑も甚だしい。アレはああやって勝ち続けながら自分だけは生き残るのだろう。

周りにいる誰かの何かを犠牲にしながら。

唾を吐きたくなる苛立ちを覚えながらも思ひだすのは手紙に書いてあつた言葉。

「同族嫌悪か。確かにそうかもしれない。だが、だとしてもそれがどうした。お前が言うにはこれが俺の業なんだろう」

含み笑いを漏らしながらそう呟く自分の頭を撫でる感蝕で我に戻る。頭の上にいるチャチャゼロの手は冷たい筈なのに温かい。

ああ、これでいい。戦いのことなぞ考える必要も無し。

所詮自分は逃げ続けてきた臆病者だ。だからこそネギのことなんて知ったことではない。

勝手に生きて、勝手に戦い、お涙頂戴の最後で勝手に死んで行け。自分には今が有ればいい。このまま情的な日々を過ごしていく。

そして来年になればエヴァの呪いも解けるだろう。弟子である夕映だって一人前になる筈だ。

そうなればもう自分を縛る物は此処にない。

約束通りエヴァ達と旅行に行き、そのまま何処へなりとも消えてしまおう。

それこそが自分が望んだことなのだから。

逃げて逃げて逃げ続けて、ようやく掴んだ安息の筈なのだから。

「なあ、チャチャゼロ。お前はネギを恨んでいるか？」

何気なく問われたこの問いが後々にまで影響を及ぼす物であると悟ったからこそ、チャチャゼロは苦笑しながら首を振る。

「イイヤ。恨ンジヤネー。身体ヲブツ壊サレルノナンザ、昔ハヨク有ツタコトダシヨー。ソレニ、アル意味デハ小僧ノ才陰デ才前ト繋ガル事が出来タンダシナ」

「そうか。なら俺も忘れることにする。恨まないし怒らない。茶々丸のあの姿勢がある意味アレと対するには正しい姿勢だ。巻き込まれない様に無関心でいればいい。・・・耐えてやるさ、一年くらい」

忌々しく苛立たしい限りだが狂気は決断する。

ネギには関わらない。そう言い切れれば楽だろうが恐らくそうもいかないだろうから無関心でいよう。

なにが起きようと後一年は大人しく此処に居なければならぬなら、良いさ耐えてやる。

エヴァとて十五年も耐えたのだ。ならば自分も一年程度耐えてやるんじゃないか。

フエイト、ネギ、超。

問題は山積みだ。だが誰ひとりとして俺に日常を壊すことだけは許さない。

救える物は救っても良い、力を貸してと頼むなら手を差し伸べよう。だが、そこまで。それ以上は許さない。

俺はあくまでも誰と争いたい訳ではないのだから。

「と言つてもな」

修学旅行のことを思い出して。今の決意もどこか無為に終わること未来が見える気がする。

自分の気性は自分が一番よく分かっている。だがこればかりは仕方がないだろう。

苦笑しながら空を見る。明るみ始め太陽が顔を出した気持ちのいい朝だ。

「帰ってねるか。チャチャゼロ」

「一緒二力？変態ヤローガ」

「否定はしない。自分でもわかってて手を出すってんなら、変態以外の何物でもないしな」

果たして手を出す対象がチャチャゼロなのか、それとも拳と言つ意味なのか。

今はまだ狂気自身にもわからない。

宇宙人からの手紙（後書き）

後二三話やった後に学園祭編に行ければ良いなーと思ってます。
え？ヘルマン襲来編？Σ（」ε「；——・・・なんのことやらわかりませぬ。

師事の差（前書き）

（ ） なにも言うことは無い

師事の差

「私は、こんなところで死ねない」

傷だらけの身体を引き摺って目の前に居る敵を睨む。
後ろにはお嬢様。ずっとお守りしたかった大切な人。

「私はまた守れないというのか」

思いだすのは幼き日の記憶。呪いのように私を縛る忌まわしい過去。
強くなったのだ。あの頃とは比べ物にならないほどに。
なのにまた、守れないのか。

そんなのは嫌だ。我慢できない。

「私は強くなったのだ！お嬢様を、このちゃんを守るために！もう
二度と守れない自分など許せないとそう誓って生きてきたんだっ！
文句がありますかっ！」

振るう夕風は未だ敵には届かない。
ほんの数センチの距離が果てしなく遠い。

「・・・だれか、誰でもいい。私に力を貸してくれ」

今より早く。ただひたすらに速く。疾く。私にまだ力があるという
のなら、覚醒してくれ。

その瞬間は今をにおいては他にない。私にお嬢様を救う力を。

——このちゃんが傷つかずに済む未来を。

「くだらん。強くなつた？その程度で奢るな。吹けば消し飛ぶ存在が思いあがるなよ」

幅のない音程の声。秘められる感情は憤怒と憐れみ。

——お前は弱い。

放たれる拳はただそれだけを知らしめ、重圧が身体を軋ませる。

「誰でもいいから力を貸してくれ？笑わせるな。お前が守りたい誰かを守るのはお前しかない。守りたいなら強くあれ。いつ何時も我を通すのは勝者だけだっ！」

叫びと共に怒りは加速し拳は更なる重さを生む。

拳圧だけで地面が砕け、避けた筈なのに風圧で飛ばされかける。

他を圧する重さ、全てを砕く怒り。何だこれは、本当に同じ人間か。後退し駆ける足をとどめるものはただ一重に自分の後ろにいる存在泣いている。もうやめてくれと敵に頭を下げている。

ああ、私はまた泣かせてしまっていると言うのか。

許さない。許さない。許さない。

このちゃんを守れない私など許せない。

「ざんがんけえええん！」

身体が軽い。あれほど体を蝕んでいた重圧をもう感じない。

敵の首を目掛けて刃を落とす。全身全霊、全力で、全ての思いと覚悟を秘めた一撃を。

私にとって最強と自負するに恥じない攻撃。これをしくじればもう二度目はないだろうと確信する。

なのに——

「軽い。軽いな。お前の剣には重みがない。守るだと。ふざけるな。

自身も守れないような存在が、誰かを守るなどと。なんと思いが
るなど言わせる気だっ！」

「なっ」

最強と自負した一撃は拳の皮一枚も断ち切ることは出来なかった。
私の刃は狂気さんになんの痛手も与えられない。
強くなつたはずなのだ。昔とは違い、私はお嬢様を守るための力を
手にしたはずなのに。

「私はまだ守れないというのか」

ポツリと漏らした悲痛に答えるのは慚然とした声。
痛々しいまでの真実を無遠慮に押し付けてくる。

「それ以前の問題だ。誰かを守る前にまずは自分を守ってみせろ」

剛腕が腹を打つ。何の受け身も取れないままそれを受けた私は上空
10mまで飛ばされて、無残に地面に落ちた。
気を失う前に見た物は泣きながら私に駆け寄るお嬢様の姿だった。

「な、なによあれ。なんなのよあれ！」

修行の一部始終を見ていた明日菜は瞳目する。
真剣を本気で振り回す刹那もさることながら、それ以上に狂気のあ
り方に困惑する。

——あれは本気の殺意。
そんなものを感じたことはない筈なのに確信する。

アレに比べればネギがエヴァと共に修行はまるでお遊戯。

「・・・此処には入るなと言った筈だがな。 神楽坂明日菜」

振り返ればそこに居たのはこの別荘の主。

勝つてに入り込んだ自分達を顔を顰めながらも許してくれた存在はいま本当に怒っているようだった。

自分がまずい物を見てしまったということは理解できる。

けれど明日菜はそれよりも狂気を断罪するように叫んだ。

「なんなのよアレは！こんなところでなにしてんの。 どうして止めないのよ。 刹那さんが死んじゃうじゃない！」

駆け寄ろうとする明日菜の手首をエヴァは掴む。

込められた力に明日菜は声を漏らした。

「止せ。 あれは当人達の意味で行われている修行だ。 他人が手を出していいことじゃない。 刹那と木乃香の覚悟を踏み躪る気か？」

「でも！」

明日菜がもう一度目を向ければ。

映る物は傷ついた刹那を必死に治癒しようとする木乃香の姿。

「プラクテ ビギ・ナル トゥイ・グラードイ・グレイディア 汝が為にユピテル王の シット 恩寵あれ “ 治癒”」

「もっと魔力を込めろ。 低級治癒魔法でこのお怪我を直そうと思ったら今の百倍は魔力を込めないと無理だ」

狂気の言葉に返事なく頷く木乃香の頬には涙の流れた跡があり、このやり取りが初めてでないことを表していた。

明日菜は止めに入ろうとするがエヴァの力は強まるばかり。

手首が碎けるんじゃないかと思うほどの痛みに明日菜は苦悶した後、涙目でエヴァを見た。

「痛いよ。エヴァちゃん」

「自業自得だ。それとちゃん付けは止めろと言った」

「刹那さんと木乃香はきつともっと痛いよ！どうして止めちゃいけないの」

「なんとも言わせるな。アレは二人が選んだ事だ。・・・狂気とて、本当はあんなことはしたくない筈だ」

苦々しく呟くエヴァが言う通り、きつと狂気が意地悪であんな真似をしている訳じゃないと言うことくらい明日菜だってわかっている。明日菜に取ってよく知らない人ではあるが狂気はなんだか助けてもらったことがあるからこそ、その人柄が決して悪い訳じゃないと分かっている。

けれど、あの惨状を見れば止めたいと思うのは当然じゃないか。

「そら、早くボーヤとお仲間達の所に戻れ」

「・・・エヴァちゃんはどっすの？」

「狂気がもう終わりにするみたいだからな、木乃香に力を貸して刹那を全快させてからも戻るさ」

「・・・お願いね」

「お前に頼まれることじゃないな」

「うん。わかってる。けど、お願い」

「ふんっ。さっさと行け」

トボトボと歩きだした明日菜を見送ってから、エヴァは狂気達の元へと向かった。

「まったく、師匠はなにを考えているんです！」

狂気は刹那と木乃香の修行と言う名の苛めを終えた後、別荘の中でも比較的過ごしやすい石畳の間で正座させられていた。

弟子に叱られる師匠と言う情けなさすぎる構図には苛立つが、まあこれはこれで新鮮でいいかなどと考えながら狂気は夕映を見上げた。

「なんです。その子が親に向けるとつと終わんねーかなー。無駄な説教マジ乙っ！みたいな目線は！」

「感じた通りでいいんじゃないかなー」

ビシっ！と指を指し図星を射抜く夕映に感心しながら正座に飽きた狂気は立ち上がる。

元より反省する気は皆無なのだ。確かにあの修行は過激ではあったが、決してやりすぎではないのだと狂気は確信する。

だからこそ正座をしていたのはただの気まぐれであり、何時の世も女は強いという常識は通用しないようだった。

「少しは反省してください。私の時もそうでしたが師匠にはやりすぎる帰来があるのですから」

「なら、ああいうぬるま湯に浸かった教え方が善かったか？悪いな。俺にはあそこまで能天気こうち側に魔法界へ引き込むのは無理そうだ」

狂気が目配せをした方を見れば生徒たちに魔法を教えているネギの姿がある。

流れる空気は和気藹藹。その風景の中に親友の姿を見つけた綾瀬は眉を顰める。

「魔法の秘匿云々は何処に行ってしまったのでしょうか」

「さあ、野菜ネギが植えられるついでに出荷されたんじゃないのか？」

「上手くない冗談です」

「だよな」

魔法は少なくとも笑いながら習うようなものではないと狂気は考えている。

だってそうだろう。初級魔法の魔法の射手ですら使い方によっては指先一つで人を殺せるのだ。

人間界で言うなら銃の様な物。銃の使い方を笑いながら習う奴が何処に居る。

いるとしたらそれは精神異常者か精神未熟児のどちらかだろう。

明かに後者であるネギと自分の師である狂気を見比べながら夕映は

思う。

違いすぎるです。あり方も考え方も教え方すらも正反対を歩いています。と。

優しく楽しいネギの教え方と厳しくも頼もしい狂気の教え方、どちらが生徒のためになるかと聞かれたから答えるまでもないことだった。

だからこそ、夕映は言う。

「師匠。のどかを救っては貰えないですか。ネギ先生の傍は危険すぎです」

弟子の頼みを聞けない自分に眉を顰めながら狂気は言う。

「殴って済む問題なら俺を頼ってもらっても構わない。けど、宮崎はネギに惚れているんだろ？俺が色恋に聡い様に見えるか？」

「いえ見えません」

「そういうことだ。何かが起きてもしない限り俺に出来ることはない。何かが起きた時は修学旅行の時みたいに連絡しろ。助けてやる」

「はいです。ありがとうございます。師匠」

さまざまな物を溜めこみながらも笑う弟子を狂気が誇りに思っているとそこにクーフエが現れた。

「およ？綾瀬は一人でなにしているアルか？」

「いえ、何でもないです。少し考え事を・・・」

会話を始めた二人を余所に狂気は腰を上げその場を離れて行く。
視界の端には小さく一礼をする弟子の姿、微笑みを返してから立ち去って行った。

「認識阻害魔法の応用とは恐れ入る。お前は殴り合いだけの馬鹿な
らもう少し可愛げもあったのだから」

「なにを言っているのですか、マスター。狂気様はいまも十分可愛
らしいではないですか。今以上に可愛らしくなれたら、私は悶死
してしまいます」

「覗キシ放題ナ魔法ダナ。ケケケ。ヨカッタジャーナ力」

三者三様の言葉を受けて狂気は深くため息を付く。
何処か棘のある言い方はたぶんそういうことなのだろう。

「問題ごとか？」

「ああ、お前にとってのな」

忌々しく口元を歪めながらエヴァは舌打ちをする。
予想通りの返事に苛立ちながらも言葉を待っていれば何時の間にか
頭の上へとチャチャゼロがよじ登り始めていた。

「爺直々のお呼び出しだ。お前一人で来いとな」

「……人がせつかく不干渉を決意してやったのに、どういっ了見

だ
」

「知らんよ
」

付いて行つてやるうかと問う視線に首を振ってから狂気は空に向かつてつぶやく。

「うぜえな。いっそのこと全部壊してしまおうか
」

師事の差（後書き）

（-----）

怒りの理由（前書き）

いまさらだが前書きって何を描けばいいのかいまいちわからない。
（ - - ）
ンー

怒りの理由

羅漢狂気には嫌いな物がある。

当たり前のことだろう。誰にだって嫌いな物の一つや二つある物だ。何もかもを好いて愛せる女神なんて少なくとも狂気が生きるこの世界には存在しない。

誰かが嫌い、自分が嫌い、争いが嫌い、平和が嫌い、近しいところで言えばゴキブリや油虫、肥溜めなんかでもいい。

自分が嫌いな物を思い浮かべたうえで考えて欲しい。

そのモノの巣窟へ足を踏み入れることに幸福を覚えるだろうか。

答えは考えるまでもなく、否である。

だからこそ狂気もまた、ただひたすらに不快と感じていた。

エヴァの家から出てそのまま向かった女子中等部の校舎、校門の前で夜空を見上げて息を吐く。

考えるまでもなく不快を表すそれを見た瀬流彦はただ苦笑いを浮かべるしかなかった。

「あはは、そんなに怒らないでよ。狂気君。まさか君を学園長だつて取って食おうと言う訳じゃないだろうしさ。案外大した用じゃないよ」

「本気でそう思います？瀬流彦さん」

「……いや、ごめん。たぶんそう簡単にはいかないだろうね」

「ええ、わかってますよ。貴方が迎えに来た時点で。知己を迎えにやって御機嫌を取ろうなんて政治家じみた真似をしますね。あの学

園ちよ、糞痴呆爺は」

「別に言い直す必要はなかったんじゃないかな？」

落ち込んでいる自傷染みた笑顔を振り払ってから勤めて明るく振る舞おうとする狂気。

その意を汲んだ瀬流彦はただでさえ温和に下がっている目尻を余計に下げて場を和ませようとしていた。

瀬流彦は麻帆良学園に置いて狂気が嫌っておらず、そして狂気を嫌っていない数少ない魔法先生である。

なぜ瀬流彦がガンドルフィーニやそれに追随する魔法先生のように狂気を嫌っていかないかと言えば、理由は一重に若いからでありそれ以外の理由はないもない。

たとえ魔法界全体が讃える英雄を狂気が嫌っていても、「それは個人の自由じゃないかな？」と言えるだけの若さと言う柔軟性を持っている。

それだけである。そう、狂気との関係を保つにはそれだけでいいのだ。

英雄嫌いとして確かに狂気は有名である。

しかし、狂気が嫌うのはあくまで英雄本人。その友や家族を毛嫌にする訳ではない。

だからこそ普通にしていれば狂気は誰か一個人を一方的に嫌う人間ではないと言うのが彼を見た感想である。

たしかに近づきたいオーラはあるが、何もしなければ何もしてこない。

むしろ黙って見えないところで力を貸してくれるような善人だ。

だからこそ夕映や刹那は彼と慕い。エヴァやチャチャゼ口、茶々丸や名前も知らない女生徒は彼に好意を持った。

何もしなければいい、普通に接しながら暮らせばいい、逆麟にさえ触れなければ狂気は英雄以外の誰かを嫌うことなどあり得ない。しかし、此処にはその逆麟に触れようとする者が多すぎる。

「ねえ、狂気君。君はまだガンドルフィー二先生のことが嫌いかい？」

学園長室に向かう廊下を歩きながら瀬流彦は狂気に問いかける。狂気はその隣を歩きながら頷いた。たとえ隣に居る瀬流彦の目尻が悲しそうに下がったとしてもそれ以外の問いを狂気は持たない。

「ええ、嫌いですよ。アイツが見ているのは羅漢狂気じゃないクルキ・ラカンだ。英雄の息子という型に嵌めこんで、狭く苦しーたらありやしねえ。なに様のつもりだ」

「君は高音君やネギ君も嫌いだろう？」

「ああ、紅い翼が戦争の英雄だつてことを理解してもいねえ。あれの栄光は血脂と血涙で彩られた輝きだ。それを崇めるなどは言わない。ある意味荘厳だろうからな。けど、美しい？格好がいい？ふざけるな——」

もはや口調がボロを出し始めたことに気づきながらも狂気は断言する。

——これが聞きたかつたんでしょう？
瀬流彦の意をあくまでも汲みながら。

「——あいつ等は敗者の涙を見ちゃいない」

悲しそうに見えるその瞳。しかしその奥にある物は紛れもなく過激な感情だと瀬流彦は読み取る。

怒気憤怒怒声怒轟——怒り。

そこまでは凡人でもわかること。だからこそ瀬流彦はその奥を読む。読み取ったその感情を吟味し悟ったからこそ瀬流彦は何処か冷たく言い放つ。

「敗者の涙か。最もだけれど、君が言う又何故か負け犬の遠吠えに聞こえるね。まるでどこかで（・・・・・・・・）自分が敗者であったかのような（・・・・・・・・）」

その言葉を聞いて一瞬だけたじろいた後、狂気は口元に笑みを浮かべた。

「ああ、まったくなんて正しい。だからこそ瀬流彦さん。俺は貴方を嫌う以前に尊敬できる。誇ってくださいよ。俺が自分から敬語を使いたいなんて思える先生は貴方だけだ」

「はは。あまり僕のことを褒めないでくれよ。調子に乗ってしまうだろう？僕なんてまだまだ半人前もいいところさ。君の力にもなれやしない。こうして言葉を伝えることしかできないんだ」

辿り着いた学園長室の前に瀬流彦は一度立ち止まると狂気へと向き直った。

部屋の中から感じる気配は明らかに複数人の物。きつとそこには狂気の味方は一人もいないのだろう。

目の前に立つ瀬流彦とて同じこと。彼はあくまでも中立だ。

麻帆良に置いて狂気の味方は数少ない。そして魔法先生で言えば皆無。

敵が中立しかない。この状況が作り出されたのはある意味必然だったのかもしれない。

けれど確かに狂気にも責任の一端はある。

だからこそ瀬流彦は狂気の眼を見据えながらいう。

「はつきりと言っておくよ。朱に交われれば赤くなる。ある意味それが賢者の選択だ。英雄嫌いは別にいい。けれどそれを声高に叫ぶのは愚者の選択。狂気君の言葉がどれだけ正しかろうと、この麻帆良では不協和音でしかない。君はこの学園を壊す気かい？」

瀬流彦さんの言うことは何時も正しい。冗談抜きで狂気はそう思う。確かに自分は麻帆良に置いて不協和音。闇の福音たるエヴァですら紅い翼を嫌っていないのだからその異常性がわかるというものだろう。

そして修学旅行で見せてしまった自分の力。

ああ、わかっていた。わからない風を装っていたけれど此处に呼び出された理由に心当たりはある。

修学旅行で現れたフェイトは紛れもなく魔法界でも最強クラスの魔法使いだろう。

悠久の風（AAA）である高畑や麻帆良最強の学園長ですら相手を出来るか危うい。

そんな相手と対峙できるほど強力な存在。そしてその者が魔法界の常識として崇めるべき英雄達を嫌っているとすればそれは不協和音どころじゃない。ただの不穏分子だ。

だからこそ瀬流彦さんは言ってくれているのだろう。

今からでも遅くない形だけでも従順しろと。

けれど、それは無理ですよ。超からの手紙で再確認したのですが、俺は本当に英雄（俺）が嫌いなんですから。

「忠告だけは受け取って置きます。けれど俺は俺にだけは嘘は付けません。自分の力は（・・・・・・・・）自分だけの物、だから（・・・・・・・・）自分勝手に（・・・・・・・・）生きてみる（・・・・・・・・）。それが親父からの教えですから」

微笑みながらそういう狂気をみて、瀬流彦は仕方なさげにしかしどこか嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「そうかい。素敵なお父さんだね」

「いえ、まさか。だらしのない糞親父ですよ」

学園長室に入った狂気は椅子に腰かけていた。

瀬流彦は既に傍にはいない。壁際で微動だにせず直立していて、傍に眼鏡をかけた男性や小太りの教師がいる。

名前は知らないが恐らく彼らが狂気にとって敵ではない相手、瀬流彦と同じ中立者なのだろう。

敵ではない誰かが三人もいてくれるのなら少しは安心出来ると息を漏らしながら目の前に陣取る学園長を睨みつける。

傍に居る高畑には気を付けるが、なにやら自分を睨んでいるそれ以外の視線など気にするまでもない。

敬語など使う必要も無し、狂気は口を開いた。

「で、なんのようだよ。学園長」

「ふむ、もう儂に敬語は使ってくれんのかの？ちと寂しいのお」

「尊敬して欲しいならそれなりの態度を見せるんだな。少なくとも臆病者に払う敬意なんてねえよ。俺をエヴァから引き離して話したい？そんなに怖いのか。この俺が」

挑発に満ち満ちた言葉にも学園長は微笑ましい笑みを返すだけ。

なにを考えているかがわからない。学園最強の魔法使いだとかそういう話ではなく、この男はこういう掛け合いが恐ろしい。

だからこそ、狂気は掛け合いから逃げ出した。建前など知らぬ存ぜぬ顧みぬ。

本音だけを漏らし立ち合おう。腹立たしいことだが経験でこの狸に勝てはしないのだから。

「フオフオフオ 狂気君が怖いかじゃと？・・・ああ、無論怖いぞ。タカミチ君が言うには全盛期の英雄達にも届くかもしれない力を持った君が敵になるかも知れんのじゃ。これが怖くなかったら正しく君が言う通り俺は痴呆じゃろう」

あくまでも笑みを絶やさない学園長に苛立ちながらも狂気は安心する。

敵になるかもしれないということはまだ敵ではないということだろう。

ならば敵になどならなければいい。敵対することなど元より望んだことではないのだから。

ただひたすらに狂気が求める物はそういうことから隔絶したなにかなのだから。

「学園長。これだけは約束できる。俺に敵対する気はない。今まで通り放っておいてくれればいい。不干渉を貫こう。勘ぐるというなら弟子の夕映も警備から手を引かせる。あいつに経験を積みせられ

ないのは残念だがな」

「そうか。うむ、よかった。狂気君に敵意がないと僕は信じよう。元々僕は君が腹芸の上手い人間じゃとは思っておらん。しかしの、言葉だけでは信じられぬという者もおるのじゃよ」

学園長の言う物とは先ほどから自分に刺さるようなうざったい視線を向けてくる奴らだろう。

部下を御せないのかそれとも御す気がないのか、どちらにせよ尊敬は未だ出来ない学園長。

しかし学園緒もまた自分と敵対したいなどと思っていないということとは信じられる。

自分に害を成せば最悪いや必然、悪の福音とその従者達も敵に回すということなのだから。

意外と彼女達に自分は守られているのだなとどこか温くなる。

「そうか、ならどうすれば証明できる？俺に敵意がないのだと」

「決まっているだろう！君も立派な魔法使い（マギステルマギ）を目指すのだよ。ネギ君と同じように。そうすれば私達も君に敵対するどころか協力できる」

そう答えたのは学園長ではなく狂気を睨んでいた一人であるガンドルフィーニだった。

その顔を、その態度を、その眼を見て思わず舌打ちを零す。

なんだアレは。学園長との対話に割り入って来ながらまるで正しく自分は正しいのだといたいのか？

最悪だ。正しく自分が嫌いな人種に他ならない。

押し付けた善意。それが正しいのだということを疑わない思想も然ることながら何よりアレは考えることを放棄している。

ああ、正義は尊い英雄は素晴らしい。彼らのやることなすこと全ては正しく正義なのだ。

典型的な狂信者。学園長への評価を見直そう。狸は狸なりに頑張っているのだろう。

あんな奴大半なら部下を御せないのも仕方がない。

ガンドルフィーニに追隨して何やらほざいている声を止めようとする学園長より早く狂気は言葉を漏らす。

馬鹿なことだとは分かっている。けれど止められない。誰に似たのかすぐ熱くなつて周りが見えないのではなく見なくなる自分。しかしこれこそが羅漢狂気という一個人なのだから。

「立派な魔法使いを目指す？ネギのように？いい大人が笑わせんなよ。前も言わなかったか？気づけよ、いい加減。前はまだ救いがあつたのに、短い間にそれすら消し飛んだのか？救えねえな。憐れぎて怒る気すら起きない」

「・・・君は、何が言いたいんだい？」

込められた意思を汲み取つたのだろう。声を震わせながら自分を睨む相手を前に本心からの憐れみを送る。

本当にアンタはどうしてしまったんだ？

最初会つた頃はただの夢見がちな少年みたいな中年だったのに、何時からそこまで盲目した。

ネギが来てからか？自分が英雄に慣れないから英雄のこと育てるつていう栄光に眼を焼かれたのか？

だとするなら――

「ほんと、憐れだよ。お前ら」

アレにさえ出会わなければ夢から覚めたのに。

本心からの憐れみという優しさを目の前の彼らは受け取れない。それは彼らだけの問題ではなく、狂気にも非があるだろう。言い方があまりにも挑発的すぎた。

「き、君は何時もいつも何処までも私達を馬鹿かれらにしているようだねっ！いや、私だけならまだいい。それは紅い翼かれらに対する侮辱でもあると気づいているのかい！君は英雄を貶める気がっ！」

「そうだ。子供が知った風な口を聞くんじゃない！」

「我らは立派な魔法使い（マギステルマギ）を目指す正当な魔法使いなのだぞ！」

「英雄の息子でありながら闇の福音などとするむ下賤な身の癖に！」

「ああ、比べればわかる。ネギ君がどれほど眩しいか！欠陥品だな、お前は！」

「英雄達が嫌いならとつとと出て行け！此処にお前の居場所なんてないんだよ！」

紡がれる言葉は罵詈雑言、口火を切ったガンドルフィーニですら此処まで言う気はなかっただろう。

しかし、止まらない。止まらない。止めれば認めるということになるのだから。

英雄に成れる力を持ちながらそれを放棄したあの傲慢で我が儘な青年を。

それだけは——彼らの中で認めらない。

英雄に届かぬまでも英雄を育てることは出来るかもしれないガンドルフィーニ以下、英雄かれらに成ることを諦める所かそんな夢も持てな

つた凡人。^{かれら}

嫉妬、妬み、それが狂気への罵倒となって紡がれる。

学園長が無理やり口を黙らせる手段を行使しようとした刹那、言っ
てはならない言葉が紡がれた。

「俺達を怒らせる気か！」

「怒る？怒るだと。なにを持って俺に怒りを覚える」

いい加減我慢も飽き飽きだ。自分どころかエヴァまでも貶めること
を吐くアレに我慢を覚える必要があるのか？

ああ、わかつている。此処で手を出せば全ては破綻する。敵意がな
いという言葉が嘘に成ってしまう。

振りかぶってしまいそうな拳を瀬流彦さんや数人の教師たちが止め
ようとしてくれている。

あの高畑だって学園長が治めると声高に叫んでくれた。

だが――

「お前の全てにだっ！子供は子供らしく夢を見ればいい物を。届く
かもしれない栄光に手を伸ばさないなんてなんて罪深い！俺が許さ
ずとも正義がお前を許すものか！」

なんてうざいんだこいつ等は。

自分が怒る理由すら他者任せか。こんな奴らに、どうして俺が怒ら
れなきゃならない。

怒るということはもつと――

『無辜、無常、無用、無知蒙昧。ああ、極まればいつそ清々しい。
良いだろう、認めてやろう。ボーヤのその理論。人間だから、人間

じゃない者を殺すことに罪はないと。そういうのだな！いいだろう。なら！』

『ふざけるなです！勝手に付いて来た？そうさせたのは誰ですか！
なにも言わずにいなくなつたのは誰ですか！一言、言ってから出て
行けば私もフォロー出来たのに、それすらしなかつたのは誰ですか
！』

『・・・測りかねるね。けれどもなるほど、理解は出来ないけれど知
覚はしたよ。つまり君に勝つには速いだけではだめ。ボクも本気を
出さなきゃいけない訳か。・・・顔を殴られたのは、初めてだよ』

『守ることは悪イノ力？求めることは悪ナノ力？違う。守護こそが
力の正しい使い方であり、求道こそがチカラの正しいあり方だ』

『私は強くなつたのだ！お嬢様を、このちゃんを守るために！もう
二度と守れない自分など許せないとそう誓って生きてきたんだっ！
文句がありますかっ！』

『ああ、わかつたぜ、糞ガキ。ぶん殴ってお前のことを止めてやる。
あと、一つ言わせといてくれ。なんで真実を黙っていたっていった
な？恐かつたんだよ！狂気に嫌われるのが！嫌だつたんだよ！息子
を失うのが！真実を言つて嫌われるなら、騙し続けてやろうつて思
つたんだよ！文句あるかああ！』

——純粹でどうしようもなく正しい自分だけの為のモノだろう。

「なんて軽い。それがお前達の怒りだと？はっ、なら俺とお前たち
とじゃ怒りの純度が違う。その怒りで？借り物の熱で？——」

俺を抑えてくれていた瀬流彦さんを振り払う。

例えどれほどの慶眼もついても力じゃ俺には敵わない。

制止の言葉を聞き流して身体に怒気を纏わせる。

ああ、高畑。あんたの言いたいことはわかる。俺のことを疎ましく思っけても止めてくれるあんたは正しく善人だよ。見直した。同じ狂信者だが少なくとも目の前に居る屑共とは種類が違う

前に出たガンドルフィー二を殴り飛ばす。

安心しろ。見た目の割に痛くねえだろ。手加減はしてやった。あんなだけは屑共の中でただ一人自分の意思で怒っただろう？英雄（輝き）が穢されるのが嫌だった。相容れないけどそういう考えは嫌いじゃねえよ。

関係無い相手は遠ざけて、忠告もちゃんと聞いたよ。

そして手加減をするべき相手には手加減をした。
なら、もういいだろう。

久しぶりに根幹に根付く拳の声に耳を傾けても。

「——この俺を！俺の弟子を！俺の友を！俺の世界（輝き）を燃やそうだなんておもいあがってんじゃねえぞオオ！」

溢れ出る怒気と共にます圧力にその空間は四散する。

高畑は額から滲む脂汗を拭うことも忘れソレを見た。

正しくあれは全盛期の英雄に追隨している。今のネギ君なんて目ではない。

アレこそが英雄の力。万に一つの奇跡を起こし続ける、暴力的な力。ああ、だめだ。止めなければ。英雄達に修行を付けてもらってこの僕が彼を止めなければ。

本当に彼の眼に映る誰かが死にかねない。

「止めるんだ！狂気君！今ならまだ間にあう！今回の件は君に罵声を浴びせた彼らにこそ責任がある。それは僕たちの誰もが認めることだ！だから、止める！」

「うるさい。自分の力は（・・・・）自分だけの物、だから（・・・・）自分勝手に（・・・・）生きる（・・・・）」

「つつ、この糞ガキ！正直僕は君のことが嫌いだからどうでもいいが、僕の同級生だったエヴァが悲しむんだよ！エヴァは嬉しそうに言っていたよ！——君はエヴァを卒業させてやるんだろう！」

「——」

一瞬の動揺で無防備になった瞬間を見逃さず、高畑は渾身の無音拳を狂気に叩き込んだ。

音もなく狂気が倒れたことで空間すら圧していた怒気が消えうせる。狂気の視線に晒されていた者は一様に気を失っているが外傷はない。それを見て安心したのだろう、気力を使い果たした高畑もまた倒れた。

「まったく、空間が歪むほどの怒気を感じたから来てみれば。ジジイ、お前こいつに何をしたんだ？」

「学園長、正直にお答えください。返答次第では消します」

「テメー、ヨクモ俺ノ男ボコツテクレタジャーカ。コロスゾ」

「ま、待つのだ。儂にそんな気は・・・いや、言い訳は止そう」

言い訳をしようとした口を積むんで学園長は神妙に狂気を見る。

彼は何も悪くない。約束通りに一人で此処に赴き、整然とした態度をしておった。

それに比べ儂はなんだ？周りを部下で固めその部下すら御せぬ始末。なんて無様。

この上に言い訳など、出来ぬ。

言い訳ができぬ以上、彼や目の前の彼女にこれ以上の反感は持たせたくはない。

「全ては儂の不手際じゃ。狂気君には何の罪もない。君に無礼を働いた者達は全て本国へ送り返す。そしてエヴァ、君を信じるから安心して麻帆良で学業に励んでくれと、目が覚めたら伝えておいてくれるかの？」

「ふん、まあいいだろう。で、何故これまで倒れているんだ？狂気とやり合ったのか？この中年」

腕を組んで学園長を見ながらエヴァは高畑の髭面をぐりぐりと踏み付ける。

それを見た瀬流彦は何かアブナイ光景だなと思い止めようと前に出る。

あくまでも話し合いで、無理なら飽くまで踏んで居てもらうしかないだろう。

自分で闇の福音に敵うなんて思えないのだから。

「あ、あのー、高畑先生も狂気君を止めようと頑張ってくれたんで足をどかしてもらえませんか？」

「ん？誰だお前は？」

「瀬流彦先生です。マスター。知っているでしょう、狂気さんが唯一尊敬しているという魔法先生です」

「へえ、なるほど貴様がか。確かに・・良い眼だ。面白い」

「幸薄ソウナ顔ダナ」

ニタアと笑う（瀬流彦視点）エヴァを見て笑顔の眼に涙が浮かぶ。狂気君、僕は君の所為で彼女に眼を付けられてしまったよ。たぶん君に出会ってから初めて恨むよ。君のことを。

「まあ、良いだろう。もう私達は帰る。こいつの後片付けはしておけよ」

「あ、うん。狂気君にお大事につて伝えておいてね」

「わかった。じゃあな」

あの小さい体で狂気を抱えエヴァが出て行ったことに安どしていると学園長から声がかかる。

なにことかなと返事をすれば聞かれたのはごく簡単な問いだった。

「どうして狂気君に優しくするのか？別に狂気君だけに優しくしているつもりはありませんよ？ただ、生徒を、私達から見ればまだ子供の彼らを導き指導し優しさを与えるのが先生の仕事でしょう」

「確かにのお。けど、狂気君はただの子供じゃない。なぜ戸惑わずにいれるのじゃ？」

学園長の問いの意味がわからない。思わず笑顔を崩し真顔で言ってしまった。

「狂気君はただの子供ですよ。自分からは意地を張って言い辛いけど本当の自分のことを知って欲しい。宝物を傷つけられればすぐに怒る。意地っ張りで利かん坊。本人の前で言ったら殴られちゃうかもしれないが、高校生の割にとっても純粹で随分幼稚ですよ」

怒りの理由（後書き）

瀬流彦さん 何か格好良くしすぎた（*、*）

高畑 いいところだ（。□。；） ンー！

学園長 何がしたいか不明（、；） ウーン

ニクマンさん&教授 影が薄い

刀子さん&ヒゲグラさん 未登場

ガンドルフィーニ があああんどおおるうふいいいいいい（）
（、；） プルプル

弟子は3人（前書き）

そろそろ学園祭を始めたい・・・”（
ノ”、）

弟子は3人

「……どうするか」

麻帆良学園における最大のイベントと呼べる学園祭が間近に迫ったあの日のこと、狂気は心の底から落ち込んでいた。

喫茶マカイは一身上の都合により閉店します。
御贔屓にしていた方々には申し訳ありませんが
田舎へ帰ることとなりました。すまないね。

特に将来がとても楽しみだった彼。君の趣味に口を出さない
私の様な心が広いマスターのいる喫茶店を頑張って探さない

マスター ヘルマン

ありのまま起こったことを話そう。

ある日、行きつけの喫茶店に行こうとしたら潰れていた。

なにを言っているのかは理解出来る筈だ。

頭が正常なら考えるまでもない。

幻覚とか幻とかそういう物よりも日本経済が恐ろしいということだ。

濃すぎる思い出のあるこの場所がまさか唐突に潰れることに成るなんて考えてもいなかった。

この間の学園長室で起きた事件よりも大きいかもしれない怒りが込み上がるが何処にぶつけていいのか狂気にはわからなかった。喫茶店に罪はないだろう。マスターにも罪はない。日本経済だって悪くはない筈だ。

「結局、人間が原罪を見つけないことなんて出来ないんだよ。なんだよりリンゴ食べたなら楽園追放って。アダムとイヴだってきつと腹が減って仕方がなかったんだ。神って奴がちゃんと餌やってなかっただけじゃないのか？」

「師匠、唐突に強烈な戯言を吐かないでください。宗教方面から苦情が来たらどうするのです？碌に神学の知識も無いくせに」

「どうしたのですか？・・・と、これなるほど。此処は閉店してしまったのですか。狂気さんの行きつけだったというのに、残念ですね。その気持ちは分かります。私も通っていたぬいぐるみ屋さんがこの間閉店してしまい・・・」

「あー、アレは仕方がないんとちゃう？通っているのせつちゃんしかいなかったんとちゃうの？」

「それは私の趣味が悪いということですか。お嬢様」

「うーん。藁人形を専門に扱うぬいぐるみ屋さんって、趣味以前の問題や。だってぬいぐるみがないもん」

なにやら後ろに付いて来ていた弟子三人が色々言っているが狂気の耳には入らない。

もはや呆然と立ち尽くしている狂気。動揺を悟られまいと無表情を装っているが口元が開いているのが余計に痛々しい。

「取りあえず場所を変えましょう」

そんな狂気の手を引いて夕映はゆっくり話せる別の場所へと歩いて行った。

「で、なんだこれは？」

引つ張られ連れてこられた先で狂気は別の意味で愕然としていた。ゆっくり話が出来る場所でコーヒ―の置いている店ということでは確かに目の前の喫茶店は条件を満たしているが、しかしなんとも入り辛い。

幻想喫茶店 ? f a n c y ?

「頭痛が痛い並みの重複表現じゃないか。ふざけているのかこの店は」

店内から流れてくる雰囲気はピンク色。客層は9割が女性である。入りにくいにも程がある。ちらほらいる男性客は一樣にそのファンシーさに口元を引き攣らせている。

止めよう。ただでさえオーラが黒い自分は目立つのに（↑自覚があった）こんな桃色に入り込んだら浮くどころの話ではない。

そう思い踵を返そうとした狂気にいつの間にかテーブルに付いていた弟子たちから声がかかる。

傍らでは店員さんがニコニコと自分の方を見ていた。

「・・・なるほどふざけて喧嘩売っているのはあいつらの方だったか。

弟子が三人そろって下剋上とは、いいだろう。受けて立とう」

もはや自棄に成った狂気はまるで戦場に向かうかのような勇氏でテーブルへと向かって行った。

「意外とコーヒーが美味しいのがまた腹立たしいな」

「だから言っただでしょう。こういう所はレベルが高いのです。何せターゲットである女学生は味にうるさいですから」

「外装は気に入らないけどな」

「それは男性と女性の価値観の違いです」

コーヒーで一服し冷静を取り戻した狂気は隣に座る夕映に話しかけていた。

目の前では刹那と木乃香によるケーキの食べさせあいが行われていて正直直視しにくい。

「これですか？女の子同士では結構普通ですよ？」

だとしても男の前で行う物ではないだろう。何とも言えない居心地の悪さを拭えない狂気はもう本題に入ろうとテーブルの周りに魔法結界を張る。

途端に店内の喧騒は消えうせた。

「刹那、木乃香。ラブコメるのも結構だが帰ってからにしろ」

「なっ、い、いえ私は別に！」

「はい。じゃあ、せっちゃん。続きはウチの部屋で・ね？」

「おおお嬢様の部屋ですか!？」

「・・・神楽坂さんとネギ先生の部屋でもあるのですよ？何を想像しているのです。やっぱり刹那さんはむつつりなのですね」

「なっ、違うぞ夕映！私はお嬢様とは健全なお付き合いをだな・・・」

「・・・はあ」

女が三人集まれば姦しいとは聞いていたがまさかこれほどとは思わずため息が漏れる。
変な所で刹那と木乃香の指導を引き受けたのを後悔していた狂気だった。

もはや二転三転した処でようやく静かになった。
その途端に弟子三人はまるで責めるような視線を目の前の師匠に送っていた。

「どうしたんだ？」

「師匠、実は私達は先日デングジャラスな事件に巻き込まれていたのです」

「そやで。ウチ何回も助けを呼んだのに狂気さん来てくれへんかつ

た。助けを呼んだらすぐ来てくれるっていうのは嘘だったん？」

「気絶してしまっていた私が言うことではありませんが、元爵位持ちの悪魔の存在に狂気さんは気づけなかったのですか？」

元爵位持ちの悪魔という言葉に驚きが走る。自分もそうだがエヴァにも気づかれずに麻帆良に侵入したというのだろうか。

だとしたら確かに強力な悪魔に違いない。だがしかし、侵入に気づかないまでも助けを求められて自分が気づかないというのはどうだろう。

あり得ない話じゃないのかとその事件が起きた日を聞いて納得する。不運にもその日はあの学園長室での一件と日時が重なっていた。

「ああ、悪い。その日のその時間は俺も立てこんでてな。気付けなかった。ごめん、完全に俺の落ち度だ」

頭を下げる狂気を見て刹那の木乃香は夕映に驚きの視線を送っていたが、夕映は静かに首を振る。

自分たちの師匠はこういう人なのだと、その顔はどこか誇らしそうな顔をしている。

「狂気さん程の人が立てこむ事体とは、いったい何があったのですか？」

「いや、もう終わったことだし楽しいことでもないからな。言う気はないから聞くな」

「はあ、わかりました」

釈然としないその言葉に追及したくなる気持ちもあるが抑えて、刹那は頷く。

どうこう言おうが既に悪魔襲来も学園長室での一件も終わったことであるし、今日話したいのはそういうことじゃないと話を終わらせてから狂気はようやく本題に入る。

「単刀直入に聞くが、現状のネギの様子はどうか？」

あまりにも真っ直ぐな問いに戸惑いながらもまずは夕映が答えた。

「可もなく不可もなくです。先に出た悪魔を倒したのはネギ先生でもあるのですが、逆にいえば私やクラスメイト達が悪魔に捕まった理由もネギ先生にある訳です。何故か応援も呼ばずに一人で戦おうとしてもいました。まあ結局は勝ったのですから文句を言うことでもないのかもしれませんが」

「つまりガキは相変わらずガキのままってことだな。いや、この場合ガキのまま強くなってるってことなのか？・・・面倒だな。刹那はどうだ？」

「そうですね。強くなっているという点には同意します。けれど、私から見れば少し妙な気がするのですが・・・」

「どういう意味だ？」

「はい。その強さに精神が伴っていない様に感じます。コレは少し変ではないでしょうか？」

「それがそうなら、確かにな」

元来肉体的な強さと精神面の強さは並行するものの筈、肉体を鍛える過程で精神面は鍛えられるしその逆もまた然り。

精神を鍛える為に肉体を鍛えもする。だからこそ肉体が強くなれば精神も強くなる。

それが普通の筈なのだが、夕映と刹那はネギの子供っぽさは変わっていないという。

だがしかし、子供が元とはいえ爵位持ちの悪魔を相手に戦える筈がない。

「英雄の息子だから、は理由に成るか？」

正直に言えばわからない。素質はある筈だが結果に結び付くとは思えない。

一応はネギの師匠であるエヴァが何らかの手を貸したのか。それとも別の理由が他にあるのか。

考えてもわからないなら別視点の意見も必要かと狂気は木乃香にも聞く。

「木乃香はどう思う？」

「.....」

「どうかしたのか？」

此処に来て狂気はようやく木乃香の雰囲気が変わっているのに気づく。

この感じは慣れ親しんだ物。怒りだ。自分は何かしてしまったのだろうか？

「なあ、どうして狂気さんはウチらにこんなスパイみたいな真似させとるん？ネギ君のことが知りたいなら直接聞けばいいんと違うの？」

ああ、何だそんなことかと狂気は安堵する。

そういえば木乃香はネギと同じ部屋に暮らしているんだったなと思いだし、ならこんな真似を不愉快に思うのも当然かと納得する。

「夕映もせつちゃんもどうしてそういうこと言うん？ウチにはよく変わらんけど、ネギ君のことを悪く言ってるっていうのはわかる」

「それは、」

「その、」

「止せ。二人を責めるな。全部は俺が頼んでいたことだ」

不機嫌そうに顔を顰める木乃香とは対照的に狂気はあくまでも冷静に、コーヒーに口を付けてから話を始めた。

「どうしてネギに直接会わないのかと聞いたな？簡単だ。逢いたくないからだよ」

「それがウチにはわかんないよ。ネギ君は狂気さんに会いたがっていたんよ。お父さんの手掛かりを知っているかもしれないって」

「そうなのか？」

問いかければ他の二人も頷く。

「エヴァンジェリンさんや茶々丸さんにもしつこく師匠の居場所を聞こうとしていたみたいです」

「それは、エヴァに悪いことをしたな。今度一度だけでも会ってみるか」

木乃香の眉間の皺が深まる。

「ネギ君のことはどうも思わへんの」

「ああ、思わないな。・・・はあ、そんな顔をするな。なあ、木乃香。お前も父親から少しは聞いているんじゃないのか？俺はお前の父親やネギの父親が好きじゃないってことくらい」

「それは、知ってるけど。・・・じゃあどうしてウチには優しくしてくれるん？ウチが女の子やからとか言ったら怒るよ」

眉間の皺は消えたが頬を膨らませる木乃香を見て狂気はため息をもらした。

説明ごとにも不幸自慢も好きじゃないんだけどな、と。

「親の罪に子は関係ない。それはわかってる。だから木乃香とは仲良くできるしよと思う。俺がネギを嫌っている理由は単純にネギの行いに不快感を覚えるからだ。アレが麻帆良に来てからしでかしたことを一から十まで並べて言ってるうとは思わないが、少なくともアレは俺に嫌われるようなことをしでかしたんだよ」

嫌な物を思い出したと舌打ちを零す狂気は苦々しげに続ける。

「注意力散漫、覚悟未熟、責任不備、思考停止、敵罰逃避、甘言遂

行、実力不足、そして何よりネギは弟子を泣かせる理由を作った。笑えるだろ？そんな相手を俺はまだ一度だって殴ってないんだぜ？」

自傷的に笑みを浮かべる狂気を見て木乃香の肩が少し震えた。

——怖い。狂気を初めて見た時の感覚を思い出す。

「頼むから子供だからしょうがないとか言わないでくれよ？そのくだりは聞き飽きた。ネギはお前達の教師で神楽坂や宮崎の魔法の師だ。年齢がどうだろうが責任を持つ立場に居る。その責任を負えないなら最初から教師にも師匠にもなるべきじゃなかったんだよ」

何処までも冷たく突き放す狂気の言うことは正しいと木乃香は理解できる。

だが、しかしとネギへの優しさも捨てきれない。前に見たネギの過去が木乃香の胸を疼かせる。

「でも、ネギ君は昔すごく辛い目にあってるんよ。それでお父さんを探そうと焦ってしまうのは仕方ないことや」

辛そうにそう言う木乃香。その横に居る刹那もどこか沈んでいる。隣に居る夕映もそれだけはそうではないでしょうかと小さく呟いていた。

それを見ながら狂気は二度目のため息をもらす。
やっぱりこういう流れだよな、と。

「ネギの過去なら俺も知っているよ。エヴァに無理やり見せられた。悪趣味だから止めると俺は言ったんだがな。面白い物を見せてやると笑いながら・・・アイツもかなりの悪者だって久しぶりに思い出した出来事だった。その上で、俺の感想を言っただいいか？」

たぶん、かなりひどいことを言うぞと前置きしコーヒーを口に含んで唇を湿らせてから言う。
音の高低のない平らな声で。

「血の一滴も流れない、なんてきれいな悲劇なんだろうって思ったよ。あんな悲劇しか知らなくて、惨劇を知らないネギを羨ましく思い。そしてサウザントマスターの育児放棄振りには呆れかえった。悪魔を吹っ飛ばして姉ちゃんに少し手を差し伸べただけのアイツはアレで父親のつもりなのか？泣いてる子供置いてけぼりにするのが愛情か？アレと比べれば、確かに俺の糞親父の方が何十倍も父親やってるよ。そして――」

あの光景を見て思ったことをただそのまま口に出す。

幼かったネギの行動は年相応の物で責められる部分はない。

しかし、あの出来事の後ネギはいつたい何を感じ学んだのか、それを考えた時狂気は理解できなかった。

だってそうだろう。父親を探すと声高に叫んでいる今のネギは間違っている。

その前にやるべきことがあるだろう。

「――今、ネギがするべきことはあんな父親を探すことじゃなくて石化した村人たちを解放する研究なんじゃないのか？」

その言葉に三人は声に成らない声を零す。

狂気が言っていることは正しすぎる正論なのになぜ自分達は気付けなかったのか、彼女達にはわからない。

ある意味では気づいてはいけないことだったのかもしれない。

ソレに気が付いてしまっただけは今のネギの行動の全てが不自然なものに見えてならないから。

「ネギは過去と未来しか見ていない。それが俺の思ったこと。英雄である父親に焦がれて、自分もそうなる未来を夢想している。今現在も呪われている村人達が思考から抜け落ちている。まあ、現在と未来しか見ていない俺が言うことでもないんだがな」

話し終えた狂気は何でもない様にコーヒーを啜るが他の三人は何処か呆然と固まってしまっていて、少し見るに堪えない。

三度目に成るため息をついてから諭すように言う。

「今のはあくまで俺の考えだ。ネギにも何か考えていることがあるのかもしれないから、あまり囚われるな。お前達はお前達で自分が思ったことをやれ。ネギに手を貸したいなら好きにしろ。手に負えなくなったら俺が助けてやるから」

無然とした声。だがどこか心に沁みわたる声に安心した三人はそれぞれ言葉を返す。

そしてそれを見た狂気は思えばこんなファンシーなところで随分と暗くなっていたなと魔法結界を切った。

途端に周りの喧騒が戻ってくる。突然のことに驚いている三人を余所に狂気はごく学生的な話題を切りだすのだった。

「いきなりでなんだが、お前達のクラスは学園祭で何やるんだ？」

へたくそ過ぎる気の使い方に微笑を零しながら三人は言葉を返し始めた。

おまけ

「師匠のクラスはなにをやるか決まっているのですか？」

「ああ、うん、まあ、たぶん」

「なんだか釈然としないですね。狂気さんらしくない」

「実は寝てたからよく覚えてないんだよな」

「あー、駄目だよ。変なものにきまっただらどうするん？」

「大丈夫だろ」

「……………そうして次なるフラグを立てる師匠なのでした」

「ボソッと不吉なことを言うのは止める」

弟子は3人（後書き）

魔法会編

お前が作った新呪文、「雷速瞬動」「常時雷化」——はどれをと
つても一流魔法学校の教授が腰を抜かすような一級品だぜ d（
「 b グッ

いや、なら村人解放する方法考えてやれよ Σ＼（「 ー、（シビシッ
思わず突っ込んでしまった瞬間

初恋と陰謀の詰まった麻帆良祭は始まる（前書き）

麻帆良祭編開幕！／（――）／ランラン♪
完結まで時間はかかると思うが頑張りたいと思う！ダッシュ！
≡へ（＊・・）ノ
≡
≡

初恋と陰謀の詰まった麻帆良祭は始まる

「なあ、エデンの園ってどういう出し物だよ」

「違うわ。エデンの園は失楽園よ。ちゃんと最後まで読みなさいよ。馬鹿なの？死ぬの？」

「お、お姉ちゃん。羅漢君に酷いこと言っちゃ駄目だよ・・・」

「別にいいじゃん。こいつあんたが教壇に立つてる間も寝てたのよ？クラスからハブられてる不良に唯一手を差し伸べてる心優しい委員長の話も聞かないなんて信じらんない」

「なあ、クラスからハブられてる不良ってだれだ？」

「あんたでしょうが！」

椅子から立ち上がり自分を指さしてくる女生徒に欠伸を漏らしながら狂気は焼きそばパンを齧る。

その様子をみて激怒する姉を辛うじて止めている妹の眼には涙が滲んでいた。

呆れたようにため息をつき、目の前で暴れる彼女を諫めるようかと思ったが止めにして狂気はコロッケパンに手を伸ばした。

「いもうふおをいじめふえたのしいのふあ？」

「口に食べ物を入れながら喋るんじゃないありません！」

「ぶふお、げっほ、げほっ、口に牛乳突っ込んでんじゃねーよ。終いにや泣かすぞ！」

怒りだした狂気を鼻で笑いながら女生徒は演劇のように腰に手を当て口に手を翳し勝ち誇った口調で言う。

「あら、怖い。クラスの真ん中で女の子を泣かせるだなんて。そんなだからアナタはクラスからハブられているんじゃないくて？」

「・・・なんかお前キャラ設定が滅茶苦茶だな」

「お姉ちゃんは演劇部だから」

「それはあんまり関係ないだろ」

そう漏らしてから狂気は椅子に座り直す。

なんだかもう自分が怒っているのが馬鹿らしくなってきたと再びパンを口に運び喋り出す。

「で、結局何なんだよ。学際でのウチのクラスの出し物は」

「だからそれはね。要は幻想を打ち砕く樂園。天使たちの爛れた日常って感じかな。要は嫌がらせ「頼もーっ！」は？」

話の腰を折る形でいきなり教室の扉が開く。

扉の前に居たのは引き戸なのにまるで蹴破ったように足を振り上げた形で君臨する美少女だった。

一見人形のような儚げな容姿をした少女の登場にポカンと立ち尽くすクラスメイト達を余所に狂気は苦笑いを浮かべながらも平然と少女に喋りかけた。

「こんなところまでどうしたんだ？ なにかあったのか？ ていうかよく俺のクラスがわかったな。エヴァ」

「いやこれで扉を蹴破ったのは三回目だ」

「おいおい。恥ずかしい奴だな」

その様子に口元を吊り上げながらエヴァはまるで自分の家であるかのように堂々と教室に入り込み、狂気の手を取った。

「行くぞ」

「ああ、」

極めて短いやり取りの後に立ち上がり荷物を纏める狂気。状況がわからなくて固まっていた女生徒が動き出した。

「ああ、てつちよつと！ 午後の授業はどうする気なのよ」

「サボる」

「そんな平然と・・・っていうかその子は誰なの！」

その問いに狂気が答えようとした時、エヴァは満面の笑顔で言った。

「恋人だ」

あの後もう色々と面倒だったからすぐさま退却をし、此処は既にエヴァの家。

頭の上によじ登るチャチャゼロは何時ものことだから放っておいて、ため息を漏らしながら目の前に居るエヴァを見る。

「で、何があつたんだ？わざわざ教室にまで来るなんて急ぎの用があるんだろ？」

「ああ、もう耐えられんのだ」

「耐えられないってなにが？」

「なにがって、ボーヤだよボーヤ！」

うがーとよくわからない咆哮を漏らすエヴァ。

「なんなのだ奴は！真面目に修行する気はあるのか！」

「いや、どうしたんだいきなり」

急にキレだしたエヴァに若干引きながらも狂気は落ちつけと鎮静化を図る。

図ったが、無駄だったようだ。エヴァは拳を握り上げるとダンツと机を足で踏みつける。

「修行中に茶々丸の胸部を揉むは転んでスカートの中を覗き込むは連れ込んだ小娘共を押し倒すは終いにや私が入浴中の所を覗きに來るわで、アイツは真祖の変態か！」

「へえ……聞く限りは度し難い変態だな。ていうかあれか？押し倒した小娘って俺の弟子が入ってんじゃねーだらうな。そうなら流石に俺も殴るぞ。いや、茶々丸にセクハラしてエヴァの裸を見た時点で殺した方がいいか。待ってるエヴァ、全ての元凶を消し去ってくる。不干渉が何だとかもう言ってるんねえだろ」

狂気の口元がつり上がる。こめかみは痙攣し血管が千切れるんじゃないかとおもうほど太い青筋が浮き上がっていた。

ふざけているのだろうかネギは？いや、ふざけているんじゃないとしても許せない。

アレは周りにそういうイベントを垂れ流さなきゃ呼吸出来ないサメかなんかか？

イベントを止めた瞬間呼吸が止まるのか？なら是非もない、そのまま呼吸困難で死ぬ。

未だかつてないほどキレた狂気を見て流石にまずくないかとおもったエヴァは慌てて手を振り鎮静化を図る。

心境はさしずめ火山の噴火を心配する島民か。

「あ、あれだ、狂気。そこまで怒ってくれるのは嬉しいんだが、私も少し言いすぎたって言うか何というか。確かに全ては事実なんだがなんともな。だからとりあえず落ち着け。ほら、流石に昨日の今日で問題を起こすのはお前もまずいだろ」

「ソウダゼ。幸イ、俺ハナニモサレテネーカラ、落着着ケ」

エヴァの真摯な説得とチャチャゼロの何処かズレた説得で取りあえずは冷静を取り戻した狂気は取り乱したと謝ってから苦々しげに口を開く。

「なあ、エヴァ。ネギの修行止めないか？なんというか俺の見てない所でお前達がそういうことになってるのは、なんだか嫌だ」

ネギがエヴァや茶々丸、弟子たちにそういうことをしている光景を思い浮かべると胸に感じたことがない苛立ちが募る。

同時に何故だか胸が締め付けられるような、感じたこともない不快感が如実に表れ狂気の心を狂わせる。

「ああ、私だって止めたいのは山々なんだが一応は約束だからな。約束を破るのは私の性にあわん」

不承不承とそうため息をつくエヴになぜだか苛立ちを覚える。どうしてこの女は自分の思い通りに成らないのだろうか。

「
」

わからない。こんな感情を自分は知らない。

だがこれはよくない感情だろう。エヴァに苛立ちを覚えるなどどういうことだ。

何か自分に起きている違和感を感じながらも頭を振り自我を持ち直す。

怒りではない。自身を焦がすこの炎のような感情を狂気は知らない。

「そこで相談なんだが・・・って聞いているか？狂気」

「ん、ああ、聞いてるぞ。なんだ？」

「ほら、あれだ。昔お前の親父に貸した巻物があつただろ。アレを返してもらえないか？アレがあれば今の私が出張らずとも昔の私がボーヤの修行を付けられるだろう」

ああ、と狂気は思い当たった。

前に親父にエヴァとの賭けに勝ちブンドッタと自慢された巻物。

彼女はあくまでも貸しているだけだと意地を張っているのかと微笑する。

「だがアレに居るのは人工精霊とはいえエヴァだろ？どっちにしろ不快なんじゃないのか？」

「はっ、大丈夫だよ。過去の私に取ってはナギの息子であるボーヤの修行を行うことなど御褒美でしかないさ。大笑して引き受けるだろうよ。まったく、成長しないとは恐ろしい物だな」

凄惨な笑みを浮かべそういうエヴァ。

彼女の心にはもう過去など無い。惚れていた男がいたということすら目の前の男に塗りつぶされた。

なら初恋に萌える少女には精々役に立つてもらおう。嘗ての自分をネギに売り渡す。

第一、言う通り現在の私が不快と感じているネギの師匠という立場だって過去の自分からしてみれば御褒美だろう。

なら何の問題もないではないか。エヴァはさらに口元を吊り上げる。そんなエヴァを見て狂気はあり得ないことだが少しネギの身を案じた

「あのエヴァが守っているのは確か禁術なんだろう？下手をしたらネギが死ぬぞ」

「なんだお前はボーヤが心配なのか？それともボーヤに害を成し裁かれるかもしれんあの私が心配か？」

意外だとばかりに首を傾げるエヴァを見て、狂気は自分でも首を傾

げた。

「いや、まさか。俺がネギを心配する筈はないし、そのエヴァには逢ったことも無いんだ。俺は何を言ってたんだろうな。ああ、わからない。だが、エヴァの話はわかった。アレがあればお前が不快な思いをしなくてすむっていうならすぐに親父に送らせるよ。その辺に打っ棄つてたから別にそこまで大切にしている物ではないと思うし」

「・・・あの馬鹿。私直筆の秘伝書をその辺に打っ棄つてただと！ たく、あれの価値がわかるのか！」

その秘伝書をネギへの人身御供にする癖にと思いながらも口には出さない。

面倒なことに成りそうだし、狂気が大切なのはあくまで自身が出会い淡い友情を育んできた今のエヴァであり、過去など知ったことではないのだから。

「お陰で簡単に手に入るんだ。いいじゃないか」

「まあ、それもそうだがな」

なにが不満なのかむくれるエヴァとは対照的に狂気は嬉しさのあまり笑みを零す。

ともかくエヴァがネギに関ることが無くなるのだ。嬉しいじゃないか。

なぜだかネギにエヴァや茶々丸は近づけたくない。

いや、正直に言えば異性に近づけたくない。

自分の頭の上に居る彼女のように俺だけの物に成ればいい物を。

最近に成り芽生え始めたこの屈折した感情がなんなのか、今の狂気

にはまだわからない。

この時代は嫌いだ。私から見れば全てが夢にしか見えない。

麻帆良学園ロボット工学部の最下層にその少女は居た。

両手は忙しなくキーボードをたたき続け、目は目の前に映るディスプレイに釘付けになっていた。

13もの画面が集合したディスプレイの一つで覗いていた光景を見ながら目を細め笑みを浮かべる。

「くひつ、やっぱり私の読みは当たっていた力。自己破壊因子は確かに同士を蝕んでいるヨ」
アポトーシス

特徴的な笑いを零しながら手足をバタつかせ喜びを表すその眼は笑っているが何処か危うげにゆれていた。

「ずっと考えていたヨ。私の計画に存在した唯一のイレギュラーである同士をどうするか。とても悩んで送ったラブレターも無視されて振られてしまった。かと言って私に同士を斃す程の力はナイ。けれど、これで――」

計画の綻びは解消された。むしろより強く強固なものに成ったと笑

いながら画面に映る愛しい彼の顔を撫でる。

笑顔だ。笑っている。私ではない誰かの前で。

けれどそれもすぐに終わる。あと少し、学園祭が始まればあの笑顔を向ける相手は私しかないなくなる。

「ああ、」

感嘆の声を出しながら火照った身体を慰めるように唾を呑む。

「正しく貴方は私だけの騎士^{ナイト}。私を守るために未来から来てくれたんだロウ」

問いかけに疑問符はない。元より答えなど彼女の中では確定している。

だからこれはある種の自慰行為。火照った熱をさらに熱くするための物。

「鋼鉄の徒、兵器の英雄。そうであつた頃の同士は壊れてしまったヨ。今君が胸に秘めている想いなどインプットされていなかった筈ネ。戦争を行う英雄^{キカイ}に必要な物は決まっている。祖国への忠義^{アイ}、戦友への友情^{アイ}、戦場への渴望^{アイ}。だから、恋心^{ソレ}は捨てた筈ダロウ」

少女は笑う嗤う晒う。異性への執着、支配欲。

純粹すぎる恋心を抱くことを覚えた彼を見て胸を高鳴らせる。

——もしその愛の全てが自身に向けられたら

少女の初恋は燃え上がる。非道な行い。彼を人とも思わない自分。これも全ては計画の為だと言いつて、そんな罪深い悲愛に酔いしれる。

「ああ、私も同士を愛してあげたいネ。けれど、今の同士は私を受

け入れてくれないのダロ。なら、愛する前に先ずは壊そう。くひっ、
くはは。あはははははは」

天を見上げ大笑する少女の狂気は止まらない。

13のディスプレイに映る物を見ながら笑い続ける。

第78回麻帆良祭日程

世界樹伝説

ロボット総軍戦力

鬼神機化プラン

時空跳躍プラン

世界樹を愛でる会

まほら武道会

鋼鉄少年英雄詩

半人機兵の成長と自己破壊因子の関係性について
アポトーシス

プロジェクト愛しい人
モン・シェリ

プロジェクト魔法露呈計画
MEP

最終プロジェクト HAPPY 幸福は終わり
end

そして彼の笑顔

——第一プロジェクトこれは彼を奪うための横恋慕。

そしてその成就とともに第二プロジェクトは動き出し、

最後は世界を救い愛しい人との口づけで終わる感動喜劇——

それが超の計画した全て。

「まずは同士、君は私への恋に落ちるヨ。必ずネ」

麻帆良教師陣との関係悪化

育ちつつあるネギ・スプリングフィールド

エヴァの師弟放棄

そして狂気に芽生えた新たな心

さまざまな要因を孕み、遂に麻帆良祭は始まる

初恋と陰謀の詰まった麻帆良祭は始まる（後書き）

ネギの成長はこれからの展開上必要なことだった！（・、へ、
；）

ネギはどうやって強くなる？闇の魔法しか思いつかない（「――
――」）

だがエヴァをネギと仲良くさせるのは物語の構成上まずい（「――」）
ウーム ドウシヨウ

考えた末に私は気がついたのだ（ノ。〇。）ノ オオオオオオオオ
オオ-

そう言えば闇の魔法をネギに教えたのは正確に言えば精霊エヴァで
エヴァ様じゃなかったと！
なら、つまりはこうすればいいんじゃないのか！

エヴァがネギを弟子にとる /（、〇、）\オーノー

←
嫌気がさして精霊エヴァに放り投げる（「。口。」）「オーイ！！

¥（「。〇。」）ナニ？

←
カンペキっ！（*「ー」*）ふふん！！

素晴らしい！この展開には誰も気づかないだろうっ！

・・・・・・・・・そう思っていた時期が私にもありまし
た。

けれども、ある読者が放った矢はすごかった。

「闇の魔法を教えるのはエヴァのコピーだし」

(- - - - -)
○ ヴグサツ
。

こ、コエーよ。

なんなんだよ、もしかして私如きが考えるこれからの展開全て読ま
れているのかあっ！

ゝ () ㇏ () ヽヒヨエ

→

てっ
な
っ
た。
。

狂気の沙汰 学園祭始まりの日（前書き）

学園祭開始（^o^）

狂気の沙汰 学園祭始まりの日

『只今より第78回麻帆良祭を開催します！！』

学園祭の開始を祝うように飛び回る飛行機、どこからともなく立ち上る紙吹雪と風船。

街道を練り歩く仮装パレードに目を向ければつい魅入るってしまう。柄にもなく高揚する気持ちを抑えながら出されている露店を見て回る。

普段は奇異な視線を向けられる頭に人形を乗せているという珍妙な格好も今この時だけは見事に雰囲気溶け込んでいた。

「なあ、何処か行きたい所とかあるか？」

浮かれているのを理解しながらも抑えられない。

毎年のことだが人目を気にせず（↑普段から気にしてはいないが）街を歩ける麻帆良祭が楽しくて仕方がない。

それはすぐそばに居る彼女も同じ様で普段なら返ってくる嫌味もなく笑顔。

「イヤ、御主人ト合流スル前二狂気が行キテー所ヲ回ツタ方ガ良インジャーネーカ。付き合ッテヤルゼ」

「そうか、そうだな。なら適当にぶらぶらするか」

特に行きたいことはないのだが好きにしていいたいと言うなら好きにさせてもらおう。

フラフラと歩きまわり学祭を回っていく。本音を言えば弟子達の出

す出し物を見に行きたいのだが、ネギに会ってしまう可能性を考えればあまり進んでいくたくはない。

自分一人の時ならばいいのだがチャチャゼロと一緒にでは色々と問題がある。

万一にも取り乱してしまつたら無様としか言いようがなく、そんな姿を見せたくはない。

矜持の様な物は出来うる限り守りたい。今さらの様な気もするが。

「お、見るよ、チャチャゼロ。ティラノサウルスだぞ。ロボットだけど」

がおーっと吠えるそれを見上げながら感嘆する。

正直こういうものは嫌いじゃない。子供っぽいと自分でも思うが恐竜とか実に燃える。

魔法界には竜種がいるがそれとはまた違ったよさがあつていい。

さらにこれは本物ではなくロボットという所が実に萌える。

「楽シンデルトコ悪イケドヨ。アレ、コッチニ突ツ込ンデ来テネーカ？」

「マジか？つーかマジだな。ははは、見るよチャチャゼロ。あれ口の中にカメラがあるぜ。目じゃなくて口で視覚する。ああいう生物学上あり得ない所に萌えるよな。さすがロボット」

「才前ノ変態的趣味ナンテシラネーヨ。ティウカヨー、ロボット萌エナノカ？ソウナノカ？ダツタ妹ガ心配ダナ。姉トシテ。手ヲ出シタラ切り取ルゾ。何処ヲトワ言ワネーケド」

・・・それはかなり危機的事態だな。男として。不機嫌そう口調に若干恐怖を覚える。本気じゃないよな？

「嫉妬してるんなら安心しろよ。チャチャゼロだって十分萌えるぞ」

「…………キモッ」

「おい」

そんなやり取りをしている間にも暴走しているロボティラノは向かってくる。

既に周り似た人々は避難し街道の端に集まっている。

にげるー、危ないー、ワアアー、キヤー

騒ぐ声が遠くから聞こえ、近くからは問いが聞こえた。

「ブッコワスカ？」

「いや、言っただろ。これには燃えて萌える。壊すのはもったいないだろ」

踏みつぶさんと向かってくるロボティラノ。

頭上で振り下ろされた後ろ脚をそのまま片手で掴む。

片足立ちの姿勢を取らせ無理やり停止させた。
そして周りに居る白衣の学生達に声をかける。

「これってどうすれば止まるんだ？」

「ええええっと。そろそろ電池が切れるから勝手に止まるかと」

「そうか。っと、止まったな」

そう言っている間にも停止したそれを横に寝かせてから手を離す。
周りの視線が面倒だからすぐにでも立ち去るか。

「なかなかいい見せ物だった。次はトリケラトプスとか作ってくれ」

「あ、ああ。悪い。ありがとうな」

頭を下げる学生達を置いて立ち去る。

頭の上ではチャチャゼロが笑っていた。

「ケケケ。イイノカヨ。アンナ目立ツ真似シチマツテ」

「ああ、毎年のことだろ。今日は外部の人間も招き入れる学園祭。
いつもより強力な認識誤差魔法が麻帆良全体に効いてる。あの程度
のことすぐに忘れる。だからチャチャゼロ、今日は普通に立って歩
き回っていても大丈夫だと思うが」

「イインダヨ。俺ハ此処ガ気ニ入ッテンダ。ソレトモ邪魔力？」

「是非もない」

俺の頭の上がお気に入りだというチャチャゼロからの嬉しい言葉も
聞けたし、面白い物も見れた。

今日はどうしようもなく気分がいい。だがやはり、苛立つ原因は其
処ら中にころがっているようで、

「サーカスの動物達が逃げ出したーッ」

イヤー キヤー パオーン クエツクエツ

「ゾウガメかアレ？カメが走ってるってぞ。すげーな」

「優サシク受け止メテヤッタロード」

「冗談。動物はネコ以外好きじゃない」

足を上げ、下を踏み付けた。途端に地面にひびが入る。

動物は好きじゃない（茶々丸が好きなネコ以外）が賢いところは嫌いじゃない。

少し力を見せてやればすぐにどちらか強いが理解する。人間より御しやすい。

「動くなよ。踏みつぶすぞ」

「オオ、怖エー」

大人しくなった動物達の横を抜けて行く。

まったく苛立たしいな。見せ物なら見せ物らしく大人しくしてればいい物を。

牙をむきたいなら野生に戻れというものだ。

飼いならされた動物という所に虫唾が走る。

だがそれ以上に苛立たしいのは、

「やっぱり馬鹿な人間か」

「んだあ！？てめーは。てめーから死ぬかあっつ……」

耳障りな声を漏らす不良の一人を黙らせる。

どうしてこう進む先々で問題が起こるんだ？

「話毛聞カネーデ、先手必勝ドコロノ話ジャネーナ」

「進む先にガラの的に確実に巻き込まれる問題が起きてんだ。火の粉が降りかかる前に潰すのは当然だろ。それに・・・祭りで騒ぐのは勝手だが場所を考えろって話だ。時代錯誤の乱闘なんて道端でやるもんじゃねーよ。白けるだろ」

「お、お前いま何しやがあっつ・・・」

白けるからもう喋るな。会話に入るな腹立たしい。
這い蹲って地面でも舐めてりゃいいんだ。全員な。

「お、おい。アリヤ あの羅漢だぞ!？」

「げっ、こいつがああのバイオレンスドールかよ。マズイ」

「暴力機巧・・・」

「ま、待て。俺達はお前とやり合う気はあっつ・・・」

「テメーらが舐められるから面倒なことになってんだろ？ 這い蹲れ。うざい」

言っただろ？ 全員地面でも舐めてろって。

「ホント、情ケ容赦ネーナ。オ前ノソウイウトコロガ俺八大好きダゼー。ケケケ」

「人を暴力の権化みたいに言うな。俺は情けもかけるし容赦もする。

時と場合は選ぶけどな」

這い蹲るこいつらにも情けはかけなかったが容赦はした。
じゃなきゃ今頃全員腸ぶちまけて死んでるよ。

だというのに周りは騒がしくなる。面倒で仕方がないな。
怒らせたくないなら苛々させないで欲しいんだが、聞き入れてくれないのだろうか。

「いったいお前はどうした？なぜ泣く？」

「えうー、う、うぐっ」

「どうしたんだ？」

道端で泣いていた子供に喋りかける。

無視しても良いんだが、なんともガキ未満の子供の泣き声は嫌いだ。

「ひうー、うう、ママ・・・」

「母親が？」

「へくっ・・・えう・・・どこお・・・」

「母親がいないのか？」

「・・・えうー、」

会話が成立しない。

しきりに声をかけているが、子供は泣くの夢中。

俺の袖口をしっかりとつかんでいるから、居ることにはきづいてんだ

ろっが。

「母親が、何処に居るかわからないのか？」

「うう、ひぐっ、うー」

「君の名前は？」

「ひぐう・・・さがしてよぉ」

「・・・名前は？」

「うええええん！」

「・・・」

数秒の沈黙ののち、俺の行動はあっさりしたものだ。子供の手を振り払い、立ち上がる。

「行くか。チャチャゼロ」

「ホットイティイノカ？」

「え？・・・や、まって、お母さん探して」

立ち去ろうとする俺の後を追ひ、子供が服を掴もうとする。だが、触れない。軽く身を翻し、小さな手をかわす。つんのめって子供が転びかける。

「・・・あっ・・・」

「なまえ、は？母親が君に付けてくれた名前がちゃんとあるだろう？」

「・・・歩」

「そうか」

静かに身を返し、俺は子供のもとへ戻る。

両手を差しのべ、抱き上げた。

本当に面倒だ。最初から素直に話していればいいものを。

「母親とはぐれたでいいのか？」

「うん」

「そうか。なら探そう。いいか？チャチャゼロ」

「アア、好きニシロ」

「狂気モ存外ニオ人ヨシダヨナー」

「・・・人並みの優しさを持っていてなにが悪い」

責めるように言われたら怒ればいいんだが何処か嬉しそうに言うのは性質が悪い。

どう反応すればいいかがいまわからない。

「ア、アソコで売ッテルトマトジュースが飲ミテ―」

「了解」

子供を送り届けた後、軽い食事でもと思い喫茶店入ろうと思ったんだが行きつけのあそこが潰れたことを思い出し、意地になって行くのを止めた。

ある意味では食べ歩きこそ祭りの醍醐味であるのだからいいだろう。

「ほら、これでいいんだろ」

「オウ、アリガトヨ。・・ッテ、コレ上手クストローガ刺サンネーゾ。クソ、コノ、」

「おいおい、零すなよ。「ガアアア、ウツゼッー!」・・・おい」

チャチャゼロ、コイツあるうことが放り投げやがった。

人の頭の上でジュースを放り投げればどうなるか？簡単だ。こうなるんだよ。

「・・・・・血塗レニミエルナ」

「言うことはそれだけか？」

「服が黒クテヨカッタナ。目タネーゾ」

「顔の血塗れが目立って見えんだろ。しかも服はぐちゃぐちゃで気持ち悪りーんだけど」

「アー、ソノ、ナンツーカ悪カッタ」

「最初から素直に謝りゃいいんだ。たくつ、コレ着替えなきゃどうしようもねーぞ」

全身トマトジュース塗れで学祭を回りたくなんてない。
仕方がないから一旦寮に戻って着替えるか。

「イヤ、ソウシナクテモイイミターダゼ。アレデ着替エテ来イヨ」

髪を引つ張られ向かされた方向を見てああと納得する。
確かにあれなら都合がいい。

貸衣装 ハロウィン・タウン

入ったがいいが、なんというか派手なのが多いな。
正直どれも俺に似合うとは思えないんだが、どうするか。

「オイ、コレナントドウダ？ケケケケケケケ」

無視だ。あんな黒いウサギの着ぐるみを持って爆笑してるチャチャ
ゼロなんて無視だ。

今さら何だがコイツは欠片も反省してないのな。そうじゃないかと思
っていたけどさ。

「ソレトモコツチガイイカ？」

「もういい。黙ってる」

明かに女性用のウサ耳付きの服を進めてくるチャチャゼロを押し

けて服を探す。

ぶつちやけ碌なのがない。着ぐるみは論外、軍服なんかが一番マシか？いや、さつきからチラチラ視界に入る執事服もまだまともか。

「オイ、コレハドウダヨ？」

「うるさいぞチャチャゼロ。後ろもつかえてんだ。真面目に探し・
つて、いいなそれ」

「ダロ？」

渡された服を手取る。

俺でもわかるがこれはおそらく何かの漫画かアニメのキャラクターの服だろう。

仮装じゃなくてコスプレじゃないかとも思うが、軍服や執事服も同じ様ものか。

それにこれの黒を基調とした色彩は嫌いじゃないしいいか。

「これにする。着替えるから後ろ向いてろ」

「イワレナクツタテ覗カネーヨ」

「一応だ」

着替え終わり貸し商店を出た俺はわりとしつくり来る服に安堵しながらも問いかけた。

「どうだ？似合ってるか？」

「アア、「似合ってる。つーか、似過ぎだろ」ア？」

答えたのはチャチャゼロではなくどこかで見たことがあるような気がする一人の女生徒だった。

ジロジロ見てくるのは善いんだが若干眼鏡の下目つきが怖い。

「ビブリオンの黒司書に本気ではまってる奴なんて初めて見た。これやると大概の奴は服に引っ張られてあの暗い感じが出ねーんだ・
・あの、写真いいですか？」

「あ、ああ。好きにすればいいだろう」

「うわ、口調までそっくりって完成度高すぎだろ。じゃあ、ポーズお願いします」

いや、ポーズなんて知らねーんだけど。

「手ヲ胸ノ高サマデ上ゲテ直立ダ。チゲーヨ、掌八開イテ表ガ上ニ向クヨウニ。・・・ソウ、ソウダヨ」

「おつ、必殺技這い出る言祝のポーズですね。ありがとございませう」

「あ、ああ。・・・なんで知ってるんだ？チャチャゼロ」

「妹ガ前ニ見テテヨ。コノ服ガ才前ニ似合ウンジャーノツテ、氣付イタノハソノ所為ダゼ」

茶々丸がね。意外だがまあ、微笑ましいな。第一アイツはまだ三歳の子供なんだし。

ネコ好きだったりアニメ見てたり意外と子供っぽいところが多いよ

な。

家事全般が凄すぎて普段は気づかないが。

「終わったか？」

「はい。ありがとうございました」

「いや、これぐらいなら何でもない。じゃあ、俺はもう行く」

「あつ、ちよつと・・・」

立ち去ろうとしたら袖を掴まれた。

「どうした？」

「これから暇ですか？もし暇ならこれからゲリラ的なコスプレイベントがあるんですけど、出ませんか？コスムの完成度も高いですし・・・」

上を見上げる。チャチャゼロは笑っている。

エヴァと茶々丸に合流する夕方まではまだ時間もある。

「まあ、暇だから」

「あ、じゃあこっちです。付いて来てください」

取りあえず付いて行ってみることにした。

狂気の沙汰 学園祭始まりの日（後書き）

千雨ちゃん登場！

若干、原作より社会的になってしまったがそれは狂気のことを同族だともっているということだ。

狂気の沙汰 一日目の終わり（前書き）

最近忙しくていけない
時間がないから二話分を一話で投稿。

狂気の沙汰 一日目の終わり

「それで黒司書は作品の中でもルーランルージュを一時独房送りにしたキャラじゃないですか。だからファンの間ではアンチ要員で——
——けれどそうしたのは理由が——そういう経緯があったてこともわかって一気に人気が発散したキャラなんですよね。けどコスプレするには難易度が高すぎてあんまりやる人がいないんです。いや、大会出れば上位は間違いなしですよ」

会場の図書館島に向かっている最中ずっと喋っていた長谷川の話は何故だか俺がコスプレしているキャラクターに付いて熟知していることが前提だった。

正直チャチャゼロがいなかったら付いていけなかったと思う。

ようやくするとこのキャラのアニメの立ち位置は、世界の本を守るために戦い続ける主人公たちと敵対する幹部の中でも上位の力を持ち外道の部類。情け容赦ないその行動は味方であるルージュという少女すら巻き込み害を成すのだが、その実、実はその全ての行動が同時に新しい本より古い本を至高とする考えに基づいた物らしい。

『新しき物が至高と誰が決めた！温故知新を知れ小娘』がキメ台詞らしい。

聞いていてわかったんだが俺はコスプレしているこのキャラは嫌いじゃない。

まだよくは知らないがようはそいつにはそいつに守りたい物があったて悪事に手を染めたのだろう。

そしてそれを欠片も隠さず堂々としているところがいい。

諦める奴やうじうじしている奴よりずっと悪人らしく格好がいいじゃないか。

「あ、着きましたよ」

見回せばなるほど、こういうのをコスプレイベントというのか。

長谷川が聞いたら怒りそうだが、俺が着ている服と見分けが付かない服を着ている奴らも多にいる。

というか本国の巨神兵に似た何かもある。魔法使いの服着てる奴はもいるし、なんだが見慣れたような光景でもあるな。

「和気藹藹か。楽しんでるようだなによりだな。で、此処はなに
する場所なんだ？」

「メインはもうすぐ始まるコスプレ大会ですよ。って、げ・・・ち
よ、こつち来てください」

「あ、おい」

手を引っ張られて本棚の裏に引っ張りこまれる。

なんだいきなり。チャチャゼロ、嫉妬深いにも限度がある。髪の毛
を引っ張るな。

「どうかしたか？」

「ええ、ちょっと担任とクラスの奴が居て。くそ、どうしてなんだ
よ。つか、人混みの中で人の名前連呼するなっ！」

ちうさーん ちさめさーん あれ、いないんですかーちさめさーん

「くうう・・・」

「同情しよう。アレは恥ずかしい」

というか担任ってネギか。何故俺の周りにはアレのクラス関係者が多いんだろうな。

学園長あたりの陰謀だって言うなら納得もできるんだが、そうじゃなきゃ星の因果が狂ってる。

「あの、悪い。私はもう帰ります。アレと出会いたくないですし」

「いや、だが大会はどうするんだ？出るんだろう？」

「・・・私は出ませんよ。私が出たって結果は目に見えてますし。リスクの高い勝負はしない主義なんで」

じゃあ手に持つてる衣装と思しき荷物はなんなんだろうな。

コイツがこういうのを大好きなのは初対面の俺にあれだけ馴れ馴れしいことから歴然なんだから、今さらなに恥ずかしがってんだが。

苛々する。

「つーか、なんだお前。俺は大会に出させて自分は高みの見物決め込むつもりだったのか？いい御身分だな」

「いや、そういう訳じゃねーけど。私はあんたと違って素材的にいってごくごく普通の女子中学生で見栄えもよくなる。無駄なことでですよ」

「素材？見栄え？無駄？意味不明だな。よくわかんないけどコスプレってアレだろ。別に他人に見せる為じゃなくて自分が楽しいからやるじゃねーの？」

「そりゃ、そうだけど「問答無用。ヤレ、チャチャゼロ」へ？」

「リョーカーイ。ケケケケケ」

突如動き出したチャチャゼロに驚いている間に長谷川の服は切り刻まれた。

誤解しないように言っておくがやったのはチャチャゼロだ。

そして俺はしっかり目を背けて置いた。

「な、なななあああ！？ちょ、犯罪だぞこれ！？っ！かなんでその人形動いてんだ！？」

「突ッ込ンデル暇ガアツタラ着替エタラドーダ？人ガ集マツテクルゼ」

「ちっ、くそっ」

布の擦れるとかぶつぶつ零れる呪いの言葉を耳に挟みながら周りを見る。

ネギは・・・消えたか？目的の人に会えなかったから帰ったんだろうか。よかった。

「・・・・・・・・・・着替え終わったぞ」

「そうか。似合ってるぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・他
に言うこと無いのかよ」

目が怖い。掛けていた眼鏡が無くなっているぶん迫力が増している

気がする。

「破った服代は弁償しよう」

「違いーだろ！謝罪しろよ謝罪！いきなり女子中学生の服切り刻んだんだぞ！謝れよ！」

「シャザイ？アヤマル？なんだそれは、俺の辞書には載ってないな。お前は知ってるか？」

「サア、シラネ。アンマウルセート、ヤッチマウゾ」

「・・・最悪だ。なんだこのコンビ、バイオレンスすぎるだろ」

「このキャラの性格はそういう感じなんだろう？」

来ている服を引っ張りながら言う。

長谷川が本当のコスプレは性格まで成りきる物だって熱弁してたから従ったのになにが不満なんだろうな？

「そうだけどさ・・・これじゃあマジでルージユの心境がわかるぜ」

口元を引き攣らせながらそう言う長谷川。

ルージユって確か俺がコスプレしてるキャラに酷い目に合わせられるキャラだよな。

その服がそうなんだろう。髪型まで変えて、なんだかんだいってノリノリだな。

「ウケルー」

「・・・だからどうして人形が喋ってんだよ」

「気にするな。好奇心で殺されるぞ。あそこで動いてる5m越えの巨人よりはまともだろ。アイボとかアシモとかあるだろ。あの類だよ。それそり早く行くぞ」

「そりゃ、確かに会話能力ぐらい普通かもしんないけど・・・って、引っ張るなよ。私は大会なんてでねーぞっ」

「お前の意思が絶対と誰が決めた！弱肉強食を知れ小娘」

「セリフが全然違えーっ！っ！」

うるさいな。抱えあげてやろうか。

「ちょ、離せよ」

「馬鹿、危ないから暴れるな。あっ、」

そのままステージに放り投げる。

いや、そこまで強引にするつもりはなかった。
ただあいつが暴れるから・・・ステージの上で固まってるな。

18番 長谷川千雨さん 19番羅漢狂気さん

二人揃ってキャラクターはビブليون敵幹部

「ビブリオ ルーランルージュ」と「黒司書」！！

放送が流れる。いつの間にか頭の上に居たチャチャゼロが居ない。

ナイスだ。流石は俺のチャチャゼロ。

長谷川の横に歩いて行く。動かない俺達に会場はざわめくが、仕方ないだろ。

俺はこのキャラのこと素人に毛が生えたくらいにしか知らないのだから。

正直長谷川だけが頼りだ。

「さつさと立て」

訳 お前が頼りだ

「う・・・？あ・・・あの」

訳 立てじゃねーだろ馬鹿やろー！

「なんだその眼は？反抗的だな。早く立て」

訳 後で幾らでも責める。だから早く助ける

「すつ・・・すいませつ・・・ごめんな・・・さい・・・」

訳 ダ、ダメだ。顔絶対真っ赤。やべーよ、オイ！客引いてるよ

「ほお、泣くか。泣けば許されるか？イイ御身分だな」

訳 無視か、苛めか、ああ嫌がらせか？俺だけが痛い奴か？

「わたし・・・・・・ご・・・ごめん・・・なさいつ・・・・・・」

訳 うっぐ、最悪だーっ 人前に出るとどうしてこんな マジで涙出てきた

「・・・もういい。好きなだけ泣いている。俺はお前の泣き顔が嫌いじゃない」

訳 演技で泣けるとはすごいな。流石プロ。俺は普通に感心したぞ

終わった。長谷川の奴は名演技として俺は痛い奴確定だな。

別にいいんだが。いや、良くはないがこれもこいつは無理やり出した天罰なら、甘んじて受けよう。

かわいいー

「は？」

「へ？」

わーっ！かわいいー かこっいー ちゅちゃんー ししょさまー！

素晴らしいです18番19番！

敵か幹部でありながら引つ込み思案なダメ幹部と

それを苛める外道幹部を見事表現！

これには会場も大満足———！

ワイー！！

ワイー！！

優勝は満場一致で——18番長谷川千雨さん19番羅漢狂気さんです！！

「そ、そうか。こーゆーのもアリだったな。てゆーかきほんがそーか。フ・・すで観客のニーズにバッチリ答えてしまうとは、流石私だなー！」

「なんかよくわからんが、流石プロ」

よくわかんないまま大会を優勝してしまった。

全ての称賛は長谷川に向けられるべきだな、正直俺は立っていただけだ。

そういう訳で大会も終わりいまはトロフィーを抱えた長谷川が目の前にいる訳なんだが。

「ありがとな」

「いや、礼をされることなんてしてない。優勝出来たのはお前の実力だろ」

「けど、アンタが居たからっているのも大きいし。強引だったけど一応御礼は言っておきます。ありがとうございました」

「まあ、わかった。あと、すごい今さうだけど敬語じゃなくていいぞ」

「・・・けど、アンタの方が年上だろ。いいのかよ」

「いいよ、別に」

全然問題はない。大体、最初は敬語だったけど途中から怪しくなつて、最後の方はまんまため口だったしな。

それに年功序列とか嫌いだ。どうして数年かそこら早く生れただけの奴に敬語なんて使わなきゃいけないんだよ。

「じゃあ、わかった。羅漢つと、姓名は嫌いなんだっけ？なら、狂気か。あんたも私の名前を呼ぶ時は千雨でいいから」

「チウタン、ジャナクテイイノカ？」

「あんたは黙ってる人形。せつかくスルーし続けてやってんだから！」

「まあ、落ち着け。千雨はもう行くんだろ？」

「ああ、そうだった。早く行かなきゃクラスの当番に間に合わねーや。またな」

「ああ、じゃあな」

もう二度と会うことが無い方がお前としてはありがたいんだろうよ。顔を見ればわかる。俺と似てるよ。平和とかいまの日常を千雨は愛してる。

俺みたいな非日常とは関わらない方がいい。
ファンタジー

「・・・気付イタカ」

「・・・ああ、あれは天性のものだな。幻覚、錯覚系統の魔法に耐性がある。普段ならまだしも学祭中にお前が動き喋ることに疑問を持てるなんて、かなりの強度だ。認知誤差の結界が効いてない」

憐れとしか言えない。いや、千雨自身に何の罪はないのだから純粹に可哀想か。

どちらにせよ神とやらは好奇心云々の前に猫を殺すのが好きらしい。それからの天罰を甘んじて受けようなんて考えてた少し前の自分を殴りたい。

「助ケネーノカ？人並ミニお前八優シインダロ？」

「関わってどうする。千雨からすれば俺は遠ざけたい物の権化だ。確かにアイツが魔法を知らなければ面倒事に巻き込まれることは多いだろうが、少なくとも厄介事に巻き込まれることはないさ。それに俺は殴って解決しないことは苦手なんだ」

いまの弟子たちとは違う。

千雨のあれは後戻りできるものだ。長くてもあと4年か？

それまで我慢して、麻帆良から出て行けはいいだけの話。

俺に関るよりそうすることの方がアイツに取って幸せだろう。

「そういう訳だ。行くぞ、チャチャゼロ。そろそろ日が傾いて来た。エヴァ達と同流する時間だ。待ち合わせ場所は・・何処だったっけ？」

「タシカ龍宮神社ダロ？」

ザワザワ・・・ザワ・・ザワザワ・・・ザワ・・・

「まほら武道会予選会場？」

日も暮れてきた頃、エヴァと茶々丸と合流するために待ち合わせ場である龍宮神社に来たんだが、何やら騒がしい。
立てかけられた看板を見れば面倒事の匂いしかしい文字。
思わず引き攣る口元で希望的観測を漏らした。

「まさか、エヴァの奴、これに出るとか言わないよな？」

「そのまさかだっ！」

声のした方向を仕方なく振り返るとそこには茶々丸の肩の上で仁王立ちするエヴァの姿があった。
なにをやってるんだろ？スカートだから下着が見えるぞ。

「こんばんは。狂気様、姉さん」

「こらっ、頭を下げるな茶々丸。落ちるだろうがっ。バランスを取るのが難しいんだぞ！」

「はあ、だったらそんな珍妙な真似をするな。お前は何がしたいんだ？」

「この人混みだからな。お前達を探してやっていたんだ。感謝くらいしろ」

「それには感謝してやってもいいが・・・」

飛び降り見事な着地を決めるエヴァに呆れながらため息をつく。
探し方はもう少し別の物があったんじゃないのか？
周りの視線が少し痛い。別に気にすることでもないんだろうから、いいか。

「もういい。それよりエヴァ。もう一度聞くがお前はこの大会に俺が出るというのか？」

「ああ、そうだ。キャッチフレーズが麻帆良学園最強への挑戦だか

「らな、お誂え向きだろ？」

「それはあれか？とてつもなく高度な冗談かなにかか？こんな大会に俺が出たら試合の意味が消えるぞ。一般人じゃ逆立ちしたところで俺に傷一つ付けらんねーよ」

俺の言葉にエヴァは笑う。声は漏らさず口元のみを吊り上げるそれはまさしく凄惨な笑み。

こつという表情を見ると正しくエヴァは悪のラスボスって感じがしてとても可愛い。

しかしそう思う反面、継いで出る言葉が不安でしようがない。

「安心しろ。これにはボーヤ達も出るそうだ。奴らなら運が良ければお前に突き指くらい追わせられるだろうよ」

「……一応はお前の弟子だろう」

「もうソレは過去の私に投げた。私の知ったことじゃない。いいから出る。公式にボーヤをボこれる絶好のチャンスだぞ？」

心の底からため息をつく。大方暇つぶしの類なんだろうが悪い冗談だ。

そんな真似をして、失態を晒し瀬流彦さん達に借りを作ってまで立てた不可侵条約が消えうせたらどうしてくれるんだ。

「止めてくれ。どういう積りだ。俺を怒らせるのが愉しいのか？」

「む、まったく、わかった、わかったから睨むのは止せ。冗談の通じない奴だ。やれやれ、私はお前をそんなキレやすい子に育てた覚えはないぞ」

「俺もお前に育てられた覚えはねーよ」

肩を竦めるエヴァの隣では茶々丸が微笑ましそくに笑う。

頭の上を足蹴りされていることからわかるがいまの冗談はチャチャゼロのツボに入ったようだった。

「実はな、さっきそこで全身をロープで覆った変態にあつたんだが——」

「ロリコンの変態に襲われた？あぁ、そいつをぶっ飛ばしてこればいいんだな？なら何も武道会なんて面倒な真似をしてくてもいまから殴り飛ばしてきてやるよ。安心しろ、ばれなきゃ犯罪じゃない」

「——人の話は最後まで聞かんかつ。そして誰が変態好きするロリだ！」

目の前で手を振り上げ怒っている彼女以外に誰がいるんだろうか？

「いいか、アレが変態なのは間違えないがただの変態ではない」

「……度し難い程の変態なのか？流石に俺もそれは恐いぞ」

「違う。アレは——英雄だ」

瞬間、血が爆ぜた。血液が沸騰し全身の体温を上げて行く。

情けない。この程度で取り乱す自分を恥じながらも抑えられない。が、こればかりは仕方がない。

「どういうことだ？英雄だと？なぜそんな奴が此処にいる？」

「知らん。昔からアイツの思考だけは理解不能だったからな。ボーヤに何か用でもあるんじゃないのか？」

「そいつは誰だ？ 詠春や親父、ではないんだろ？」

「ああ、お前も奴から聞いた事くらいはあるだろ。大魔法使いアルビレオ・イマ、重力魔法の使い手で正直性格の悪さはナギ以上だ」

「アルビレオ・イマか」

親父から聞いた話を思い出すが、変態という印象しかない。
あの変態親父が変態というのだから度し難い変態だと思っていたがまさかロリコンの変態だったとは。

「変態変態イイ過ギダゼ」

「人の思考を読むな」

「頭ノ上ダト読ミヤスインダヨ」

「なんだそれ、こわいな」

「で、どうするんだ？」

割って入る形で首を傾げるエヴァを見詰め、一考するが、どうする？
英雄という単語には虫唾が走るが昔ほどではない。
親父に精神的にのされて以来、一応は衝動を抑えられるレベルにはなった。

此方に手を出さない限りは放っておくのも手なんだが・・・

「考えている暇があれば自分の目で確かめればいいだろう。爺共も大会に出るくらいで可侵されたと騒ぐほど馬鹿じゃあるまい。諍いを起こしたくないのはあっちも同じはずだ。ならなぜお前ばかりが気を使うんだ。情けない」

「それは、確かにその通りだが」

「それにボーヤを殴れるまたとない機会だぞ？」

「お前はそればかりだな」

とても良い笑顔でそういうエヴァにため息をつく。

隣で何故か茶々丸も嬉しそうにしているのが若干怖い。

「狂気が言ったのだろう？私の裸を見たり茶々丸にセクハラしたボーヤを殴り殺してくれると」

それを言われるとお終いだった。

「・・・わかった。出よう。確かにネギは一度殴って置きたかったんだ」

「ふっ、それでいい。行くぞ！我々エヴァ一家の力を見せてやるのだっ！」

「おーーです」

「オーーダナ」

手を振り上げるエヴァに続く二人。

「いや、待て。二人も出るつもりか？」

「いえ、私は実況の仕事がありますから」

「俺ハ出レルカナ？」

「流石に無理だろ」

「なにをしている！早く来ないか」

大人しくエヴァの後ろを付いて行く。

「まほら武道会」予選会は20名一組のバトルロイヤル形式！！

AからHまでの各組より2名ずつが選出！！

合計16名が明日の本戦に出場となります！！

板張りのステージの上に立ちながら放送を聞く。

幸運なのかどうなのか俺のグループはA、見知った面子はだれ一人いない。

エヴァや何故か参加していた弟子のひとりと戦わなくてすむのは嬉しいんだが、ネギやイマのいるBグループならネギを殴りイマを締めあげれば目的達成で本戦なんて面倒なものに進まずに済んだんだがそううまくはいかないようだった。

優勝賞金一千万円！

くじにより20名そろった組から順次試合開始！！

定員160名に達するぎりぎりまで参加受け付け中！！

麻帆良の強者のみなさん奮ってご参加を！！

「一千万か、エヴァは知らんが俺からすれば大金だな。卒業後の旅費の足しにでもするか」

周りが五月蠅い中でそんなことを考えていると視線の先に弟子一号を見つけた。

取りあえず手なんかを振ってみたんだが、苦笑いを返されるだけだった。

「デコ弟子の奴、どうしたんだ？」

「ソリヤ、才前ノ半径1m以内誰も近寄ラネー光景ヲ見タラ笑ウシカネーヨ」

「周りの奴らに根性がねーだけだろ」

あからさまに挑発するが誰も殴りかかって来ない。

むしろ舌打ちを零した俺を避けるようにさらに誰もいない輪が広がった。

わかっていたことだが、若干傷つく。

今の俺の格好は着ていたコスプレ衣装から学らんに着替え頭にはチヤチャゼロ。

誰が言い始めたかは知らないが、幻の不良だかバイオレンスドールだが暴力機巧などと呼ばれている基本的な服装。

少しでも威圧できるかと思っただが、効果てきめん過ぎたようだ。というかこの会場に居るガラの悪い奴は全員殴ったような覚えもある。

るのだから仕方がないのかもしれない。
アイツらも馬鹿じゃないということだろう。

「しかし、楽でいいな。このまま数が減るのを待ってれば・・・へえ、やる気がある奴いたんだ」

飛んできたパンチを掴みながら感心する。

何処の誰だか知らないがその勇氣だけは褒めてやりたい。

そう思い振り向いた先に居たヤツを見て、思わず笑みを零す。

「ヤベエ、燃える。チャチャゼロ、ちゃんと捕まってるよ」

「アア、ケドヨ。アレ、多分妹ノ弟ミタイナモンダカラヨー。ヤリスギンナ」

「わかってる。言っただろ。ロボットは燃えて萌える。壊しはしない」

ロケットパンチを飛ばしてきた大柄なそいつに向けて突っ込んだ。
柄にもなく高揚する気分が抑えられない。日中みたロボティラノもかなりの物だった。がコイツはそれ以上に俺の琴線に触れる。

「これくらいは避けられるか？」

人間で言うところの達人クラスの速さで放った周り蹴りは両腕でガードされ後ろに押されながらも耐えられる。

いい、すごくいい。避けられるかと言ったがああ体型だ。
できることならその鉄で出来た身体でガードして欲しかったんだよ。

「固いな。さすがロボ。本気を出せ。こっちも乗ってきた」

「了解シマシタ。デハ初動カラパワー全開^{マックス}デ」

口が開き出てきた何かからビームが放たれる。
やばい、ロケットパンチにビームとか最高に痺れて懂れる。

「は、はは！いいな。それでこそロボ。やっぱお前、最高に萌えるはっ！そら、今度は避ける」

「了解シマシタ」

放った気弾。それをコイツは背中からホバーを出し人外な速さで避けてくれて、なんていい奴なんだろうと思う。
周りではコイツのビームでむさ苦しい男共の服が脱げ地獄絵図が出来上がっているが気にすることなく大笑する。

「あはははは！いい奴だな、お前。その機動力は現代じゃありえねえ、やっぱ茶々丸の弟か？」

「ハイ。T - A N K - α 3 田中トイイマス。オ兄様ト才呼ビシタ方ガイイデス力」

「お兄様？よく分かんないが好きにしろ。次で終いだ。根性を見せろっ！」

「了解シマシタ」

放たれたビームを掻い潜り間合いを詰める。
ボディブローを叩きこむが半身を逸らされ、かわされる。
向かってきたパンチを正拳で返せば相手がグラつき姿勢を崩した。

「まあ、こんなもんか」

顎を突くように繰り出した拳を寸で止めながら息を漏らす。
断じてため息ではなく、感嘆の息だ。よくやったと褒めてもやりた
い。

「お前を壊したくない。引いてくれるか？」

コイツもロボならなにかしらのプログラムで動いているとわかって
いるんだが、一応言っておく。
殴りたくないのも壊したくないのも本音だ。

「了解シマシタ」

「・・・いいのか？」

「ハイ、上位命令デスノデ」

「上位命令？どういう意味だ？」

「禁則事項デス」

案外呆気なく退いた田中は直ぐにステージの上から引いて行き、俺
は一人残される。

上位命令？どういう意味だ。もう一度聞いたところで禁則事項だとい
うならアイツは教えてくれないだろうが、気になるな。

「まあ、いいか。それよりそろそろ雑魚の始末を」

皆様お疲れ様です

本選出場者16名が決定しました

「あれ？」

気付けば終了のアナウンスが流れ、Aグループに立っているのは俺だけ。

いや、端の方に辛うじて立っている無駄に顔の濃い男だけになっていた。

「どうなってるんだ？」

「才前ガハシャイデル間二大半ノ奴ハ余波デ吹き飛ンデタゼ」

「……それは、御愁傷様で」

本戦は明朝8時より龍宮神社特別会場にて！

今さらだが明日クラス当番がある、午後からだから大丈夫か？

狂気の沙汰 麻帆良武道会（前書き）

なんとなく一人称でやってみたけど、無理だ。
ムずい。・・・（「」；） うーん
次から3人称に戻します。

狂気の沙汰 麻帆良武道会

ある日気が付いた時から不快だった。

ああ、痒い。汚い。どうして俺の腕は赤黒く染まる。

俺の体は俺もののなにどうして他人を救うために戦わなくちゃならない。

遠に疲弊していた精神はその日を境に擦り減り始める。

完全と言われた鋼鉄は小さな傷を重ね曇り始め、戦うための兵器は逃避こそが至上だと計算を叩きだした。

膨れ上がる。自己愛、自己愛、自己愛。

かの英雄は既に壊れていた。

雄記より抜粋

鋼鉄少年英

目が覚める。口の中にはえもいえぬ苦みが広がり不快感を感じさせた。

頭を手当てれば冷や汗による冷たい感触。

はあ——息を吐きながら天井を見上げる。

「嫌な夢を見た」

最悪な目覚め。覚えてはいないが悪夢の類を見たと言言できる。

麻帆良祭の中、何故そんな日に不快感を覚えなないといけないのだ

ろうと考えたが、すぐに結論が出た。

「まほら武道会。ああ、そういえばそうだった。なら悪夢の一つや二つ見るか」

面倒だ。それが素直な感想。

だが、エヴァと約束したこともあるからサボれない。そして、事実気になることもあるのだから仕方がない。

アルビレオ・イマの存在。あれは何だ。なにをしに来た。

考えたところでわからないのだから考えてしまう。

自分と英雄は相性が悪いと分かっているのだから、今回も何か不吉なことが起きる気がしてならなかった。

「イマの意図を掴む。それが第一目標。ついでにネギを殴る。それが次点。武道会で俺がすることはわかりやすい位に明白か」

立ち上がり伸びをして目覚まし時計を見る。

こんな早起きしたのは何時振りだろうと自分に感心しながら着替えを済ませ部屋を出た。

「いつてきます」

誰もいない部屋にかけられた声に、無論返事をする物はいなかった。

「狂気さん」

声をかけられ、振り返った先に居たのは褐色の肌に流れるような黒髪的女性。龍宮真名だった。

傍にある時計を見ればまだ6時前、こんな時間に何をしていたのか。片腕にはバイオリンケースが握られていた。

「こんな時間に、こんな場所で何をしているんだ？」

「それは私のセリフだよ。貴方がこんなに早起きするとは珍しい。殆ど寝ていないんじゃないか？」

「確かにいつもよりは早起きだが、寝ていないは言い過ぎだ。数えれば7時間は寝ている」

「え、だが、昨日の夜は遅くなっただろう？」

「昨日の夜？確かにエヴァの家に行ったが、どうして知っているんだ？」

龍宮の態度に狂気は首を傾げる。

前々から妙に大人びていて変な奴だとは思っていたが、煮え切らない態度を取る奴ではないのだが、そんなことを思っている間も龍宮は頻りに眉を顰めて何かを考えているようだった。

「ああ、そういうことか。——超の奴、なかなかどうして大胆なことを」

「超鈴音がどうかしたのか？」

「いや、此方の話だ。気にしないでくれ」

「気にしないでといわれても、気になるんだが」

目を細め顔を見ると龍宮は困ったように笑いながら人差し指を一本立ていった。

「困ったな。仕事上のことだからあまり言いたくはないんだが・・・ヒントを一つ言うなら、狂気さん。貴方はもう一人の自分というものを信じるかな？」

「もう一人の自分？世界には同じ顔の人が三人は居るとか、ドツペルゲンガーとかいう妖怪の話か？」

「どう解釈してもらっても構わないよ。ただこうして狂気さんが私と話している時、別の場所では別の誰かと話している別の狂気さんが居る。言い方が少しややこしいが、そういう現象を信じるかどうかということだね」

困ったような笑みは消え、どこか楽しそうな表情でそういう龍宮。いつも以上に意味が不明なその問いを一考した後、狂気は不満そうに眉を顰めながら返した。

「信じてないな。いや、信じたくないか。『自分以外の意思で動いている俺』を信じるかということだろう？ここで言うところの『自分』をいまこうしている俺だとして、その意思以外で動いている『俺』なんて俺は認めない。それじゃあただの木偶だろう。俺の意思がない」

考えた末に一蹴したような答えを出した狂気に一瞬だけ呆気にとられた後、龍宮は心底おかしそうと笑いを堪える。

「ヒントのつもりだったのだけれど、まさか射てくるとは思わなかったよ。しかし、答えがわかったところで信じないというのなら意味はないね。超がそこまで考えての行動だというのは本当にすごい奴だよ」

「なにをぶつぶつと意味がわからない。どうしたんだ？」

「いや、すまない。仕事上のことでね。これ以上は言えないよ」

意味が不明の質問をした上に笑いながらそういう龍宮に苛立ちを覚えた。

狂気は眉を顰めながら目を細め言う。

「感じが悪いな」

「狂気さんが苛立とうがどうしようが、私には関係ないね」

辛辣な言葉を何処か嬉しそうに言う龍宮。

本当にこいつは仕事人だな——そう漏らしながら諦めたように息を吐いた。

「それよりも早く行こうか。まほら武道会、狂気さんも出るのだから？そろそろ開場時間だよ」

「ああ、わかったから手を引っ張るな。たくつ、なんか何時もより馴れ馴れしくないか、お前」

「そうだね。心境的には完璧超人だと思っていた人の少し情けない姿を見て、母性が刺激されたのかな？」

「・・・意味が不明だ」

「ふふ、いいから行くよ」

そのまま手を引かれながら、狂気は龍宮神社へと向かって行く。

「控室にはいかないのかい？」

「ネギに会うからな」

「ああ、なるほどね」

群衆のなか立ち尽くしているとアナウンスが聞こえてきた。

只今よりまほら武道会第一試合に入らせていただきます！

「茶々丸。隣いいか？」

「あ、ええ。どうぞ狂気様」

解説席らしき場所にいる茶々丸の少し横に腰をかける。

欠伸を噛みしめる程に眠い。だれか早起きしたのを褒めて欲しいくらいだ。

「珍しいですね。てつきり遅刻をなさるとばかり思っていました」

「一応な。麻帆良最強の座。そんな子供っぽいものに——興味がないわけじゃない」

「ふふ、そうですか。微笑ましいものです。しかし、そんな心配をせずとも最強の座はマスターと狂気様の二翼でしょう?」

「一応といった。本命は別にある」

選手席に眼をやればネギや見知った嫌な面はあるが、フード姿の男の姿はない。

仕方がないなと頷いてから今は試合を鑑賞しようと舞台の上に眼をやった。

こ これは——? 小太郎選手信じられないスピードで間合いを詰め……!?

い 今のは掌底アッパーでしょうか!?! 少女の体が10mは吹き飛んだ——っ!

何処かで見た顔が上空に打ち上げられ、水の中へと落ちて行く。やった方の少年の頭には犬耳がついていた。

仮装かそうではないのかはわからないが、多分本物だと思う。だとすれば狗族だろうか。どうしてこんなところに?

「かの少年はネギ先生のお友達らしいです。少し前に京都から此方へ越してきたそうです。たしか彼は修学旅行の時、木乃香さんの誘拐犯の一味だったはずですが記憶にはありませんか?」

「……覚えてないな。だめだ、あの時はデコ弟子の泣き顔とフ

エイトの無表情、あとエヴァの異常なはしゃぎっぷりくらいしか記憶にない」

その三つの衝撃が凄すぎて正直、今までフェイト以外にも敵が居たなんてことは知らなかった。

「だが、元敵を友と呼ぶか。昨日の敵は今日の友と。笑えるほどに優しいな、アレは。流石は英雄あんなモを目指しているだけはある。目に映るものの全部を救うつもりか？」

「あんな小さな手では何時か取りこぼすのでしょうか。その時、溢れる者が哀れでなりません」

そんな会話をしていると次の試合、龍宮の試合が始まる。

相手はデコ弟子が言うに一般人最強の部類、クーフェという名の少女だった。

楽しい試合になりそうだ。

口元を歪め見ている狂気表情を、茶々丸は何処か懐かしそうに見つめていた。

彼は私にとってとても大切な人間だ。

他の何者にも代えがたい、かけがえのない人。

恩がある、などという一言ではすまされない、大恩ある相手だよ。

おそらく、私が彼に対して生涯を掛け、何をしたところで、これで恩が返せたなど思うことは一生ないだろう。

血の匂いしかない間違えなくどん底の底辺でもがいて居た時、差

しのべられた彼の手は、大袈裟でも何でもなく、ヒーローの救いの手に見えた。

今でも私は、あの出来事を思い出すだけで、胸の奥に熱いものが込み上げる。

あの戦乱の世で、人が人を救うなどとても嘘臭いことだけれど、それでも私は、あの日、彼に救われたのだと思っている。

どんな思いがあつたにせよ、どんな打算があつたにせよ、その事実が私の中で揺らぐことはないだろう。

だから私は、地獄のような数カ月をへて、ようやく彼に頼られるようになったことが、にやけてしまうほどうれしかった。

主と従者という関係で彼と話ができる、それだけで十分だ、満足だ。それ以上の関係なんて、とてもじゃないがあ頃の私は望まなかった。

私程度の小娘は、おそらく話が出来たというだけで感謝を捧げなければならぬ相手なのだと、嘘偽りも無く今も思っている。

無論、かといって、彼がお高くとまった男性なのかと言えばそんなことは全くない。

そこを誤解されては困る。

むしろ、私は彼ほど善良な人間には生れてこのかた会ったことが無い。

それこそ、現代の物語で読むヒーローという人物の大抵はこれ以上も無く英雄然としているけれど、私の知るヒーロー^彼は、自分の所有する才能、能力をもっと自覚するべきだろうと忠告してしまうほど、過剰なまでに誰に対しても公平だった。

なにもないあの地で地べたをはいずり回っていた私に手を差し伸べてしまうほどに。

英雄の中の英雄。

誰からの受けもよく、仲間からの信用も厚い。

真面目である以上に、とても面倒見のいい性格。

少し女心に疎い位しか、あげつらえる欠点が思い付かない。

確かに、彼の夢は控えめに言っても夢物語で、大仰に言えば荒唐無稽な戯言の類。

けれど彼はそれを公言し続けた。自分でも叶わないとわかっている夢を追い続けていた。

恥も外聞も無く、言ってしまうえば、私はそんな彼に惚れたんだ。

一目惚れだったなどと、言うつもりはない。

けれど、二度目に見た時には、もうすでに好きになっていたのだろうと確信する。

だから、あの輝かんばかりの笑顔を思い出す度に、私の目は何時も、彼の姿を探している。

好きという言葉なんて、もう言える筈も無いのに、無意味な行為をくり返す。

私の初恋は叶わなかった。いや叶うとか叶わないとかいう以前に、始まりすらしなかった。

私がこの思いが恋心だと理解出来る年頃になるころには、既に彼は何処にもいなかったのだから。

あまりにも理不尽な別れだった。何度泣いたか分からない。

何度泣いても、なんとあの名を叫んでも、もう彼が笑顔を私に向けてくれることはなかったけれどね。

操を捧げようと思った。もう会えないけれど、私は彼を確かに愛していた彼もまた私のことを大切な人だと言ってくれたことがあったから。

理不尽な別れを恨んで、恨み続けて、この胸にあるあの思いは消えることがないのだと確信していたから。

けれど、どうやら私はそんなに綺麗な女ではなかったのだと昨日理解したよ。

あの時、彼に対して抱いていた恋心は片時も離さず身に着けていたロケットから目の前にいる彼へと移ってしまった。

——なあ、龍宮

そう呼び掛ける声は何時ものように慄然としたものではなく、口元は緩み、常に苛立ち映っていた目は何処までも禍々しく揺れていた。私は悟った。目の前にいるのは何時もの彼ではない。私の知っている彼じゃない。

けれど、慄然を促すその声は確かに怒りに燃える彼が出す声だったから、これから紡ぐ言葉は本気なのだと理解した。

——一つの世界を、救ってみないか？その胸に秘める愛でさ

私の初恋の彼は彼のように禍々しくは笑わなかった。

私の知る彼は初恋の彼のように夢を語る人じゃなかった。

けれど、その言葉は紛れもなく彼の言葉で彼の声で語られた言葉だったから。

私は彼に恋をした。人生で二度目の恋に落ちた。

彼の眼に映るのはたった一人の女性だと理解しながらも叶わない恋に身をゆだねた。

「なるほど、浸透勁という奴か・・本当にやるじゃないか。クー、見直したぞ」

「いやあ、まだまだアルよ」

腹部に叩き込まれた掌から内臓にかけて激痛が送り込まれるのを感じた、完敗だ。

羅漢銭なんて大道芸まで出したのにこれとは少し情けないが、いいだろう。

口元の笑みを絶やす必要はないさ、私は確かに彼の期待道理に動けたのだから。

古菲選手勝利——！！龍宮選手を下し2回戦に進出です！！

皆様 お待たせいたしました！！

板の張り替えが終了しましたので第五試合に移らせていただきます

それにしてもレベルの高い大会になってきました！！

「狂気様。 出番です」

「ああ、わかっている。わかっているが、そうか。相手はアイツだったな」

思わずもれる舌打ちを隠さずに舞台の方へと向かっていく。

背にかけられる慰めの言葉に手を上げて返事をしてから舞台にたった。

対面する形で向き合う東方には俺のことを親の敵であるかのように睨みつけている女が居た。

西方、聖ウルスラ女子高等学校2年

高音・D・グットマン選手！

東方、対するは神楽学園高等部3年

羅漢狂気選手！

互いに今回のような格闘大会に出るのは初めてな為
その実力は未知数だがかし！

狂気選手は麻帆良最強と名高い不良生徒！

真面目な委員長タイプである高音選手が何処まで喰らいつける
のか

第五試合ファイト！

何処かで見た、確か夕映と同じクラスの放送部部員の試合開始の合
図が鳴っても対面した女は動かない。

思わず苦笑を漏らしながら声をかける。 思っことはあまりないが、
これはただの嘲りだ。

「どうしたんだ？ 高音。 お前が俺に勝とうと思ったら、これはもう
開始直後の不意打ちくらいしかないだろ」

「ふざけないでください。 不意打ちだなんて、 そんな卑怯な真似を
私がする筈がありません！」

「不意打ちが卑怯か。 まあ、その考えは嫌いじゃねーよ。 けどさ、
好き嫌いで負けてたら世話ねーよな。 お前じゃ俺の足元にも及ばな
い、勝つ気ないならさっさと降参してくんねーか」

「あ、あなたは相変わらず私を怒らせるのが大好きみたいですね」

「まさか、んな変態じゃねーよ。お前こそなんで顔紅くなってるんだ？罵倒されて感じたか？マゾか？変態か？救いようがねーな」

「だ、ただ誰が変態ですか！もういいです、喋るな馬鹿！その腐った性根を殴り殺してあげます！」

「おいおい、殴った上に殺すなんて物騒なこというなよな」

お、おーい お二人さん

試合を始めてください

解説者席、そこは文字通り試合を解説する者が座る席。

茶々丸と時代錯誤な学生服に身を包んだ漢、男ではなく漢、豪徳寺はその席に座っていた。

「いやー、まさか羅漢の奴が出場しているとは驚きです。これは高音選手の実力次第では面白い試合になるかもしれませんね」

「豪徳寺さんは狂気さ、いえ羅漢選手のことを知っておられるのですか？」

「ええ、絡繰嬢にはあまり馴染みはないかもしれませんが高校生の間では有名ですよ。羅漢の名は。バイオレンスドール、暴力機巧、デス眼鏡高畑と並んで恐れられている存在ですからね。曰く、最強の不良。かくゆう自分も一度喧嘩を挑んでばこぼこにやられましたから。ははは」

「では、やはり羅漢選手が有利と考えていいのでしょうか？」

「はい。高音選手には悪いですが自分は羅漢の奴を押します。正直、アレは人間とは思えないほど強いですから」

「となると、この試合で羅漢選手の勝利。次の試合が順当に行くのなら勝者はやはり高畑選手でしょうから、準々決勝では最強の広域指導員対最強の不良という好カードが切られるということですね」

「確かに、高音選手や坊主には悪いですが夢の対決が実現するでしょうね。正直、今大会最大の目玉になるかもしれません」

以上、解説席からでした！

高音とぐだぐだやっている内にか解説が流れていた。

というか茶々丸はアナウンサーやってたんだな。

この試合が始まるまでは俺が話しかけていた所為でなにもやってなかったきがするんだが、悪いことしたかもしれない。

「にしても、随分アウェイだな、高音。いつもとは逆の立場じゃないか。どんな気分だ？立派な魔法使い候補生」
マギステルマギ

「別に何も感じません。凡夫には好きに言わせておけばいいのです、正義の使者たる私が万人に受け入れられる存在でないことはわかりきっていること。私を讃えるのは私と同じ正義の炎を胸にもつ選民だけで十分ですし」

思わず浮かぶ苦笑いを止めない。選民、選民、正義の使者、選ばれた存在。

そんなことを声高に叫ぶ声には虫唾が走るが、あり方だけは嫌いじゃない。

目の前の奴には奴の信じる者があるというだけだろう。

それを押し付けてくるタイプのガンドルフィーニなんかは大嫌いだが、そうしないコイツにはまだ好感が持てるというものだ。

まあ、コイツからしてみれば正義や英雄紅い翼を信じない異常者である俺なんか枝葉にかけerる必要がないということなんだろうが。

「高音。お前は俺が嫌いだろうが、俺はお前がそこまで嫌いじゃねえわ。ガンドルフィーニやネギが俺の敵なら、お前は好敵手だ。ライバルまあ、致命的な弱点を抱えちゃいるが」

「ふん、わかりきったことを言っているいい気にならないください。私は正義の使者、あなたは傲慢な悪役。そんなこと2年前から知っています。ですから、覚悟なさい！今日こそ私の鉄槌があなたを潰します！」

叫びながら突っ込んで来る高音。速度からして戦いの歌でも使っているんだろう。

繰り出される拳は黒い影で覆われ威力を増していた。当たれば岩石程度簡単に碎けるだろうそれを避けながら笑う。

ああ、本当にお前は好きじゃねえが嫌いじゃねえ。

これがもしネギなんかだったら観衆の中目撃されることも意に反さず、派手な魔法を使うんだろうが、高音はしっかりと周りを慮っていた。

「だから、なあ。それがお前の弱点だ。俺は悪役なんだろう？それをお前は倒すんだろ？なら、周りなんか気にすんじゃねえよ。意を通せ、塵芥誰かなんて気にもせずてめーの力に酔いしれてる。それが、英雄ヒーローだろ。だが、出来ねえお前。優しすぎんだよ、高音」

—— 大体、学祭中は世界樹の恩恵で強力な認識誤差が働いてる。
結構派手にやったって大丈夫だろうが。

そう耳元でささやくと、それに気付いた高音は狼狽する。

その様子を見ながらまた思う。ああ、やっぱり俺はコイツが嫌いじゃねえ。

そして、カウンターをいれるようにその顔面を殴り飛ばした。

観客からすればそれは見たことのある光景だった。

第一試合で吹き飛ばされた少女と同じ様に高音は吹き飛んで水の中へと落ちへ行く。

ただ二つ違う点があるとするとするのなら、それは吹き飛んだ理由が風圧などという生優しいものじゃないということと、勝者は沈んでいく敗者に助けようという気がまったくないという点だった。

会場が静まり返る。なんだ？ どうしたんだ？ 首を傾げながら周りを見渡すが、理由はわからない。

何時までも見せものの様に舞台に立っていたくはないんだがな、審判兼実況をしている少女の方へと振り返る。

「おい、俺の勝ちでいいんだよな？」

「え、ええ。っていうか、やりすぎでしょ！ 女の顔を殴り飛ばすなんて、何も感じない訳っ！ 失格にするわよ！」

何処かで見たことがあるような奴は何やらいきなり喚き始めた。
なに言ってるんだらうコイツ？ とか思う。俺は何もルール違反はしてないんだがな。

「阿呆か。女の顔殴るのが反則なら、そう最初っから言っておけよ」
ため息をついてから舞台を降りて行く。背から聞こえてきたのは投げやりな勝利宣告だった。

「なあ、なんだこの空気。周りからすげー睨まれてる気がするんだけど、俺が勝ったんだよな？なんでなんとか起き上がった高音の方が拍手されてるんだ？」

ネギと顔を合わせたくないから選手席に戻らず観客席に戻る。
水の中に沈んで行った高音救出の為、一時試合中断させた暇をぬって隣の茶々丸に当然な疑問を投げかけるが、茶々丸もわからないように首を傾げるだけだった。

「そりゃ、当然でしょう。完全に悪役でしたよ。羅漢さん」

俺も茶々丸も首を傾げる中、答えてくれたのはいつの間にか傍に座っていた千雨だった。

昨日とは違い、服装は普通の学生服。その上で眼鏡を付けているから、正直凝視しないと誰だか分からなかった。

「そ、そんなに睨まないでください。私が言ったのは一般論なんですから」

「いや、別に睨んでいるつもりはないんだが、悪い。それより悪役ってどういうことだ？俺は何の反則も犯さずスポーツマンシップに則ったつもりなんだがな」

気も、羅漢シリーズも、魔法すら使わなかった。手加減としては上等だし、事実高音も大きな怪我はしていない。顔が大きく腫れあがっているくらいだ。

「スポーツマンシップに則った奴は女の顔面を躊躇なく殴ったりしませんよ」

「女の顔面は殴らないでくださいなんてルールには書いてなかったぞ」

「ルール以前の問題というか、一般常識なんですけどね」

「長谷川さん。狂気様に一般常識など求めてはいけません。この方は常識を超越していますから」

「なあ、茶々丸。さらっと俺のこと馬鹿にしたか？人を非常識みたいに言うんじゃないよ」

「あ、なんだロボ子、じゃなくて絡繰。お前、狂気さんと知り合いなのか？どういう関係だ？“様”付けなんて」

「ええ、実は・・・狂気様は姉さんの恋人でして」

「えっ？へ、へー、そうなんだ。ふーん・・・ていうか、お前に姉とか居たのか？ロボ子じゃなかったのか？」

「おい、何無視してんだよ。というか、話が逸れてるだろ」

危ない方向に突っ込む始めた千雨。コイツはアレだな、体質以外に
ファンタジー
もこういう好奇心とかも非日常に突っ込んでしまう原因だわ。

さらに言えば有能くせーから手に負えねえ。

「あー、はいはい。相手をしてあげますから眼鏡を取ろうとするな。まったく、子供みたいなことする人ですね。私の中の貴方に対するイメージが崩れましたよ、今」

「・・・俺だつてやりたくてやってんじゃねーよ」

お前の為に話を脱線させてやったんだ。

「ならやらなきゃいいでしょ。で？何の話でしたっけ？」

「どうして女の顔殴っちゃいけないのかという話だ」

「普通そうでしょ？」

「なら、女は男の顔殴っていいのか？不平等だろ。時代は男女平等社会なんだろ」

「それは、まあ、そうですが・・・あれですよ、顔は女の命っていうでしょう」

「それを言うなら髪じゃないのか？大体、命っていうなら金的も禁止をルールに入れるべきだろ。男の命だぞ？」

「き、金つつ・・・なに言わせる気だっ！」

「・・・おもつ糞顔面殴られたんだが、いいのかこれ？
平手じゃなくてグーだぞ。」

「狂気様、長谷川さん。漫才はそれくらいにして、そろそろ次の試合が始まる様ですよ」

茶々丸の言葉で舞台に目を向ければ、ネギと高畑が立っていた。高畑は何やら気色悪くにやけて居て、ネギは緊張しているのか固くなっている。

それではみなさまお待たせしました

第六試合　fight!!

そうして、最高最悪の試合が始まった。

「お、おい。なんだよアレ」

隣にいる千雨の顔が青くなっている。

たくつ、ネギがどうしようも無いのはわかっていたが高畑まで気づかなかったのか。

幾ら世界樹の加護があろうとも、認知誤差結界が効かない奴だっているんだぞ。

「オカシイダロ！今のリアルタイムトンデモ衝撃映像・・・つかなんで周りの奴誰も気づいてねーんだよ！」

「うるさいぞ、千雨。目立っている」

「だって、あんなの高畑死んだんじゃないか！て・・・なんで無事なんだよー！」

「黙れ。死にたいのか？」

「つつ、」

立ちあがった千雨を無理やりに座らせる。

「なにも気づくな、疑問を持つな。今の光景は全て泡沫の夢だと思え。さもなくば、喰われるぞ。お前が大嫌いな現実^{リアル}に」

「ど、どついう意味だよ」

「疑問を持つなと言ったろう。好奇心はお前を殺すぞ。猫。今日の前で起きているもの全て、ヤラセだ。それで納得しろ」

「・・・・・・・・」

うなだれるように、いや恐怖心からか膝に顔を埋める千雨。
やりきれないな。今は麻帆良での俺の立場が前より不安定な所為で、
派手な動きもできはしない。

「学園祭が終わったら、納得させてやるから。今は耐えろ」

学園祭が終わったら、全て忘れさせてやる。

「ああ、わかった」

覇気のない声が耳障りに聞こえる。

ああ——苛立たしい。

狂気の沙汰 麻帆良武道会（後書き）

次回、武道会編完！

・ ・ ・ ・ ・ てっ、2話しかやってねえw（ ; ）w おおっ！

狂気の沙汰 プロジェクト 愛しい人(前書き)

なにも言えない(ー)ゝウーム

狂気の沙汰 プロジェクト 愛しい人

ヒラヒラ、ヒラ、ピラ♪

「………見てられないな」

ネギの試合が終わり、次は弟子2号の試合だと楽しみにしていたんだが、なんだアレは。
なぜ観衆の目の前でああも下着を露出出来る。信じられない。直視しにくいじゃないか。

「……悪い。ちょっと席を外す。次の俺の試合までには戻る」

「あ、ああ。じゃあ、また」

「行つてらっしゃいませ」

観客席から席を立ち、人気のない方に歩いて行く。

——愛よ エロス 愛よ エロス 愛よ エロス ——

着いた先は龍宮神社の裏手、すぐ傍から歓声が聞こえてくるが何処かその音は物悲しく感じる。

——私は全てを愛している——

ガンガンと聴覚を刺激していた音から離れた所為か、聴覚がうまく働かない。

嫌な耳鳴りを止める為、耳の穴に指を突っ込むが効果とがあるのだろうか。

わからないが、やらないよりはましだろう。

——いかなる者も私の愛から逃れること叶わず——

来る途中に自販機で買った缶コーヒーを一口飲んで一息つく。

日蔭を捜し腰を下ろすと空を見上げた。快晴の青空。なかなか清々しい。

——おお ラートリー 永愛の門を開けよ ——

「ふう、なあ」

—— 永遠の物はなにか 愛は永劫の光である ——
エロス

「うるせえんだよ。さつきから、変態野郎。だいたいなんだその呪文。根源の神話がめっちゃめっちゃだぞ」

虚空を睨みつけながらそう言えば何処からともなくロープをはおった男が姿を現す。

飲みかけの缶コーヒーを投げつけるが通り抜けて芝生の上に落ちた。思わず舌打ちを鳴らす。

「おやおや、嫌われたものですね」

「いきなり変態じみた魔法をかけようとして来る変態を好きになれるわねーじゃねーか」

「私は貴方が会いたいだろうなと思ひ参上したのですが、不用でし

たか？それと先ほど歌は呪文ではありませんよ？愛の詩です」

人差し指を立て笑顔で首を少し傾げる変態、アルビレオ・イマに只ならぬ殺意を抱く。

なんだこいつは、英雄だか毛嫌いするとかいう以前に殺したい。

「ふふ、そう情熱的な目で見ないでください」

「黙れ。殺すぞ」

「無理ですよ。私は貴方の父と同じ英雄です。ジャックを殺しきれなかった貴方に私は殺せません」

にこやかに閉じられていた目が薄く開く。

微かに見える眼光に薄く汗をかいた。

「・・・ちつ、吹聴したのは親父か？」

「ええ、息子にようやくの反抗期が来たと嬉しそうに連絡して来まして。あのジャックが本当に父親になった、月日が流れるのは速いものですね」

「糞親父、人の弱みをべらべらと」

「自分の親を悪く言うものではありませんよ」

頭の上に伸ばして来る手を避ける。

「おや？」

「ネギ^{ガキ}と同類に扱ってんじゃねーぞ。俺はお前が嫌いなんだ」

重なる声、変わらぬ穏やかな音程で紡がれる汚い言葉はどうにもこ
うにも癪に障る。

「考えていることがわかりやすいですよ。ええ、ええ、わかってい
ます。貴方は私を嫌っている。知っているからこそ、こうして貴方
の前に現れた。嗜虐が私の嵯峨でして」

「・・・嫌がらせの為に来たと？なるほど、喧嘩売ってるんだな。
ああ、良いぜ。買ってやるよ」

殴りかかった瞬間、イマの姿は陽炎のごとく霧散する。

中身を失いふわふわと空へと浮かんで行くローブから変わらぬ声が
直接脳へと聞こえてくる。

「おやおや、キレイやすい性格はジャックの息子らしくないですよ。
彼なら大抵のことは陽気に笑い飛ばすというのに。貴方にもそうい
うおおらかな心を持って受け継いでもらいたいものです。彼の数少
ない長所なのでから」

「黙れよ幼女嗜虐趣味の変態野郎。人をどうこう言う前に自分を鏡
で見たらどうだ？変態の権化しか映んねえぞ」

「ふふ、耳が痛いですねえ。聞かなかったことにしましょう。話題
を変えます。次の試合、楽しみにしていますよ。ネギ君と貴方。現
状で言えば貴方が圧倒的な強者でしょうが、ネギ君にも頑張っても
らいたいものです。個人・・・的に用事・・・もある・・・こと・・・で・・・す
し・・・」

言いたいことだけ言って、残っていたロープすらも消え去った。
殺意を覚えるほどに変態な奴だが、取りあえず敵意はないということ
とでいいんだろう。
それにしても、

「ネギに個人的な用事があるねえ。はっ」

次の試合、俺が勝利することは決定事項となった。

少年には求めなければならぬ物がある。

マギステルマギ

立派な魔法使い、正義の魔法使い、その修行よりも優先し、なによりも優先すべき物。

それは少年の全ての行動の根源であり、存在全ての主柱である。

マギステルマギ

立派な魔法使いになりたいと思ったのも、正義の魔法使いになりたい
いと思ったのも、英雄を志したのも全てはその願いから零れた錆。

「教えてください。僕の父さんのことを！」

だから問いかける。修学旅行を終えてから、ずっと会いたいと願
いながらも何故か出会うことが出来なかった彼に問いかける。

ようやく整った舞台、彼と自分が相対できる時は今しかない
と頭のどこかで理解しているから外聞も気にせず声を張り上げた。

けれど、男は答えない。否、答える術を持たないと言った方が的確
だろう。

突然かけられた意味不明な言葉。少年の父親？なんだそれは、なぜ
そんなものを男が知っていると勘違いをしているんだろう。

意味がわからない。男は静かに笑った。

「お前、自分が世界の中心だとも思っているのか？」

返された嘲笑に齒を噛みしめながら少年は男を睨みつける。

なにを考えているのかはわかりやすい位に明確だ。

忘れもしない故郷の燃えるあの日の夜の悲劇。あの日に見た光。

目を奪われ、初めて流した涙の味。それを少年は信仰する。

父さえいればこの世全ての悲劇すら消えるかもしれないと考えるそれはもはや狂信の類だった。

「・・・僕が勝ったら、全てを教えてもらいます」

まるで男が重大な何かを知っているのだともいう様に聞こえてくる声に眉を顰めた。

教えるも何もなにも知らないのだから仕方がない。興味がない。

ネギからすれば知りたくて仕方がないことだろうが、男にとってはどうでもいいこと。

故に何も知る筈がないのだが、少年はそんなことも考えられないのかと、自分勝手な勘違いに怒るところか呆れ果てる。

少年が知りたいことなど、男は何一つ知りはしない。だからこそ、口を歪めてこう言った。

「俺を斃せたら、なにを教えてやっても良い」

第十一試合 fight

ネギ・スプリングフィールド 対 羅漢狂気の試合はこうして始ま

った。

「はあっ！」

目の前に飛んできたネギ、出も入りも稚拙な瞬動を見ながら狂気は忌々しそうに口を歪めた。

つい最近の修学旅行では会得もしていなかった瞬動を大味ながら使っているという事実がネギの優秀さを表していた。

——だが

「純粹に出力不足だよ」

撃たれた拳を肉体で受けとめながら狂気はつまらなそうにそう言った。

「ま、まだまだです！」

拳、肘、膝、裏手、足先、全身を使つての連撃を打ち続けるネギ。チャチャゼロから言わせれば蛸の様な動きを続けるそれは中国拳法。

「はああっ！」

無詠唱呪文、魔法拳士の花形ともいえる技を使いながら両腕を引き繰り出すは自身の持つオリジナル技。右腕を伸ばしながらその哭を叫んだ。

「雷華崩拳」

タイミング、込めた力、全ては完璧だったと自負する一撃を受けて

なお、さりとて狂気は動かなかった。

ネギの顔を冷や汗が伝う。

信じられない物を見るように狂気の顔を見るが、一切の動揺は伺えない。

嘘だと信じたかった。

あのタカミチにだって効いた一撃が一切の効果を見せない光景。

あり得ないことなのだと信じたいが、何処かで見た光景だったと頭の中で思い出す。

——そう、あれは

「俺と高畑とじゃタイプが違う」

——初めて死の恐怖を知ったあの夜

「ガキがちよつと思いついた程度の半端なオリジナル技が効くとも思ったのか？」

——目の前の人は己が師と同列なのだと今ようやくに理解した

「がつはっ」

ゴロゴロと吹き飛ばされ、転がりぬいた先で嘔吐する。

ビチャビチャと明日菜と共に食べた朝食を零しながら信じられないと声を漏らす。

何の変哲もないパンチに見えたそれはいとも簡単に身体に貼っている障壁を貫いていた。

千雨はその光景を痛ましく思いながらもどこか安堵していた。

なぜならその光景はとても真つ当だったから。

「お、おい。羅漢の奴、えげつねーな。大丈夫かよ子供先生」

「まあ、幾ら菲部長の弟子つっても子供だからな。あれくらい仕方ないだろ」

「だよなー。けどよ、どうして羅漢の奴に攻撃が効いてないんだ？あの光るパンチなんだかわかんないけど、高畑が吹き飛んだりしてたよな」

「そついや、そうだな。もしかしてやらせだったんじゃない？」

「は、はは」

「そうだ。そうだよ。」

「そう小さく呟きながら千雨は不謹慎だと思っていながらも笑うのを止められなかった。」

「まだ立つのか？もういいだろ。お前じゃ俺には勝てねーよ」

腹を押さえ、顔に着いた吐瀉物を袖で拭きながら上がったネギに呆れながら声を出す。

「実力差がわからぬほど馬鹿なのかと考え、いや違つかと狂気は答えを出す。」

「アレは紛れもなく天才だ。それだけは認めても良いとかねがね思っていた。」

ならばどうして立つのか、それは考えるまでもなく明白だった。

「そんなに父親が大切か？」

「当然です。僕は父さんを追い続けなければならないんだ」

妄信、狂信と言ってもいいほどの意思を前に顔を顰める。

真っ直ぐだ。アレには曲がりがない、いや曲がりようがない。

こと此処に対峙して初めて狂気は理解した。

——ネギは子供だ^{アレガキ}

元来、さまざまなものに向けるべき関心の全てを子供特有の頑固さと執念をもって父に向けている。

元はネギに罪はなかったのだろう。死んだとされる英雄の忘れ形見、
どという育て方をされたのか、少し考えれば簡単にわかることだった。

ずっと耳元で囁かれ続けていたのだろう。

あなたのお父さんは有名な英雄^{ヒロイ}だったのよ、と。

「だが、それは同情する理由にはならない。他者を巻き込むほどの感情など、ただの害悪に他ならない。お前は知った方がいい、見ず知らずの内に巻き込んでいる誰かの怒りを」

「・・・そんなこと、どうでもいいですよ」

「いま、なんと言った」

荒い呼吸の合間に聞こえてきた言葉に耳を疑う。

「知りもしない誰かとか、知りませんよ。僕は、僕は僕の願いを叶えるためにいるんです。その為に今まで頑張ってきた。僕自身の為

だから頑張つてこれたんだ。他人のことなんて知る訳ないじゃないですか」

「ああ、そうか」

観衆には届かないほど小さな声で漏れる本音に腸が煮えくりかえる。憤怒を宿す瞳の中に映る自分の姿を狂気は見た。

「同族嫌悪とはよく言ったものだな。俺はお前が大嫌いだ、ネギ。自己愛を撒き散らす姿は醜過ぎて見て居られない」

「醜いのは僕だけじゃない筈です。誰にだって、優先順位があります。他人より父親が大切なのは当たり前じゃないですか。貴方にだって、誰よりも大切な人が居るでしょうっ！」

「もういい、喋るな。勝ちはくれてやるから這い蹲つてろ。お前には殴る価値もない」

大声を出したせいか、床に伏せてもがくネギを置き去りに狂気は舞台からさがっていく。

朝倉はそんな狂気の肩を掴み、声をかけた。

「ちょ、ちよつと、ネギ君はまだやる気みたいだし、今下がったら棄権扱いにするわよ」

「好きにしろ」

ネギと狂気の戦いは大会中最も地味だと呼んでいいほど呆気なく終わった。

衝動のままに壁を殴る。亀裂が走り音を立てて崩れ落ちる。
地面に転がる瓦礫を踏みつける。踏みつける。踏みつける。
ける。

何度も。何度も。何度も。何度も。

そうして砂になったものを空に向けて蹴り飛ばした。

無意味な行動。だがもしかしたら少しは苛立ちが晴れると行ったそれに何の意味もなく、心は変わらず荒れ続ける。

「反吐が出る。虫唾^{アレ}が走る。俺がネギと同じだと。ああ、同族などと認めたあの時の俺を殺したい」

自傷に走りかける右腕。心臓を抉る程の力で胸に当たった右腕を止めたのは懷に収められる一枚のカードだった。

深呼吸を何度も繰り返してからそれを取りだせば、書かれているのは自分の姿と自分の名。

そして何時も狂おしそうに笑っている彼女の名。
どうしてか落ち着いた心を持ってあまして空を見上げ呟いた。

「何時もは一緒なのに、今日はまだ会ってないな」

「およ？のろけ力？同士」

独りごとだというのに帰ってくる不粋な返事。

顔を顰めながら振り返ればそこにいたのは狂気も知る少女だった。

「超か。何の用だ？」

「何の用だは私の言葉ネ。人の家の壁をそんなに強く叩かないで欲しいヨ。壁、崩れているじゃないか」

はああ、と深くため息を突きながら大きく壊れた壁を超は撫でる。狂気の額に少し汗が流れた。

「これ、武道大会に合わせて作った急増の建物だけど、結構良い値がするんだが」

「・・・悪かった。むしろくしゃしてやった。後悔はしている」

まったく、やれやれと言った風に両手を使いあからさまな態度を取りながら超は笑顔で狂気の手を握った。

いきなりなんだと振り払おうとするが離れることのない手に困惑しながらも狂気は超を睨む。

「おい」

「はっはー、いいじゃないかこれくらい。ちょっと付き合っただけネ」

「俺に拒否権は」

「あると思っっているのナ？壁を壊したのは同士ダロウ」

渋々と狂気は超の後へと続いて行った。

何処をどう歩いたかはもうわからない。

まるで迷路のように入り組んだ道を歩いていたかと思えば昇降機に

乗せられ下り、また歩いて行く。

その間、超は時折時間を確かめる為か懐中時計を弄るだけでいつもの元気はなくなったかのようになにも喋ることはなかった。

「なあ、何処行くんだよ」

「もう少しでわかるヨ」

何度目かもわからない問いとかけても、帰ってくるのは決まった言葉。

握られ続けていい加減に汗ばんできた右手を疎ましく思いながらも狂気は素直に付いて行く。

超はただ嬉しそくに顔を赤らめながら歩みを進めるだけだった。

徐々に荒くなつていく息は勘違いだと信じたい。

「さあ、着いた。ここが私達のエ始まりの地デンの園だ」

ガゴン

大袈裟な音を立てて見上げるほど大きな扉が開いた。

2年と数が月の間、麻帆良で暮らしてきたが地下にこんな空間があることを知らなかった事実に驚きながらも扉の中に足を進めれば、そこは淡い光に満ちた空間だった。

「この光は、世界樹の発光現象か？」

人工の光は此処にはない。壁に張り付くように生える世界樹の根に手を添えながら頭をふる。

「あり得ない。此処までの光を出すのは最終日の筈だろう。どういうことだ？」

「さあ？ただの異常気象か、もしくは私達が此処に来るまでの間に一日が過ぎてしまったか。ああ！同士が私の手を何度か振り払おうとして無駄な時間を過ごしたせいかもしれないネ」

答えを知っているであろう天才は恍けていて答える気が無いらしい。いつの間にか腕を組んでくる始末だ。半ば強引に組まれている腕を振り放す。

超がなにやら呟いたが狂気には知ったことではなかった。

「で、何の真似だ？こんなところに連れ込んで、確かに珍しい物はみられたか興味がある訳じゃない。これを見せるのが用事だったなら、もう帰りたいんだが」

「あらら、随分と警戒しているネ。同士。そんな怖い目で見られたら可憐な私は泣いてしまいかもしれないヨ」

「お前がそんなたまかよ。まえに堂々と予告状送りつけてきた癖に」

「ラブレターのつもりだったんだか」

笑い、頬を掻きながらそう言う超。

陽気な口調だがどこか沈んだ影を残す言い方に狂気は首を傾げるばかり。

「もついいヨ。同士がそう言う人だと知れたのも僥倖だと考えよう」

「なんか知らんが、悪かったな？」

疑問符のついた謝罪を笑い飛ばしてから、超はじつと狂気を見詰めた。

熱っぽく、艶っぽく、ねっとり。

眉を顰める男を余所に少女は熱い息を吐きながら喋り出す。

「二人きりで話がしたかった。私と同士、同郷の者として積もる話もあるダロウ。なあ、君にはこの世界がどう見える？」

ポケットからリモコンを取り出したかと思えば、空中に映るディスプレイ。

画面の中では麻帆良祭を楽しむ人々の姿が映っていた。

超は眩しそうに目を細め、狂気は目を見開いた。

「私には夢のように見えるネ。誰もが生きることには不自由しない時代。楽しく空虚で何不自由ない世界。私達の時代、私達の世界から見れば、ここはまるで偽りの楽園のようダ」

「失われたエデンの園か」

「そうだ、みなが笑っている。私達が生きられなかった青春をさも当たり前だともいう様に謳歌しているヨ。どうして？^彼クラスメイ^女ト達は^女どうして私や私の友が生きられなかった光の中にいる？どうして私達の世界には笑顔がない？理不尽じゃないか、平等じゃない」

「当然だろう。誰もが笑っている世界などあり得ない。幸福は奪いあうものだ。世界は理不尽なまでに不平等だ。意を通す者は強者だけ。そんなもの、俺達が一番よく知っている道理だろう」

「わかつているさそんなことは！」

それは悲痛な叫びだった。

認めなくなかったのだろう。理解したくなかったのだろう。それでも、超は理解していたのだろう。

彼女の経験した悲劇は全て仕方のないことだったのだと

「思いを通すは何時も力のある者のみ。けれど、そんなこと認めたくないじゃない力。見えている、伸ばせば手が届くのに、この平穩へいぎを手にすることができないなんて、私は認めない。認めなくなかった」

「甘えるなよ、超。認めるしかないんだよ。俺達の世界は救われない。お前が何をしようと未来は変わらない。やろうとしていることはよくわかる。だがな、世界が魔法を知ったところで火星の人間5億、亞人も含めれば12億もの人が暮らせる居場所が地球のどこにある」

それは激怒の告白だった。

認めなくなかったのだろう。理解したくなかったのだろう。それでも、狂気は理解していたのだろう。

あの世界は決して救われえないということを。

「お前の夢は破綻している。いいよな、ガキはそんな夢ものを見るだけで生きていける」

「つつ、同士にだけはとやかく言われる覚えはないネ。戦場にかかることから逃げた君にだけは」

ディスプレイを見ていた視線を外し、超は狂気を睨みつける。

犬歯を剥き出しにして言われたそれはどうしようもないほどの正論だった。

返す言葉など狂気にはない。

「あつ、・・・つ、すまない。言いすぎたヨ」

「・・・いや、事実だからな」

「少し頭を冷やした方がいいカナ。私はこんなことが言いたくて同士をよんだんじゃないんだ」

「・・・わかった。お互いに頭を冷やそう」

喧騒は嘘のように消え去って、訪れた静寂は既に百を超えた。

互いに見るのはこの世界の人々の笑顔。

超は眩しそうに目を細め、狂気は目を見開く。

互いになにを見ているかは始めとまったく変わらない。

静かに、おずおずと静寂は破られる。

「私達の青春は碌なものじゃなかったネ。同士はそれを取り戻す為に此処に来たのダロウ？なのに、どうして私と相容れないのカナ？」

狂気は小さく含み笑いを零す。

「勝手な話だ。青春？だからガキは嫌いなんだ。そんなことしか頭にないらしい。取り戻すとか、世界を救うとか、そんな大仰なことが俺に出来る筈がない。俺はただ・・・逃げただけだ」

「なら、世界を救いたいと思ったことは？」

「無論、あつたさ。むしろ常に思っていた。僕ぼくの力で世界を救うんだ。ああ、思いたすだけで滑稽すぎて涙がでる。なにを思いあがっていたんだか」

狂気は大笑した。

笑う笑う笑う笑う、楽しそうに可笑しそうに愉快そうに。そして笑い終えたあとで一筋の涙を零す。

超はその涙を指の腹ですくい取った。

「それは違う。ラブレターに書いた筈ネ。同士は確かに私達私達を守ってくれた。世界は救えず守れなかったけど、同胞同志が生きる未来をくれた。それは事実だ。卑下しないでくれ」

抱きつかれる。背中に手を回され温かい温もりが狂気を包んだ。わからない。眉を顰めながら狂気は上ずった声を漏らす。

「苛立させたと思えば、怒らせて。泣かせたと思えば、慰める。お前は何がしたいんだ？」

「あー、いや、あれヨ。その、色々考えていたんだが、．．うん．．やっぱりこういうものはつきり言った方がいいアルか？はっはー、何分初めてなものでネ」

すーはー、大きく深呼吸をしてから超は狂気の瞳をみつめる。顔を赤くして、唾を飲んでから小さく口を開いた。

「私のパートナーになってくれないか？」

一瞬、世界が光ったように思えた。

「ずっとずっと私と一緒にいて欲しい。そして共に世界を救おう」

真っ赤な顔でそう言う超に呆れかえる。

なにをいいたいのかと思えばそんなことだったのかと思いながらも、狂気は少しだけ口元を吊り上げた。

答えなんて考えるまでもない。

人間ではないが、大切な彼女が自分にはいて、大切な妹が居て、大切な友がいる。

ならばなぜ、彼女達を裏切れよう。

狂気ははつきりと、その気持ちには答えられないと告げる。

「ああ、わかつた」

は ？ ま い 、 お れ な と ？

「あ、ああ。嬉しいヨ。同士、いや、これからは狂気と呼ぼう。狂気、狂気、ふふ、少し照れくさいネ」

「いや、まっ」

否定の言葉が出てこない。

蛇に睨まれた蛙のように超の瞳から目が離せなかった。

心臓の動悸が激しくなるのを感じる。

顔が熱を帯び紅くなっていくのが自分でもわかる。

なんだ、これは。

こんな気持ち、俺は知らない

言葉に出来ない問い、答えがないであろう狂気の問いに超は答えた。

「すまないネ、狂気。私はこんな形でしか君を愛せない酷い女だ。
んっ、ふう」

押し付けられる唇の感蝕に溶けそうになる。

入ってくる舌に蹂躪され身体は素直な反応を示した。

送り込まれる唾液に脳は喜びを上げ熱がでる。

抵抗する気持ちなど、ものの数秒で消えうせた。

「ふはあ、ふふ。可愛いヨ、狂気。私にとっての幸福は君が麻帆良の教師陣と仲たがいを起こしたこと、そしてこういうことに興味がなかったことだ。知らなかった口ウ？世界樹伝説なんてネ。伝説の樹の下で告白した男女は必ず結ばれる」

超は笑う。とびきりの笑顔で。
狂気はそれに胸を高鳴らせた。

繋がれた手をもう振り払おうなんてもう思わない。
むしろ指を絡ませて握りしめる。

狂気の様子に満足そうに頷いてから、超は懐中時計をいじり始める。

「じゃあ、行こうか。世界を救いにネ。ついて来てくれるか？」

超の答えに、もう狂気は一つしか答えを持たない。
熱に魔され濁った瞳で嬉しそうに答えた。

「是非もない。お前が行くというのなら、俺をも行くさ」

「ありがとう。愛しているヨ、狂気」

「俺も、愛してる。鈴音」

二度目の口づけをかわしながら、二人の姿は光に包まれた。

狂気の沙汰 プロジェクト 愛しい人（後書き）

麻帆良祭編

コトは青春に関わる大問題じゃ（　・　「　」　、　）

10巻で豹変したネギを見る限り、青春どころのはなしじゃねーだ
ろ　ッ（ー　ー　）オイ

思わず原作に突っ込んでしまった。

狂気の沙汰 二度目の麻帆良祭初日（前書き）

いそがしい・・・主に二次創作を読むのとゲームで
（ ） ボー――

狂気の沙汰 二度目の麻帆良祭初日

愛とは、崇高なものから、恋愛、そして欲望に至るまで様々な意味で用いられる概念である。

親兄弟のいつくしみあう心。ひろく、人間や生物への思いやり。親愛大切にすること。かわいがること。めでること。情愛。

根源的な愛の形態の一つ。自分自身を支える基本的な力。自己愛。男女間の愛。恋愛。

「となると、俺のコレは恋愛か」

携帯端末に映る文字列を吟味しながらなるほどなと呟いた。

『只今より第78回麻帆良祭を開催します!!』

学園祭の開始を祝うように飛び回る飛行機、どこからともなく立ち上る紙吹雪と風船。

街道を練り歩く仮装パレードに苛立ちを覚える。

美しくない、楽しくもない。傍に彼女さえいれば高揚して仕方がないだろうが残念ながら愛しの君は忙しいらしい。

我を通してあちら側にもよかったが、鈴音の邪魔になるつもりは毛頭ないのだ。

なら自分はこの暇な時間を利用して彼女に利することをしよう。

「行くぞ。田中」

「了解シマシタ。マズ八何処へ？才兄様」

「そうだな。此処にはまだ俺が居る。派手には動けん。本当なら一番邪魔な奴らを始末したいが、無理なら次点と行こうか。幸いに俺の目はそちらに向いていない」

「申し訳アリマセン。A Iで理解シカネル語意が含マレテイマス」

「いいさ、会うのは二度目だが今日が初起動なんだろう？徐々に理解を深めて行け。取りあえずは、黙ってついてこればいい」

「了解シマシタ」

カッーン カッーン

二つの足音が淀んだ空気を揺らし響き渡る。

懐中電灯を手に持ち進む二人の影が配管に大きく映った。

「はぁ、どうしてこんなことに」

「はは、まあ、落ち着いてくださいよ。ガンドルフィーニさん。ようやくの謹慎明けなんですから、パーと行きましようよ。パーと」

「瀬流彦君、君ね。こんな配管だらけの所で何をパーとやるんだい？」

「は、はは」

ガンドルフィーニの尤もな言葉に瀬流彦は苦笑いを零す。

「けどね、ガンドルフィーニさん。貴方だってわかってるでしょう？仕方がないことですよ。反省の意味も込めてこういう雑用もこなさない」と

「まあ、ああ・・・そうだな。君まで付き合わせてしまつて済まない」

「いえいえ」

ニコニコと笑顔のまま瀬流彦は歩みを進めて行く。

二人はいま、麻帆良の地下下水道にいた。

「それにしても、結構早い謹慎明けだった。私はどうあれ麻帆良に對し不利益となる行動を取った。本国送り、悪ければオコジの刑もあると覚悟していたんだが」

「ああ、それですか。聞きたいですか？」

くくく、と小さく声を漏らす瀬流彦にガンドルフィーニは片眉を跳ねさせる。

「なんだ？何か理由があつたのか」

「ええ、実はガンドルフィーニさんが本国送りにならなかったのは狂気君のお陰なんですよ」

「なっ！？」

「彼が言いましてね。『他は屑だがガンドルフィーニの奴はまだ見込みがあるぞ。現状、俺みたいな奴が居るんだから抑止力には必要だ

る。まあ、俺としては居なくなつた方が万々歳だが』ってね。素直じゃないですよー、彼は」

「なるほどな。だが、感謝はしたくない」

「でしょうね。けどまあ、今度話してみてくださいよ。結構素直でいい子ですよ。怒らせなければですけど」

「私は怒らせているつもりはない。むしろ羅漢が私を怒らせるんだ」
「傍から見ればどっちもどっちだと思いますよ」

笑顔で言われる心を抉るような言葉を受けて苦悶を漏らす。

図星を突くようなことをハキハキ吐いてくる瀬流彦にガンドルフィ
ーは首を傾げた。

瀬流彦君はこういう人だったっけ？と。

「そ、それより瀬流彦君。どうして私達はこんなところを見回っているんだ？パトロールするにしてもなにもこんな場所をしてくれも、地上の方が人でごった返しているだろうし良いと思うんだが？」

「ん、まあ、そうなんですけどね。ただ、地下こゝに何かあるようなきがするんですよえっ！」

サギタ・マギカ
魔法の射手 光の一矢

それは瞬き一つの間に行われたことだった。
ガンドルフィーが困惑する中で振るわれた杖、煙が吹き出し音をたてる配管が入り組んだそこを睨みながら瀬流彦はいった。

「出てきたらどうだい。僕の目は誤魔化せないよ」

普段は閉じられている目を開き、眼光は蠢く黒い影を捕えた。

チューチュー

「……………ネズミだよ。瀬流彦君」

「……………あれ？」

「ん？」

「ドウシマシタ？」

「いや、地下にいた使い魔^{ロボット}ネズミの一つが壊れたみたいだ。やったのは瀬流彦さんかな？あの人は魔法先生の中で一等優秀だから。ねえ、そう思いませんか？明石教授」

地面に転がるソレを見ながら狂気は笑う。

眼鏡が欠け、砂に塗れたソレはただ無様に睨んで来るだけで嘲笑が零れる。

なんだこれは？なんて脆弱。殴ればこつとも容易く黙りこむ。前の俺がどうしてこんな奴らとの関係性に頭を悩ませていたのかが理解できない。

「ら、羅漢君。な、何のつもりだい。こんなことをして、」

ボロボロになりながらも瞳の光を絶やすことのない明石の言葉に嗤った。

「何のつもり？ああ、たいしたことじゃない。ただ鈴音が利する結果になるだろうと思ってな、聞きたいことがあっただけだ。素直に答えてくれるなら、乱暴なんかしなかったんだが」

しゃがみ込んで髪を手で鷲掴みにして顔の近くにたぐりよせる。徐々に髪を握る手の握力を強めながら質問を繰り返すが、明石は答えない。

「今の君にはなにを聞かれようと、答える気はない」

頑なな態度に埒が明かないなと舌打ちをした後、狂気は突然口元を吊り上げた。

「そういえば、アンタ子供が居たな」

目は淀み、禍々しいほど凄惨な笑みを浮かべるその顔に明石は答えのない問いを頭の中で呟いた。

——これは誰だ

「前に一度会ってるんだが、可愛い女の子だった。中学生とは思えないほど身体の発育も良かったっけか？なあ、田中」

「ハイ、基準値ヲ大キク上回ッテイマス」

「つつ、裕奈に何をする気だっ！あの子に手を出すことだけは許さないぞ！」

「なにをする？わかりきったことを言うなよ。俺は男で、あの子は女だ。それに麻帆良祭中は世界樹の加護があるおかげで記憶操作なんていうお前達が大好きな高等魔法の難易度も下がっている。何でもし放題だな。ああ、いつそ世界樹の力で俺に惚れさせてもしようか？」

我が子の危機に激動する明石を狂気は笑う、嗤う晒う。

その眼は既に無謬の輝きに焼き潰されて他の光は届かない。

「・・・君は、どこまで腐ってしまったんだ」

「腐っていようが狂っていようが構わない。鈴音が駄目だと言ったのは無意味な流血だけ、ならそれ以外はなにをやってもいいということだろう？それより早く選んでくれよ。正義とか矜持とか目に見えない物を取るか。それとも娘を取るか。どっちでもいいぞ。ああ、後者なら娘に伝えといてやるよ。お前の父親はとても立派な正義の味方だったって。は、はは」

歯を食いしばり、年がいもなく涙を流す明石を誰が責められよう。覇気もなく、呼吸で飲まれてしまうのではというほど小さな声で呟かれた。

「なにが・・・聞きたいんだ」

「ほんと、良いよな。父親の子に対する愛情って。今の俺でも、鈴音以外でそれだけはまだ信じている」

何処か遠くに妙な幻影を見詰めながら狂気は晴れやかな顔で呟く。支離滅裂。先ほどまでの表情。今の状況に合わないその表情を見て

明石はようやく何かを理解した。

——彼はおかしい　どこか狂ってしまっている　まるで何かに操られているかのように

明石から粗方聞きたいことは聞き終わった後、傷と服装を直し記憶修正を加えてから賑わいをみせる一角の隅に放置してきた。

あれなら周りからはただの酔っ払いに見えるだろうし、明石自身も記憶はないのだから疑問は持ただろうが深くは探れないだろう。

そういう後始末を終えれば既に日が傾く時刻、集合場所として決めていたあの場所に向かう途中で狂気は心外だとばかりに眉を顰めていた。

「もし明石が喋らなかったはどうしていたか？馬鹿にするなよ、田中。俺は鈴音に操を誓ってんだ、どうしてそれ以外の女なんか抱かなきゃなんねえんだよ」

「ソウデスカ。安心シマシタ。オ兄様ガ屑スギテ幻滅スル所デシタノデ」

「お前だってノリノリだったじゃねーか。それにアレくらい戦中じやよくあることだろう」

そう言った後、後悔したとばかりに不快な顔をして狂気は歩き続けるのだった。

今の羅漢狂気は紛れもない異常者である。

無論、元々の彼が清廉潔白の聖人であつたかと言えば、答えは否であるが決して悪人ではなかつた筈だ。

彼は彼なりの矜持を持ち、誇りを持ち、自身の嫌う言葉だが確固たる正義を持っていた。

英雄は嫌いだが英雄の子を理由なく嫌うことはしない。

困っている人が居るなら眉を顰めながらも手を貸そう。

大切な人だと認めた者の為なら助力を惜しむ筈もなく。

どれだけ怒りに燃えようと無関係な人を巻き込むことは認めない。

彼を知らない者から見れば乱暴であり粗暴であつたかもしれないが、傍によればそれは暖かく見える日輪に他ならなかつた。

だが、大切なことだから二度言うが、今の羅漢狂気は紛れもない異常者である

目に映っていた矜持は砕け、手にしていた誇りは鈍く輝き、正義などとは間違つてもいえない思想を持つ者に他ならない。

根幹にある思いは愛。

本来、美しい筈であるそれを宿した狂気は狂気した。

女神の笑顔に網膜を焼かれなにも見えない、見ようとしもない。

彼女の声が聞けるなら、彼女の温もりを感じられるなら、彼女さえ居てくれるなら、他の何かなどいらない。

自分はそれで満ちているから、あとは居てもいなくても良い塵屑に他ならない。

彼女が自分以外に仲間だと呼ぶ人もまた、狂気からすればそれが彼女の利する結果となるならばと放置しているだけであり、彼女から

の命が有れば、いや彼女が命じずとも塵屑アレラが万が一にも害を成すというのなら手にかけることすら厭わない。

殺すことすら、肯定できる。それが何者であろうとも。元より彼は戦火を駆けた殺戮者英雄に他ならないのだから。

焦がれ焼かれ熱せられ羅漢狂気は確かに狂っていた。

どれ程までもに見えようとその眼は白濁し彼が信奉する女神以外なに者もその眼には映さない。

だが、それだけならどれ程に善かったか。

彼がただ恋患いの熱にうなされ狂うだけの男であつたなら、女神への絶対の忠義と引き換えに元来持っていた能力は大きく下がっていただろう。

しかし、現実はそうではない。

彼は熱によつて脳神経が焼き切れたわけでも、女神への獣欲を貪るだけの獣になつた訳でもなかった。

むしろその逆、女神の為に彼女の為に鈴音の為にただそれだけの為にあるうと願つた彼は狂いながらも製錬されていた。

折れず曲がらずよく切れる。刀剣の代名詞を彷彿とさせる兵器で出来た英雄。

いや、兵器という名の英雄か。

遠い未来に置いて行われた100年戦争で名を馳せた在りし日の最強の姿。

それが今の羅漢狂気に他ならない。

「なあ、龍宮」

時刻は既に零時を回り、日付は今日から昨日へと変わっていた。

麻帆良の地下に張り巡らされた鈴音の秘密基地。

その一角で狂気は笑う。禍々しく、しかしどこかその笑みは神聖さを感じさせた。

黒に黒を塗り重ねた宇宙が何処か神秘的であるように暗闇で浮かべられる凄惨な笑みもまた絵になっていた。

「一つの世界を、救ってみないか？その胸に秘める愛でさ」

だが、違う。同じ暗黒でも宇宙と狂気とは決定的な違いがあった。宇宙は暗黒でありながらも無数の光で満ちているのに、狂気を満たすのはただ一つの恒星の輝きに他ならない。

それ以外はなんにも要らない。枝葉にかけない。黒く塗りつぶすだけの塵屑に他ならなかった。

—— だがら、『愛』だと言った瞬間に世界が光ろうとも気にしない目の前の少女が初恋を忘れ、その眼に仮初の熱を宿そうとも罪悪感など微塵もない。

男は既に狂っているのだから。

「ああ、別に何も特別なことをしろという訳じゃない。今まで通りに鈴音の指示通り動いてくれればそれでいい。俺が望むのは鈴音が目指す世界だ。彼女が得たいと嘆く輝きだ。狂気に満ちた獣になって全てを壊そうなどとも思わんし、逃げ出す無様も二度は晒さん。その為にお前が必要だというのなら、良いだろう。愛でもやろう。なあ、龍宮。役に立ってはくれないか？その為に生かしているんだぞ。お前達を」

返答など元から決まっていた。だから聞く価値もないと聞き流して、もう既に此処には龍宮の姿はない。

与えられた狂気の私室。三日も過ぎさないであろうそこには物もなく、精々質素なベットが一つ置かれている程度。そしてそのベットでは今、二つの影が重なり合っていた。

「なあ、狂気。真名に何かしたカナ？」

一糸纏わぬ姿で狂気の上に跨っていた鈴音は何故か突然そんなことを言い始めて、唐突な質問に首を傾げながらも答える。

「たいしたことじゃないぞ。鈴音の二番煎じだからな」

世界樹の加護、という名の呪い。

最終日であるなら120%の洗脳を可能とするそれは初日であろうと60〜80%の性能を誇る。

ましてや舞台は文字通り伝説の樹の下での告白だ。

叶わぬ方が難しいと狂気は笑う。

「そんなことをしなくとも私達の仲間だったヨ？真名は仕事を真面目にこなす仕事人ネ。裏切りの心配もない。余計なことじゃないか」

「そうか？アレは確かに裏切りはしなかったろうが、全力もださなかったろう。ならば出せるようにするのがお前の為だ。ああ、アレも喜んでいるだろうよ。お前の為に力を尽くせるといふのだから」

皮肉や誇張ではなく心の底からそう確信しているだろう狂気。

そんな男の胸に顔を埋めて、腕で守るように抱きしめられて、鈴音は独り小さな笑い声を漏らした。

「なにがおかしいんだ？」

「いや、前の君を知っている身としては変わってしまったあたり方に悲しくもある。が、それ以上にこうしていることに喜びを覚えている自分がおかしくてネ。・・・こんな温もり、仮初だとわかっているのに」

「鈴音はわけのわからないことをいう」

なにに怯えるのかはわからないが、少しでも恐怖が和らぐ様にと額に口づけを落としながら、狂気は濁りながらも熱を宿す眼で鈴音を見る。

「俺はお前を愛している。偽りだろうと仮初だろうとお前を思う炎はこの胸に。忘れず、違えず、あり秘めている」

一日はそうして終わる。

そして、この世界からもう一人の狂気が消える学園祭の二日目。物語は本格的に動き始めるのだ。

敵は友、弟子達、そして彼女。過去の残子に他ならない。

狂気の沙汰 二度目の麻帆良祭初日（後書き）

悪い奴を描くのは楽しすぎて困る

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3692x/>

バグキャラを継いだチートキャラ

2011年11月30日20時48分発行